

# 大道東遺跡(1)

－縄文時代編－

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

東日本高速道路株式会社  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 序

大道東遺跡は太田市東今泉町に所在し、平成15年から平成17年にかけて、北関東自動車道の建設に伴い、発掘調査された遺跡です。発掘調査では、縄文時代から江戸時代に至る各種遺構や遺物が発見され、特に、古代東山道の発見は歴史的にも極めて重要であることが判明しました。

本遺跡は、古く大正期からその存在が知られる著名な遺跡で、縄文時代の岩版や土版等が出土しておりました。そのことは郷土史家として知られる岩沢正作氏により紹介されています。

本書は、縄文時代編として報告するものですが、縄文時代の住居をはじめとして土坑や埋壺などが発見されています。このほか、包含層から多量の土器片や石器類が出土しており、それらの遺物を見ていると、豊かな縄文社会が改めて実感されてくるようでもあります。それらは縄文社会の豊かな生活ぶりを解明する上で貴重な資料となるものと期待されます。

発掘調査から報告書の作成にいたるまで、東日本高速道路株式会社関東支社、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会、地元関係者の方々には種々ご指導ご協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、併せて本書が群馬県の歴史を解明する上で広く活用されることを願い、序といたします。

平成21年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 高橋 勇 夫



## 例 言

1. 本書は、北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設に伴い発掘調査された大道東遺跡（1）－縄文時代編－の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社
3. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調査期間 平成15年7月1日～平成15年10月31日、平成16年1月1日～平成16年3月31日  
平成16年4月1日～平成17年3月31日、平成17年4月1日～平成17年9月30日
5. 調査組織  
管理指導 高橋勇夫・小野守三郎・木村裕紀・津金澤吉茂・住谷永市・神保信史・萩原利通・矢崎俊夫・平野進一・石島和夫・真下高幸・西田健彦・中東耕志  
事務担当 佐藤明人・藤巻幸男・宮崎結城雄・植原恒夫・丸間道雄・高橋房雄・竹内 宏・笠原秀樹・吉田有光・柳岡良宏・石井 清・阿久沢玄洋・田中賢一・栗原幸代・佐藤聖行・今泉大作・清水秀紀・北野勝美  
調査担当 平成15年度：新井 仁・大澤 務・川端俊介・増田眞次・飯田公規  
平成16年度：廣津英一・杉山秀宏・新井 仁・増田眞次・小林洋一・田村 博・山川剛史  
平成17年度：廣津英一・新井 仁・小林洋一・長澤典子
6. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 平成20年4月1日～平成21年3月31日
9. 整理組織  
管理指導 高橋勇夫・津金澤吉茂・木村裕紀・飯島義雄・相京建史  
事務担当 笠原英樹・佐嶋芳明・須田朋子・柳岡良宏・斉藤恵利子・矢島一美・斉藤陽子  
整理担当 岩崎泰一  
整理補助 湯浅美枝子・小野寺仁子・掛川智子・福島瑞希  
遺物写真 佐藤元彦  
保存処理 関 邦一  
機械実測 岸 弘子・田所順子・小池益美
10. 本書作成に際し、以下に各種業務を委託した。  
石器の石材同定……………飯島静男氏 遺構図作成……………アコン測量
11. 本書の作成に際しては、群馬県教育委員会・太田市教育委員会・地権者・地元関係者の方々の多大な協力及び支援をいただいた。また、調査に従事された発掘補助員の方々には酷暑・酷暑の中、大変ご苦労をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。
12. 調査資料は、一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

## 凡 例

- 本文中に使用した方位は、総て国家座標（2002.4改正前の日本測地系）の北を使用している。
- 報告書に記載した各種遺構図の縮尺は下記の通りである。

住居・土坑配置図	……………	1 / 800
住居	……………	1 / 60
住居内炉	……………	1 / 30
屋外炉・埋壘	……………	1 / 20
土坑	……………	1 / 40
- 実測図は以下の縮尺を基本に掲載した。なお、土製品等小形品についてはその都度縮尺を変え掲載しているため、図版中のスケールを参照されたい。

縄文土器	……………	1 / 4
縄文石器	……………	1 / 3（礫石器類 1 / 4）
- 図版中の遺物番号は、下記の通り、整理番号に一致している。

住居	……………	住居毎に1から番号を付した。
土坑石器	……………	土坑を一括して連続する番号（1～96）を付した。
土坑土器	……………	土坑を一括して連続する番号（100～624）を付した。
包含層石器	……………	器種別に1～828まで連続する番号を付した。
包含層土器	……………	時期別に1001～1814まで連続する番号を付した。
- 本文中の器種・石材名については、下記のとおり略記した。

打製石斧：打斧	磨製石斧：磨斧	加工痕ある剥片：加工		
石製品：石製	多孔石：多孔	使用痕ある剥片：使用		
黒色安山岩：黒安	黒色頁岩：黒頁	珪質頁岩：珪頁	硬質頁岩：硬頁	ホルンフェルス：ホル
溶結凝灰岩：溶凝	石英斑岩：石斑	粗粒輝石安山岩：粗安	砂質頁岩：砂頁	変玄武岩：変玄
珪質粘板岩：珪粘	珪化凝灰岩：珪凝	黒色片岩：黒片	細粒輝石安山岩：細安	変輝緑岩：変輝
変質安山岩：変安	糖晶状チャート：糖チ	未固結凝灰岩：未結灰	点紋頁岩：点頁	
- 写真図版の遺物番号は、実測図中の番号に一致している。なお、写真図版には整理番号を付したものについて、できるだけ情報を提示するという観点から、写真のみ掲載したものもあり、これらについても遺物番号を付した。図版中の遺物番号と写真図版中の遺物番号は、巻末の観察表に示しているため、参照していただきたい。
- 本文執筆は、下記の通り、分担した。

I-1（1）	……………	佐藤明人
I-1（1）以外	……………	新井 仁
II～V	……………	岩崎泰一

# 目 次

序

凡例

## I 調査の概要

1. 調査に至る経緯と調査の経過 ..... 1
  - (1) 調査に至る経緯
  - (2) 調査の経過
2. 調査の方法 ..... 4
  - (1) 調査区の設定
  - (2) グリッド設定
  - (3) 遺構調査

## II 周辺環境

1. 地理的環境 ..... 6
2. 周辺遺跡 ..... 8

## III 基本土層

..... 10

## IV 検出された遺構と遺物

1. 住居 ..... 12
2. 炉・埋甕 ..... 47
3. 土坑 ..... 53
4. 包含層出土の遺物 ..... 98

## V まとめ

1. 河川資源と出土石器 ..... 155

遺物観察表・計測一覧表

写真図版

抄録





## I 調査の概要

### 1. 調査に至る経緯と調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設に伴う伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは平成12年度である。平成12年6月、日本道路公団、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議において、道路公団から橋梁下部工事等の工事優先区間の一部について、平成12年8月から発掘調査実施の要請があった。これを受けて当事業団は用地解決状況、残土置場の確保、側道と本線の調査地区分の検討等、調査実施への準備を進めた。平成12年8月1日、日本道路公団、群馬県教育委員会、当事業団の3者による「北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、また、協定書に基づく公団と事業団による平成12年度発掘調査の契約が結ばれ、発掘調査は伊勢崎市書上遺跡から着手となった。

大道東遺跡の過去の発掘調査に関しては、昭和41年駒沢大学が、金山丘陵における鉄生産に関連する遺跡の調査、研究の一環として、北関東自動車道事業地の南近接地において発掘調査を実施している。この発掘で奈良平安時代の竪穴住居跡3軒等を調査した。以後昭和46年の群馬県文化財地図に掲載されるなど、縄文、弥生、古墳時代の集落遺跡として周知され、また北関東自動車道事業地にかかる本発掘区は平成8年度の協議により大道東遺跡に含まれることが確認された。

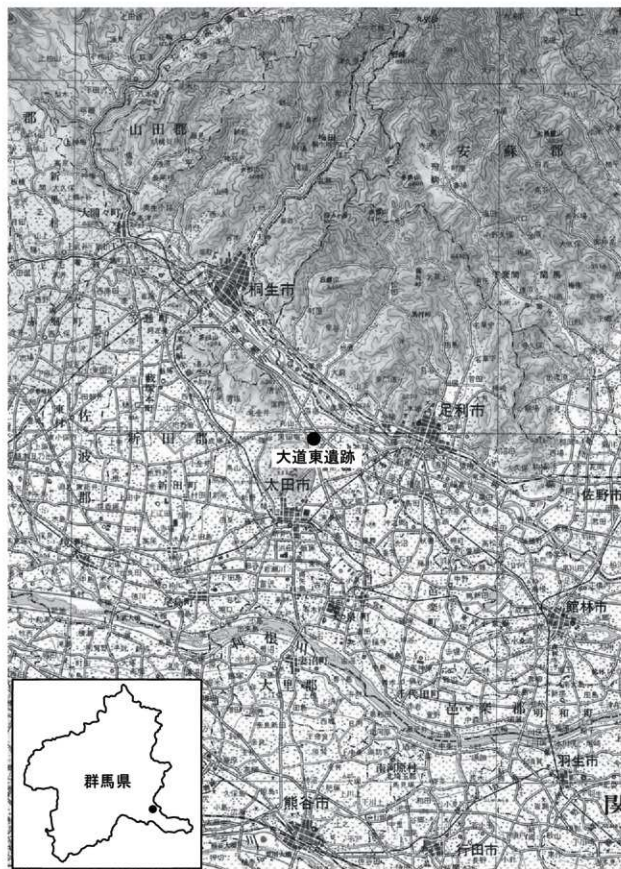
本遺跡の調査実施については平成15年度事業の開始後の発掘事業工程の変更調整において、当年度に発掘調査を実施することとなった。金山以東の本事業区間では、用地取得が比較的進んでいた大道西遺跡において、平成14年度に通年の調査が実施されていた。平成15年度当初計画では、県道太田桐生線との立体交差のための架橋工事エリアである大道西遺跡の調査実施を予定していた。県道西側沿道の未収去住宅地の解決を見込んでの計画であった。しかし平成15年度事業を開始した段階で、大道西遺跡の用地解決の見込みがたたない中で、県道を挟んで東に隣接する、大道東遺跡の用地取得が進み、この取得済み事業地の調査実施が道路公団から要請された。発掘調査は平成15年7月1日から着手することとなった。なお、太田桐生線の架橋工事エリアは平成15年度内に用地解決が進まなかったため、この発掘は次年度に実施することとなった。

#### (2) 発掘調査の経過

調査は、平成15年に開始された。まず、7月に、調査区全面にトレンチを入れ、範囲確認調査を行った。その結果、全面から遺構が多数検出されたため、次年度調査事務所建設予定地である、3・4区北部（3区-①・4区-①-1）から表土掘削を開始した。表土掘削後遺構調査を開始し、竪穴住居・土坑等を調査した。遺構調査が終了した時点で空撮を行い、その後縄文包含層と考えられる黒色土が3区東部から4区にかけて存在していたため、それを人力で掘削し記録した。また、ロームの残りの良い部分で旧石器の試掘を行ったが、遺構・遺物は検出されなかったため調査を終了し、次年度調査事務所建設地部分は埋め戻した。

平成16年度は、2班体制で調査を行った。まず前年度調査した3区北部（3区-①）の続きから4区北部・東部（4区-①-1・4区-①-2・4区-②-1）にかけて調査し、その後4区南部（4区-②-1）・3区南部（3区-②-1）に向かって調査を進めていった。しかしながら、道路公団から西端部の太田桐生線の架橋工事エリア部分を優先して調査してほしい旨の話があったため、3・4区の調査と並行して、進入路

# 1 調査の概要



第1図 遺跡位置図 (国土地理院 地勢図 1 : 200,000「宇都宮」使用)



第2図 調査区位置図 (太田市 1/2500地形図を縮小して使用)

## 1. 調査の概要

となる2区北部(2区-①)、架橋工事エリアである1区西部(1区-①-1・1区-②-2・1区-②-3・1区-③)の順に調査を進めることとした。3・4区は調査途中の遺構のみ終了させて、1・2区の調査を優先した。2区-①は8月下旬から表土掘削を行い、9月上旬に遺構調査に入った。重複が激しく調査面積に比して時間がかかったが、12月中旬に空撮を行い、調査を終了して埋め戻して進入路とした。1区は11月下旬から2区と並行して調査に入った。架橋工事エリアを優先して調査し2月上旬に空撮を行った。その後旧石器の試掘を行ったが、遺構・遺物は検出されなかったため調査を終了した。空撮後は引き続き東に向かい、2区南部(2区-②・③)の調査を進めた。

平成17年度も2班体制で調査を行った。前年度調査途中の、2区南部(2区-②・③)から、3・4区南部(3区-②-2・3区-②-1・4区-②-1)にかけての区域を調査した。空撮は7月下旬に行い、遺構調査終了後は旧石器の試掘を行ったが、遺構・遺物は検出されなかったため、9月16日で遺跡全体の調査を終了した。その後9月下旬に埋め戻しを行った。

### (3) 整理作業の経過

整理作業は平成19年8月から開始され、平成22年9月まで行う予定である。縄文時代～近世の複合遺跡であり、特に縄文と古墳～平安の遺物、遺構が多く検出されているため、縄文時代と弥生時代以降を分けて整理し、調査報告書もそれぞれの分冊とした。整理期間は延べ74ヶ月で、その内縄文時代は12ヶ月である。

平成19年度は1班体制で、弥生時代以降の整理を行った。平成20年度は、2班体制となり、1班は弥生時代以降、1班は縄文時代の整理を行い、縄文時代は報告書を刊行した。平成21・22年度はすべて弥生時代以降の整理作業の予定である。

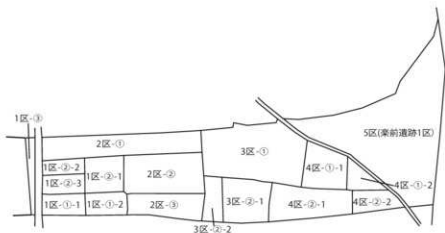
縄文時代の整理作業は、5月上旬まで縄文期遺物の抽出を行い、同下旬まで石器の分類をおこなった。6月より遺構図の修正を開始、これに並行して土器の分類作業を進めた。遺物は遺物収納箱に200箱を越え、目をとすだけで2ヶ月を要した。

実測個体の選定は8月に入ってからで、写真撮影の準備・拓本・実測等のメニューを消化していった。10月より遺構・遺物のトレースを開始、11月に版下作成を行い、12月19日の入札と慌しく日々が過ぎた。1月より以降は報告書の校正作業・遺物の収納作業を行い、今年度の業務を終えた。

## 2. 調査の方法

### (1) 調査区の設定

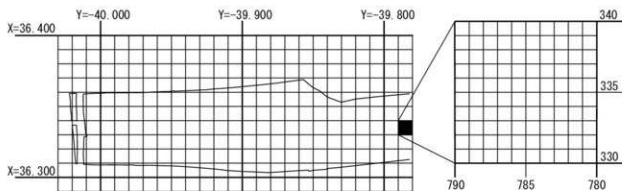
現道や畑の地境等を境界として西から東に向かって1～4区の大区画を設定し、調査順序等から各区を細分し、1区-①～③、2区-①～③、3区-①・②、4区-①・②を設定した。調査が進むにしたがって、調査の優先順によりさらに細かい区画が必要になり、1区-①-1・2、1区-②-1～3、3区-②-1・2、4区-①-1・2、4区-②-1・2を追加設定した。ただし、調査区は調査の便宜上のもので、遺構番号はすべて遺跡の通し番号でつけている。



第3図 調査区設定図

## (2) グリッド設定

日本平面直角座標（国家座標）を基準とし、X軸Y軸ともに国家座標の下3桁の値を用い、X軸-Y軸の順に併記し、その南東隅のポイント名をグリッド名とした（例350-850）。最小単位は1mであるが、方眼杭や遺物取り上げなどは5mグリッド（下一桁0、5）を用いた。



第4図 グリッド設定図

## (3) 遺構の調査

表土は重機で除去した。その後遺構確認作業を行い、確認後遺構を掘り下げた。遺構番号は調査区に関係なく通し番号とし、遺構にならなかった物は欠番とした。また番号が重複した遺構はアルファベットの英文字を番号の後につけて区別した。写真撮影は、6×7・6×6白黒、35mm白黒、35mmカラーリバーサル の3種類を基本とした。全景写真についてはラジコンヘリによる空中撮影を行った。測量は、断面図を手実測で行い、平面図は業者委託で電子平板によるデジタル測量とした。遺構調査終了後ロームの残っていた部分で旧石器の試掘を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

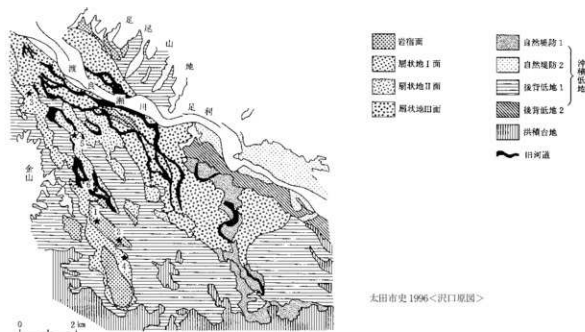
## (4) 遺物の整理

遺物は洗浄後、遺跡略号（KT-690）、調査区、調査面、遺構名・グリッド名等、遺物No.を記入した。

## II 周辺環境

## 1. 地理的環境

本遺跡は、栃木県境に近い渡良瀬川扇状地上に立地する。渡良瀬川扇状地は八王子・金山丘陵－足尾山塊に広がる扇状地で、桐生市赤岩橋付近（標高120m）を扇頂部に、太田市下小林から足利市御好地区（標高30m）を扇端部とする、南北18km・東西7.5kmを測る大規模扇状地である。扇状地はⅠ～Ⅲ面に区分され、最古期のⅠ面が丘陵側に、その東側にⅡ面が、現河道側に扇状地Ⅲ面が広がる。その形成年代はⅠ面がAs-BP降下以前に遡り、Ⅱ面は洪積世末の再堆積ローム、Ⅲ面については完新世の所産（沢口、1996）とされている。この見解に従えば、本遺跡は渡良瀬川扇状地Ⅰ面の台地上に立地することになるが、後述する遺跡の基本土層でも明らかなように降下テフラの堆積に齟齬が生じており、再検討の余地が生じているようである。これについて若干の私見を述べるなら、太田市ハヶ入遺跡（北関東自動車道関連、未整理）や東長岡戸井口遺跡（住宅団地造成に伴う発掘、事業団報告書 第111集）では暗色帯を切る洪積世の再堆積ローム、及び、その上面のAs-YPを確認しており、より複雑な地形発達が生じられることになり、図の修正の必要は明らかだろう。北関東自動車道は渡良瀬川扇状地を横断、栃木県境に抜けるものであり、その調査成果を総合することにより扇状地の地形発達の詳細が判明、これに遺跡分布を連動させることにより地域発達の様相解明が期待できることになる。北関東自動車道関連の発掘調査では、峰山・萩原・古水条里水田・二の宮・ハヶ入・大道西・大道東・楽前・鹿島浦・向矢部・矢部・只上深町・新島・道原の14遺跡が、関連事業に伴い1遺跡（東今泉鹿島遺跡）が発掘調査されている。現在、大部分が未整理であり、調査成果の詳細については今後の整理作業を経て明らかにされるだろうが、以下には事業団年報の記載に従い渡良瀬川扇状地の地理的環境についてその概要を記しておく。



第5図 渡良瀬川扇状地の地質区分

渡良瀬川扇状地の地形発達を理解するには、ハケ入遺跡の基本土層が重要になる。ハケ入では暗色帯以上のローム層が通常堆積した細石刃石器群の出土地点と、それより東の河川性再堆積ロームの堆積地点が存在した。これについては渡良瀬川変流（東遷）に伴う侵食によることが確実であり、同様なロームの堆積地点は東長岡戸井戸遺跡でも確認されている。これにより同段階の台地が金山丘陵東縁に広がることも確実となり、太田市竜舞地区の岩宿面（第5図）に続く地形面とすることができるだろう。このほか、特殊事例として萩原遺跡の低湿地を上げることができる。萩原遺跡では、As - BP以下のテフラが埋没泥炭層に挟在、低湿地としての性格が明らかになった。その形成年代については少なくともHr - HA降下より新しくならないが、渡良瀬東遷前の河川性堆積物（古桐生川?）により出口が塞がれ、低湿地化した可能性が指摘されるよう。

扇状地Ⅰ面については、沢口原因に従えば、大道西・大道東2遺跡の所在する東今泉の台地が該当、As - BPが堆積するということになるのであろうが、詳細は明らかでない。As - BPについて言えば県央田石器遺跡の発掘では同テフラは必ず存在、見慣れていることからみて、あれば気づくはずである。可能性として肉眼観察できるほど堆積していなかったということかもしれないが、テフラ分析が行われていないということが致命的で、結論づけられないのが現状である。図1-24（太田市史通史編）の3地点ではAs - BPが良好に堆積しており、1.5kmと近距離にある本遺跡周辺で確認されないのは不自然で、これにより複雑な地形発達を想定せざるを得ない。

扇状地Ⅱ面については、矢部遺跡以西が該当する。現河道を流れるようになる前の旧河道については、現在の菰川・矢場川の流路が想定されているが、発掘調査では複数の旧河道が明らかにされており、絶えず流路を変えていたようである。現在の流路についてその変流年代は不明だが、板倉町西岡付近では縄文から古代の遺跡（渡良瀬川河床遺跡）の上を流れており、これと矢部遺跡周辺の遺構検出状況を考え合わせれば、利根川変流と同時期中世後半の変流という可能性も否定できないだろう。

扇状地Ⅲ面については、それとされた地点で縄文から古代の集落が発見されている。扇状地Ⅲ面は足利市市場町付近から百頭町付近まで広がるようであるが、北関東自動車道関連の発掘成果、及び、遺跡分布を見る限り、足利市浅間山付近を境に新旧2分されることになるかもしれない。

遺跡の立地する渡良瀬川扇状地を概観した結果、渡良瀬川は徐々に東遷したのではなく、途中矢場川付近を流れる段階があり、扇状地Ⅲ面が細分されるだろうことが想定されることとなった。具体的には、足利市浅間山付近から東武線「あがた駅」周辺域を抜け、新时期扇状地を形成する段階がそれで、扇状地地形を良く残している。加えて、本遺跡の所在する東今泉の台地を含む北関東自動車道の路線内には、金山丘陵末端の台地縁辺（古水条里水田・ハケ入）を除いてAs - BPの堆積する台地はなく、従来の地形区分を見直す必要が生じている。

本遺跡の所在する東今泉の台地は扇状地Ⅰ面とされているが、As - BPが堆積せず扇状地Ⅱ面とすべきである。東今泉の台地は遺跡北方2kmの丸山付近から南北に延びる低平な台地で、基本的に緩く南に傾斜する。台地と水田の比高差はわずかであるが、遺跡西端と東端では約2mの高低差があり、東西方向にも緩く傾斜していた。また、遺跡内には浅い埋没谷が2ヶ所に入り込み、縄文期包含層を形成、多量の土器・石器類が出土した。埋没谷の形成要因については不明だが、少なくとも縄文以降の浸食ではないこと、俯瞰して見ると、現地形の変換点に一致していることから、旧河道あるいは形成時期の異なる段丘を示唆するものと理解している。

## 2. 周辺遺跡

渡良瀬流域の縄文期遺跡は、渡良瀬扇状地Ⅰ面に偏在（第6図）するように見える。扇状地の地質区分（第5図）に従えば、より新时期の太田市東部域の扇状地には縄文遺跡は存在しないということになるが、この地域は地盤沈降が著しい地域であり、渡良瀬の氾濫層に厚く覆われ、その実態は不明と言わざるを得ない。太田市域の縄文遺跡は八王子丘陵、及び、その周辺部台地、大間々扇状地Ⅱ面・由良台地等の台地縁部に立地、地元教育委員会の調査例がある。県の遺跡地図には八王子丘陵の周辺域に相当数の遺跡が周知の遺跡として記載されているが、太田市東部の水田域には遺跡が散在する程度で、遺跡の空白地帯に近い状況にある。この地域には従来遺跡がないとされた地域であるが、氾濫層下の塚廻り古墳群の発見から分かるように、氾濫層に埋もれた遺跡というものを考慮した対応が望まれよう。

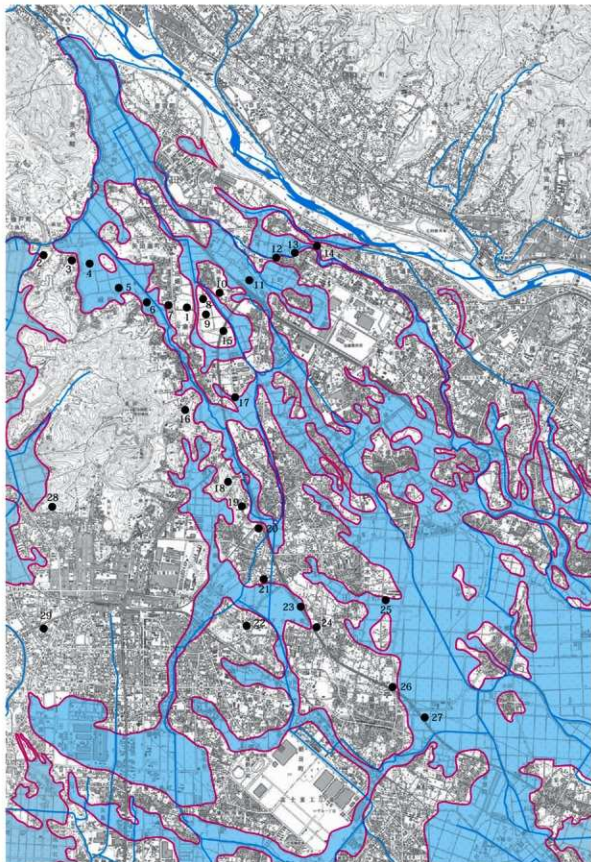
北関東自動車道の発掘は、渡良瀬扇状地の扇頂部を横断するようそのルートがあり、扇状地に所在する遺跡の実態を示唆する可能性がある。具体的には、大道東（1）・楽前（8）以東の北関東ルート上の遺跡で、鹿島浦（9）・向矢部（10）・矢部（11）・只上深町（12）・新島（13）・道原（14）と続く遺跡の様相である。楽前遺跡は本来的には大道東と同じ台地上の遺跡で、縄文中期～後期集落である。これに続く鹿島浦では住居こそ発見されていないが、中期段階の埋喪や土坑があり、広い意味で大道東と同時期の遺跡とすることができる。

これに続く矢部や向矢部でも、早期土坑群や中期遺構が発見されており、遺跡は途切れることがないようである。わずかながら縄文期遺構が途切れるのが深町や新島であり、渡良瀬川右岸の道原では再び中期から後期の集落が出現するようである。渡良瀬川の右岸一帯は扇状地Ⅲ面であり、こうした新时期扇状地には地形発達史的に古い縄文期遺跡は存在しないというのが常識的な見解になるだろうが、見直す時期にあるというべきだろう。渡良瀬川下流域には現河道に渡良瀬川河床遺跡（館林市）があり、古代住居や土坑の概形が見える。古代の河道は当然いまとは異なり、別の地点を流れていたことになる。北関東ルートで言えば、深町・新島遺跡の境界である可能性が高い。縄文期に上ればより丘陵部に近い地点ということになり、旧石器では更に丘陵部に近づく。こうした地形発達に即して遺跡は語られるべきであり、対環境という枠組で一部との生活が展開した以上、そうした視点は避けて通れないだろう。

さて、丘陵東の縄文期遺跡の動向であるが、これについては中・後期に遺跡数が増加することが指摘されており、丘陵部から台地部へ遺跡立地が変わるともされている。概ね、その理解は正しく今後も変わることがないだろうが、渡良瀬川の変流等の環境要素、具体的には関東造盆地構造や気候変動等に起因した環境の変化が影響していることは明らかである。そうした意味で、渡良瀬は母なる川というべきものかもしれないが、決して川に依存した生活ということでもなさそうである。それは、大道東の遺物組成を見れば明らかであるが、磨石・凹石・石皿その他の製粉具が組成の主体を占め、石錘等の漁労具は主体とならないことから分かる。

1 大道東遺跡	2 峯山遺跡	3 萩原遺跡	4 小丸山西遺跡	5 二の宮遺跡	6 八ヶ入遺跡
7 大道西遺跡	8 楽前遺跡	9 鹿島浦遺跡	10 向矢部遺跡	11 矢部遺跡	12 只上深町遺跡
13 新島遺跡	14 道原遺跡	15 東今泉鹿島遺跡	16 金井口遺跡	17 下宿遺跡	18 焼山遺跡
19 棚田遺跡	20 東長岡戸井口遺跡	21 東長岡金井口遺跡	22 女体山古墳東方遺跡	23 雷遺跡	24 上遺跡
25 清水田遺跡	26 賀茂遺跡	27 小町田遺跡	28 大鳥口遺跡	29 塚廻遺跡	





第6図 周辺遺跡

### III 基本土層

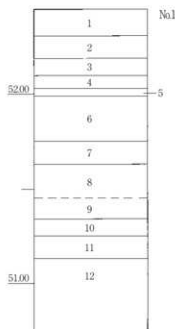
本遺跡の浅い埋没谷2ヶ所については、前章「地理的環境」の項で極く簡単に述べた。埋没谷は1ヶ所が940ライン（2区）を南北方向に、残る1ヶ所が4区と5区の境を北西-南東方向に抜けるものであった。その存在については発掘初期段階から明らかであったが、発掘時において、これについて特に注意は払われなかったようである。これらについて仔細に見ると、西側の埋没谷（940ライン）は遺跡の南に広がる台地斜面部に連なるように見え、東側埋没谷は調査区内に谷頭があるように見えるが、後者については、南から俯瞰して見ると、その方向は北西方向に走る農道に一致するようでもあり、少なくとも何某か地形の変換点を示唆しているようにも見える。これについて、これ以上の言及はデータが不足しており言及できないが、旧石器試掘時に作成した土層図から見る限り、西側埋没谷は旧河道の凹凸、東側埋没谷は異なる時期の段丘面を示唆しているようである。以下に、遺跡の基本土層を説明する。

まず、最初に遺跡の基本土層（第7図）を図示した。作図位置は調査区西端に近い台地頂部（310-990G）で、遺構確認面より下を作図した。1層～2層が黒ボク土、3層～9層がローム層、10層より下位が河川性堆積物となるようである。I～IV区の土層堆積は基本的には同様であるが、第8図に明らかのように微妙に異なり、単なる風成堆積のロームとすることは難しいようである。

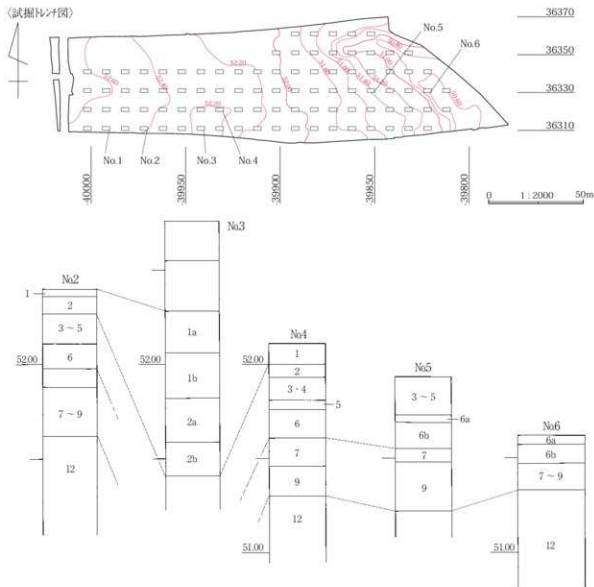
続いて、西側窪地を挟んで310ライン付近で3地点、これに連続するよう330ラインで2地点の土層図（第8図）を配置した。各地点とも河川性の堆積物がベースとなり、地点毎の対比が難しく、浅間板鼻軽石層（As-YP）と河川性堆積層のみ対比が可能な状況である。所見には砂礫層と記載されている地点もあるようだが、途中シルト層に砂礫層が介在する地点もあり、扇状地礫層については未確認であるというべきだろう。その他の傾向としてはNo3地点以西ではシルトと砂質土の互層堆積、同地点より東では砂礫の混じる砂質土が堆積したようである。No6地点については、As-YPが堆積せず、第4層より下位は典型的な河川性堆積物であり、砂礫層については確認されていないようである。

#### <310-990G>

- 1層 暗褐色土（白色粒子混入） 古代遺構確認面
- 2層 暗褐色土（白色粒子混入、ローム塊を含む）
- 3層 褐色軟質ローム層
- 4層 褐色軟質ローム層
- 5層 褐色硬質ローム層（砂質）
- 6層 As-YP（上層はアッシュ、下層はバミス）
- 7層 褐色砂質ローム層
- 8層 暗褐色軟質ローム層
- 9層 暗褐色軟質ローム層（やや砂質）
- 10層 黄褐色砂質土（砂礫を含む、河川性堆積物）
- 11層 暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の互層（河川性堆積物）
- 12層 砂礫層



第7図 遺跡の基本土層(1)



第8図 遺跡の基本土層(2)

以上、本遺跡の基本土層を説明した。発掘調査では旧石器を対象として75ヶ所でトレンチ(2m×4m)を設定、試掘を試みた。調査メニューとして全地点で土層を観察しており、所見ではAs-BPは堆積しないとされている。同様な状況は隣接する大道西・楽前両遺跡でも確認されている。本遺跡の所在する東今泉の台地は、従来の地質区分では渡良瀬川扇状地I面とされているが、その指標となるAs-BPは堆積しないことが確定的である。このほか、東今泉台地に堆積する可能性のあるテフラとしてはAs-YP(15,000BP)とAs-ok 1(18,000BP)がある。As-ok 1については北関東の発掘では未確認だが、同じ金山丘陵端部の台地に立地する東長岡戸井口遺跡(約3.5km南)では「暗色帯」を切る河川性堆積物の上と同テフラを確認しており、本遺跡周辺域でもほぼ同時期に渡良瀬氾濫原から離水、その後台地化したものと見られる。As-BP降下期前(22,000BP)、八王子・金山丘陵の西から東へ流路を変えた渡良瀬川が同丘陵東側の台地を部分的に浸食、北関東ルートではその痕跡が八ヶ入遺跡(五ヶ村用水の西側調査区)にあるということなのであろう。おそらく、渡良瀬川は遺跡北方1.5kmの独立丘陵(丸山-子丸山)の間を抜け、金山丘陵端部の台地を浸食していたはずで、これよりやや遅れて東今泉の台地が台地化したことになるのであろう。

## IV 検出された遺構と遺物

縄文関連の遺構として、住居12・土坑93・埋壙3・炉2が検出されている。調査過程で浅い埋没谷が確認されたことについては前章(Ⅲ章、基本土層)で述べたとおりであるが、縄文関連の各種遺構は、いずれもこの浅い埋没谷に挟まれた台地上に分布した。各種遺構の構築時期については、概ね、中期後半(加曾利E期)から後期初頭(称名寺期)に限定され、時期的には比較的限定されている。以下に、各種遺構について概括的に概要を記す。

竪穴住居12棟の分布については、大別二群に捉えることができる。西側の埋没谷(940ライン付近)付近に広がる一群と、どちらかと言えば東側の埋没谷を意識して広がる一群がそれである。両群とも調査区外に分布が延びることは明らかであるが、前者は土坑群を伴わず、土坑群を伴う後者とは対照的である。時期的には前者が後期・称名寺期から堀之内期に限定されるのに対し、後者は中期・加曾利E期から後期・称名寺期に継続する。竪穴住居12棟には柄鏡形住居2棟があり、東西分布域に各1棟が分布した。住居12棟は古代の遺構に重複、炉・柱穴・規模等が不明な住居も多く、pitからそのプランを推定した住居も多い。

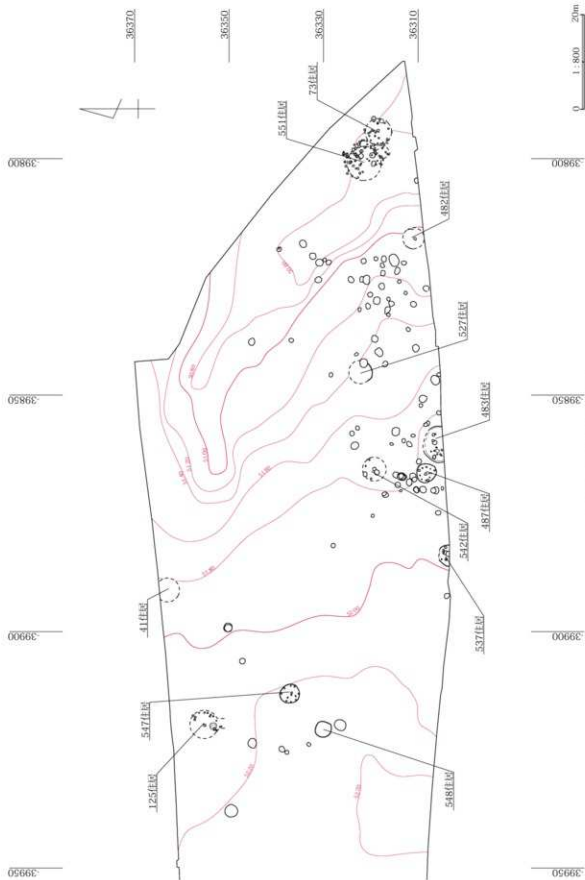
土坑は91基が確認されている。東側埋没谷に近い遺跡東側に分布、とりわけ820～830ライン、860～870ラインに集中分布する傾向が明らかである。土坑は円形・楕円形の2種類があり、量的には両者は拮抗している。前者にはフラスコ状を呈するものがあるが、東西両群に分布が見られ、特に集中分布する傾向は指摘できない。

埋壙および炉跡は、いずれも東側埋没谷に近い台地平坦部に確認されている。これらについては住居に伴う埋壙・炉跡の可能性も考えてみたが、周辺域には古代住居・pit等の重複が著しく、積極的に住居として認定できるような要素が見出せず、単独遺構として捉えた。

出土遺物は包含層を主体に、古代住居や土坑の覆土から多量の土器・石器類が出土している。総重量は土器だけでも1.5 tに達した。土器・石器類の分布域の主体が住居や土坑の集中する地点にあることは、図示(第90図)したとおり、確実である。包含層出土の土器については中期後半から晩期にかけて断続的に出土、後期中葉以降その出土量は激減しているが、その主体が住居と同様に中期後半から後期初頭にあることには変わりはない。石器類については、剥片系石器より凹石その他の礫石器類の存在が特徴的で、量的にも多い。これについては発掘精度の問題が問われなければならないが、採集遺物は小片に及んでおり、選択的に剥片類を除外した可能性は低く、ある程度実態を反映したものと考えている。ホルンフェルスやチャートなど、在地系石材を用いた石器製作は主に集落外で行い、集落内の石器製作は補完的とすべきだろう。

### 1. 住居

当該地域の縄文期遺構の覆土は、地山に似た褐色土であることが多く、遺構確認を難しくしている。このような状況は中毛域から東毛域においては珍しいことではなく、黒ボク土の形成が遅い地域特有の現象と理解すべきである。本遺跡においても例外ではなく、整理の段階で炉・pitの配置関係から住居を再認定したものもある。125・542・551号住居とした3棟がそれで、125住は当初125・126住、542住は当初485・542住

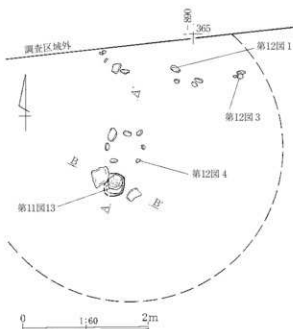


1. 住居

第9圖 縄文期住居配置圖

#### IV 検出された遺構と遺物

として重複住居として認識、551住については当初配石遺構として認識されていた。このため、発掘時と報告時のそれは、特に遺構写真において船舶を来しており、必要な図面類（セクション図・エレベーション図等）が欠落していることを予め了解していただきたい。また、調査区内には多量の pit が確認されているが、住居・土坑ほど時期判定が充分ではなく、縄文 pit か、それ以降の pit か、判然としないものが多い。縄文期建物跡の存在について近年の発掘調査では半ば常識化しているが、古代以降の遺構量が多く、これについては検討事項から省いた。



#### 1号住居 (第10図, PL 5)

**位置** 調査区(3区)北、西側埋没谷に近い台地平坦部 (X=36360, Y=-39890) に位置する。

**形状** 不明。

**床面** 未確認。包含層調査過程で炉石と埋設土器の存在を確認、あらためて住居の検出を試みたようである。その時点で、住居の西側部分は掘り過ぎていたようで、床面・柱穴とも確認されていない。床面は、可能性として埋設土器の口縁付近、炉石上面付近に求められようが、硬化面として明確な床面は確認されていない。住居は調査区外に延びることが確実だが、壁面のセクションが未検討であり、検討材料を欠いている。



#### 41号住居

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物等は含まれない、粘性・しまりやや弱い。  
2 褐色土 ローム塊を含む。



第11図 41号住居出土遺物(1)

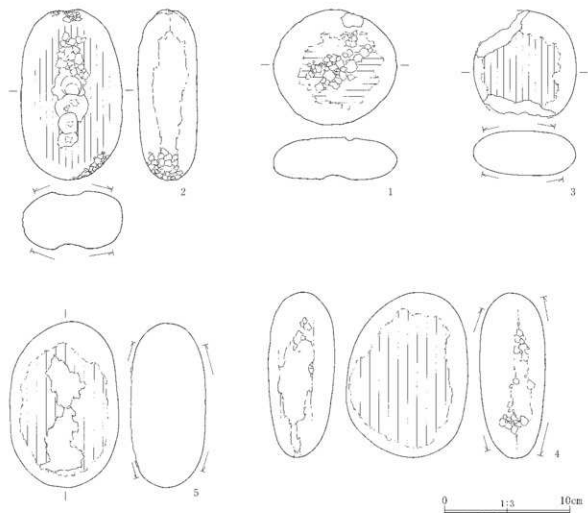
## 1. 住居

**炉 跡** 石囲い炉?埋設土器に接して人頭大の角礫(金山石)2個体を配す他、埋設土器の北に10~20cmを測る円礫(金山石・粗粒輝石安山岩)等が隙間を空けて方形に配されている。この方形区画については、燃焼部の可能性も否定できないが、埋設土器に続く断ち割り調査を欠き、燃焼部として機能したのか、埋設土器そのものが炉体土器として機能したのか、判断できない。埋設土器は方形区画の方向に傾いている。

**柱 穴** 埋設土器周辺に10本を越える柱穴が確認されているが、検出面が51.8m前後と、先に推定した床面(埋設土器口縁付近、炉石上面のレベル=51.7m)より高く、住居に伴う柱穴として認定できないという結論に達した。

**遺物の出土状態** 住居遺物として土器1(埋設土器)、石器7(凹石2・磨石3・剥片2)の他、礫・礫片が出土した。石器類は調査区北の壁際に集中、推定床面(標高51.55m)より0~15cmの間で出土している。

**所 見** 埋設土器に続く礫については、炉の根石ではないかという指摘を受けている。この場合、炉石は抜き取られたことになり、そのひとつが埋設土器脇の大型礫ということになる。住居を認定した時点で、本来住居遺物として扱われるべき土器の大部分は包含層遺物として取り上げられたのであろうが、それらから本住居に伴う遺物を抽出することは難しく断念した。本住居の帰属時期を推定できるのは、縄文施文の埋設土器1個体のみで、器形・縄文施文の特徴から称名寺期から堀之内期に帰属するものと考えている。



第12図 41号住居出土遺物(2)

#### IV 検出された遺構と遺物

##### 出土遺物（第11・12図、PL18）

13（11図）は、縄文施文の深鉢。口縁部を意図的に欠き、埋設（炉体）土器としたものである。胴部最大径付近にススが付着している。RL縄文を施文。2（12図）は、楕円偏平礫を用いた凹石。凹み部4ヶ所が直線的に並ぶ。上端に近い部分、礫の小口部分にアバタ状の打痕が残る。使用部は側面にも及び、打痕や磨耗が著しい。1は、円形偏平礫を用いた凹石。表裏両面の平坦面には磨耗痕が残り、磨石としての機能を有している。3は円形偏平礫を、4・5は楕円礫を用いた磨石。5の側面には打痕・磨耗痕が著しい。

##### 73号住居（第14図、PL 5）

位置 調査区（4区）東側、東側埋没谷に近い台地斜面部（X=36315、Y=-39790）に位置する。

形状 埋喪炉および柱穴の配置状況から、その存在を確認した。全体像その他は不明であるが、略円形を呈する住居と捉えた。径5.5m程度の住居と推定している。

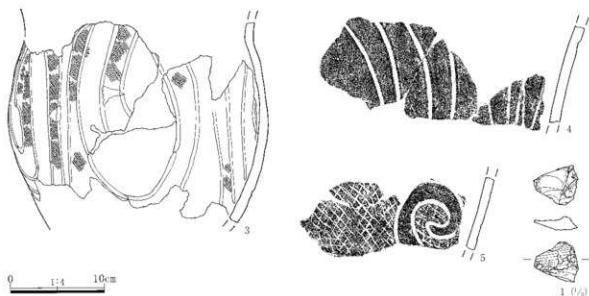
床面 未確認。

炉跡 埋喪炉。炉は東西軸から南側が直線的、それ以北は弧状となる略円形状（径50cm、深さ20cm）を呈する。炉体土器の上端を確認した時点で精査、認定した住居であるため、炉体土器上端の状況については不明である。検出状態からみて炉体土器は口縁部と底部を欠いた状態で埋設されたのであろうが、炉内から同一固体と見られる底部破片が出土しており、断定するだけの根拠に乏しい。セクション図の記載では焼土等の記載がないようであるが、炉体土器そのものには二次焼成の痕跡が明らかである。

柱穴 推定プラン内外に相当数が確認されているが、住居の柱穴となるだろう柱穴は推定プラン内側の8本程度である。南-東の柱穴が深さ55~60cm、その他の柱穴は20~30cmであった。

遺物の出土状態 炉と柱穴の位置関係から推定した住居であり、床面上の遺物については不明である。炉内より、炉体土器1、これとは異なる個体の胴部破片2、底部1、刺片1が出土した。

所見 炉体土器は調査時点で住居遺物として認定されているが、住居プランの認定は、その時点ではなされていないため、整理段階でプランを認定した。炉体土器の胴部文様構成から称名寺期に帰属するであろう。

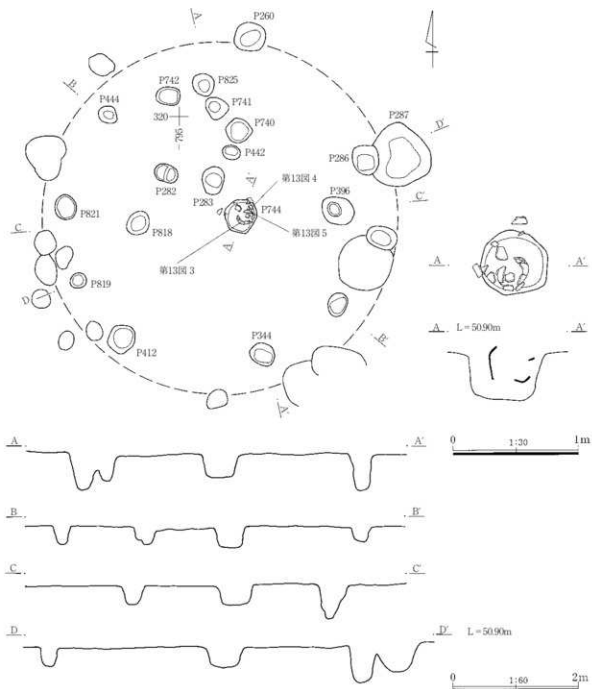


第13図 73号住居出土遺物



## 出土遺物 (第13図, PL18)

3 (13図)は、沈線により丁字文と渦巻文を組合せた胴部破片。胴部は1/2が残存、現状では丁字文3単位が残る。沈線間をRL縄文で埋めており、全体として4単位の文様構成としたのであろう。器面は内外面とも二次焼成により荒れている。4は、沈線渦巻文を配した胴部破片。炉内覆土から出土した底部破片(平底、未掲載)と同一個体。器面には二次焼成痕が明らかである。5は、単軸絡条体5類Lを施文後に、沈線渦巻文を配した深鉢胴部破片。1は、裏面側に小剥離痕を有するチャート製の小型剥片。



第14図 73号住居

#### IV 検出された遺構と遺物

##### 125号住居 (第15図, PL 6)

**位置** 調査区(3区)北側、西側埋没谷に近い台地平坦部(X=36350, Y=-39920)に位置する。

**形状** 炉および柱穴の配置状況、連結部付近の土坑、河床礫から、敷石住居を推定した。主体部は推定長さ6m(張出部、幅2m)を測る。159号住居(古代)と重複する。

**床面** 当初は重複住居(125・126住)として捉え、床に若干の高低差があるとされていたが、柱穴の配置状況等から最終的には同一住居として捉え直した。主体部と張出部の床面は約10cmの高低差があり、連結部付近の住居内土坑(159号)で緩く傾斜するようである。連結部には、20~40cm大の河床礫複数が直交するよう並んでいたほか、その南1m付近に埋堯1が存在、敷石住居特有の様相を呈していた。埋堯は副部下位より上を打ち欠いた深鉢で、連結部より南で正位の状態を検出されたものであるが、詳細は断ち割り調査の記録がなく明らかでない。

**炉跡** 地床炉。略方形状(長軸58cm・短軸52cm)を呈する。炉の西側壁は古代住居に重複、部分的に破損する。土層内には焼土粒・炭化粒の混入は記載されていないが、写真で見ると、側壁や底面が若干赤化していたようである。深さ31cmを測る。

**柱穴** 住居の柱穴となるだろう柱穴は推定プラン内側の10本程度で、主体部の柱穴は40~70cmと深く、張出部の柱穴は20cmと浅い。推定プラン東に相当数が確認されているが、北壁際や西壁際(古代住居の掘り方)の柱穴は確認されていない。

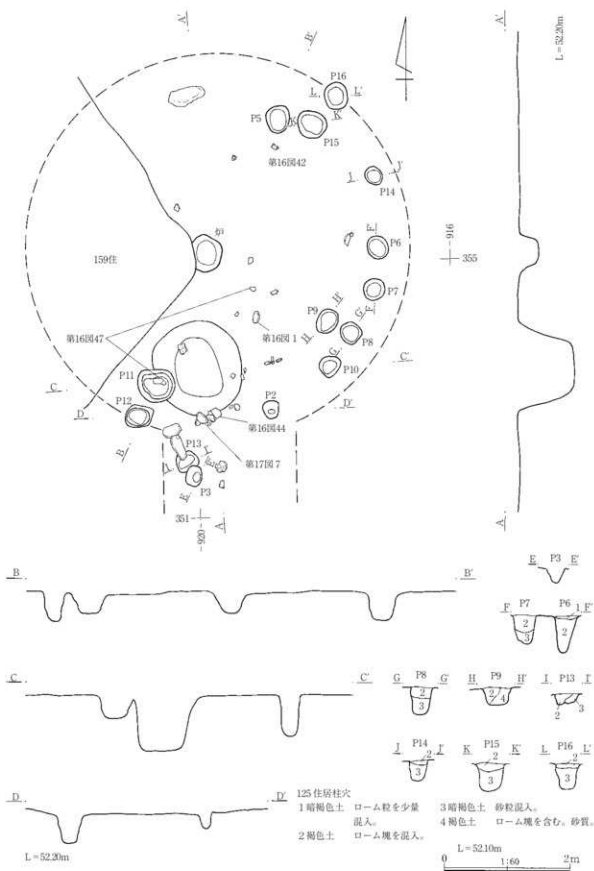
**遺物の出土状態** 連結部周辺・炉・柱穴周辺域より、土器16(口縁部破片11・胴部破片4・底部1)、石器8(凹石2・磨石3・石皿1・台石1・石製品1)の他、剥片1・礫6・礫片18が出土した。住居内土坑の敷石以外は床面より0~10cmの間で出土した。

**所見** 当初重複住居として扱われ、整理の段階で敷石住居としたことは、上述したとおりである。連結部の構造的特徴、埋堯・住居内土坑の存在など、敷石住居に特徴的な要素のすべてがあるが、埋堯の断ち割り調査や張出部のプラン確定作業を欠いており、不明瞭な点は如何ともしがたい。出土遺物は称名寺期後半の土器を主体としている。

##### 出土遺物 (第16・17図, PL18・19)

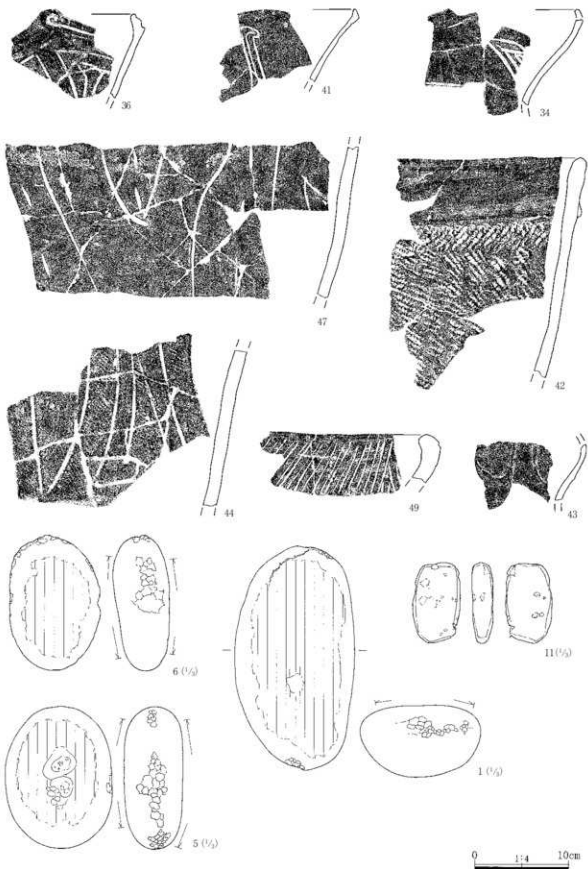
36(16図)は、沈線区画によるJ字文を施す。波状口縁の頂部に小突起を有し、この小突起から反時計回りに口唇部沈線が廻る。器壁は内・外面とも荒れている。41は、R字状文様の沈線区画を垂下、口縁部下位の横走沈線に続く口縁部破片。34は、41に類似したR字状文様の沈線区画を有する波状口縁破片。44・47は、沈線区画によるJ字文を施文した胴部破片。47は、区画内に沈線様の列点を施す。44は、区画内に縄文施文があるように見えるが、器面が荒れており、判断できない。42は、口縁部無文帯下に横位隆帯が廻る深鉢。隆帯下には、LR縄文を横位施文、それ以下は縦位施文する。49は、斜向する条線文が廻る口縁破片。施文は2種類が想定可能で、一つは幅8mmの半截竹管様の工具、一つは幅12mm程度の先端の鋭い工具(沈線の幅1.5mm程)であろう。うち、後者の工具は柔軟性があり、条線間は12~18mmの間で変化している。43は、U字状の細隆線を施す深鉢胴部上半の破片。5・6は、偏平礫を用いた凹石。6は表面側のみアバタ状の凹み部を有し、小口部や両側縁の打痕が著しく、使用頻度が高い。右側縁中央には打痕が集中しており、大きく窪んでいる。5は表裏両面に2個のロート状の凹み部を有する。部分的にアバタ状の打痕と重複しており、敲く・擦る用途が連続的であることを示している。裏面側を主体にススが付着する。5・6は側面に打痕を有する点で共通する。粗粒輝石安山岩製。1は、楕円形を呈する河床礫を用いた磨石。器体中央下半に浅い打痕があるようだが、磨耗で痕跡を止める程度である。重さ1324gを量る大型礫で、表面側に磨耗面

1. 住居

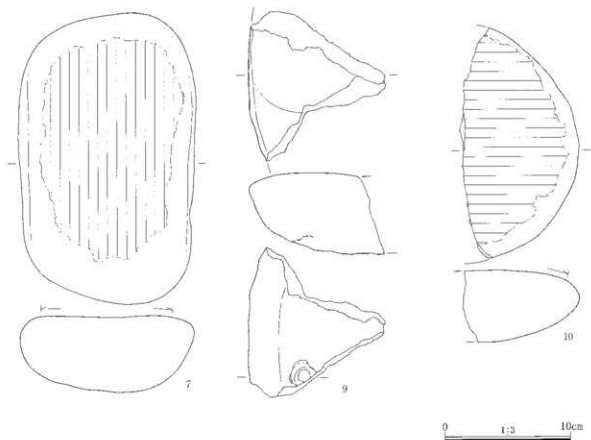


第15图 125号住居

IV 検出された遺構と遺物



第16図 125号住居出土遺物(1)



第17図 125号住居出土遺物(2)

があるほか、礫の小口部分に打痕がある。裏面は被熱により礫表皮が弾け飛んでいる。11は、板状を呈する軽石製の石製品。右側縁が直線的であるのに対して、左側縁は弧状に脹らんでいる。各辺の面取り・整形は明らかであるが、穿孔等の痕跡は見られない。

7・10(17図)は、大型礫を用いたもの。7を磨石、10を台石としたものであるが、名称は便宜的なものである。7は、偏平・長方形形状を呈する河床礫を用いたもので、表面側が平坦であるのに対して、裏面側は凸状に脹らみ、些が安定感に欠けている。やわらかい地面で使用するには問題ないであろう。表面側には磨耗面を認定、やや窪んでいることから、無縁石皿として機能したのかもしれない。粗粒輝石安山岩製。3460g。10は、破損資料で形状の仔細は不明だが、復原的に見れば30cm大の河床礫ということになる。現状で表面側が平坦、これに比べて裏面側は脹らみ安定感に欠けるということでは、7と同様の礫形状を呈するということになるが、これまた、下がやわらかければ使用するのに問題はないだろう。粗粒輝石安山岩製。9は、石皿破片。やや窪んだ形状から、描き出し部の破片であろう。裏面側には破損部に接してロート状の窪み穴1がある。粗粒輝石安山岩製。

IV 検出された遺構と遺物

482号住居 (第18図, PL 6)

位置 調査区(4区)南、東側埋没谷に近い台地平坦部(X=36310, Y=-39815)に位置する。

形状 住居の南北を土坑・溝に切れられ、全貌は不明。径4mを前後する規模の住居とされているが、壁高は3~7cmと低く、また、柱穴等が未検出であり、認定に不安が残る。住居は、現状で不整形形に見える。

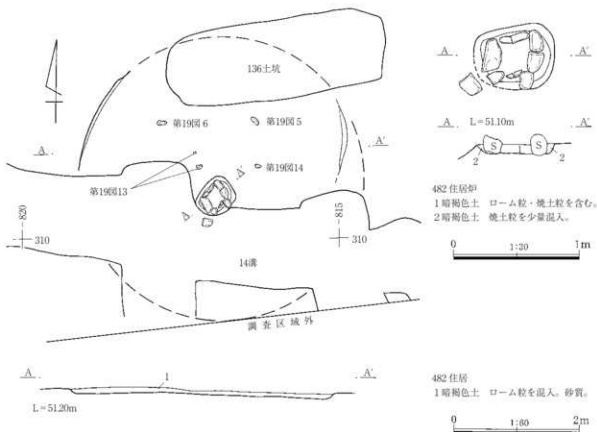
床面 概ね、平坦だが東側に緩く傾斜する。

炉跡 石囲い炉。南側炉石に角礫様河床礫を平置き、他辺に河床礫側面を上に向け、炉石を方形配置する。南北両辺には10kg近い大型礫を、東西両辺には3kg程度の河床礫を配する。炉の北西側と南東側2ヶ所の礫は偏平礫というより円礫に近く、溝の肩口から出土した礫も同系統の礫であり、位置的に特徴的である。炉の掘り方は長軸64cm・短軸51cm・深さ8cmを測る。炉石の赤化は判然としないうであるが、被熱してヒビ割れた炉石が多く、それ相応の使用状況が看取される。

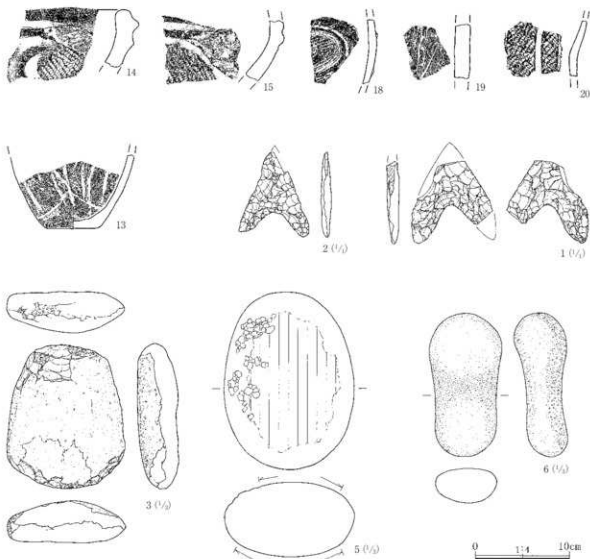
柱穴 未確認。

遺物の出土状態 炉の周辺域を主体に、土器10(口縁部破片3・胴部破片6・底部破片1)、石器6(石鏃2・打製石斧1・加工痕ある剥片1・磨石1・石製品1)が出土した。各遺物とも床面に密着した状態で出土している。

所見 壁高が低く、柱穴も確認されないことから断定する根拠に乏しく、そのことが前提となるが、炉の主軸から見れば、北東側のプランが歪んでおり、もう少し外側に脹らむ可能性が指摘されよう。出土遺物は床面から0~10cm浮いた状態で出土している。時代的には加曾利E期の土器が主体であり、概ね住居の帰属時期とすることができよう。



第18図 482号住居

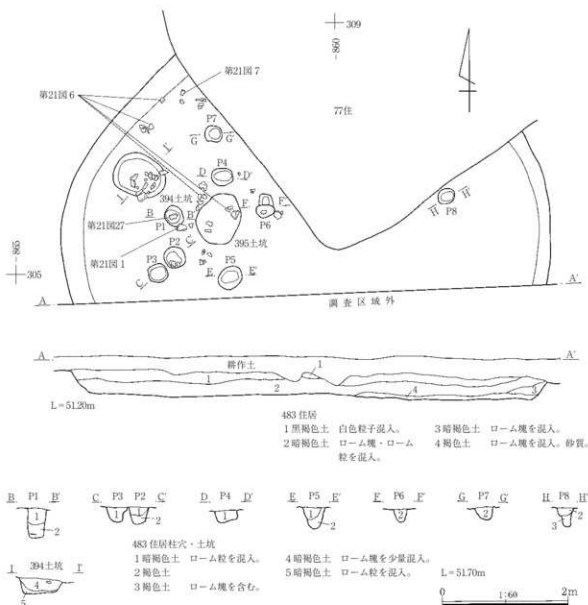


第19図 482号住居出土遺物

## 出土遺物 (第19図、PL19・20)

14 (19図)は、隆帯により楕円区画した口縁部破片。区画内にRL縄文を施文する。15は、楕円区画内にRL縄文を施文。口縁部を欠く。18は、隆帯によるU字区画内にLR縄文を斜位に施文した胴部破片。隆帯内に縄文を施文後、その内側を沈線区画している。19は、条線文を波状施文した胴部破片。波状文の施文後、浅い沈線を斜め施文する。20は、縦位沈線を垂下した胴部破片。地文にRL縄文を縦位施文する。13は、体部の下半に縄文施文後、沈線を垂下したものの。残存部に縦位施文したRL縄文を若干確認することができる。1・2は、器体を部分的に破損した石鏃。2点とも薄身で完成状態にあるものと見られ、先端部の破損(2)は典型的な衝撃剝離痕とすることができる。3は、打製石斧の未製品か。偏平礫を用い周辺加工を加え石器の製作を試みたようだが、途中破損したものであろう。上下両端の打痕を重視するなら、破損後は敲打具とすべきかもしれない。5は、大型の偏平礫を用いた磨石。6は、糸巻き状を呈する石製品。粗粒輝石安山岩製だが、石製品の中央部に暗色包有物(細粒半晶質?角閃石ひん岩ないし角閃石安山岩。捕獲岩ではなく、マグマ混合 mixing による塩基性マグマの注入により生じたものとみられる:飯島静男氏教示)を含む。

IV 検出された遺構と遺物



第20回 483号住居

483号住居 (第20回、PL 7)

位置 調査区(4区)南、東西埋没谷間の台地平坦部(X=36305、Y=-39860)に位置する。

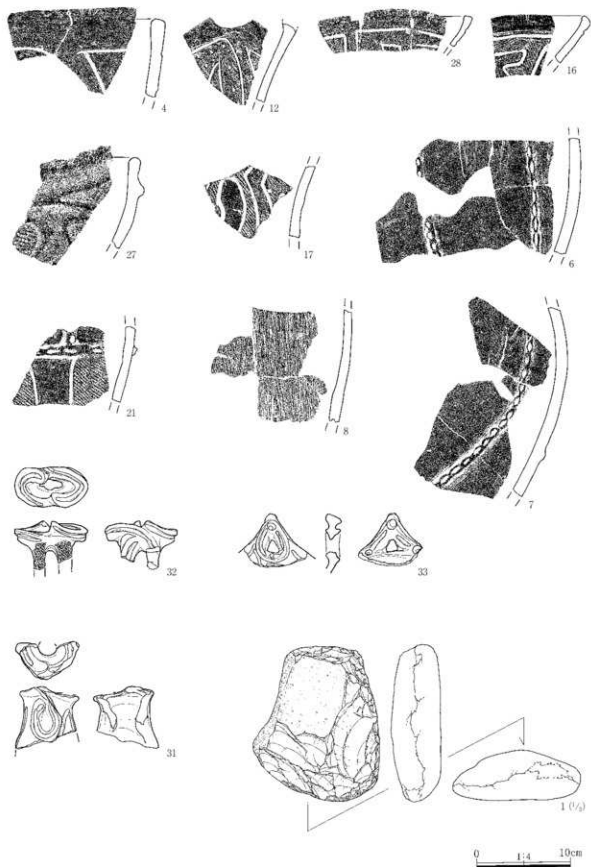
形状 住居の北側を古代住居に切れ、南側は調査区外に延びるため、全貌は不明。現状で7.5m(南側壁際)を測り、大型住居の部類に入る。住居プランは北西側が若干直線的だが、概ね円形を基調とするものであろう。

床面 残存状況は良好で、概ね平坦な床面が検出されている。住居内には2基の土坑(394・395号)が存在した。住居と土坑の新旧関係は判然としないうであるが、394号土坑は縄文土坑、395号土坑はそれ以後の土坑とされているようである。

炉跡 未確認。

柱穴 住居西側付近に10本弱の柱穴が確認されている。柱穴は径30cm前後、深さ20~50cmを測る。古





第21回 483号住居出土遺物

#### IV 検出された遺構と遺物

代の住居内に該当する柱穴は確認されていない。

**遺物の出土状態** 住居西側の柱穴付近を主体に土器31（口縁部破片8・把手3・胴部破片19・粘土焼成塊1）、石器（加工痕ある剥片1・剥片1）、礫片1が出土した。遺物は床面より10～25cmほど浮いた状態で出土しており、概して床面直上の遺物は少ない。縄文期の所産であろうとされた土坑（394号）にはレベル的に床面の上位から土坑覆土に連続して遺物が出土するようである。いずれも称名寺期のものであり、型式差は認め難い。

**所見** 出土遺物には、加曾利E期の土器が混在出土しているようであるが、その主体は称名寺期のそれである。

#### 出土遺物（第21図、PL20）

4・12・16・28（21図）は、沈線区画によりJ字文を施す口縁部破片。12は区画内に列点を、16は区画内にLR縄文を充填。27は、隆帯による楕円区画を有する口縁部破片。区画内にLR縄文を施文。器面は荒れる。17は、沈線区画内にLR縄文を施文する胴部破片。21は、横位隆帯が廻る胴部破片。横位隆帯の上は基本的に無文となるようであるが、これに縦位隆帯が付く。隆帯下はU字状に沈線を垂下させ、沈線内にLR縄文を施文。隆帯上には刺突文が連続する。8は、縦位条線文を施す胴部破片。6・7は、隆帯上に刺突文を施した胴部破片。31・32は、筒状の突起。33は、三角形状を呈する突起。いずれもC字状の沈線が環状に廻る。1は、打製石斧を転用したもの。便宜的に加工痕ある剥片として記載したものだが、刃部下端には敲打が著しく、敲打具とすべきものかもしれない。ホルンフェルス製。

#### 487号住居（第22図、PL7）

**位置** 調査区（4区）南、東西埋没谷間の台地平坦部（X=36305、Y=-39865）に位置する。これに隣接して483号住居がある。

**形状** 長軸4.2m・短軸4.1mを測る。略円形を呈する住居で、東側の壁が賑らむのに対して、南側の壁が窄まるように見える。壁高12cmを測る。

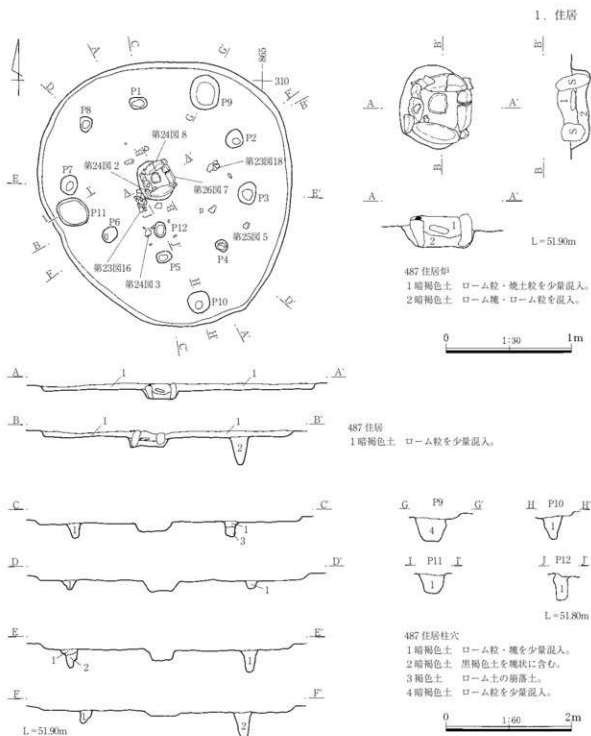
**床面** 残存状況は良好で、概ね平坦な床面が検出されている。

**炉跡** 石囲い炉。炉石に枕大の河床礫を用いる。礫重量は10kg前後で、北側と東側の炉石には石皿を転用、このうち北辺の石皿（炉石）は表面側が多孔石として存在しており、視覚的効果は高い。炉の北辺の両サイドは粘土で塞がれ、その外側に土器片が張り付いているほか、南側炉石の両サイドには棒状の河床礫と扁平礫を配している。また、炉内には破損した石皿が使用面を下に向けて出土、これについてはやや東に傾いていることから、炉の使用に纏わるものとしての可能性も否定できない。炉石の大半は被熱して破損している。炉の掘り方は長軸65cm・短軸55cm・深さ13cmを測る。

**柱穴** 炉石を中心に楕円形状（長軸3.0m・短軸2.5m）に柱穴が廻る。柱穴は径30cmだが、深さ（13～43cm）はバラツキがある。このほか、炉の長軸上・南側壁際に柱穴1（深さ45cm）、炉の短軸上の両サイドには径50cm・深さ30cm程の柱穴？がある。

**遺物の出土状態** 炉の周辺を主体に土器6（口縁部～胴部破片5、胴部破片1）、石器10（石鏝1・磨石3・石皿4・石核1・剥片1）、礫5が出土した。遺物は床面から5～10cmほど浮いた状態で出土している。

**所見** 本住居は他の遺構と重複することなく検出され、その全貌の分かる数少ない住居のひとつである。炉は構造的で、コーナーに棒状礫を配するなど、炉の祭祀的要素を感じる。出土遺物は加曾利E期の土器が主体を占める。

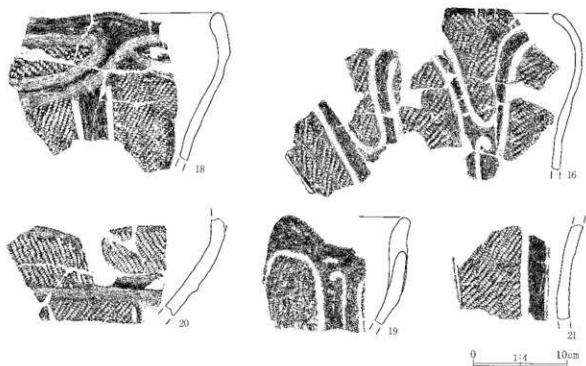


第22図 487号住居

出土遺物 (第23~26図, PL20・21)

18 (23図)は、沈線による楕円区画を有する口縁部~胴部破片。楕円区画間に波頂部を有する。楕円区画の下にはP L縄文を縦位施文、沈線を垂下する。沈線間は棒状工具で整形。炉の東側床面(+5cm)の出土。20は、隆帯による楕円区画を有し、隆帯下に沈線を垂下する。R L縄文を楕円区画内に横位施文、隆帯下に縦位施文する。炉の北西側コーナー出土。16は、沈線をU字状に配したもの。口縁部にR L縄文を横位施文、それ以下は縦位施文する。U字状沈線は縄文施文後で、U字状沈線の下には蕨手状の沈線が付く。炉の西側

IV 検出された遺構と遺物



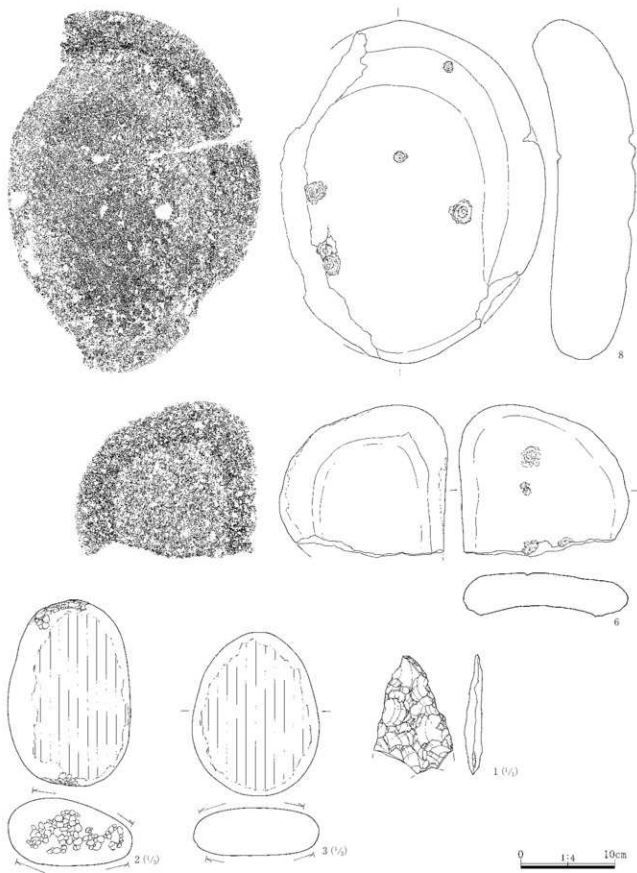
第23図 487号住居出土遺物(1)

床面上に出土した。19は、U字状沈線を有する波状口縁。区画内にR L縄文を充填、沈線間に蕨手状沈線を施文する。器面は荒れている。21は、沈線を垂下した深鉢の胴部破片。R L縄文を縦位施文。炉の東側コーナー出土。

8 (24図)は、炉の東側炉石として転用されていた石皿。機能部は使用頻度を反映して平滑で、まだまだ使用に耐える状態にあるはずであるが、機能を停止させ、炉石とされたようである。表面側6、裏面側41の孔を穿つ。ススの付着、ヒビ割れ等の被熱痕跡が明らかである。器体の左側を破損する。粗粒輝石安山岩製。125kg。6は、炉内出土の石皿。器体下半を欠損する。機能部は平滑で、裏面側に孔3を穿つ。2は、楕円偏平礫を用いた磨石。表裏両面とも磨耗が激しいほか、上下両端の小口部分は打痕が著しい。炉の南西コーナーの出土で、被熱が明らかである。粗粒輝石安山岩製。1225g。3は、楕円偏平礫を用いた磨石。炉の南側床面より出土した。777g。1は、チャート製の石鏃。左右の返し部を破損する。加工状態は雑であり、製作途上、破損した可能性が高い。25g。

5 (25図)は、長さ34cm・幅28cmを測る大型の石皿。住居南側の柱穴3・4の間に出土したもので、炉とは直接関係しないものであるが、全面にススが付着、ヒビ割れ、破損している。石皿として使用可能な状態にあるが、機能部(使用面)には打痕が残り、使用頻度は低い。表面側に孔1を、裏面側に孔15を穿つ。石皿は有縁で、右側の縁は耳たぶ状を呈する。粗粒輝石安山岩製。7620g。

7 (26図)は、長さ34cm・幅24cmを測る大型の石皿。東側炉石として埋め込まれていたもので、これにより被熱している。機能部は平滑だが、長軸上に打痕が残り、それほど使い込んだ状態にはない。縁は2cm程で、使用面より鋭く立ち上がり、左側の縁には石皿製作時の打痕が残る。粗粒輝石安山岩製。9780g。



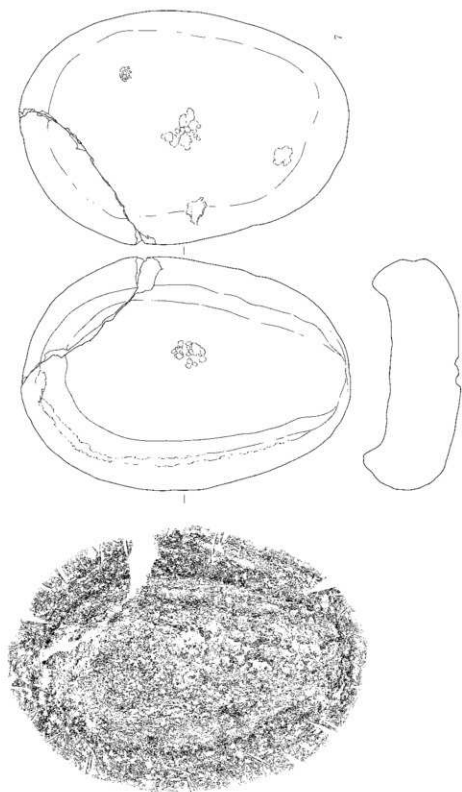
第24图 487号住居出土遺物(2)

IV 検出された遺構と遺物



0 1:4 10cm

第25図 487号住居出土遺物(3)



第26图 487号住居出土遺物(4)

IV 検出された遺構と遺物

527号住居 (第27図, PL 8)

位置 調査区(4区)南、東西埋没谷間の台地平坦部(X=36320, Y=-39845)に位置する。古代住居(511号)、及び、縄文土坑(673号)に重複する。

形状 古代住居に重複するため、規模は不明。残存状況からみて、略円形を呈する大型住居(径7mを前後?)と推定。

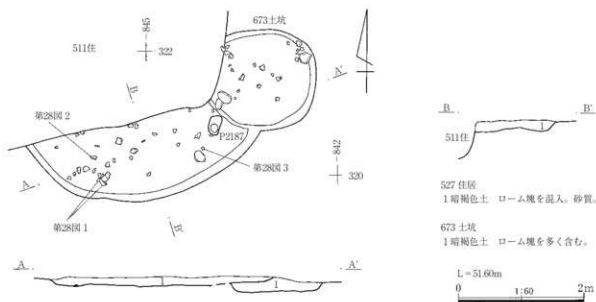
床面 概ね、平坦な床面が検出されている。

炉跡 未確認。

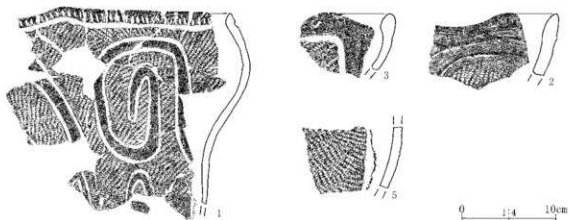
柱穴 未確認。P2187は上層から掘り込まれたものである。

遺物の出土状態 住居南西の壁際を主体に土器5(口縁部破片4・胴部破片1)、石器(加工痕ある剥片2・剥片2・凹石1・磨石1・敲石1)、礫8が出土した。遺物は床面から10cm内外で出土している。

所見 出土遺物は加曾利E系の土器が主体を占め、少量だが称名寺期の土器片が混じるようである。住居の全貌は不明だが、称名寺期に帰属する住居と捉えた。



第27図 527号住居



第28図 527号住居出土遺物



## 出土遺物 (第28図, PL22)

1 (28図)は、波状口縁に刺突を施した深鉢。口縁部刺突文の下には横状沈線を廻らせ、R L縄文を施文後、胴部に渦巻状・U字状の沈線を施文する。3は、波状口縁の破片。波頂部下にU字状沈線を廻らせ、R L縄文を縦位施文する。2は、波状口縁の破片。波頂部下に細隆線を大きく弧状に配す。細隆線内にR L縄文を施文する。5は、やや幅の広い沈線を垂下する胴部破片。R L縄文を施文する。

## 537号住居 (第29図, PL 8)

位置 東西埋没谷間の台地平坦部 (X=36300, Y=-39880) に位置する。調査区 (3区) 南に住居が延びる。

形状 住居の北側が東山道の側溝と重複、南側が調査区外に延びるため、全貌は不明。残存状況からみて、略円形を呈する住居 (径5m弱) と推定。

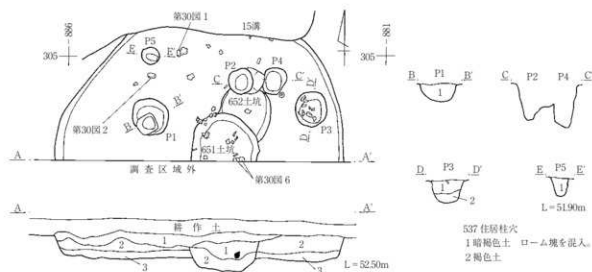
床面 概ね、平坦な床面が検出されている。住居内には土坑2基 (651・652号) が重複しており、少なくとも651号土坑については住居より新しいことが判明している。

炉跡 未確認。

柱穴 現状で、5本を確認した。北西側柱穴の深度 (10cm弱) が浅く、これ以外は30~60cmと深い。柱穴は壁際に連続するようなものではないようである。

遺物の出土状態 土坑付近と柱穴3に遺物は集中出土している。土坑出土の土器片も小片だが、住居出土のそれと型的には差を認めない。住居出土の遺物は床面から15cmの間に出土した。小片が大部分だが、土器5点・石器2点を図化した。

所見 出土遺物は加曾利E3式の土器が主体を占めた。



## 537 住居

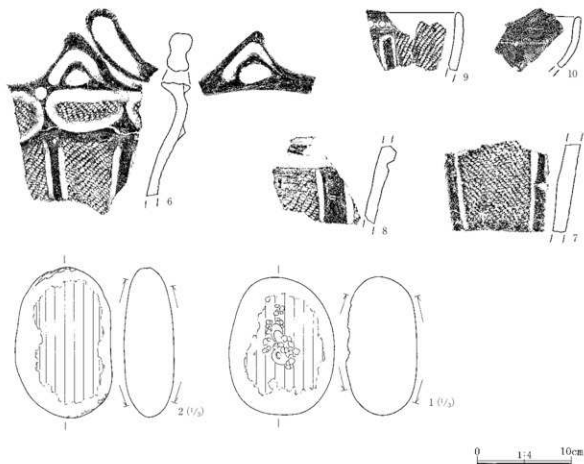
- 1 暗褐色土 ローム粒を混入。砂質。  
2 暗褐色土 ローム塊を混入。  
3 暗褐色土 ローム塊を多量混入。

## 537 住居内 651号土坑

- 1 暗褐色土 ローム塊を混入。  
2 暗褐色土 ローム粒を多量混入。

第29図 537号住居

IV 検出された遺構と遺物



第30図 537号住居出土遺物

出土遺物 (第30図、PL22)

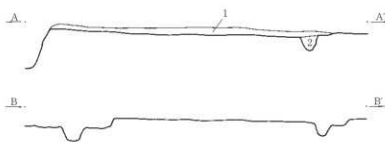
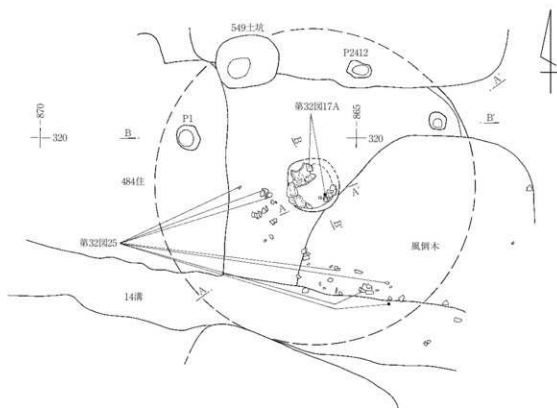
6 (30図) は、平縁に三角形の突起の付く口縁部破片。口縁部には隆帯による楕円区画があり、その下に2条1単位の沈線が垂下する。楕円区画内にR L縄文を横位施文、隆帯下にR L縄文を縦位施文する。9は、口縁部に円形刺突、その下に横位沈線を施す口縁部破片。横位沈線下にはU字状沈線文が垂下する。R L縄文を縦位施文。10は、口縁部無文帯を持つ口縁部破片。無文帯の下に波状の条線文を施文する。8は、横位隆帯下に垂下沈線を配置する。R L縄文を施文。7は、垂下沈線間にL R縄文を施文した胴部破片。2は、楕円偏平礫を用いた磨石。表裏両面とも磨耗が著しい。粗粒輝石安山岩製。576g。1は、楕円形礫を用いた凹石。表面側にロート状の凹み部が2ヶ所、裏面側にアバタ状の凹み部2ヶ所がある。粗粒輝石安山岩製。704g。

542号住居 (第31図、PL 9)

位置 東西埋没谷間の台地平坦部 (X=36320、Y=-39865) に位置する。住居の北側と西側で古代住居が重複する。

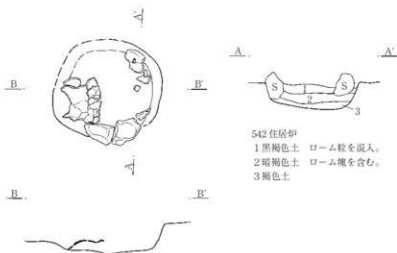
形状 生きた住居の壁は北東側で部分的に確認したのみであり、全貌は不明だが古代住居の掘り方に縄文柱穴として認定可能なものがあり、これから推定して、ほぼ円形を呈する住居プランを推定した。住居規模は、概ね5m内外になるものと考えている。

1. 住居



542住居  
1 暗褐色土 □-ム塊を少量混入。  
2 褐色土

L=51.80m  
0 1:60 2m

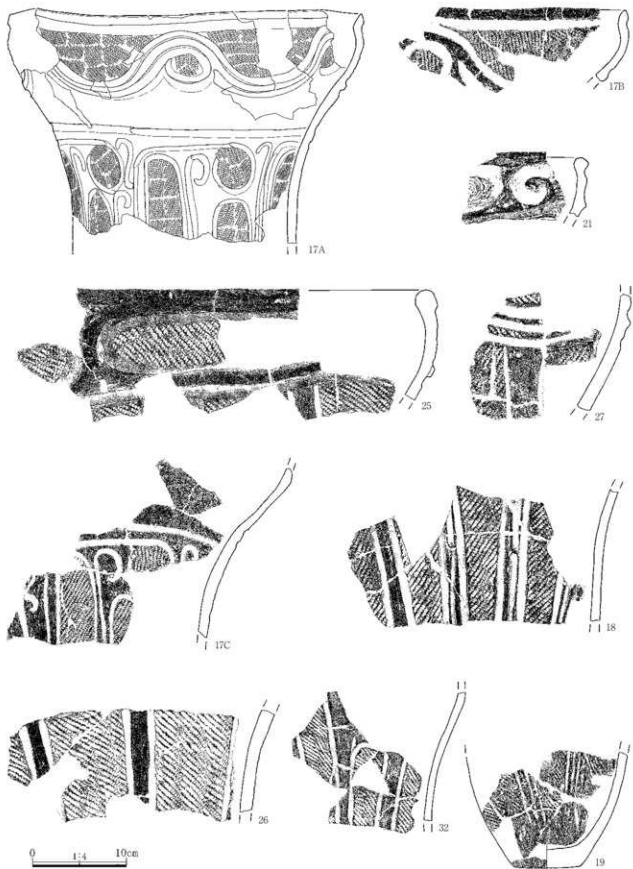


542住居切  
1 黒褐色土 □-ム粒を混入。  
2 暗褐色土 □-ム塊を含む。  
3 褐色土

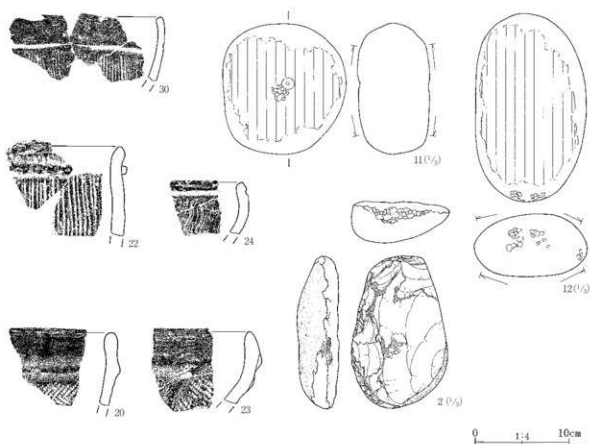
L=51.80m  
0 1:30 1m

第31图 542号住居

IV 検出された遺構と遺物



第32図 542号住居出土遺物(1)



第33図 542号住居出土遺物(2)

**床面** 炉の南東側を倒木痕が壊しており、床面の状況は明らかでない。

**炉跡** 石囲い炉。炉の南東側と南西側に炉石があるのみで、炉石は基本的に抜かれてしまっている。炉の北辺には土器片が内面を上に出土、これについては炉の構造体のひとつであるように見えるが、炉内には複数の個体が集中出土しており、廃棄されたものとして理解しておきたい。

**柱穴** 北東側壁際で柱穴1を確認した。柱穴は径30cm・深さ10cmを測る。古代住居の掘り方の柱穴は深さ30~60cm(推定値)で、位置的な要素を重視して認定した。

**遺物の出土状態** 炉の西側に遺物が集中出土している。炉の南側に出土した多量の遺物については、列状に分布しており、倒木に関係した、少なくとも二次的に移動したものである可能性が高い。炉の西側の遺物は床面より10cmほど浮いた状態で出土している。

**所見** 本住居は、当初485号住居と重複するとされたものであるが、整理の段階で単独住居としたものである。倒木と重複していたこと、埋土が褐色系で地山と区別が難しいこと等が誤認の原因である。出土遺物は加曾利E3式の土器が主体を占めた。

**出土遺物** (第32・33図、PL22・23)

17A(32図)は、口唇部直下に太い横線沈線が廻り、その下位に隆帯による〇字文を連結、口縁部文様帯6単位を構成する。頸部には横線沈線が廻り、それより下位は沈線による渦巻文・U字文・巽手文を1単位として施文、胴部文様を構成する。口縁部にR L縄文を横線施文、胴部にR L縄文を充填施文。17Bは、17Aと同一個体。21は、隆帯による楕円区画文を渦巻文で繋ぐ口縁部破片。楕円区画文内には条線文を渦巻状

#### IV 検出された遺構と遺物

に配す。25は、口縁部に隆帯による楕円区画文を配し、隆帯下の胴部に垂下沈線を施したものの。R L縄文施文。27は、楕円区画文下に横位沈線を配し、これより下位に縦位沈線を垂下した胴部破片。口縁から横位垂下沈線付近までR L縄文を横位施文、それより下位は縦位施文。17Cは、渦巻文・U字文・蕨手文を組み合わせて1単位とした胴部破片。17A・Bと同一個体。18は、縦位沈線3本を1単位とする胴部破片。R L縄文を住施文。26は、沈線を垂下した胴部破片。L R縄文を縦位施文。32は、縦位沈線で区画した胴部にU字文を配したものの。R L縄文を施文後、沈線区画する。19は、沈線を垂下した底部破片。R L縄文を縦位施文。

30 (33図) は、口縁部無文帯下に横位沈線が廻り、それより下位に縦位条線文を施文した口縁部破片。22は、横位隆帯上に刺突文、その上下に縦位条線文を施文した胴部破片。24は、無紋帯下に横位沈線が廻り、波状条線文を施す口縁部破片。20は、口縁部無文帯下に隆帯を配し、その下位にL R縄文を帯状施文、それより下位を縦位施文したものの。23は、口縁部に隆帯による楕円区画を配したものの。口縁部にはやや広い無文帯を有する。楕円区画内にR L縄文を施文。11は、楕円形礫を用いた凹石。表裏両面にロート状の凹み部1ヶ所がある。礫の表裏両面・小口部下端が磨耗する。粗粒輝石安山岩製。900g。12は、楕円形礫を用いた磨石。表裏両面とも磨耗するほか、礫の小口部下端に打痕が著しい。粗粒輝石安山岩製。1031g。2は、礫面を大きく残す分割礫をもちいたもの。背面側左側縁・上端に剥離を加え、左右対称に石器を仕上げている。左辺と背面側には磨耗痕は明らかであり、敲打具としての可能性も否定できないが、用途は不明。便宜的に加工痕ある剥片に分類した。ホルンフェルス製。424g。

#### 547号住居 (第34図、PL10)

**位置** 西側の埋設谷に近い台地平坦部 (X=36335, Y=-39910) に位置する。

**形状** 長軸4.2m・短軸4.0mを測る。略円形を呈する住居だが、北西側のプランが窄まるように見える。壁高15cm前後を測る。

**床面** 写真から判断する限り、その認定に際し相当難渋したようである。炉石を確認した時点で、床面が確定したということであろうが、硬化面として床面が確認できたということではなさそうである。

**炉跡** 石囲い炉。北西側と南東側の炉石が抜かれているようである。断面図から見る限り、炉石は掘り方に埋め込まれたというより、その立ち上がり際に置かれたように出土しており、床面の構築に連動して床面に埋め込まれたとすることができよう。炉のサイズは炉石の内側で長軸45cm・短軸30cmを測り、掘り方のサイズと同規模である。炉の主軸は北北西-南南東であり、これに並行するよう柱穴位置が決定されているようである。

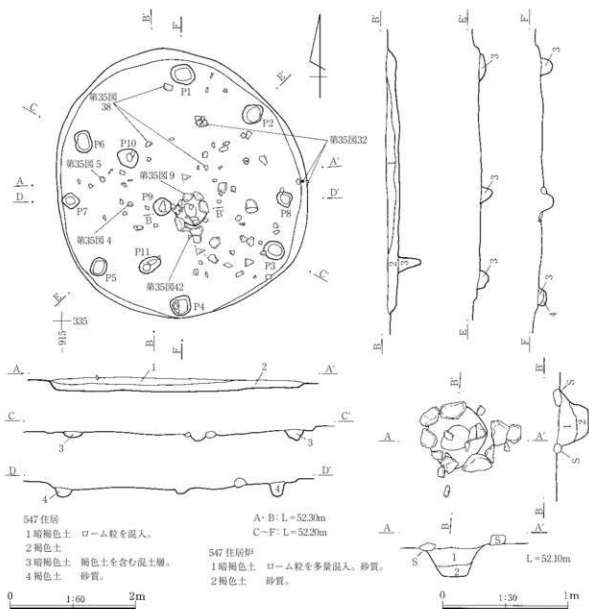
**柱穴** 壁際に8本、炉の西側に1本、その中間に2本の柱穴が確認されている。柱穴は径30~40cm・深さ10~20cmと同規模である。

**遺物の出土状態** 炉の南東側・北西側に密に出土している。南東側にはススの付着した被熱礫が多く出土、位置的に炉石が抜かれたものと考えている。同一個体 (第35図32・34) が炉内、および、その周辺域に散在して出土するなど、床面から10~20cmほど浮いて出土するものが多く、その出土状態は基本的に廃棄状態にあるとすることができる。

**所見** 他の遺構に重複することなく確認され、その全貌が判明した。柱穴は壁柱穴タイプのそれである。出土土器は称名寺期に帰属するものが多い。

#### 出土遺物 (第35図、PL23・24)

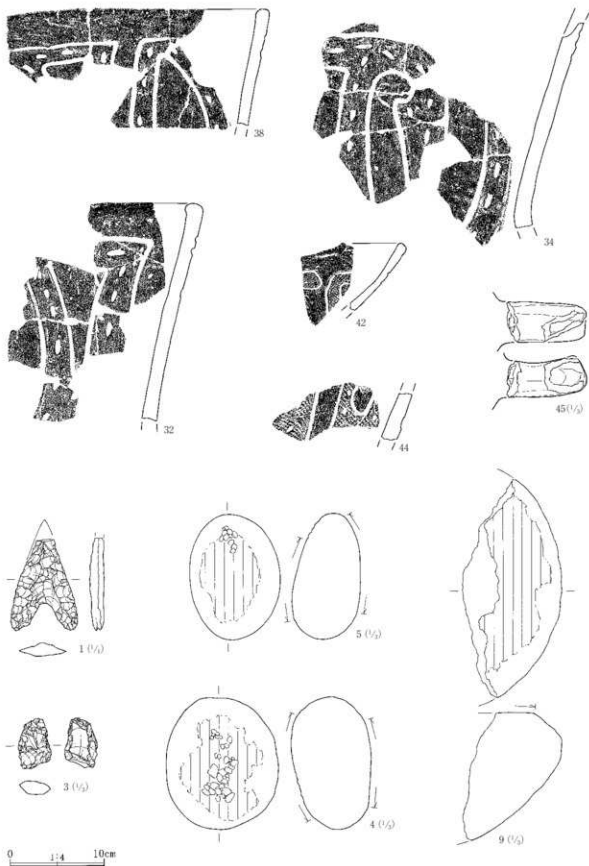
38 (35図) は、沈線区画によるJ字文を施した口縁部破片。区画内を列点で埋める。内外面とも被熱して



第34図 547号住居

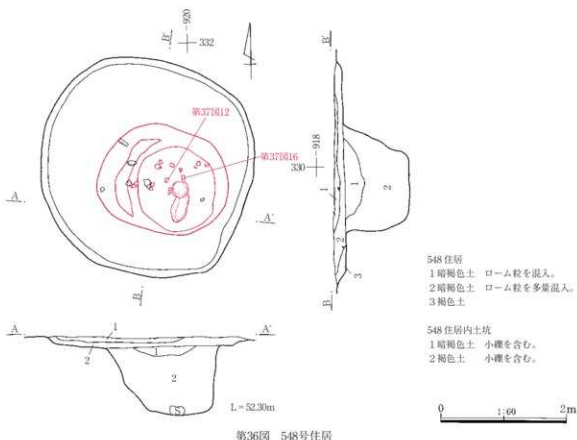
腕い。32-34は、38と同様に沈線区画によるJ字文を施したものの。文様構成は異なるように見えるが、胎土・整形とも酷似、同一個体と捉えた。42は、細沈線区画によるJ字文。沈線区画内にRL縄文を充填施文する。波状口縁を呈する。44は、沈線区画によるJ字文を施したのち、区画内に列点を埋めたもの。地文にRL縄文を横位施文する。45は、注口部破片。1は、チャート石の石鏝で、器体は浅く深い押圧剥離が全面を覆い、器体も薄く、対称形である。左側縁には衝撃剥離痕様の桶状剥離があり、完成状態にあるとも見えるが、可能性ということに止めておきたい。1.43g。3は、加工剥片。表裏両面とも周辺部から打ち欠き、両面加工体の石器を作出する製作意図が読めるようにも見えるが、詳細は明らかでない。5は、楕円形礫を用いた磨石。表裏両面に磨耗面を有するほか、表面側には打痕が残る。溶結凝灰岩製。516g。4は、円礫を用いた凹石。表裏両面とも磨耗痕・打痕が残る。裏面側の打痕は磨耗して痕跡のみ残る。花崗岩。837g。9は、台石破片。上面がフラットで、仮面は凸状に脹らむ。粗粒輝石安山岩。1289g。

IV 検出された遺構と遺物



第35図 547号住居出土遺物





第36図 548号住居

548 住居  
 1 暗褐色土 ローム粒を混入。  
 2 暗褐色土 ローム粒を多量混入。  
 3 褐色土

548 住居内土坑  
 1 暗褐色土 小礫を含む。  
 2 褐色土 小礫を含む。

#### 548号住居 (第36図、PL 8)

**位置** 西側の埋没谷に近い台地平坦部 (X=36330、Y=-39920) に位置する。

**形状** 長軸2.5m・短軸2.3mを測る。略円形を呈する住居だが、東側プランが直線的である。壁高15cm前後を測る。

**床面** 比較的平坦だが、壁際は緩く立ち上がり、皿状を呈する。住居中央に土坑が重複、土層図から判断する限り、土坑より住居が新しいとされている。

**炉跡** 未確認。

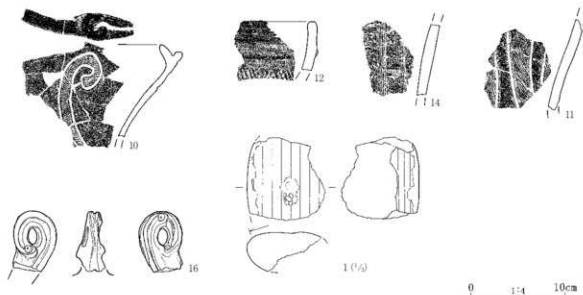
**柱穴** 未確認。

**遺物の出土状態** 住居中央付近に出土している。住居出土の遺物としては、床面から20cmの間に出土したようである。土坑内には底面付近から被熱礫2が出土したほか、土器片類は覆土中から出土している。出土遺物には加曾利E3式期の垂下沈線文土器や条線文土器も含まれるようであるが、その主体は加曾利E4式期から称名寺I式期にある。

#### 出土遺物 (第37図、PL24)

10 (37図) は、波状口縁頂部に小突起を有する口縁部破片で、その直下にRL縄文を充填施文した逆J字文状の区画文を配する。突起上面を棒状工具で刺突、刺突部を基点に口唇部上に沈線が廻る。12は、口縁部無文帯を有する口縁部破片。無文帯下には横位の細隆線が廻り、胴部にRL縄文を施文する。14は、条線文を施文した胴部破片。条線文は3単位を縦位に、1単位を横位に施文する。11は、沈線で渦巻状に区画した胴部破片。沈線内には、Rの縄文を横位施文する。16は、住居中央の土坑内より出土した口縁部突起。片側・

#### IV 検出された遺構と遺物



第37図 548号住居出土遺物

孔の上下に棒状工具による円形刺突文を施し、沈線が環状に廻る。別の片側には孔の下端に円形刺突があり、これを基点に沈線が廻る。1は、凹石の破片。偏平碟を用い、凹み部1がある。凹み部の位置からみて、碟は小形の部類に入る。粗粒輝石安山岩製。

#### 551号住居 (第38・39図、PL11)

**位置** 4区、東側の埋没谷に近い台地斜面部 (X=36320, Y=-39800) に位置する。

**形状** 柄鏡形敷石住居。張出部敷石、及び、柱穴から推定した住居であり、詳細は不明。主体部推定径6.5m、張出部長軸2.6m・短軸2.2mを測る。

**床面** 未確認。主体部床面について、詳細は不明。張出部床面については敷石が比較的良好に残存した。写真から判断する限り、敷石の下面を床面としたようであるが、黒色土中の床面であり、調査は掘り方に達している可能性が高い。現状では、連結部の組石2と左右の大型河床礫 (長さ20~40cm)、東側壁面に張り付いた河床礫、連結部組石の対辺の埋裏?等、典型的な張出部の要素を備えている。

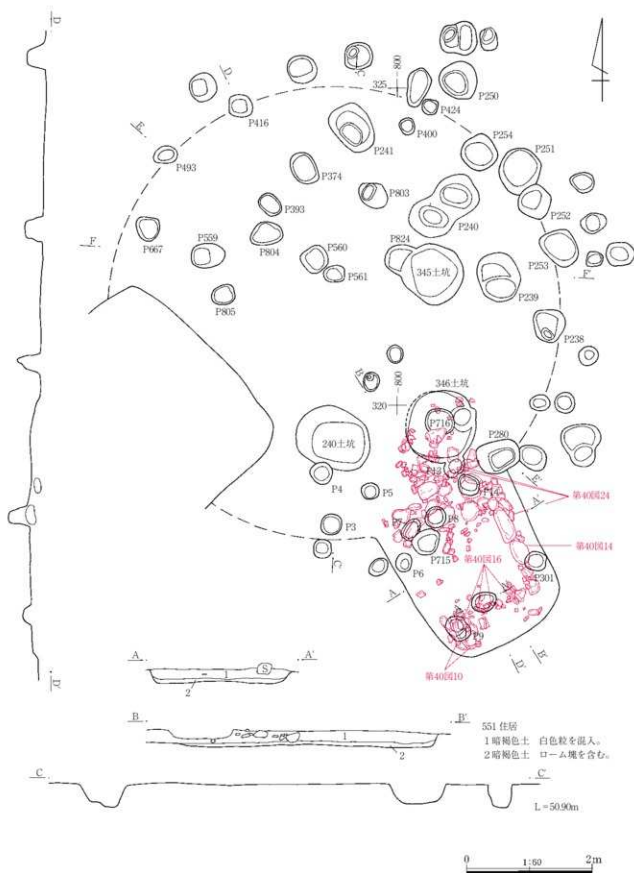
**炉跡** 未確認。

**柱穴** 柱穴は連結部組石を基点に推定、pit280・238・251~253・254・424・416・493がライン上に載る柱穴を抽出した。各柱穴は柱穴の深度として十分に耐えるものであるが、周辺域には柱穴多数があり、あくまで推定の域を出ない。

**遺物の出土状態** 張出部から凹石3・磨石6・石皿2・台石1・多孔石1・石製品1が出土している。石皿は連結部・南西側コーナーから各1が、台石は連結部から、多孔石は南東コーナーから、石製品 (第41図14) は東側石列から出土している。土器類は連結部付近に多く出土している。張出部南端の埋裏 (第40図16) とされたものは掘り方を有しているが、胴部破片の状態で出土しており、埋設されたような状況にはなく、南側コーナー付近出土の土器片と接合した。出土資料の主体は称名寺期のそれである。

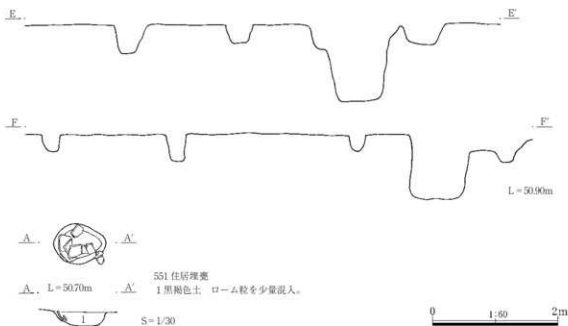
#### 出土遺物 (第40・41図、PL24・25)

20 (40図) は、沈線区画したJ字文内に縄文を施文した口縁部破片。縄文は異東L原体を横位に施文した



第38図 551号住居(1)

#### IV 検出された遺構と遺物

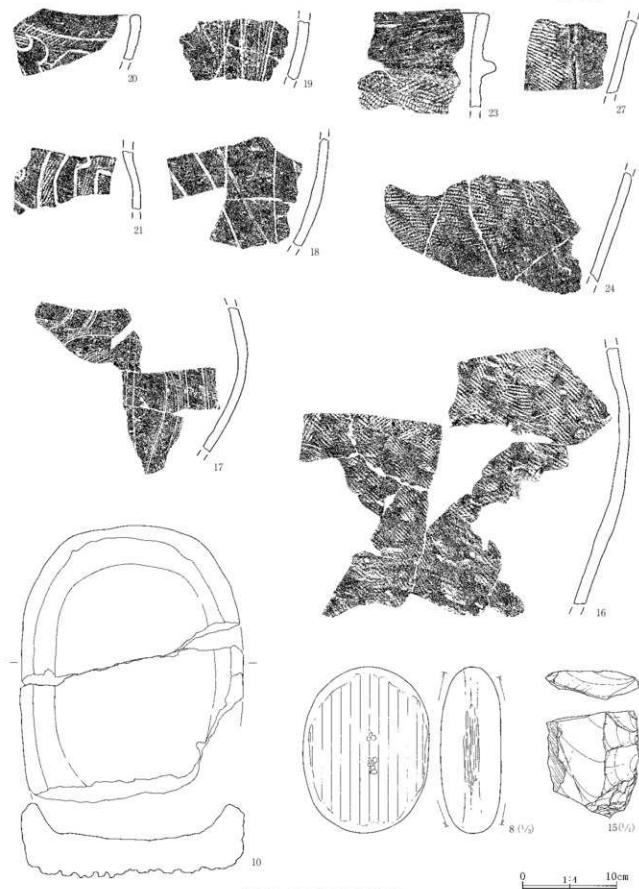


第38図 551号住居(2)

ものであろう。21は、沈線区画したJ字文内にRL縄文を施文した胴部破片。19は、条線文を施す胴部破片。18は、縦位沈線1条を垂下させ、その左に斜位沈線を3条、右に1条を刻した胴部破片。23は、口縁部無文帯下に隆帯を貼り付け、隆帯下にLR縄文を横位施文、それ以下には斜位施文した口縁部破片。隆帯上には三角形状の突出。27は、縦位細隆線を持つ胴部破片。隆帯左側にはLR縄文を斜位に施文する。17は、条線文を持つ胴部破片。条線文の施文順は、縦位条線文→胴部中央の環状条線文→破片上部の環状条線文の順である。16は、張出部南側の埋裏とされたもの。LR縄文を全面施文した土器の胴部破片。23と同一固体か。10は、掻き出し部を欠く石皿。石皿は器体中央部でも破損、やや離れて(15cmほど)出土したものであるが、その破損面は掻き出し部のそれよりも新鮮である。使用面と石皿周縁は3cm強の高低差があり、鋭く立ち上がる。裏面側には多数の窪み穴が穿たれている。粗粒輝石安山岩製。5080g。8は、扁平な円礫を用いた磨石。表裏両面に磨耗面を有するほか、右側面側の磨耗が著しく、平坦面となっている。粗粒輝石安山岩製。984g。15は、幅広剥片の側縁を加工したもの。チャート製。621g。

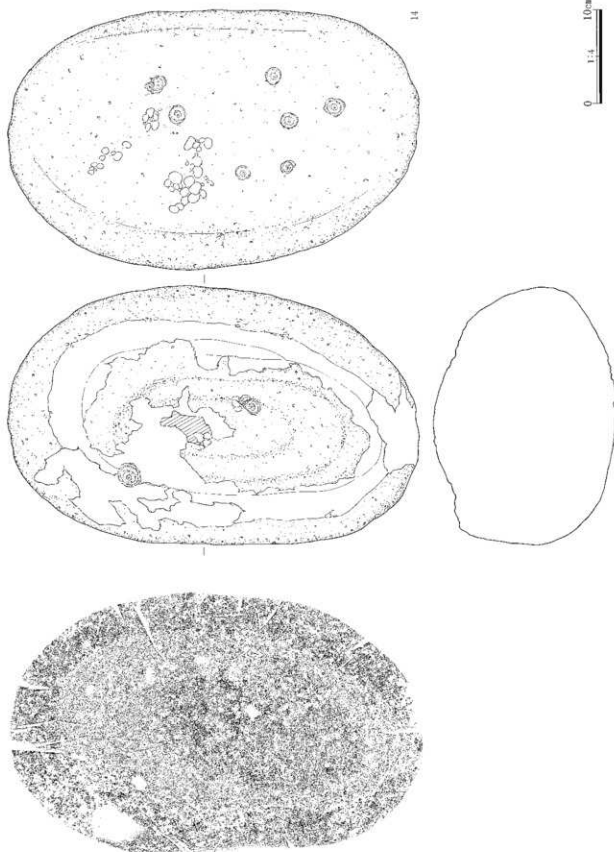
14(41図)は、長さ43.2cm・幅27.2cm・厚さ19.2cmを測る河床礫を用いたもの。背面側周辺を環状に敲打する。敲打は幅4cmに及び、礫の中央部は凸状に脹らむ。長軸上に見て、中央突出部の上と下では形状が異なり、上端側が陣笠様に緩く窪んでいる。このような形状の粗粒輝石安山岩製の河床礫は現河床にはないので、判断に苦しんでいる。小口部、及び、裏面側は被熱して表面が荒れ、剥がれ落ちている。ロート状の凹み部が背面側に2ヶ所、裏面側に7ヶ所がある。石皿の未製品として捉えるべきかもしれないが、礫の形状等から一概には断定できない。これについては別項で改めて論じる予定である。粗粒輝石安山岩製。31.4kg。

1. 住居



第40图 551号住居出土遺物(1)

IV 検出された遺構と遺物



第41圖 551号住居出土遺物(2)

## 2. 炉・埋甕

東側の埋没谷に近い台地平坦部（Y = -39805～39815ライン）で、屋外炉2・埋甕3が検出されている。東西・南北とも15m弱、約200㎡の範囲に（X = 310～320、Y = -815～825）集中しており、極めて限定的な在り方を呈していた。縄文期竈穴に伴う内部施設としての可能性を含め精査したようであるが、柱穴等による住居の想定も難しく、単独の遺構として便宜的に理解したということである。炉、及び、埋甕としての区分は、そこで火を焚いているかどうかを目安としたようで、炉とされたものは礫が被熱している。埋甕は単独で正位に埋設されたものだが、機能・用途を示す痕跡はない。

### 1号炉（第42図、PL11）

**位置** 482号住居の北西、約15mに位置（X = 320、Y = -825グリッド）する。

**形状等** 長軸1.15m・短軸0.81m・0.39mを測る略楕円形を呈する土坑の南北両端に河床礫を配置、その間に深鉢（43図6）を正位に埋設して炉体土器としている。この炉体土器に覆い被さるように横位隆帯の廻る土器（44図4）が出土している。南側の礫は長さ58cm・幅28cm・重さ19.1kgを測る粗粒輝石安山岩製の棒状礫で、多孔石を転用したものである。北側の礫は、長さ37cm・幅23cmを測る溶結凝灰岩製の礫である。

**所見** わずかながら覆土に炭化粒を含む程度で、炉石が被熱しているわけでもなく、また、埋設土器が被熱している状況も確認できない。埋設土器は外面上半にススが附着、下半が被熱しているように見え、内面は炉体土器として使われていたような被熱の痕跡は乏しく、屋外炉として機能したものか、判断としない。

### 出土遺物（第43・44図、PL25・26）

43図6は、沈線区画によるJ字文を施文した深鉢で、区画内に列点文を充填する。文様構成は器体上半をJ字文により5分割、その間を「7字状文」「剣先文」「V字状文」「反転7字状文」で埋める。下半の沈線区画は開放している。列点文は長く、沈線様である。7は、胴部上半を欠く深鉢。区画内に列点文を充填、下半の沈線文は開放している。

44図4は、横位隆帯が廻る深鉢。隆帯は三角形に突出、嘴状を呈する。隆帯下にLR縄文を器面全面に施文する。2は、多孔石を転用して炉石としたもの。背面側に4ヶ所、腹面側に1ヶ所のロート状の窪み穴を持つ。断面が三角形を呈する大型礫を用いたもので、裏面側は緩く石皿様に窪み、その両端の突出部は磨耗が著しい。これについては穿孔時に擦れたというより、意識的磨耗を想定したのであるが、その詳細については明らかにすることは難しい。粗粒輝石安山岩製。19.2kg。

### 2号炉（第42図、PL11）

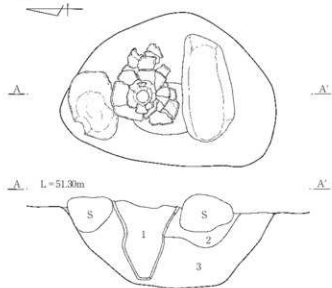
**位置** 482号住居の南西、約2mに位置（X = 305、Y = -820グリッド）する。

**形状** その一部が調査区外に延び、詳細は不明。長さ42cm・幅20cmを測る棒状礫を置き、これが略楕円形状を呈する土坑に埋設されたということだろう。土坑は部分的な確認であるため、形状等は明らかでないが、浅い皿状の土坑を想定している。

**所見** 遺構覆土には、焼土粒・炭化粒等の炉の存在が暗示されるような痕跡はなかったようである。調査所見として炉とした理由は、明らかに被熱した大型棒状礫の存在が確認されたということであろう。これに伴う出土遺物は見られない。

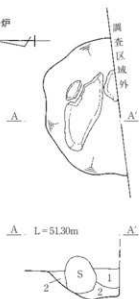
IV 検出された遺構と遺物

1号炉



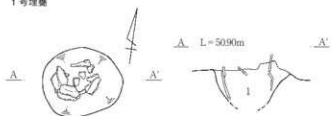
- 1暗褐色土 白色粒・炭化粒を混入。  
 2暗褐色土 ローム粒・炭化粒を含む。  
 3褐色土 ローム土を主体とする。

2号炉



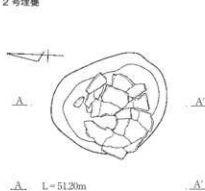
- 1黒褐色土 ローム粒を混入。  
 2暗褐色土 ローム塊を含む。

1号埋壺



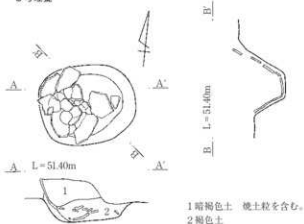
- 1黒褐色土 ローム粒等の混入は見られない。しまり弱い。

2号埋壺



- 1褐色土 しまりに欠ける。

3号埋壺

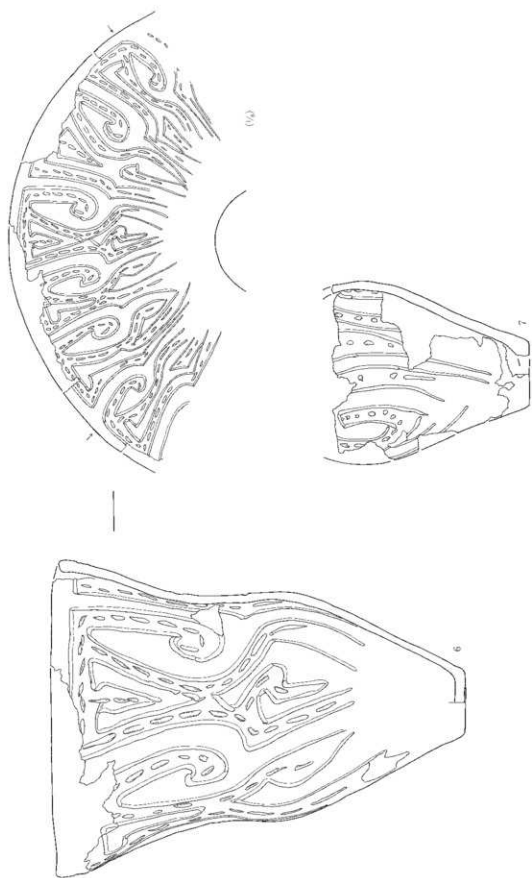


- 1暗褐色土 焼土粒を含む。  
 2褐色土

0 1:20 1m

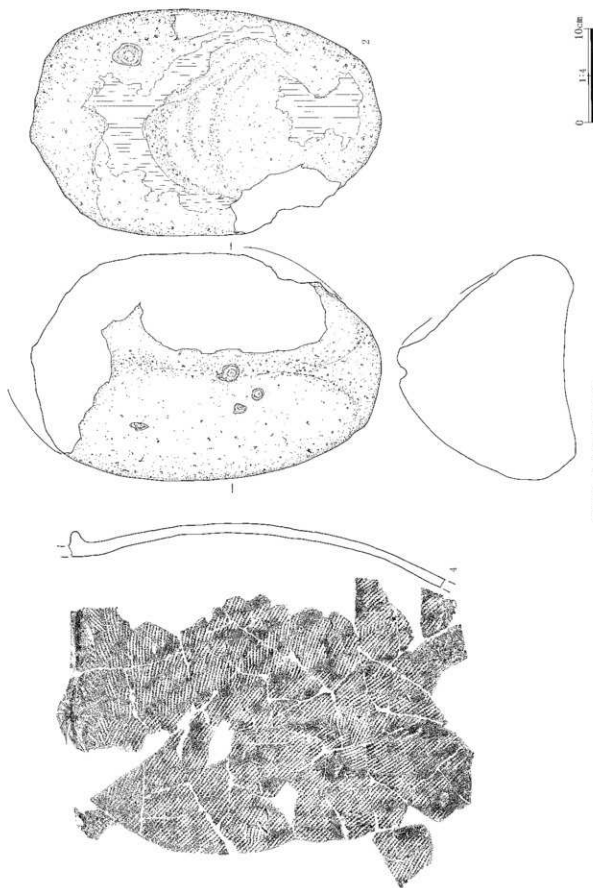
第42図 1・2号炉、1～3号埋壺





第43图 1号出土器物(1)

IV 検出された遺構と遺物

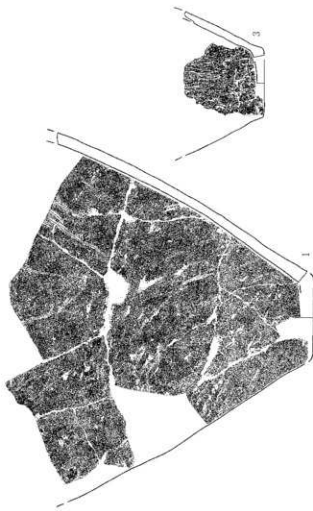
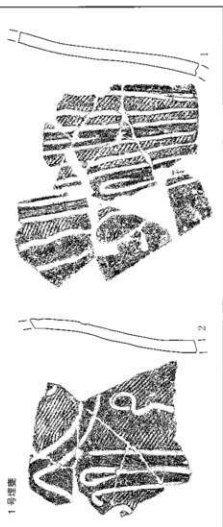


第44図 1号出土遺物(2)

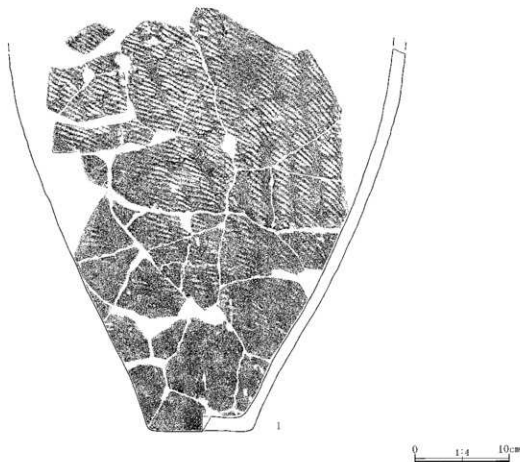
2号埋藏



1号埋藏



第45图 1-2号埋藏出土遺物



第46図 3号埋塞出土遺物

1号埋塞 (第42図、PL11)

位置 482号住居の南西、約2mに位置 (X=305、Y=-820グリッド) する。

形状等 長軸0.42m・短軸0.38mを測る略円形を呈する土坑に、深鉢(第45図1・2)を正位に埋設したもの。埋設土器は口縁部を欠いた頸部～胴部上半の深鉢だが、埋設時点から胴部が全周するようなものではなかったようである。

所見 土坑底面の記載がなく、深さ形状等については明らかではない。覆土は「しまりの弱い黒褐色土」とされるのみであり、その機能・用途を推測させるような所見は得られていない。

出土遺物 (第45図、PL26)

2 (45図) は、渦巻状の沈線文の下に垂下沈線文・炭手文を配した深鉢胴部破片。地文にL R縄文を施文。1は、縦位沈線間に炭手文を配した胴部破片。地文にL R縄文を施文する。器体は内外面とも荒れており、地文や内面整形のナデが失われている。1・2は同一個体。

2号埋塞 (第42図)

位置 482号住居の北、約12mに位置 (X=320、Y=-820グリッド) する。

形状等 長軸0.51m・短軸0.42m・深さ0.25mを測る略楕円形を呈する土坑に、深鉢(第45図1・2・3)を正位に埋設したもの。埋設土器は潰れた状態で出土したようで、器体上半の片側を欠いてしまっているが、

本来的には完形土器が埋設されていたということができらるだろう。埋設土器は土坑の西側に偏り埋設されており、東側が空いている。

**所見** 土坑には完形土器1個体が正位の状態に埋設されていたが、その機能なり用途を示す具体的証拠は得られていない。唯一、土器が底部を欠いている点が気掛かりである。

#### 出土遺物（第45図、PL27）

2（45図）は、沈線により丁字状文を施した口縁～胴部破片。外面口唇部はヒビ割れ、内面は爆ぜており、いずれも被熱に起因する現象とすることができよう。1は、深鉢の胴部下半。底部を欠いた状態で出土しており、これが意図的に欠かれたものか不明。無文。1・2は、同一個体。3は、条線文を施文した胴部から底部にかけての破片。条線文は縦位施文だが、部分的に横位施文が見られる。

#### 3号埋壘（第42図、PL11）

**位置** 482号住居の西、約8mに位置（X=310、Y=-825グリッド）する。

**形状等** 長軸0.64m・短軸0.53m・深さ0.15mを測る略楕円形を呈する土坑に、深鉢（第46図1）を正位に埋設したもの。埋設土器は潰れた状態で、南側に傾いて出土したようである。現状で、器体上半を欠いてしまっているが、確認面が低く、本来的な姿については不明である。

**所見** 土坑にはやや傾いた状態で、土器が埋設されていた。土層には若干の焼土が含まれるとされているが、その機能なり用途を示す具体的証拠は得られていない。

#### 出土遺物（第46図、PL27）

1（46図）は、深鉢の胴部上半を欠いたもの。器面全体にLR縄文を縦位施文する。器面内側はナデ整形が新鮮であるのに対して、外面は荒れて対照的である。

## 3. 土坑

調査所見では106基の土坑が縄文期土坑とされていたが、倒木痕その他が含まれていたためこれを除外、縄文期土坑として93基を認定した。土坑には貯蔵穴・陥し穴・墓坑等の性格が想定可能だが、概してその性格を明らかにすることは難しい。本遺跡の土坑も同様で、その性格が明らかになってきたものは例外的で、土坑としたものも柱穴等を含む可能性が否定できない状況にある。

本遺跡の土坑についてはその分布が偏る傾向にあり、90%以上が調査地南東側（4区）に多く分布、その群在化傾向が明らかであった。その分布域は南東側住居群に重複、両者が密接に関連していることだけは確実であろうが、その帰属時期の認定については問題を残している。複数の土器型式が混在して出土した場合、新しい型式で時期認定するのが常道であろうが、量的に見て混在したとしかいいようのない土坑も散見され、出土状況が不明で判断に苦しむ例も多い。以下には、土坑の分布傾向を基に、再確認を兼ねて形態的・時期別に見た傾向について記していきたい。

#### <分布傾向>

北西側住居群に重複する土坑は少なく、南東側住居群に重複分布する土坑が圧倒的である。南東側分布域には古代住居等が密集しており、これにより縄文期土坑が壊されたということも確実なことであろうが、現

#### IV 検出された遺構と遺物

状で見る限り、台地中央の住居群に濃密に分布、東側の埋没谷に近い台地縁辺では分布が希薄となるようである。分布の濃い台地中央部ではY=-845ラインを境に東西2群に分布域の小群が指摘できそうであるが、古代遺構の重複が激しいため、断定できるだけのものはない。

##### <形態>

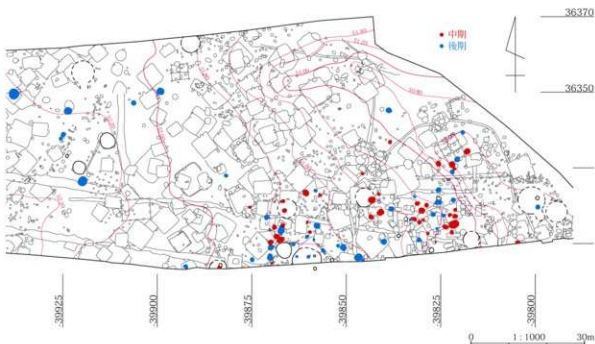
大別二群からなる。円形タイプのそれと楕円形タイプのそれである。土坑の断面形状には「皿状」「壘状」「筒状」「フラスコ状」があり、2群4類に細分可能な状況にある。

**円形タイプ** 38基の土坑からなる。断面形状と併せ見た類別比は、別表の通り、皿状7・壘状11・筒状7・フラスコ状9・その他2で、壘状・フラスコ状を呈する土坑が主体となるようである。類型別に見た土坑の分布は特に偏る傾向は指摘できないようで、特徴的なフラスコ状の土坑についても明確な集中性は指摘できない。

**楕円形タイプ** 49基の土坑からなる。円形タイプの土坑と同様に断面形状と併せ見た比率は、皿状18・壘状14・筒状10・フラスコ状3・その他3で、楕円形タイプの土坑についてはフラスコ状タイプの土坑は少ない。属性的には平面形態：円形-断面形態：フラスコという関係が強く相関するようであるが、これを除いて有意な関連は認め難い。

##### <遺物の出土状況>

10点以上の遺物が出土した土坑は27基を数え、全体の30%近い比率を占めた。30点以上が出土した土坑についても9基があり、なかには出土量100点を越える土坑(552・593土坑)も存在した。土坑毎に遺物の出土状況はさまざまであるが、記録類からみる限り、大部分は土坑の底面から浮いて出土、複数型式の土器片が混在して出土したようである。このような在り方は直接土坑の機能なり用途を推定させるものではないが、集落の継続期間・集落内活動等から見れば、その大部分は包含層を壊して土坑を構築、役割を終えた時点で



第47図 縄文期土坑配置図

## 3. 土坑

埋め戻したとすべきである。このように出土遺物の大半は埋没過程で混入したものであるというべきであろうが、なかには人為的な廃棄等を示唆する土坑も少数が存在した。具体的には、508土坑（第60図、PL15）の組み石であり、その出土状況は明らかに意図的とすることができる。これに類似するものとして、335土坑や502土坑の礫石器類の集中出土、496土坑の完形土器の出土等がある。508土坑は深さ10cmを測る皿状の土坑で、土坑中央部に多孔石2、その周辺に拳大の礫6（凹石4・磨石2、凹石は3点が被熱）を配置、礫の押さえとして深鉢胴部破片を配したものである。その出土状況は明らかに意図的であり、中央部に多孔石を配するなど、祭祀的色彩が強い。335土坑については、中央部に古代のpitが重複しており全貌は不明だが、覆土上層に凹石・磨石・敲石・多孔石等を含む礫が集中した。出土石器類には被熱したのがあり、集石礫とすることも可能だが、覆土の所見には焼土粒等の記載がなく、単なる礫の廃棄土坑か集石土坑か、判断できない。502土坑は古代住居と重複、その北半に礫が弧状に出土した。土坑底面はpit状に落ち込み、その周囲に礫が、加えて覆土上層にもpitの延長上に大型礫が出土した。これについては柱の押さえとしての礫ということかもしれないが、詳細は明らかにすることができなかった。

## &lt;帰属時期&gt;

土坑の構築時期については出土遺物が廃棄状態にあることから、その帰属時期の判定が難しい。極く単純に言えば、中期段階の土坑（42基）には中期段階の土器のみが出土、後期段階の土坑（45基）には中期～後期の土器が混じるという傾向が指摘されるということになるが、実際は中期段階の土坑にも後期の土器が紛れ混んでおり、紛れ込む理由について詳細を述べるだけの根拠がない。

第1表 土坑計画一覧(1)

土坑番号	長軸	短軸	深さ	平面形	断面	時期	x座標	y座標
9	1.25	1.2	0.41	円形	塵状	称名寺2	345	905
71	1.65	1.6	1.27	円形	フラスコ	称名寺2	350	895
182	1.56	1.33	1.51	円形	フラスコ	称名寺2	345	835
330	1.31	1.56	0.66		塵状	称名寺2		
335	2.12	1.78	不明	略楕円	塵状	後期	340	820
336	2.36	2.02	0.22	楕円	塵状	称名寺2	330	820
340	0.85	0.77	0.55	円形	塵状	加曾利E4	325	820
341	1.55	1.55	0.33	円形	塵状	加曾利E4	330	820
342	2.94	2.51	0.99	円形	フラスコ	加曾利E4	330	825
343	3.82	2.85	0.27	略楕円	塵状	加曾利E4	330	815
344	0.96	0.85	0.59	円形	塵状	加曾利E3	335	835
345	1.01	1.01	0.97	円形	筒状	不明	320	795
346	1.15	1.07	0.71	円形	塵状	称名寺2		
389	1.18	0.96	0.51	楕円	不明	称名寺2	305	870
393	1.13	1.07	0.24	円形	塵状	称名寺2		
394	0.85	0.66	0.28	楕円	塵状	称名寺2	305	860
400	1.48	1.17	0.22	楕円	塵状	加曾利E3	310	865
481	2.72	2.61	1.12	略円形	フラスコ	称名寺2	345	935
482	0.85	0.77	0.59	略円形	塵状?	加曾利E3	310	820
483	0.80	0.79	0.72	略円形	フラスコ	称名寺2	310	825
484	0.78	0.69	0.27	略円形	塵状	加曾利E	310	825
486	1.17	(1.08)	0.16	略円形	塵状	称名寺2	310	830
487	2.25	(2.20)	0.20	略円形	塵状	加曾利E4	315	830
488	0.75	0.72	1.10	円形	筒状	称名寺1	315	830
489	1.31	1.20	0.46	略円形	塵状	不明	305	825
490	不明	0.47	0.38	略楕円	不明	加曾利E4	315	830
496	(1.70)	1.58	0.98	略円形	フラスコ	称名寺1	305	845
497	2.06	1.80	0.28	略円形	塵状	称名寺1	305	845
498	1.13	0.91	0.99	略楕円	筒状	称名寺1	315	820
499	2.62	1.96	0.33	略楕円	筒状	加曾利E4	315	820
500	1.35	1.27	0.65	略楕円	塵状	称名寺1	315	825
501	2.55	2.02	0.59	楕円	塵状	加曾利E3	315	820
502	2.12	(1.52)	0.33	不明	塵状	称名寺2	320	820
503	3.63	3.06	0.61	楕円	塵状	加曾利E4	315	840
506	1.09	1.03	0.60	円形	塵状	加曾利E4	320	825
508	(2.50)	(1.85)	不明	楕円	塵状	加曾利E3	305	800

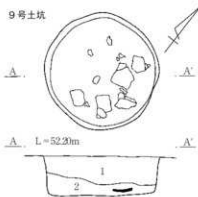
## IV 検出された遺構と遺物

第1表 土坑計測一覧(2)

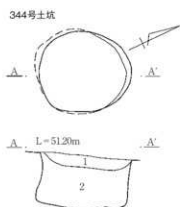
土坑番号	長軸	短軸	深さ	平面形	断面	時期	x座標	y座標
509	0.85	0.85	0.91	円形	筒状	加曾利E 4	315	820
510	0.97	0.86	0.57	不明	壘状	加曾利E 3		
513	1.31	1.13	0.33	略楕円	皿状	称名寺2	320	825
514 (3.33)	(1.70)	0.25	不明	不明	皿状	称名寺2	320	825
519	2.98	2.88	0.15	略円形	皿状	称名寺2	310	840
522	0.95	0.77	0.48	略楕円	皿状	加曾利E 4	325	845
523	0.95	0.86	0.12	略円形	皿状	加曾利E 3	320	855
526	1.73	1.45	0.51	略楕円	皿状	加曾利E 3	320	860
536	3.51	3.14	0.46	楕円	壘状	堀之内1	310	855
538	1.13	0.88	0.97	楕円	筒状	加曾利E 3	310	820
539	3.10	2.82	0.77	略楕円	筒状	堀之内1	315	835
540	1.00	0.75	0.36	略楕円	筒状	不明	310	835
541	1.03	0.98	0.43	円形	壘状	堀之内1	320	855
542	1.19	0.82	0.32	楕円	壘状	不明	320	825
545	0.99	0.92	0.26	略楕円	壘状	称名寺	305	860
546	0.62	0.58	0.53	略円形	不明	不明	305	855
547	1.58	1.37	0.83	略楕円	筒状	加曾利E 4	315	830
548	3.58	3.05	0.76	略楕円	フラスコ	堀之内1	305	850
549	1.01	0.82	0.81	楕円	筒状	加曾利E 3	320	865
551	0.95	0.68	0.36	略楕円	壘状	堀之内2	310	855
552	2.45	2.02	1.17	略楕円	フラスコ	加曾利E 4	310	870
555	1.50	1.39	0.24	略楕円	壘状	称名寺1	305	870
557	0.96	0.85	不明	略円形	フラスコ	加曾利E 4	310	865
558	0.75	0.52	0.42	略楕円	筒状	加曾利E 3	300	865
559	2.91	(2.50)	0.09	略楕円	皿状	称名寺2	305	870
562	1.28	1.16	0.51	略楕円	壘状	加曾利E 3	320	830
564	0.61	0.51	0.61	略楕円	フラスコ	堀之内1	310	810
566	1.03	1.01	0.18	円形	皿状	加曾利E 3	310	865
567	0.92	0.63	0.22	楕円	皿状	称名寺2	320	820
568	0.83	0.71	0.44	楕円	壘状	加曾利E 3	315	825
570	0.53	0.48	0.42	円形	筒状	不明	310	870
575 (1.40)	1.18	0.20	略楕円	壘状	称名寺2	315	870	
576	1.28	(0.57)	0.26	不明	皿状	加曾利E 3	315	830
593	2.28	2.25	1.21	円形	フラスコ	堀之内1	305	870
597	1.29	1.21	0.18	略円形	壘状	加曾利E 3	310	865
598	0.79	0.77	0.82	円形	筒状	称名寺1	305	850
601	0.94	0.83	0.13	略円形	皿状	不明	305	850
608	0.97	0.71	0.06	楕円	皿状	称名寺1	305	855
611	1.37	0.91	0.27	楕円	皿状	称名寺2	310	860
612	1.33	1.28	0.62	略円形	壘状	加曾利E 3	310	865
641	0.97	0.86	0.75	略円形	筒状	称名寺1	325	880
649	0.84	0.58	0.37	楕円	筒状	加曾利E 3	320	840
651 (2.40)	2.12	0.20	略楕円	筒状	加曾利E 3	300	880	
652 (2.40)	1.65	0.17	楕円	皿状	不明	300	880	
673 (1.90)	1.58	0.11	略楕円	皿状	加曾利E 4	320	840	
678	2.46	2.22	1.11	円形	フラスコ	称名寺2	325	915
679	0.85	0.78	0.23	略楕円	皿状	堀之内1	325	925
680	1.98	(1.60)	0.18	楕円	皿状	称名寺2	345	920
683	0.86	0.72	0.25	楕円	皿状	不明	320	920
685	0.93	0.79	0.25	楕円	壘状	加曾利E 3	310	855
686	2.26	2.02	0.58	楕円	壘状	称名寺2	300	890
687	1.17	1.06	0.42	略円形	皿状	加曾利E 3	315	865
688	1.38	1.08	0.11	略楕円	皿状	称名寺2	325	920
691 (0.80)	(0.28)	0.21	不明	不明	皿状	加曾利E 4	315	860
702 (1.00)	(1.50)	0.43	楕円	不明	加曾利E 3	315	875	
703	0.75	0.68	0.39	略円形	筒状	加曾利E 3	315	875
711	1.01	0.72	0.38	略円形	筒状	称名寺2		



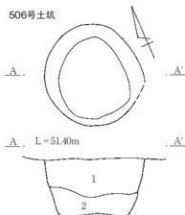
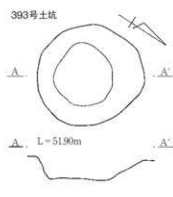
3. 土坑



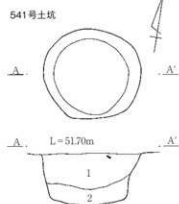
1 褐色土 ローム塊を少量混入。  
2 褐色土 ローム塊を多量混入。



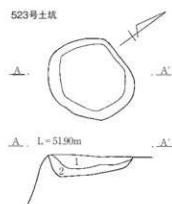
1 暗褐色土 焼土粒、炭化粒を少量混入。  
2 黒褐色土 ローム粒を少量混入。



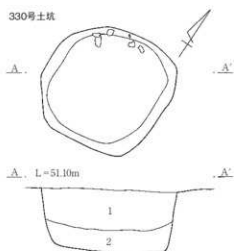
1 黄褐色土 白色粒を含む。  
2 暗褐色土 砂礫(〜0.3cm)を混入。



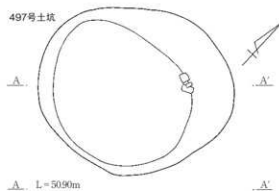
1 暗褐色土 ローム塊を含む。  
黒色土まじり。  
2 褐色土



1 暗褐色土 ローム粒を含む。  
2 褐色土 ローム粒を含む。



1 黒褐色土 ローム粒を少量混入。砂質。  
2 黒褐色土 ローム粒を少量混入。

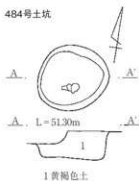


0 1:40 1m

第48図 土坑(1)

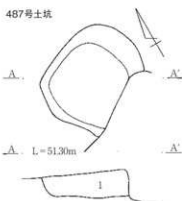
IV 検出された遺構と遺物

484号土坑



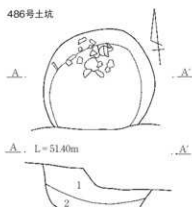
1 黄褐色土

487号土坑



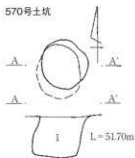
1 暗褐色土 炭化粒・ローム粒を少量混入。砂粒少量混入。

486号土坑



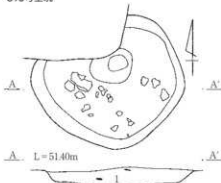
1 暗褐色土 白色粒・ローム粒を混入。  
2 褐色土 ローム土。

570号土坑



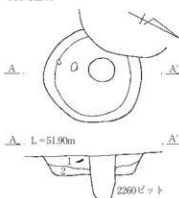
1 暗褐色土  
ローム粒子を少量混入。

519号土坑



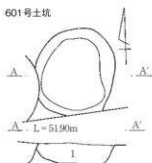
1 褐色土 焼土粒、白色粒を含む。

566号土坑



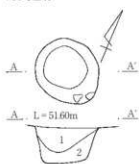
1 暗褐色土 ローム粒を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム粒を混入。

601号土坑



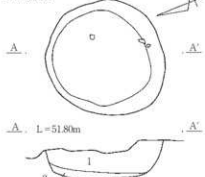
1 暗褐色土  
ローム塊・粒を少量混入。

703号土坑



1 暗褐色土 白色粒・ローム塊を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム塊を含む。

597号土坑



1 暗褐色土 ローム粒を含む。  
2 暗褐色土 ローム塊を混入。

687号土坑



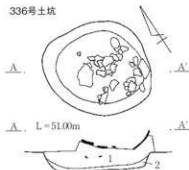
1 暗褐色土 ローム塊を少量混入。  
2 暗褐色土 砂質ローム塊を混入。

0 1:50 1m

第49図 土坑(2)

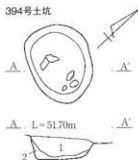
3. 土坑

336号土坑



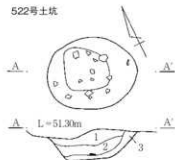
L = 51.00m  
1 黒褐色土 ローム粒を少量混入。  
2 黒褐色土 ローム塊を少量混入。

394号土坑



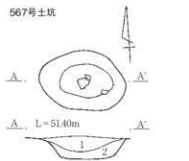
L = 51.70m  
1 暗褐色土 ローム塊を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム粒を少量混入。

522号土坑



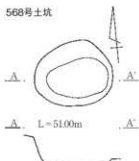
L = 51.30m  
1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。  
2 暗褐色土 ローム塊・焼土粒を少量混入。  
3 暗褐色土 焼土粒を少量混入。

567号土坑



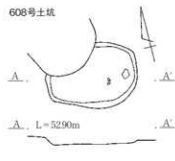
L = 51.40m  
1 暗褐色土 ローム塊を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム粒を含む。

568号土坑



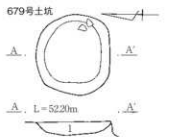
L = 51.00m

608号土坑



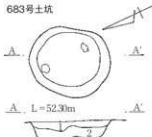
L = 52.90m

679号土坑



L = 52.20m  
1 褐色土 ローム土を主体。

683号土坑



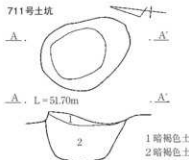
L = 52.30m  
1 暗褐色土 砂質。  
2 黄褐色土 フロック少量混入。

685号土坑



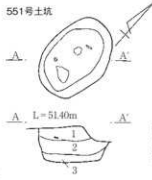
L = 51.60m

711号土坑



L = 51.70m  
1 暗褐色土 ローム塊を含む。  
2 暗褐色土 ローム粒を微量混入。

551号土坑



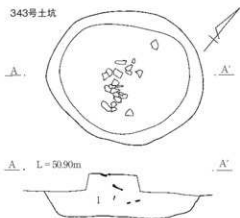
L = 51.40m  
1 褐色土  
2 暗褐色土 ローム粒を含む。  
3 暗褐色土 ローム塊を含む。

0 1:40 1m

第50図 土坑(3)

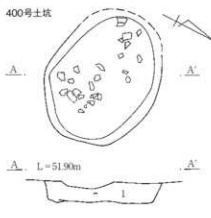
IV 検出された遺構と遺物

343号土坑



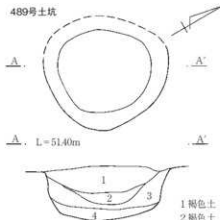
1 暗褐色土 ローム粒を混入。

400号土坑



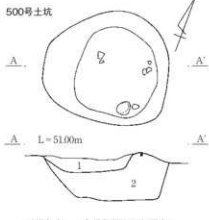
1 暗褐色土 ローム粒・塊を少量混入。

489号土坑



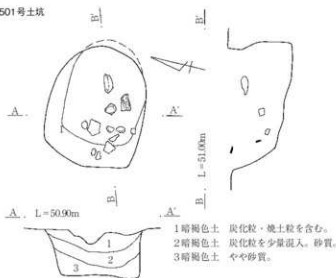
1 褐色土 ローム粒を少量混入。  
 2 褐色土 黒褐色土を塊状に含む。  
 3 褐色土 ローム塊を含む。  
 4 黄褐色土 褐色土を少量混入。やや砂質。

500号土坑



1 褐色土 古代住居カマド覆土。  
 2 暗褐色土 白色粒を含む。やや砂質。

501号土坑

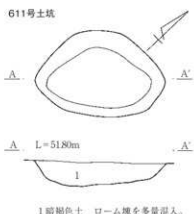
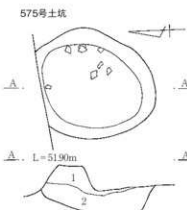
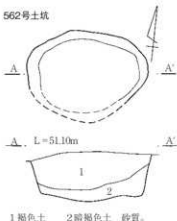
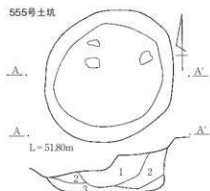
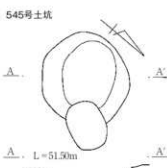
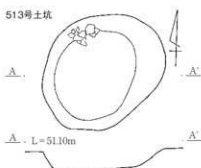


1 暗褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。  
 2 暗褐色土 炭化粒を少量混入。砂質。  
 3 暗褐色土 やや砂質。



第51図 土坑(4)

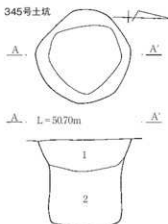
3. 土坑



第52図 土坑(5)

IV 検出された遺構と遺物

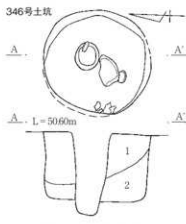
345号土坑



△. L=50.70m △'

1 暗褐色土 ローム粒・塊を少量混入。  
2 黒褐色土 ローム塊を混入。

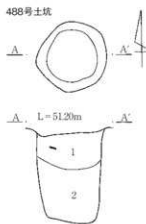
346号土坑



△. L=50.60m △'

1 黒褐色土 白色粒を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム粒を少量混入。

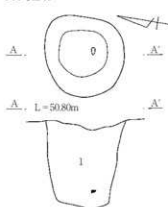
488号土坑



△. L=51.20m △'

1 暗褐色土 ローム粒を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム塊を混入。

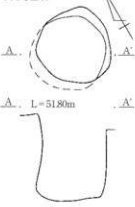
509号土坑



△. L=50.80m △'

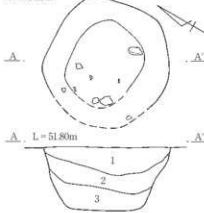
1 暗褐色土 小礫(0.5~2cm)を混入。

598号土坑



△. L=51.80m △'

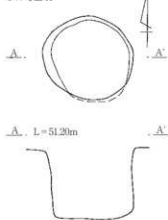
612号土坑



△. L=51.80m △'

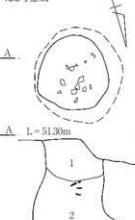
1 暗褐色土 ローム塊を含む。  
2 褐色土 ローム塊を混入。  
3 褐色土 ローム塊を少量混入。砂質。

641号土坑



△. L=51.20m △'

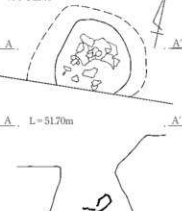
483号土坑



△. L=51.30m △'

1 暗褐色土 砂礫・ローム粒を少量混入。  
2 暗褐色土 砂礫・ローム粒を混入。

496号土坑

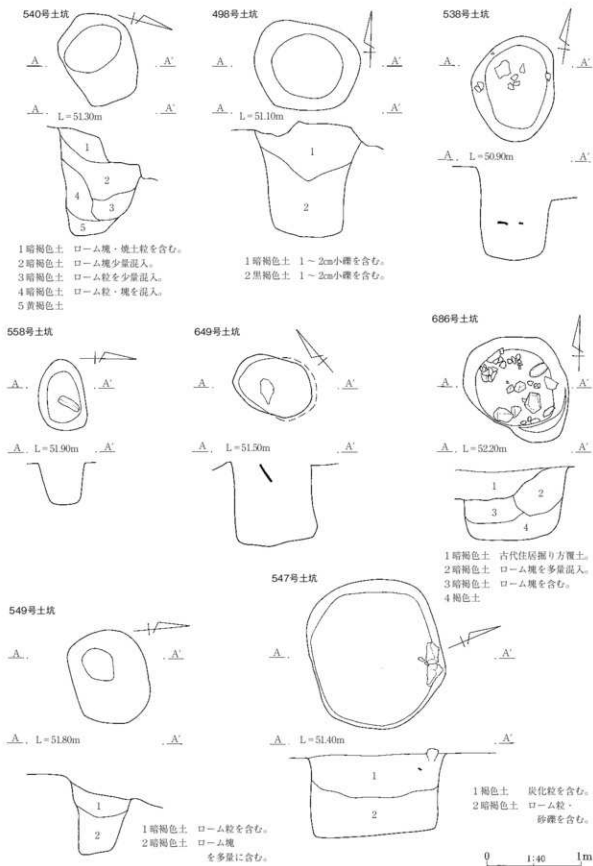


△. L=51.70m △'

0 1:40 1m

第53図 土坑(6)

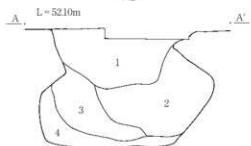
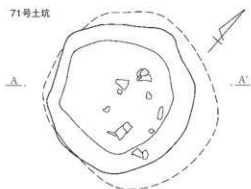
3. 土坑



第54図 土坑(7)

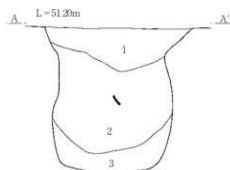
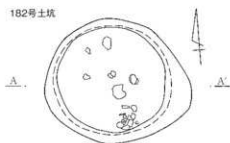
IV 検出された遺構と遺物

71号土坑



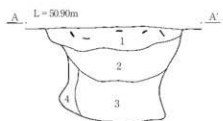
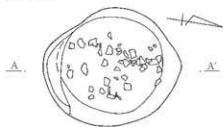
- 1 暗褐色土 炭化粒少量混入。褐色土を塊状に含む。  
 2 褐色土 炭化粒少量混入。  
 3 暗褐色土 ローム塊を混入。  
 4 暗褐色土 ローム塊を多量混入。砂質。

182号土坑



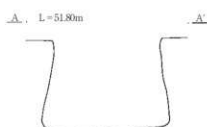
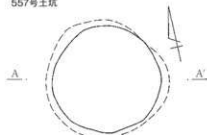
- 1 暗褐色土 白色粒(1mm)少量混入。  
 2 暗褐色土 小礫少量混入。  
 3 暗褐色土 小礫少量混入。砂質。

342号土坑



- 1 暗褐色土 白色粒・焼土粒を少量混入。  
 2 暗褐色土 ローム粒を少量混入。  
 3 黒褐色土 ローム塊を少量混入。  
 4 暗褐色土 ローム塊を混入。

557号土坑

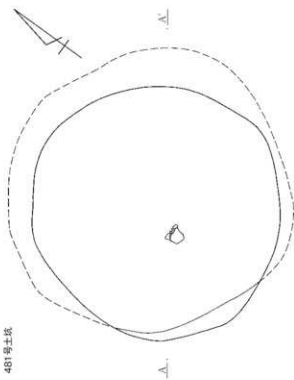


0 1:40 1m

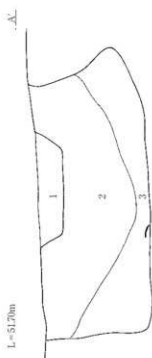
第55図 土坑(8)



481号土坑

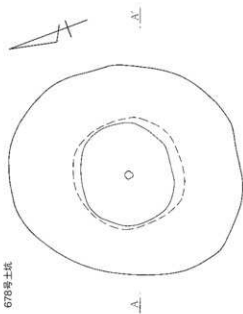


A. L=51.70m

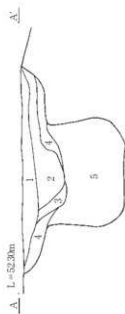


- 1 黄褐色土 住居内土坑 (489号) 覆土。
- 2 黄褐色土 小樽を含む。
- 3 黄褐色土 ローム層を多量混入。

678号土坑



A. L=52.30m

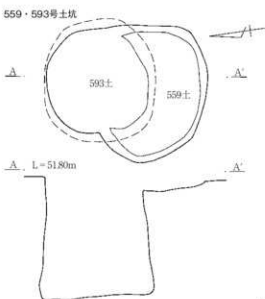
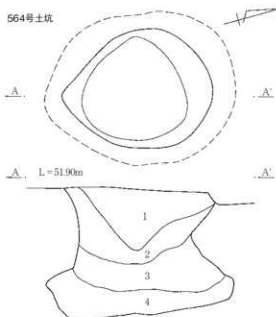
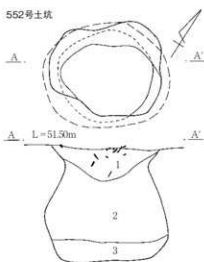
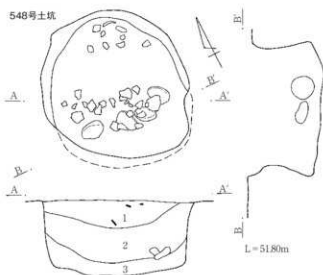
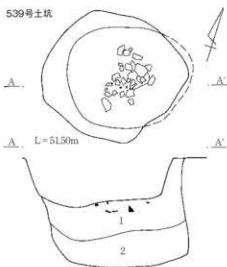


- 1 黄褐色土 黄褐色土を基底に含む。
- 2 黄褐色土 ローム層を少量混入。
- 3 黄褐色土 2に類似。今や粘性あり。
- 4 黄褐色土 ローム層を混入。
- 5 黄褐色土 ローム土を主体。

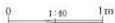
3. 土坑



IV 検出された遺構と遺物



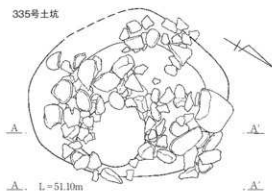
- 539 土坑  
 1 黒褐色土 ローム塊を多量混入。  
 2 暗褐色土 ローム塊を含む。砂礫まじり。
- 548 土坑  
 1 褐色土 ローム粒・塊を多量混入。  
 2 褐色土 ローム土を主体とする。  
 3 暗褐色土 ローム粒を含む。砂質。
- 552 土坑  
 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。  
 2 暗褐色土 ローム塊を含む。  
 3 褐色土
- 564 土坑  
 1 暗褐色土 ローム粒を少量混入。  
 2 黒褐色土 ローム粒・塊を含む。  
 3 黒褐色土 ローム粒を少量混入。  
 4 暗褐色土 ローム塊を多量混入。



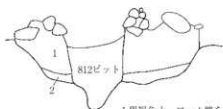
第57図 土坑(10)

3. 土坑

335号土坑

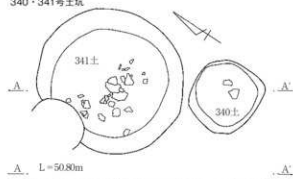


L = 51.10m

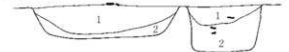


1 黒褐色土 ローム塊を少量混入。  
2 黒褐色土 ローム塊を多量混入。

340・341号土坑



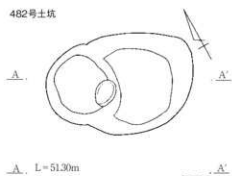
L = 50.80m



341 土坑  
1 黒褐色土  
ローム粒を少量混入。  
2 黒褐色土  
ローム塊を混入。

340 土坑  
1 黒褐色土  
ローム粒を少量混入。  
2 黒褐色土  
ローム塊を少量混入。

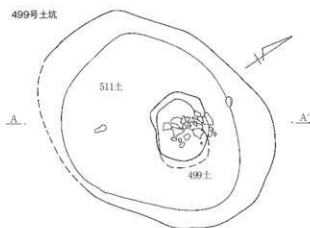
482号土坑



L = 51.30m



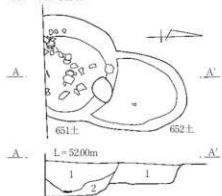
499号土坑



L = 51.70m



651・652号土坑



L = 52.00m



651 土坑  
1 暗褐色土 ローム塊を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム粒・塊を多量混入。

652 土坑  
1 暗褐色土 ローム塊を混入。



第58図 土坑(11)

IV 検出された遺構と遺物

503号土坑

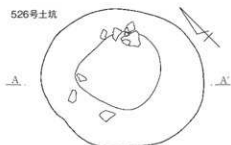


L = 51.20m



1暗褐色土 炭化粒を含む。  
2黄褐色土 ローム塊を含む。

526号土坑



L = 51.70m



1暗褐色土 ローム粒を少量混入。  
2黒褐色土 白色粒・ローム粒を含む。  
3黒褐色土 ローム粒を少量混入。  
4暗褐色土 ローム土と黒色土の混合。

514号土坑

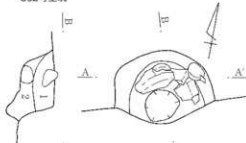


L = 51.30m



1暗褐色土 0.1 ~ 1cm 小礫・ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む。

502号土坑

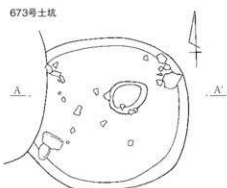


L = 51.30m



1褐色土 炭化粒を含む。砂質。  
2暗褐色土 炭化粒を含む。

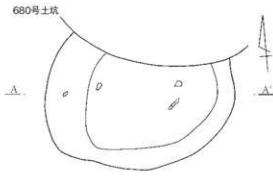
673号土坑



L = 51.50m



680号土坑

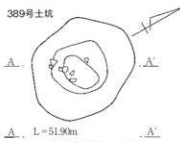


L = 52.20m

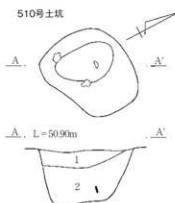


第59図 土坑(12)

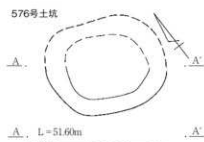
3. 土坑



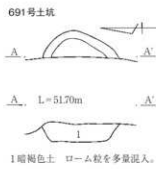
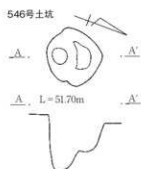
1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量混入。  
2 暗褐色土 ローム塊・焼土塊を少量混入。



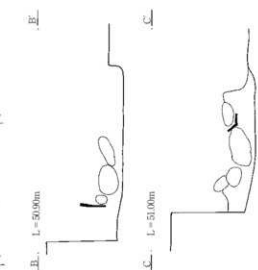
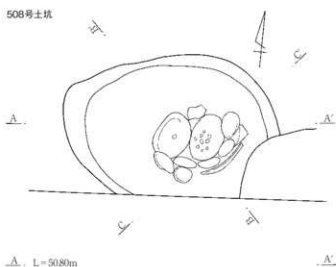
1 褐色土  
2 暗褐色土 小礫(0.5~2cm)を含む。



1 暗褐色土 ローム塊を少量混入。



1 暗褐色土 ローム粒を多量混入。



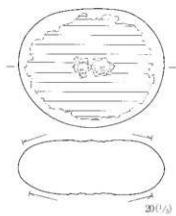
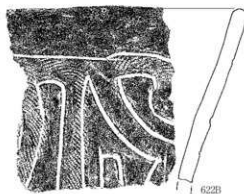
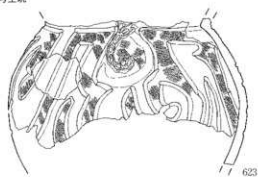
1 黒褐色土 ローム粒を含む。  
2 暗褐色土 ローム粒を混入。



第60図 土坑(13)

IV 検出された遺構と遺物

9号土坑



0 1/4 10cm

第61図 土坑出土遺物(1)

3. 土坑

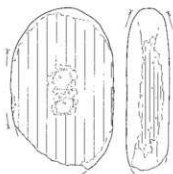
71号土坑



100

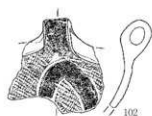


101



22(%)

106号土坑



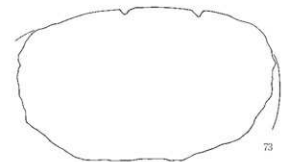
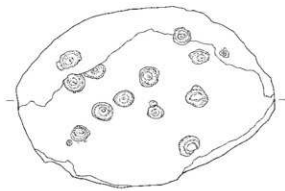
102



103



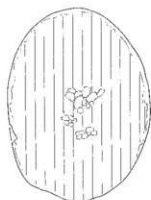
104



73

0 1:4 10cm

107号土坑



24(%)

552号土坑

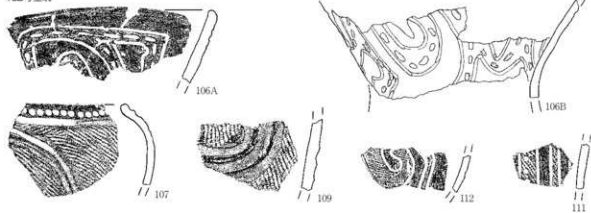


389(%)

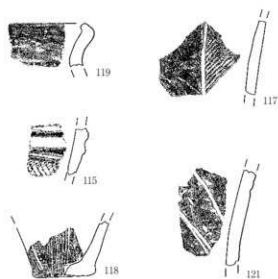
第62图 土坑出土遺物(2)

IV 検出された遺構と遺物

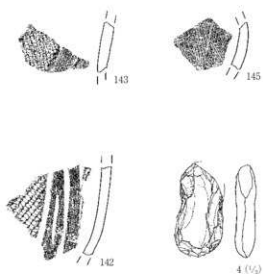
182号土坑



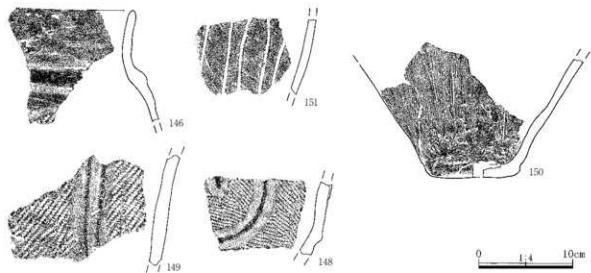
330号土坑



340号土坑



341号土坑



0 1:4 10cm

第63図 土坑出土遺物(3)



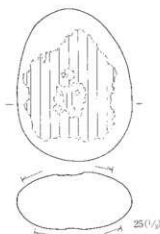
335号土坑



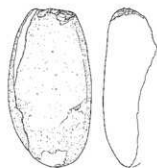
122



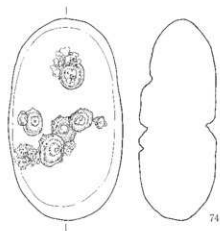
123



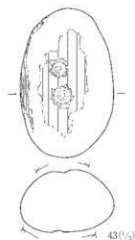
25(1/2)



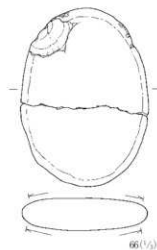
67(1/2)



74



43(1/2)

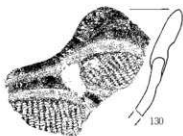


66(1/2)

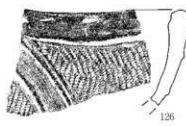
336号土坑



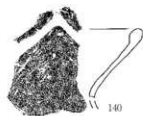
138



130



126



140



128



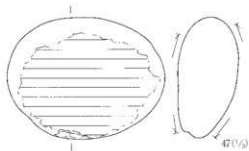
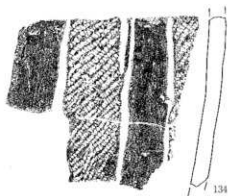
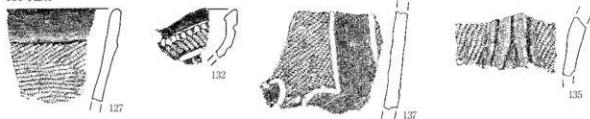
129

0 1:4 10cm

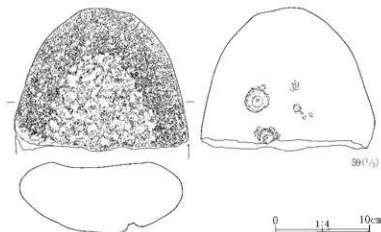
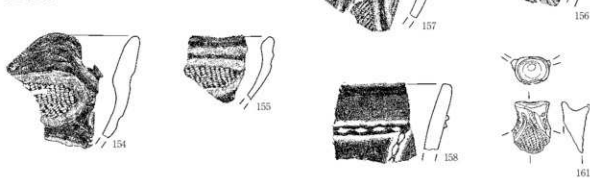
第64图 土坑出土遺物(4)

IV 検出された遺構と遺物

336号土坑



342号土坑

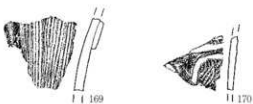


0 1:4 10cm

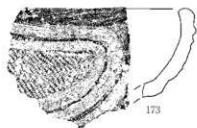
第65図 土坑出土遺物(5)

3. 土坑

343号土坑



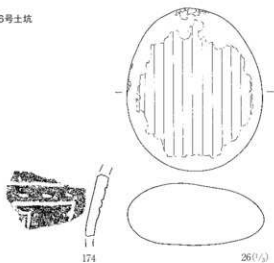
344号土坑



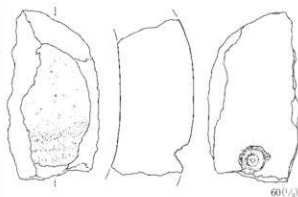
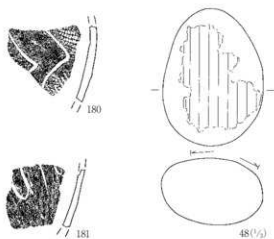
393号土坑



346号土坑



394号土坑

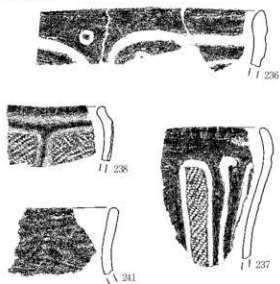


0 1:4 10cm

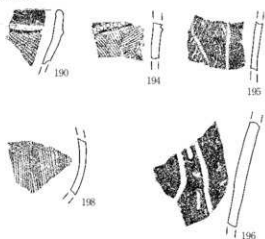
第66图 土坑出土遺物(6)

IV 検出された遺構と遺物

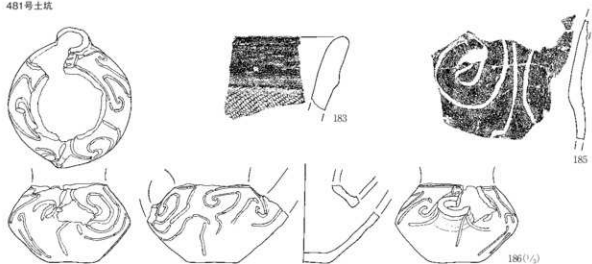
400号土坑



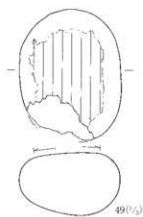
483号土坑



481号土坑



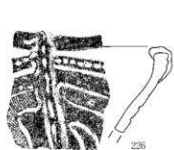
484号土坑



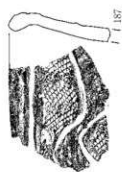
488号土坑



497号土坑



第67図 土坑出土遺物(7)



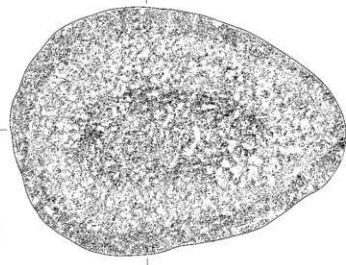
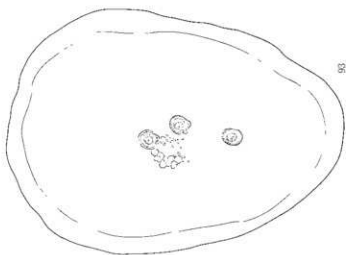
486号土坑



3. 土坑



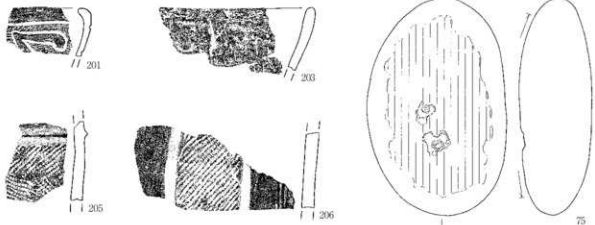
402号土坑



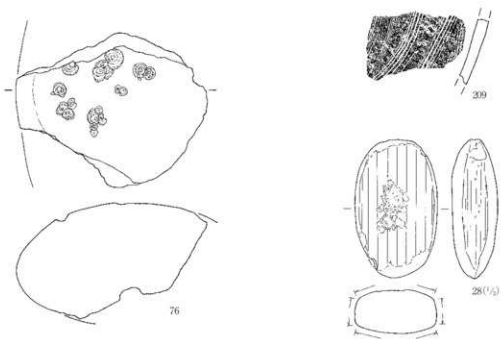
第68图 土坑出土器物(8)

IV 検出された遺構と遺物

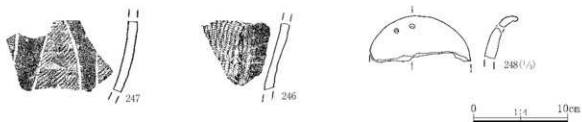
486号土坑



487号土坑



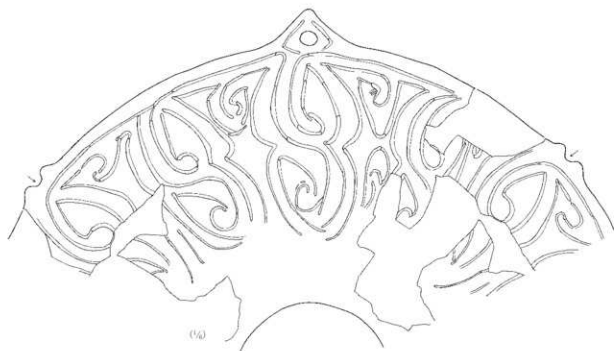
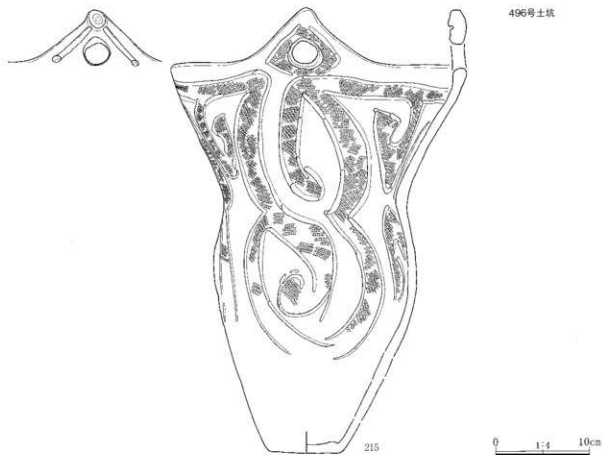
500号土坑



第69図 土坑出土遺物(9)

3. 土坑

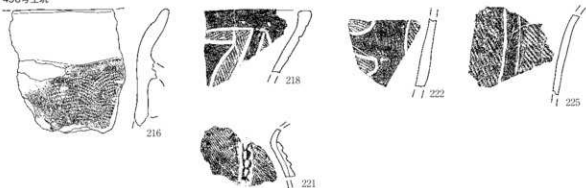
496号土坑



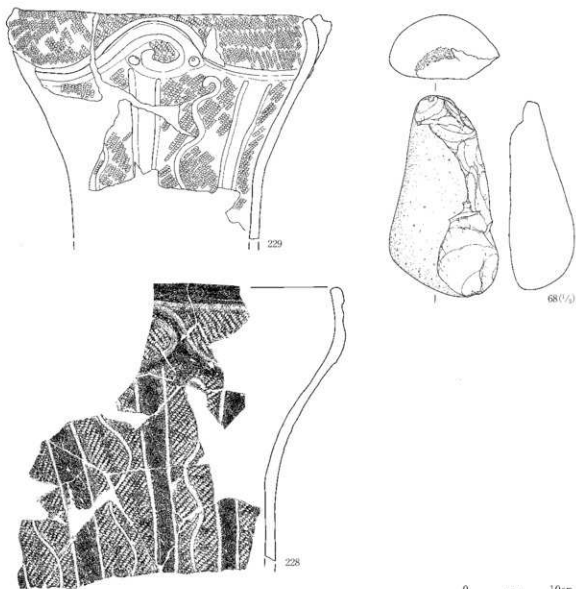
第70图 土坑出土遺物(10)

IV 検出された遺構と遺物

496号土坑



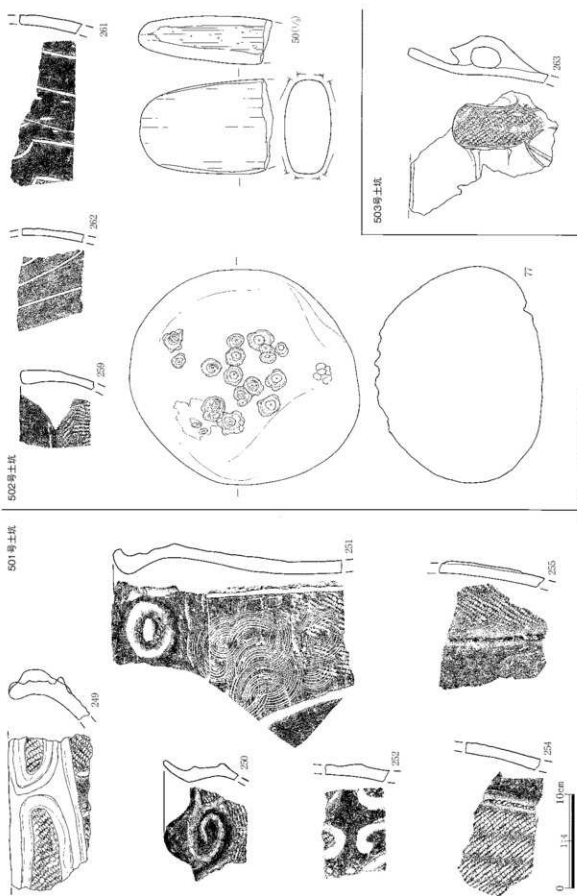
499号土坑



0 1:4 10cm

第71図 土坑出土遺物(11)

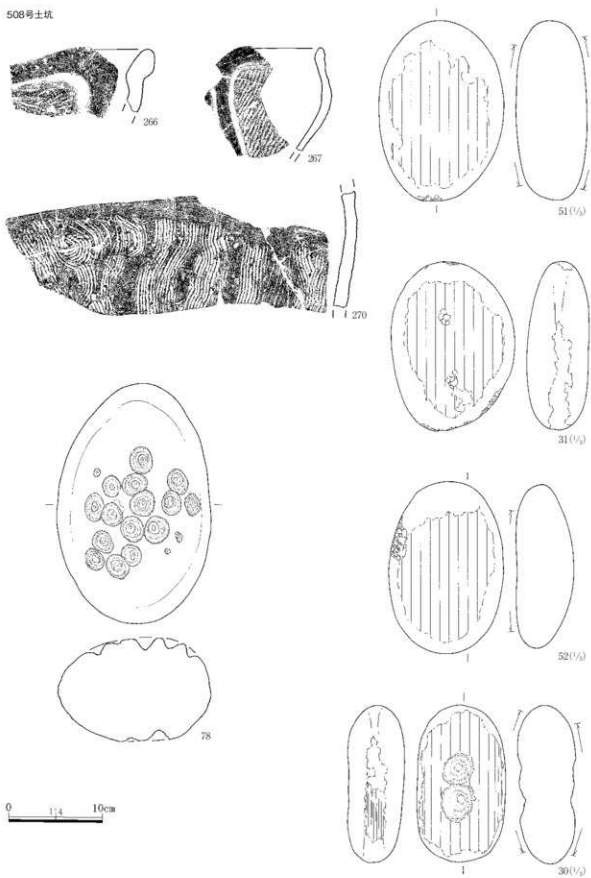




第72圖 土坑出土遺物(12)

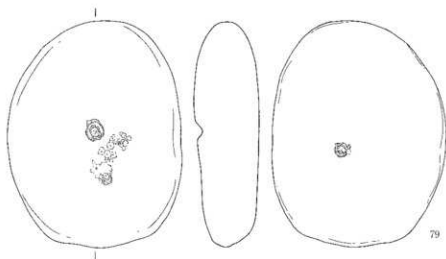
IV 検出された遺構と遺物

508号土坑



第73図 土坑出土遺物(13)

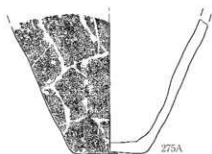
508号土坑



509号土坑



513号土坑



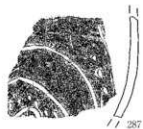
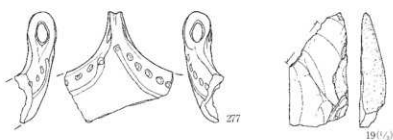
510号土坑



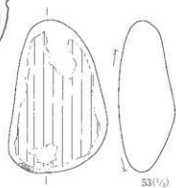
519号土坑



514号土坑



526号土坑

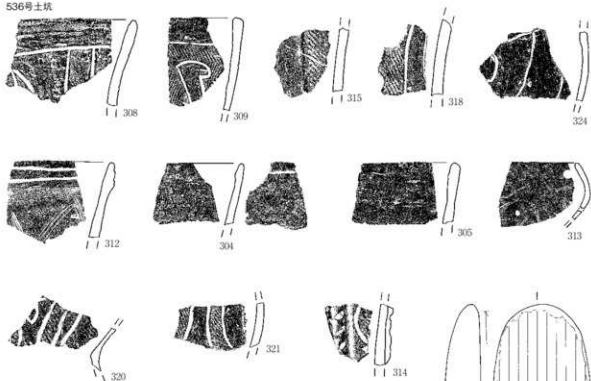


0 1:4 10cm

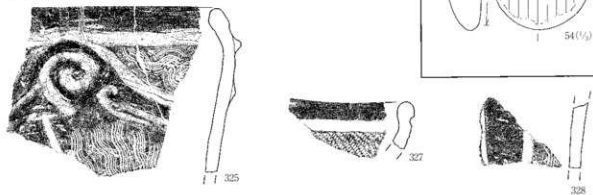
第74图 土坑出土遺物(14)

IV 検出された遺構と遺物

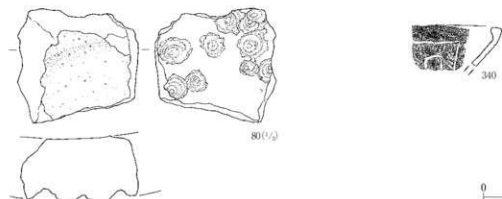
536号土坑



538号土坑



542号土坑

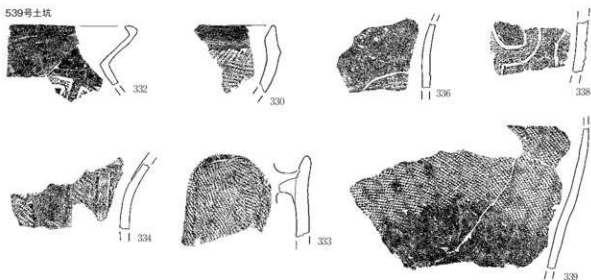


0 1:4 10cm

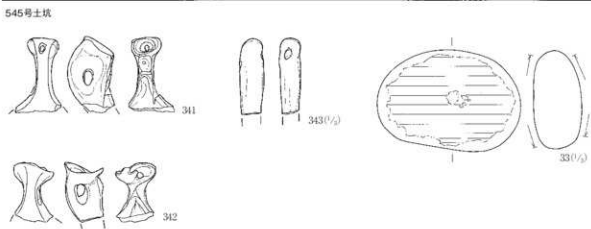
第75図 土坑出土遺物(15)

3. 土坑

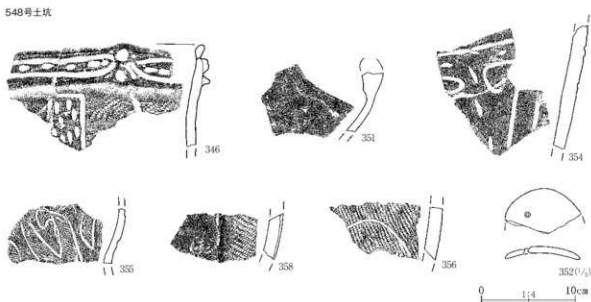
539号土坑



545号土坑



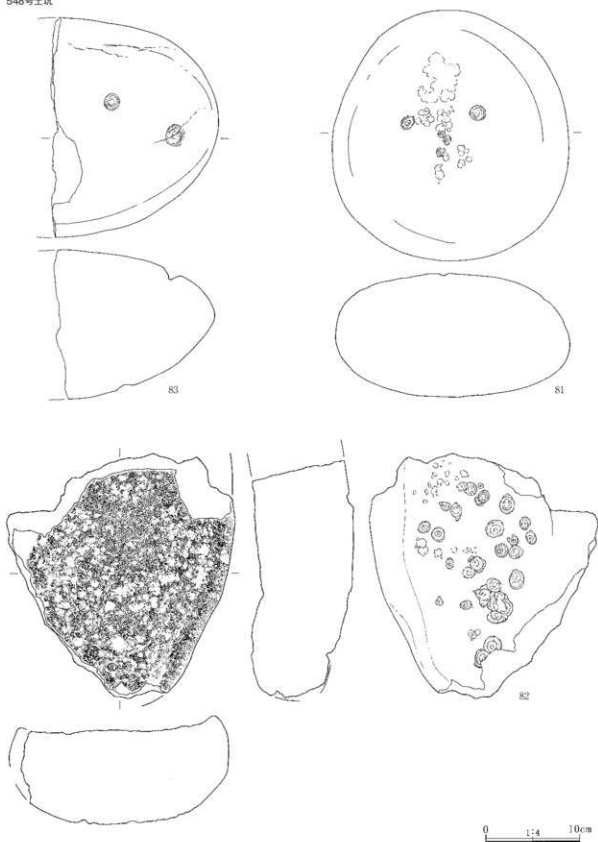
548号土坑



第76图 土坑出土遺物(16)

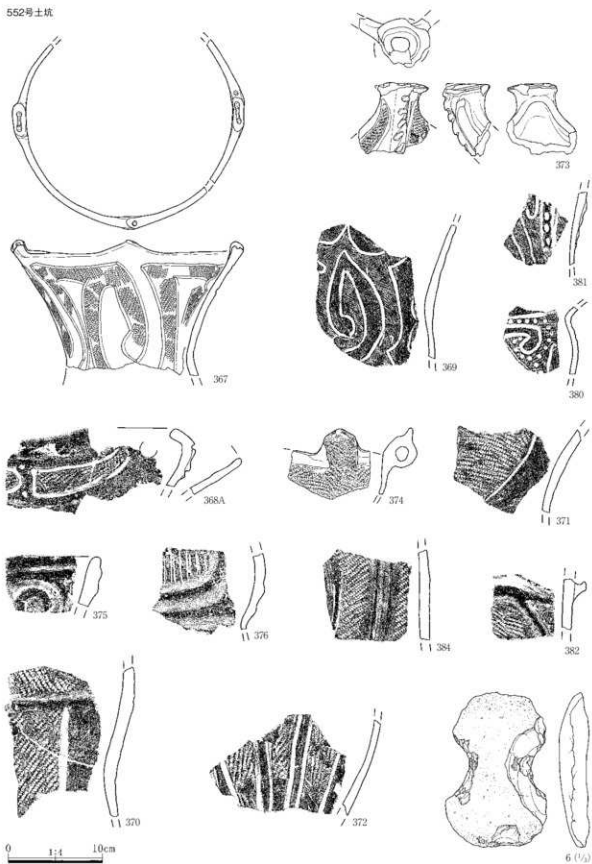
IV 検出された遺構と遺物

548号土坑



第77図 土坑出土遺物(17)

552号土坑



第78图 土坑出土遺物(18)

IV 検出された遺構と遺物

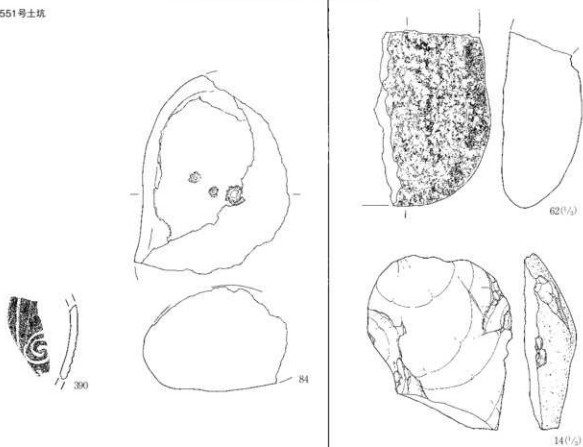
549号土坑



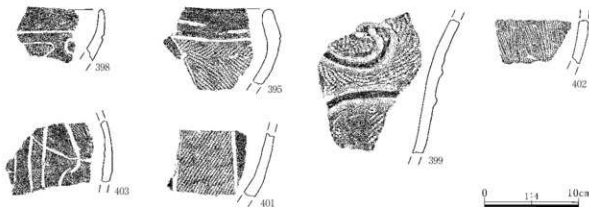
555号土坑



551号土坑



557号土坑

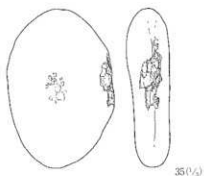


第79図 土坑出土遺物(19)

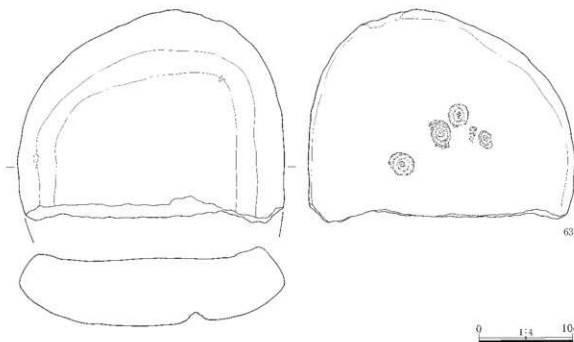
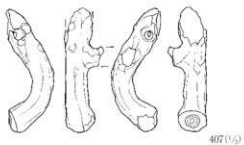
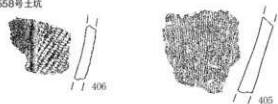


3. 土坑

557号土坑



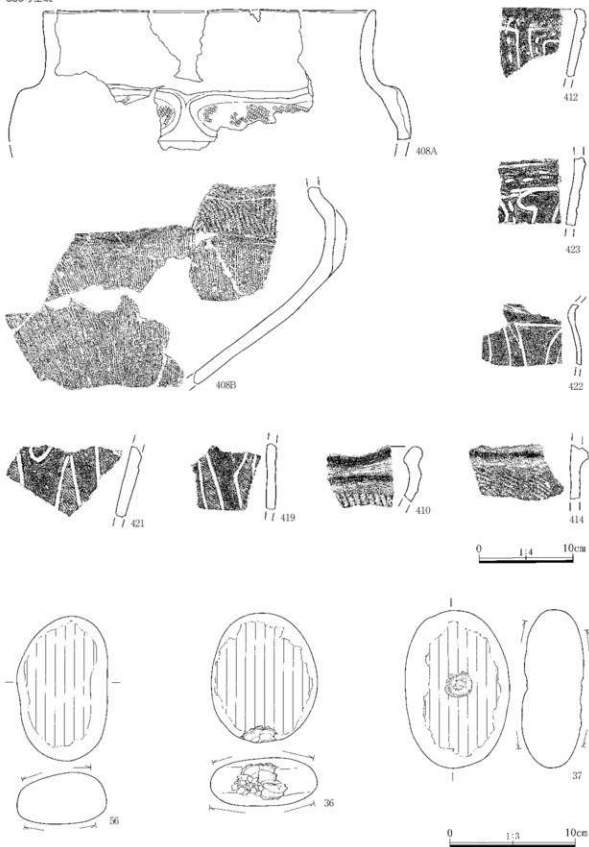
558号土坑



第80图 土坑出土遺物(20)

IV 検出された遺構と遺物

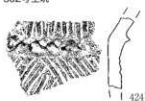
559号土坑



第81図 土坑出土遺物(21)

3. 土坑

562号土坑



567号土坑



566号土坑



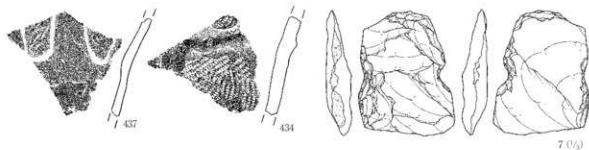
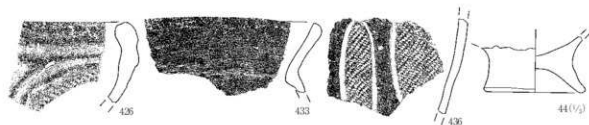
575号土坑



568号土坑



564号土坑

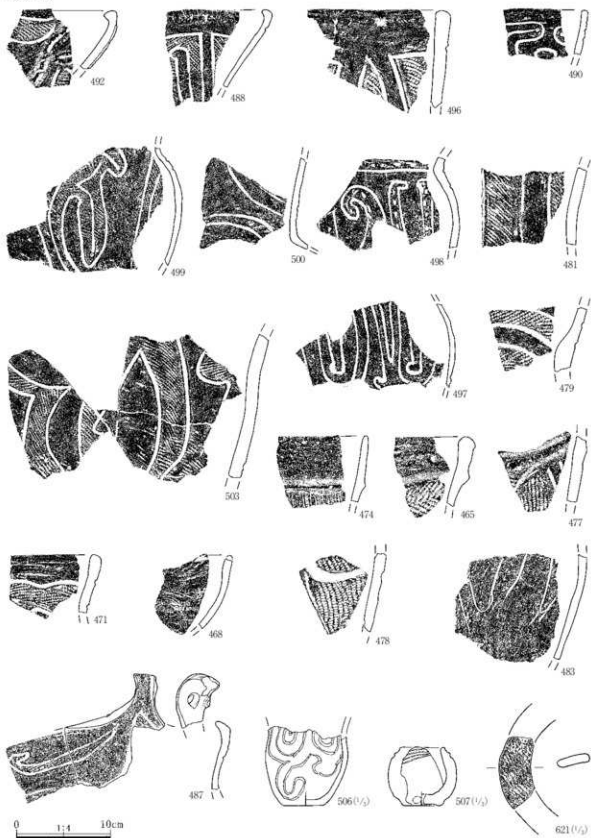


0 1:1 10cm

第82图 土坑出土遺物(22)

IV 検出された遺構と遺物

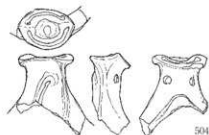
593号土坑



第83図 土坑出土遺物(23)

3. 土坑

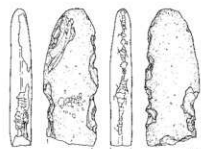
593号土坑



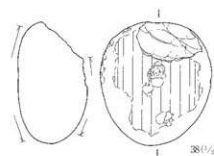
504



505



69 (1/2)



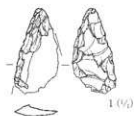
38 (1/2)

613号土坑

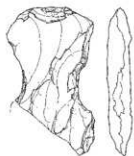


524

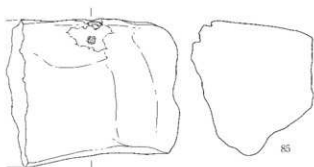
0 1:4 10cm



1 (1/2)

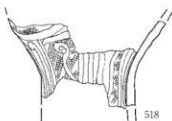


8 (1/2)

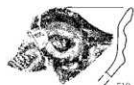


85

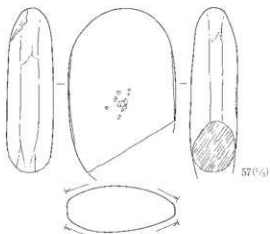
612号土坑



518



519

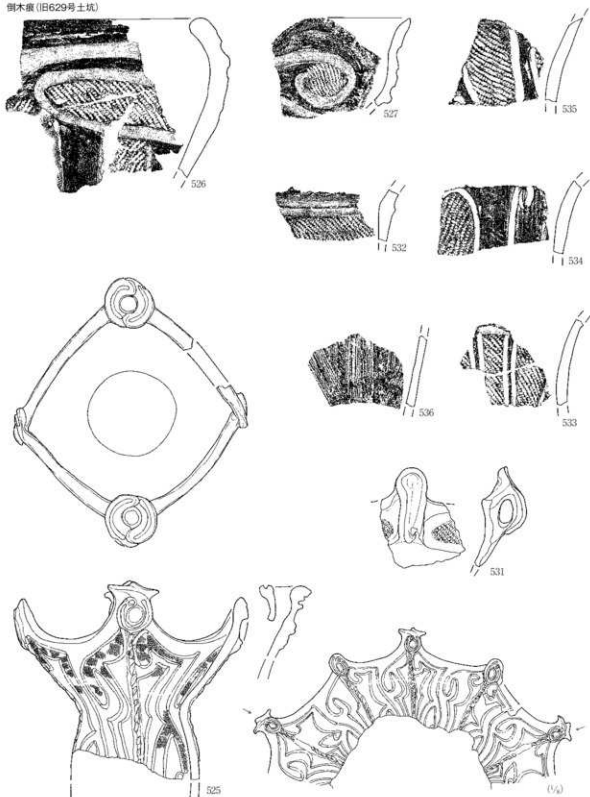


57 (1/2)

第84图 土坑出土遺物(24)

IV 検出された遺構と遺物

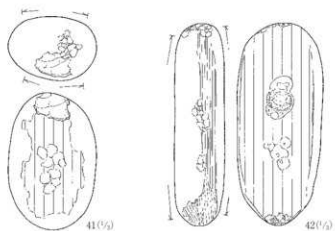
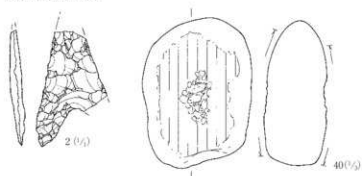
倒木塚 (IB629号土坑)



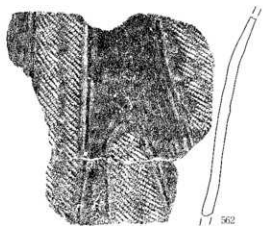
第85図 土坑出土遺物(25)

3. 土坑

倒木痕 (旧629号土坑)



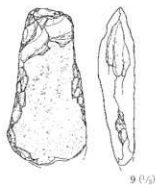
649号土坑



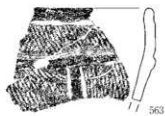
641号土坑



648号土坑



651号土坑



683号土坑

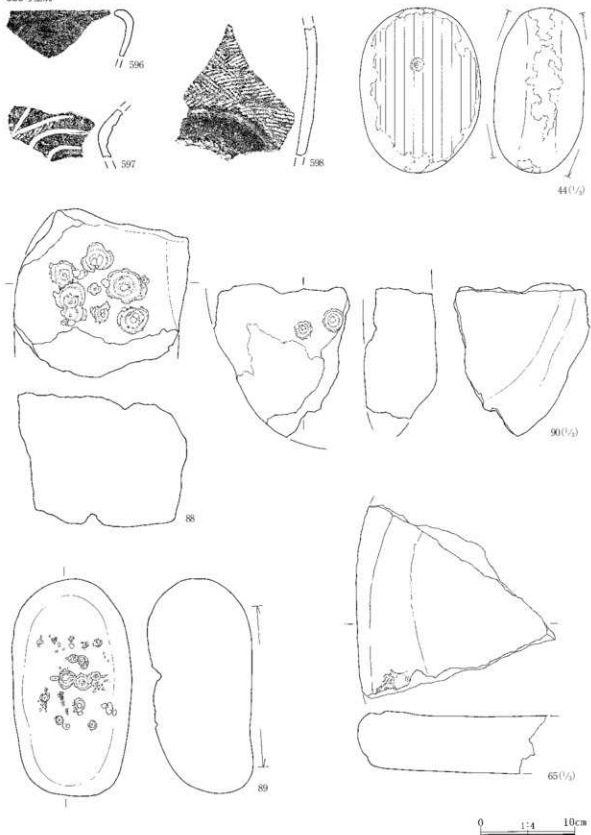


0 1:4 10cm

第86图 土坑出土遺物(26)

IV 検出された遺構と遺物

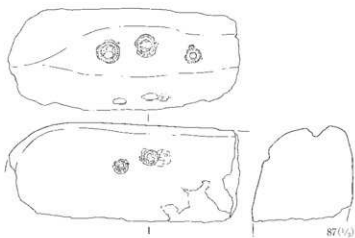
686号土坑



第87図 土坑出土遺物(27)



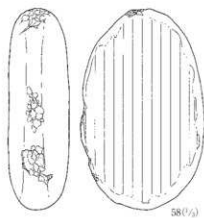
673号土坑



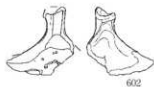
678号土坑



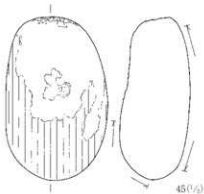
679号土坑



688号土坑



693号土坑

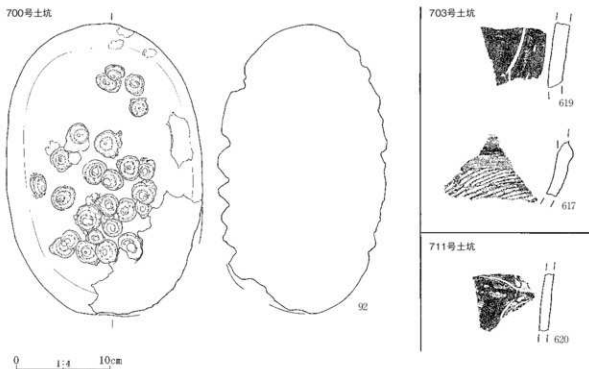


680号土坑



0 1:4 10cm

#### IV 検出された遺構と遺物



第89図 土坑出土遺物(29)

### 4. 包含層出土の遺物

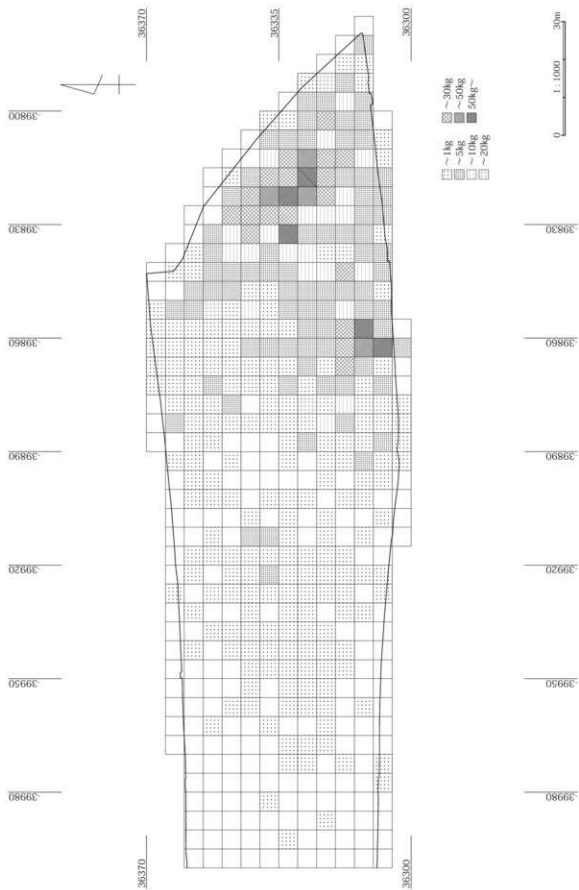
#### 4-1. 土器

これまで再三指摘してきたとおり、縄文期遺構は古代遺構と激しく重複していた。縄文期遺跡においては包含層を伴う例が通例であり、本遺跡においても縄文期住居・土坑周辺域に遺物包含層が掲載されていた。調査地の縄文期住居は12棟で、数的に突出しているわけではないが、その分布が調査区外（調査区の南側）に延びることは確実で、今回の調査では遺跡全域の部分的様相が判明したのにすぎない。包含層形成の要因については資料的蓄積には事かかないが、その要因については解決された過去のテーマというわけではない。調査中、遺物が包含層から累々と出土する状況は日常的だが、縄文人の行動については現代的な感覚が邪魔して理解できない点が多く、包含層は継続的・断続的な活動の中で形成されたという認識に止まる。縄文期遺跡においてはその構造性が注目され、住居群・土坑群・掘立群・廃棄の場等が知られているが、包含層の形成には縄文人の居住サイクル・精神的側面が絡んでいるはずである。精神的側面には縄文人の意識や志向性を含んでいるが、現代的感覚とは明らかに異なるものであり、言わば縄文的感覚というべきものである。具体的には、縄文人にも片付けるという行為・意識があったということであろうが、それは邪魔にならない程度ということであろう。

#### <分類作業の概要>

包含層・古代住居覆土から出土した土器は、バンケースで200箱に及んだ。量が膨大で、小片が圧倒的に多く細別型式レベルの分類が難しく、時間が限られていたため数は把握せず、重量のみ計測した。あくまでも目安でしかないが、実態を伝えるうえで、ある程度参考になるものと考えている。具体的な数字として、

4. 包含層出土の遺物



#### IV 検出された遺構と遺物

包含層（グリッド）954kg、古代住居516kg、古代土坑106kg、総重量15tの土器片が出土したということになる。継続的に集落が営まれ、細別型式レベルの網羅的分類は難しいだろうことが予想されたので、細別型式が判定可能なものと判定できないものに大別、型式判定ができないものについては縄文施文か無文か、沈線文か隆帯文か、これに部位別属性を加味して集計した。この時点で包含層（グリッド）529kg、古代住居491kg、古代土坑181kg、計1201kgが未掲載資料として確定した。時間の都合で、平安住居・土坑については分類を割愛しているのので、ここでは包含層のみその概要を記しておく。包含層527kgの内訳は、縄文施文の土器片154kg、無文土器片207kg、沈線文系土器片66kg、隆帯文系土器片58kg、底部30kg、その他12kgとなった。これらには中・後期の土器片が混在しているということになるが、どの程度の比率になるのか、断定できるだけのデータはない。

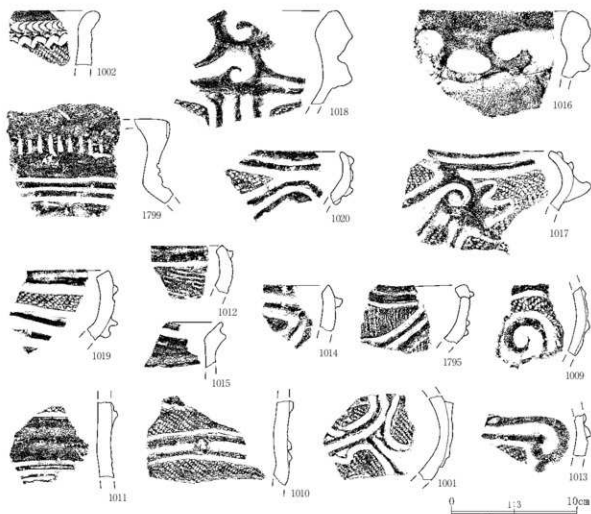
未掲載資料とした1201kgを除く374kgについて細別型式を認定、残存状態の良い土器片を選び、整理番号を付した。

細別型式を認定した土器片は、計10009点に達した。このうち、型式の内容が分かるよう、残存状態の良い土器片を選び、814点に整理番号（1001～1814）を付した。整理番号を付した814点については、できるだけ掲載するよう心掛けたつもりであるが、都合で写真のみ掲載した資料も多い。

#### <分布>

包含層出土遺物の出土状況を語る前に、まず遺構の分布状況について概要を述べておきたい。本遺跡には住居12・土坑93・屋外炉2・埋壺3がある。住居は北西側住居群と南東側住居群の二群に大別され、土坑群が南東側住居域に集中、その北側に屋外炉・埋壺があるという構造性を有していた。土器型式から見ると、中期後半～後期前半の土器が圧倒的多数を占めており、遺構および包含層には密接不離の関係にあることが明らかである。以下その関係性に触れ、分布概要を記していきたい。

第90図に、グリッド別に見た土器の重量別出土量を示した。これから明らかのように、土器は調査地から満遍なく出土しているのではなく、ある程度偏在分布したことが分かる。包含層出土の土器が調査区の東側に集中していたことは誰が見ても明らかであるが、特に東側台地縁辺部（ $X = 320 \sim 345$ 、 $Y = -800 \sim 845$ ）と台地中央部（ $X = 310 \sim 320$ 、 $Y = -855 \sim 865$ ）の2ヶ所に集中している。ごく簡単に言えば、後者の分布域には住居が重複、前者の分布域には遺構が見られないということで、両者は対照的である。通常、遺物は遺構が確認できるまで、グリッド出土の遺物とされることが多く、確認面が低い場合、グリッド出土の遺物量が増える。本遺跡で言えば、住居群に重複する後者などには確認面の問題を反映しているように見える。では、前者の台地縁辺の集中部は、どのように考えることができるだろうか。可能性として、単に技術的な問題で住居が確認できなかった場合、屋外炉や埋壺など他の遺構と関係性を有する場合、廃棄の場（包含層）として機能していた場合などがあるだろうが、東側集中部には古代遺構（特に住居）の重複が少なく、住居の存在した可能性については否定的にならざるを得ない。次に、他の遺構の関係性を検討しておきたい。両者の関係性を認めるということは屋外炉・埋壺の機能解明が期待できるということになるが、これには呪術系の遺物など出土遺物の吟味が必要であるが、これに類する遺物は土製品・石製品とも分布の偏在性がないようであり、肯定的要素は少ない。残る可能性は単なる廃棄の場としての包含層ということになるが、土器片類の出土量が多い台地縁辺部は埋没谷に入り込む地点でもあり、この地形的要素を重視するなら、廃棄の場とすることが現状では最も可能性の高い解釈とすることができるだろう。細分型式レベルで型式別分布は確認できていないが、型式別に偏在するような傾向は、感覚的だが想定できない。



第91図 包含層出土の土器(1)

#### <出土土器の概要>

包含層より出土した土器は、中期後半から後期前半のそれが圧倒的多数を占めた。その内訳は中期前半期3点・中期後半5613点・後期前葉2355点・後期中葉159点・晩期1点である。時期不明を除いた総点数に占める比率は中期後半期が56%、後期前半期が24%と多数を占める。細別型式毎の比率を見ると、加曾利E2式47点、加曾利E3式4841点、加曾利E4式606点、称名寺1式807点、称名寺2式1152点、堀之内1式131点、堀之内2式13点、加曾利B式66点となる。加曾利E3式が突出しており、この比率は集落規模や集落の継続性に係わるものとみられる。本遺跡は大正期からその存在が知られ、太田市史(1996年)には大道東の縄文期土器として前期諸磯期、中期阿玉台期・勝坂期・加曾利E期、後期堀之内期・加曾利B期、晩期安行期があるとされる。今回の発掘では、前期諸磯期と晩期安行期のそれを除いた各期の土器が出土、従来の見解を表付けることができたというべきであろう。前期や晩期の遺物が極めて少ない状況は、遺跡地が120,000㎡に及ぶ大規模遺跡であることがその理由ということになる。

#### 中期前半の土器

##### a. 勝坂式(第91図)

口縁部破片3・突起2が出土した。5点とも鉋状工具等による連続押圧、横位の結節沈線様の角押文を特

徴とする。

**中期後半の土器**

b. 加曾利 E 2 式 (第91図)

60点が出土した。破片資料が主体であり、器形を復元できるようなものはないが、渦巻文・横 S 字文など隆帯で文様構成するものが多い。胎土チャート岩片や溶結凝灰岩の小片を含む一群と、金雲母を含む一群等がある。

c. 加曾利 E 3 式 (第92～99図)

5110点が出土した。隆帯による楕円区画文・横 S 字文を主文様とするもの (第92図)、横位隆帯による U 字文・渦巻文 (第92・93図)、縦位隆帯文で区画するもの (第93図)、太沈線を横位に配するもの (第95図)、縦位沈線間に沈線脈手文を配するもの (第95図)、横位沈線下に沈線 U 字文を配するもの (第96図)、横位隆帯に刺突文を配するもの (第96図)、縦位条線文を地文とするもの (第97図) 等のバリエーションがある。沈線は太く、口縁部で 7～15mm・胴部で 6mm 前後を測り、後期段階の沈線とは明らかに異なる。胎土は 2～5mm 程度のチャート岩片等を含む粗雑な土器も散見されるようであるが、大部分は 0.2mm 程度の細粒物粒を含む比較的均質な胎土で、文様間の差は見られない。

5110点中518点が4段階区分されている。第1段階とされたものは連弧文 (第98図1004～1006) 3点で、いずれも胴部破片である。第2段階とされたものは波状口縁下に隆帯渦巻文を配するもの (第98図1007) で、隆帯は前段階同様に明瞭である。第4段階とされたもの (第98図1305以下) は U 字文・渦巻文系の土器515点で、それぞれ隆帯文系・沈線文系の別がある。この段階の隆帯は低く、より細隆帯化する。また、口縁部下の沈線等は10mm 弱と前段階と同様だが、U 字状の区画には細線化、その断面形状は皿状から U 字状になるようである。

d. 加曾利 E 4 式 (第100～102図)

719点が出土した。隆帯文系・沈線文系とも U 字文が主体を占める。隆帯文系の土器は横位隆帯に U 字状の隆帯が連結したものが多く、細隆帯化している。また、口縁部無文帯の幅が広がる傾向があり、肥厚した口縁部が減少する。沈線文系の土器も隆帯系のそれと同様な文様構成を示す。波状口縁となるものは波頂部下に U 字文を配す例が多く、横位沈線が波頂部に集まり、波頂部下が隆帯化する。沈線はシャープで、横位沈線や隆帯下の縄文は1段のみ横位施文されるものが多数を占める。

**後期前葉の土器**

3591点が出土した。これには細分型式を明らかにできない突起・無文土器など1292点が含まれているが、堀之内段階以後の土器の出土量が激減することは明らかである。

a. 称名寺 1 式 (第103・104図)

897点が出土した。J 字状に区画した沈線内に縄文を充填するもの、区画内に列点を充填したものがある。このほか、口縁部無文帯下に低い隆帯を配し隆帯下に縄文を施文するもの、渦巻状に区画した沈線内に縄文を充填した等の加曾利 E 系の土器群がある。

b. 称名寺 2 式 (第105～108図)

1152点が出土した。J 字状に区画した沈線内に列点を充填するもの、沈線区画のみしたものがある。このほか、縦位に条線文を施文したもの、横位・縦位隆帯を刺突したもの、X 状に隆帯を配したもの等がある。口縁部無文下に横位沈線の廻る一群 (第107図1605～1607) や粗い縦位条線文を施す一群 (同1608～1617)、やや外反気味の無文口縁については、称名寺も堀之内段階のそれとして捉えた。突起類は筒状を呈し、円形

利突に沈線が繋がるC字文を配したものが多い。

把手以外には、蓋（第108図1634・1635）や注口土器（同1504・1505）、小型の深鉢（同1805）・土偶の頭部片（同1807）がある。土製円盤（同1639ほか）については、加曾利E期の土器片を使用したもの（同1640・1647）、縄文施文の土器片を使用したもの等がある。

c. 堀之内1式（第109～111図）

215点が出土した。波状口縁の頂部や平縁から延びた小突起に渦巻状の文様を配し、これに横位沈線を繋いだもの（第109図1719・1720）や、口縁部から垂下した隆帯上に刺突と沈線を繋いだもの（同1736・1737）、口唇部に横位沈線3条が廻り、口縁部が内折気味になるものがある。胴部破片では縦位に沈線構成するものが主体で、これにJ字状の沈線に渦巻文を繋いだもの（第110図1686ほか）等がある。このほか、前代の沈線J字文の系譜を引いたもの（同1661・1662）、口縁部下の円形刺突文や沈線の下に鋸歯状の条線文を施したもの（第111図1731ほか）、口縁部無文帯下に隆帯刺突文のあるもの（同1655）がある。

d. 堀之内2式（第112図）

35点が出土した。縦位沈線による懸垂文（第112図1755・1757・1759）や沈線渦巻文（同1767・1769・1770）など前代の様相を残す一群の他、磨消縄文や三角文（同1773・1756）文様帯の幅の減少、棒状文（同1771）が見られるようになるなどの特徴を有する。このほか、やや外反気味に立ち上がる無文土器の口縁部や木葉痕・網代痕を有する底部片（同1636・1637）、土製円盤（同1638）が出土している。

第112図1775は、横位の細隆帯上に刺突した深鉢の口縁部に近い破片である。上端の破損面は明らかに磨耗しているように見える。磨耗状態は上端中央より右の磨耗は土器表面のザラツキがなく、これに対して左側は鉱物粒等が見える状況である。位置的に輪積痕の可能性も否定できないが、今後注意しておくべき資料であろう。

#### 後期中葉の土器

22点が出土した。小片であるものが多く詳細は不明だが、加曾利B1～B3段階の土器が存在するようである。

a. 加曾利B1式（第113図）

口縁部破片5点・胴部破片2点を図示した。器形的特徴として内面・口縁部下に稜（第113図1780・1781）が、文様構成として横位並行沈線文、及び、これに「の」字文や「区切り縦線文」が特徴的（同1780・1784）である。また、内面口唇部に横位沈線を廻らせるもの（同1783～1785）も特徴的で、この段階の特徴を良く備えている。その他、沈線間に斜向細条線を施すもの（同1780・1781）、縄文施文後に沈線を廻らせるもの（同1782）等がある。

b. 加曾利B2式（第113図）

口縁部破片3点・胴部破片1点を図示した。横位隆帯文を口唇部に貼り付けるもの（第113図1786・1788）、綾杉状の斜向沈線文を施すもの（同1787）がある。

c. 加曾利B3式（第113図）

口縁部破片1点・注口土器1点を図示した。注口土器（第113図1803）は曲細隆起線により「工字文」に似た文様構成を持つ。注口部・釣手部を欠く。

#### 晩期の土器

1点のみ出土した。粘土帯2段を積上げた口縁部破片（第113図1777）である。詳細は小片であるため、不明。

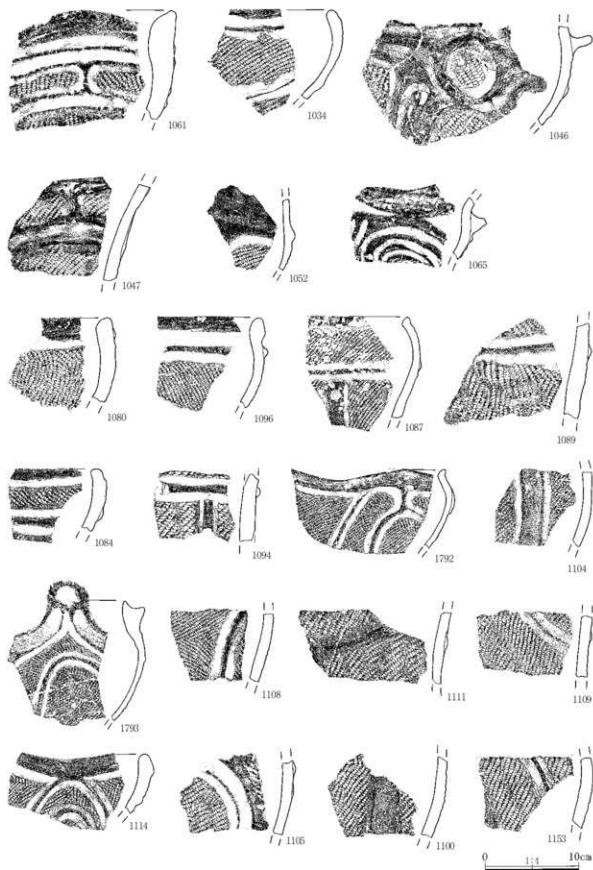
IV 検出された遺構と遺物



第92図 包含層出土の土器(2)

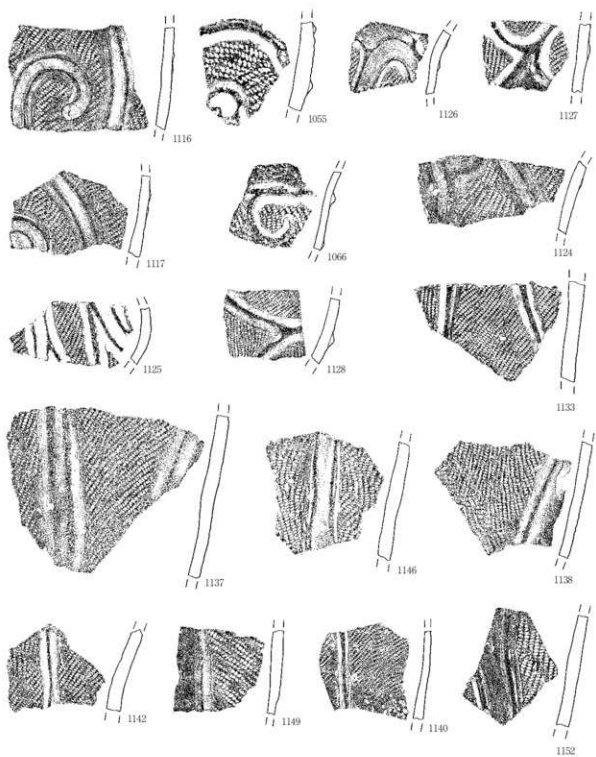


4. 包含層出土の遺物



第93図 包含層出土の土器(3)

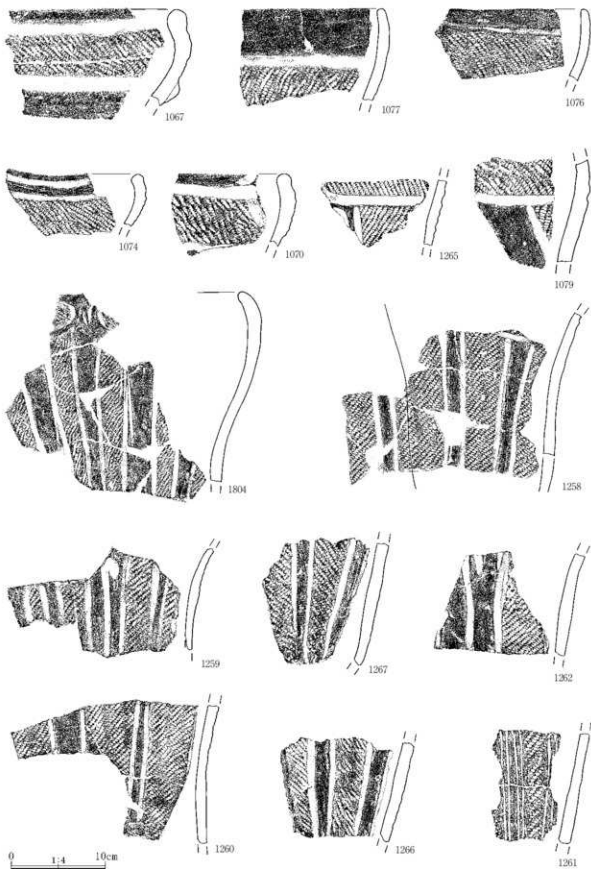
IV 検出された遺構と遺物



0 1:4 10cm

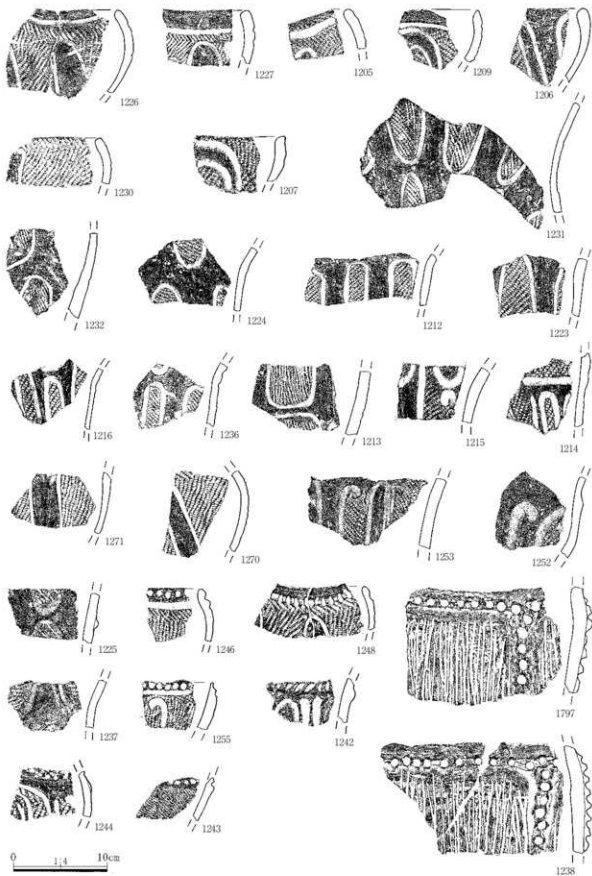
第94図 包含層出土の土器(4)

4. 包含層出土の遺物



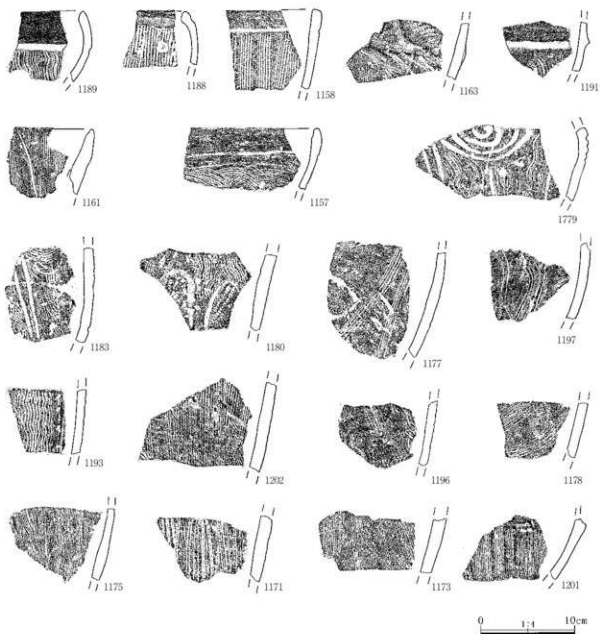
第95図 包含層出土の土器(5)

IV 検出された遺構と遺物



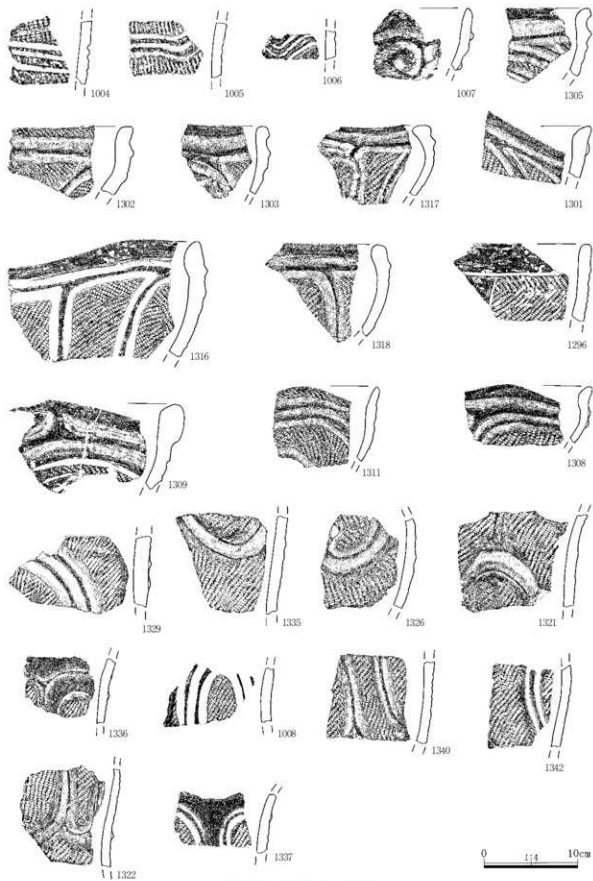
第96図 包含層出土の土器(6)

4. 包含層出土の遺物



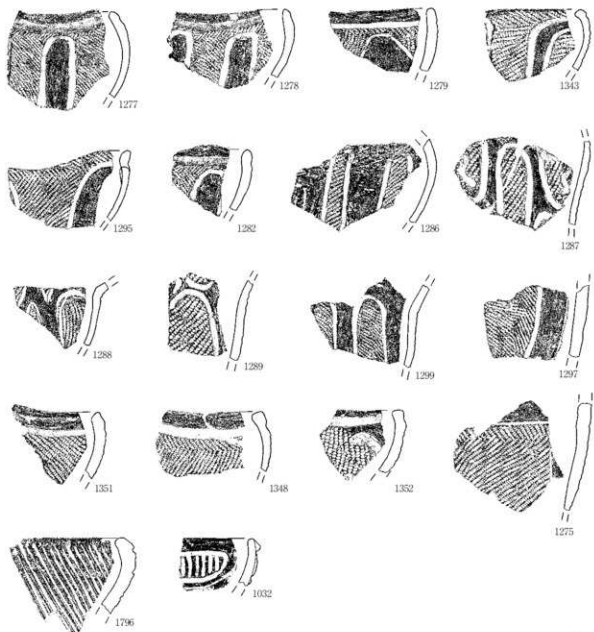
第97図 包含層出土の土器(7)

IV 検出された遺構と遺物



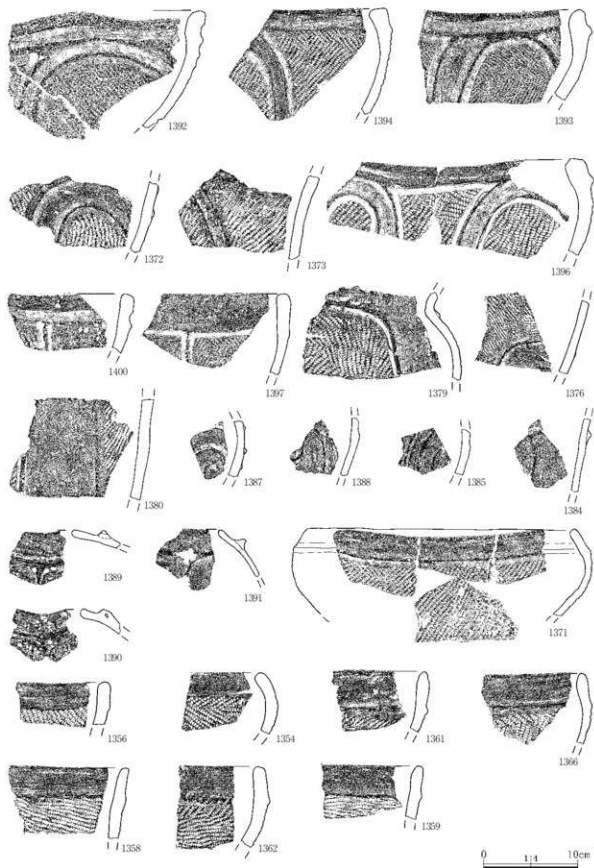
第98図 包含層出土の土器(8)

4. 包含層出土の遺物



第99図 包含層出土の土器(9)

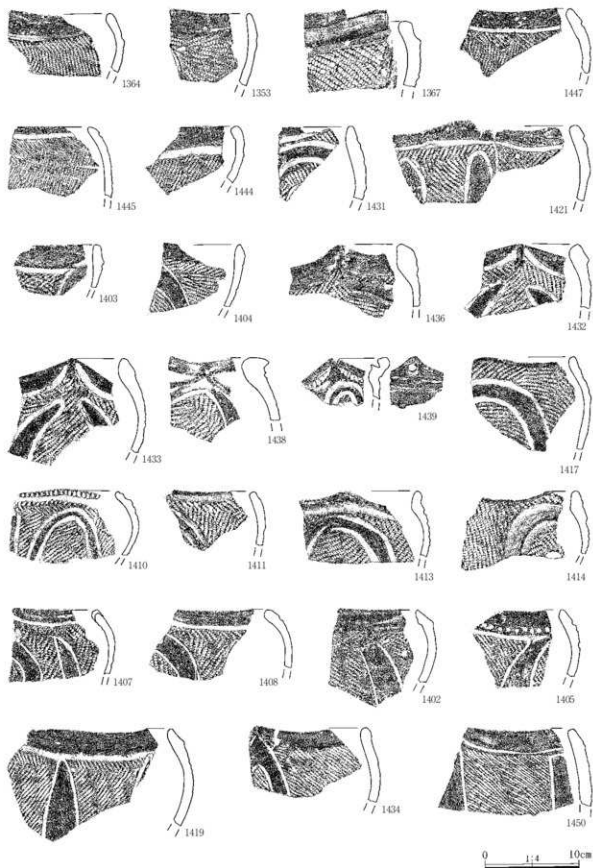
IV 検出された遺構と遺物



第100図 包含層出土の土器(10)



4. 包含層出土の遺物



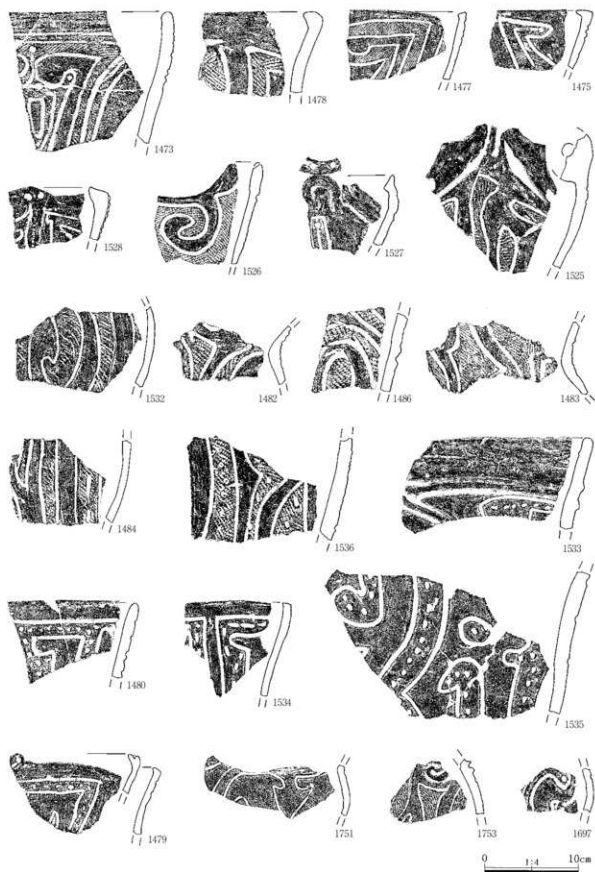
第101図 包含層出土の土器(11)

IV 検出された遺構と遺物



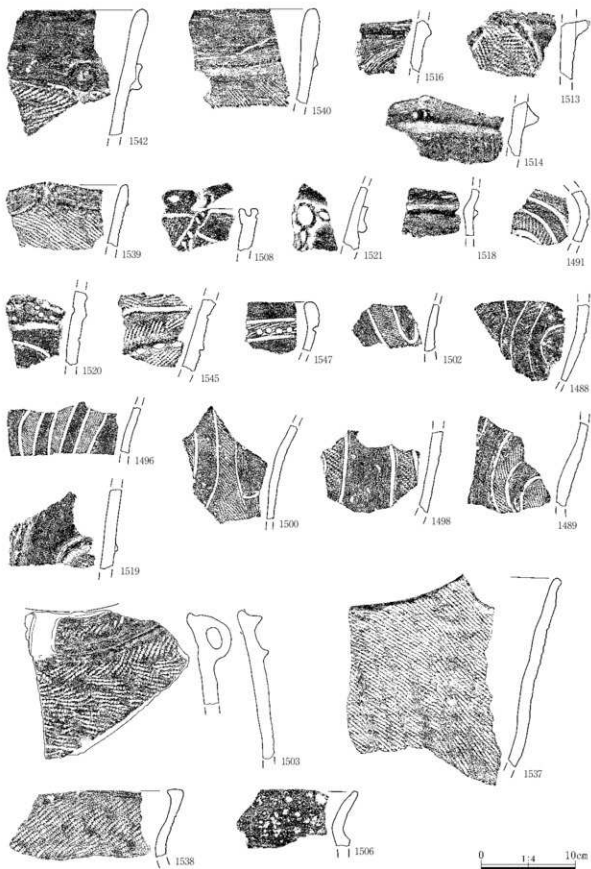
第102図 包含層出土の土器(12)

4. 包含層出土の遺物

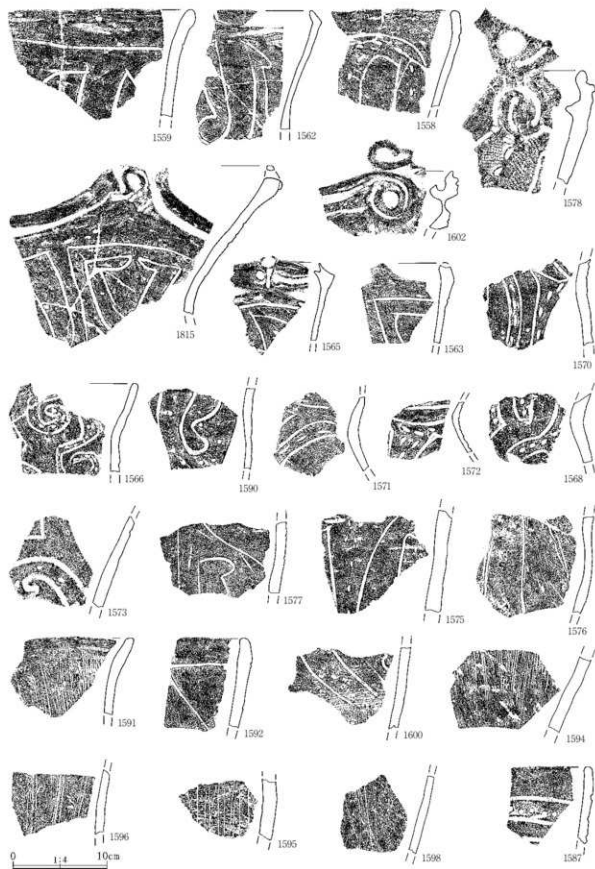


第103図 包含層出土の土器(13)

IV 検出された遺構と遺物

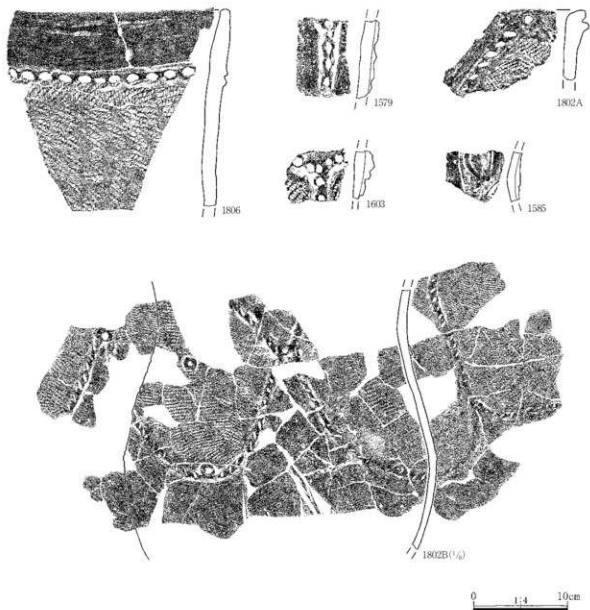


第104図 包含層出土の土器(14)



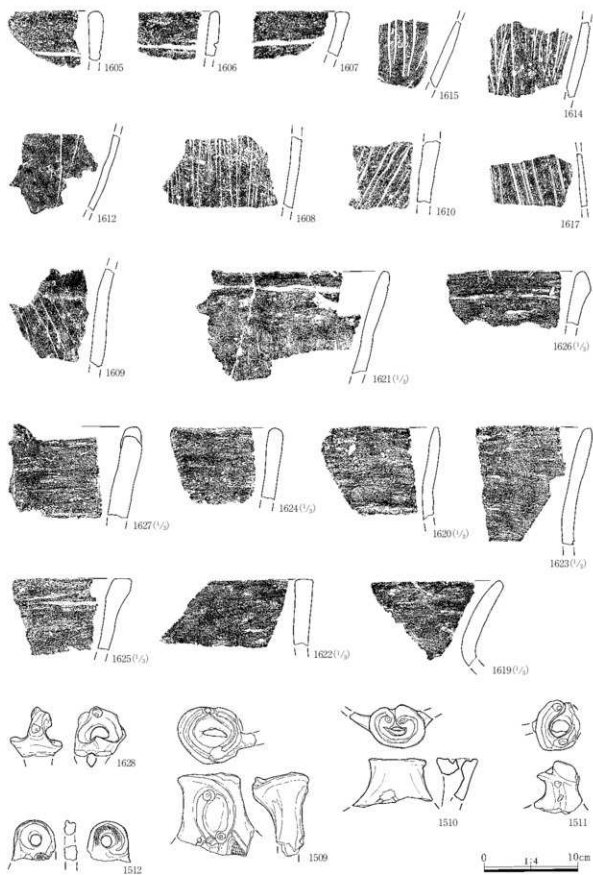
第105図 包含層出土の土器(15)

IV 検出された遺構と遺物



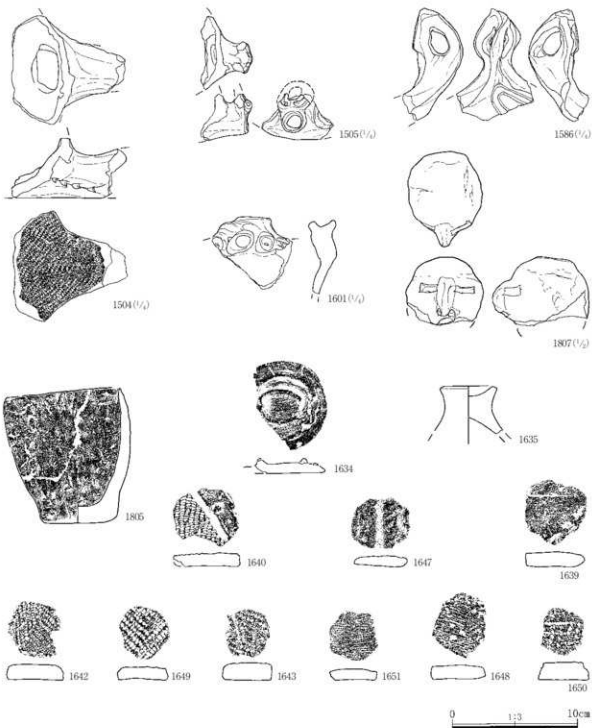
第106図 包含層出土の土器(16)

4. 包含層出土の遺物



第107図 包含層出土の土器(17)

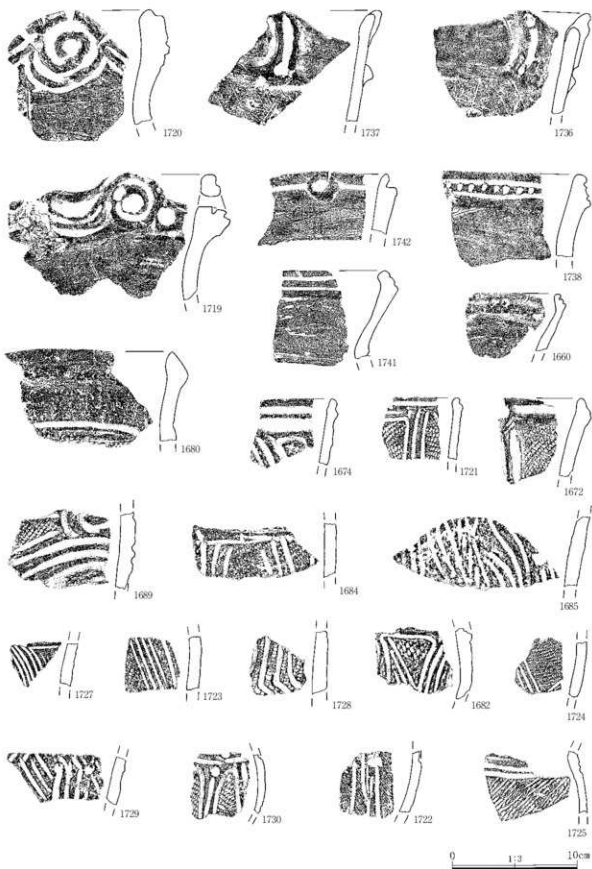
IV 検出された遺構と遺物



第108図 包含層出土の土器(18)

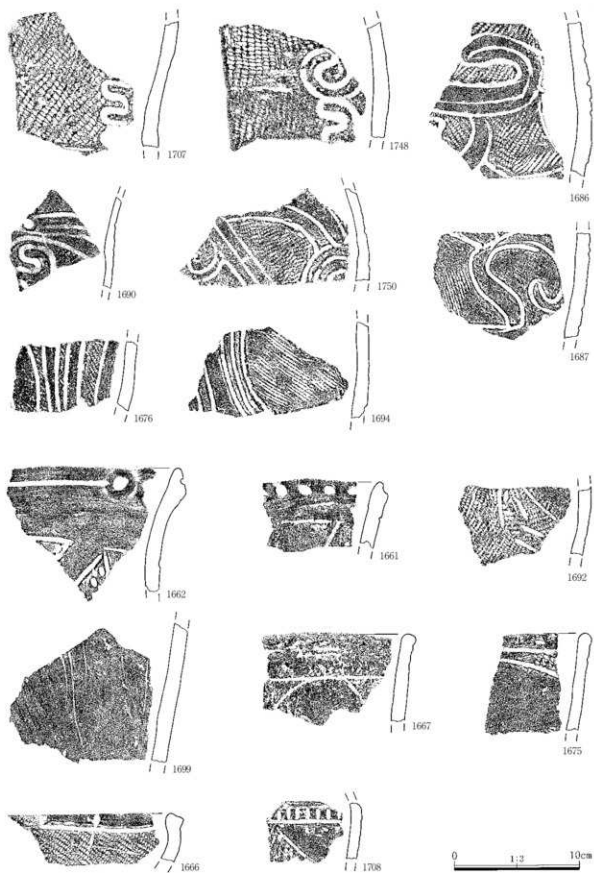


4. 包含層出土の遺物



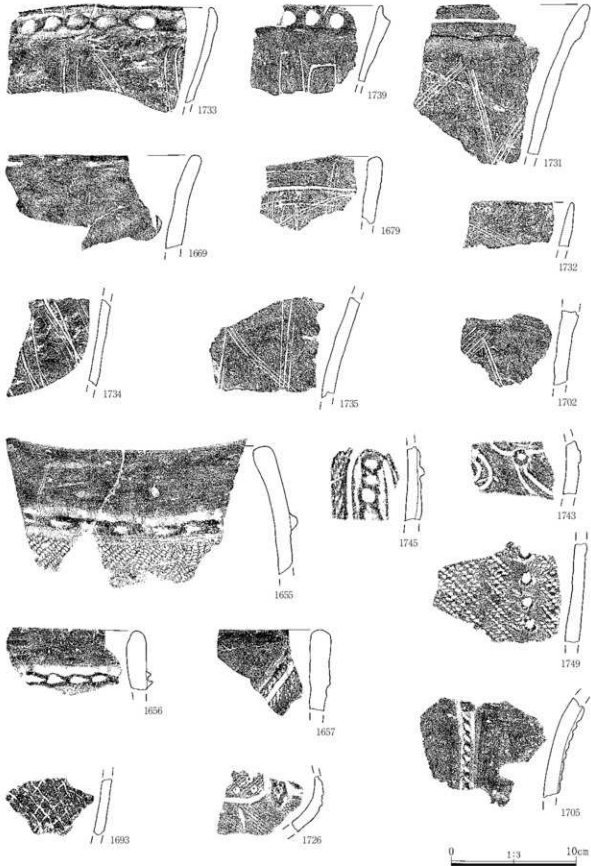
第109図 包含層出土の土器(19)

IV 検出された遺構と遺物



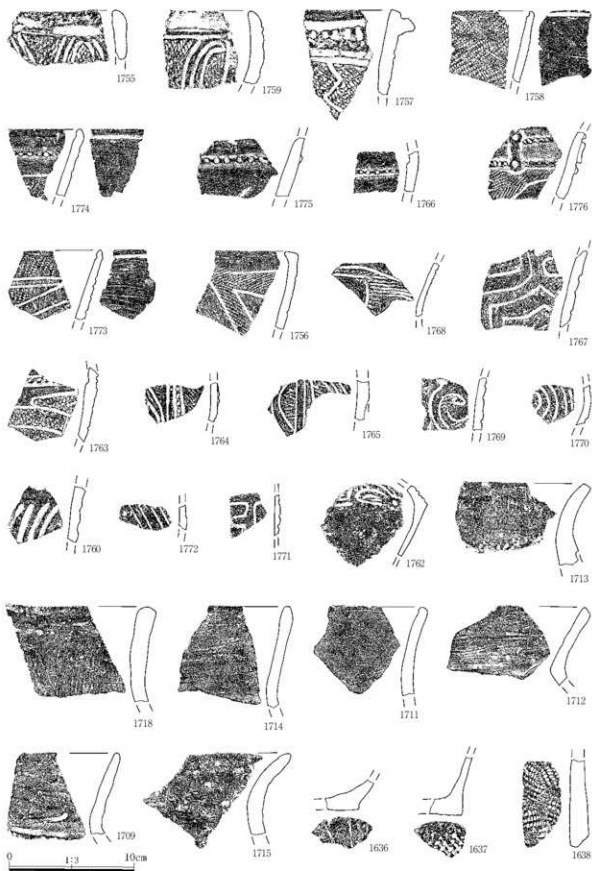
第110図 包含層出土の土器(20)

4. 包含層出土の遺物

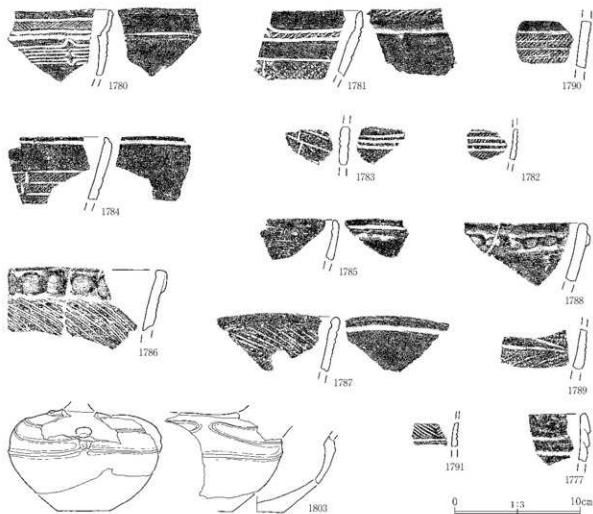


第111図 包含層出土の土器(21)

IV 検出された遺構と遺物



第112図 包含層出土の土器(22)



第113図 包含層出土の土器(23)

## 4-2. 石器

縄文期包含層の残存状況については、前節で述べたとおりである。その残存状況は良好とは言えず、分布論的な検討を難しくしており、本報告では取って遺物分布の検討については省略、できるだけ遺物そのものを観察するよう心掛けた。以下、整理作業の概要と個別遺物について報告していきたい。

## &lt;分類作業の概要&gt;

まず、整理作業はバン箱から土器と石器を分ける作業から開始、暫時石器の分類へ作業を進めた。縄文期の遺物が古代住居覆土に混入していたため、古代住居350棟分の遺物を点検した。この縄文期遺物を取り出す作業に2班で1ヶ月を要した。土器だけでもバン箱で200箱を越え、これに相当量の石器類が加わることになった。分類に際し、古代の礫石・鷹網石等についてはある程度排除できたものと考えているが、礫片類については峻別が難しく、これらについては分類項目から除いた。剥片類については石材別に重量のみ計測、全重量把握の材料となるよう心掛けた。分類作業の過程で、地山混入の自然礫を相当量（薄いバン箱に6箱分）確認した。石器として810点を認定、これらについては個々に整理番号を付した。

## &lt;分布&gt;

包含層出土の石器について、グリッド別に数量を把握できるようなデータや重量分布図は作成していない

#### IV 検出された遺構と遺物

が、通常の縄文期遺跡の遺物分布がそうであるように、概ね、土器と石器の分布は重なるだろうことが予想され、本遺跡の石器分布を考える上で、前節で明らかにしたグリッド別の重量分布図（第90図）が、ある程度の参考になるものと考えている。繰り返せば、縄文期遺構は住居が北西側と南東側の二群に大別、土坑群が南東側住居群に集中、その北側に屋外炉・埋甕があるという構造性を有し、遺構出土の土器と包含層出土の土器は概ね同時期で、遺構および包含層には密接不離の関係にあることが明らかであり、以上の様相から包含層出土の石器も、仔細を別に、ある程度まで予想は許されるのではないだろうか。仮に、この予想が許されるものならば、その分布域は遺跡南東側の台地縁辺にあるということになる。これ以上は推測に推測を重ねることになるので控えるべきだが、凹石・磨石・石皿当の特定器種についてはグリッド単位に分布の検討が可能で、これについては記載が煩雑になるので、別項で改めて取り上げる。

#### <出土石器の概要>

包含層より出土した主な石器（古代住居出土の石器を含む）は、別表の通り、石鏃35・石匙1・石錐2・打製石斧118・磨製石斧5・石錘3・凹石120・磨石124・敲石44・石皿32・台石18・多孔石44・石製品7・石棒3がある。打製石斧や凹石・石皿・磨石の優位性は明らかであり、石鏃等の狩猟具は低調である。多孔石や石製品など「第二の道具」類の出土量も多い。漁労具としてその性格が明らかな石錘3についての評価については意見が分かれるだろうが、漁場として遺跡東方1.5kmを流れていた旧渡良瀬川の存在は無視できない。剥片系石器については加工痕ある剥片158・使用痕ある剥片8が出土した。加工痕ある剥片には石鏃の製作途上に位置づくもの、打製石斧製作の関連資料、両極石核様小型石器などを含む。これに対して、削器や使用痕ある剥片等の加工具は少ないようであるが、これについては石材等を反映して石器認定が難しい

第2表 石器器種と石材

石材	打斧	磨斧	礮器	石鏃	石匙	石錘	削器	石核	加工	使用	石鏃	凹石	磨石	敲石	石皿	台石	多孔	石製	石棒	統計
チャ				31	1	2	1	54	57	5				1						152
アイ																			1	1
ホルン	115		1					21	86					17						240
花崗岩																		1		1
灰安									1											1
角安												1								1
金山																		5		5
津貫	1			1					4	1	2			2						11
軽石																			2	2
硬頁										1										1
黒安				2			1	1	2											6
黒頁	1						3	3	1	1	1									10
黒曜石				1				2												3
砂岩														2						2
砂頁									1											1
蛇紋		2																		2
石門																		1		1
粗安	1		1									117	123	17	32	18	37	4		350
点頁									1											1
頁岩									4					1						5
変玄		2																		2
はん		1																		1
消磁												2	1	4			1			8
緑片									1											2
総計	118	5	2	35	1	2	5	81	158	8	3	120	124	44	32	18	44	7	3	810

ということも影響している可能性がある。

包含層出土の剥片類については個別に具体的な数量を確認していないが、石材別重量を提示して概略その傾向を指摘しておきたい。剥片類の総重量は36.1kgに達し、石器石材は20種を確認した。主な石材には、ホルンフェルス・チャート・頁岩その他があり、ホルンフェルスが圧倒的多数を占めた。対器種レベルで石材を大別するなら変玄武岩は磨製石斧に、緑色片岩は石棒に相関するようであるが、溶結凝灰岩や細粒輝石安山岩、変質玄武岩についてはその対応器種は明らかでない。通常、赤城山麓で使用頻度の高い黒色頁岩や黒色安山岩は、それぞれ1.8%・1.2%と極めて少なく、渡良瀬流域の典型的な石材構成を示している。

ホルンフェルスは風化に弱く、器種認定の難しい典型的な石材である。この石材性状と同種石材が70%を占めるといふ実態からするなら、剥片類とした中に、相当量の加工剥片や加工石器が混在することが容易に想定されよう。

#### <出土石器>

包含層出土の石器には、古代住居覆土や表土中の石器を含めている。以下には、個別器種レベルに形態的特徴・使用石材の傾向等についてその概要（文中の石器点数についてはグリッドから出土した石器に限定）を記す。

#### 打製石斧（第114図）

118点が出土した。従来型の分類に従えば、短冊形18・撥形6・分銅形88・不明5で、分銅形が圧倒している。形態的に完成状態にあるものが主体を占めるようであるが、短冊5／18点・分銅19／88点が未製品で、ホルンフェルス製の剥片類が多量に出土していることを踏まえれば、遺跡内製作の石器と捉えるべきである。ホルンフェルスは剥離方向や切り合い関係の理解が難しい石材だが、部分的に磨耗痕が見られるものもあり、概して変形度の高い石斧に見られるようであり、遺跡内で頻繁に刃部が再生されたということを示唆する。

形態的には分銅形が主体を占め、これが中期後半から後期前半の特徴とすることができるが、特徴的な形態の石斧があり、これについて何点か指摘しておきたい。

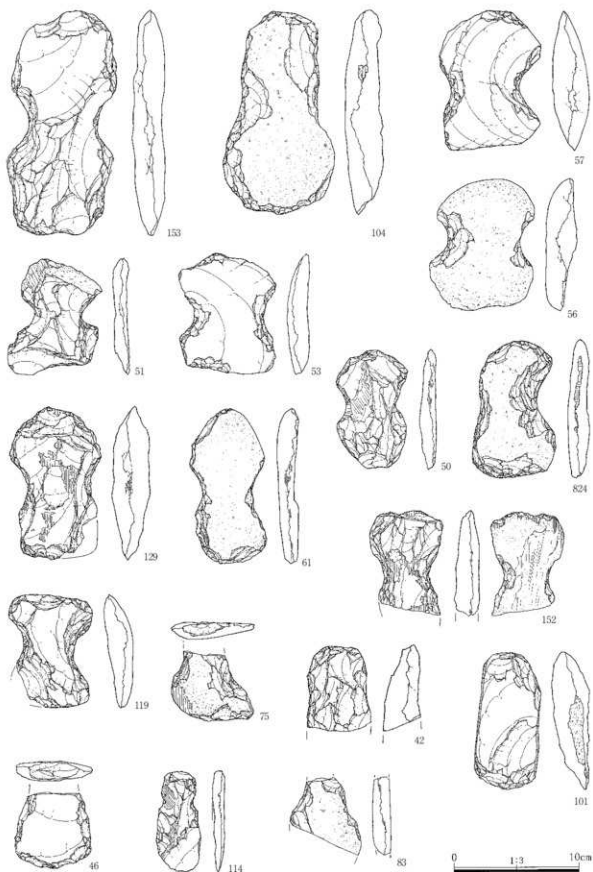
第114図51・53・56等がそれであり、中央両側縁を浅く打ち欠いている。形態的には糸巻き状を呈し、薄い幅広剥片を用いている。加工量は少なく、抉り部やエッジに限られるようである。刃部は直線的で、完成形か判断が難しい。このタイプの石斧は10点強があり、形態的に安定して存在している。機能的分化の想定が可能だが、石材性状に制約され、使用痕等は明らかでない。比較的軽量（100g前後？）であり、対称性に欠けることから、加工具として位置づけることができるかもしれない。

打製石斧の製作は自前で製作（調達）したという見方と、他集団に依存（交易）したという見方がある。前者は採集地で石斧の母形を作り、集落で最終的に仕上げるという理解であり、後者は集落では石斧の補修程度が行われたとする考え方である。また、特定器種の量比を問い、地域内集落の相互依存体質を示唆する見解もある。前者は石材の調達地：石材の乏しい地域という枠組で、後者は地域内という枠組で意欲的に縄文石器を分析したものであるが、今後は両者を統合分析する方向性が模索されるべきであろう。石器石材はホルンフェルス製のそれが115点と圧倒した。

#### 磨製石斧（第115図）

5点が出土した。長さ5～15cmを測り、大小さまざまである。完形品3・破損品2という内訳で、大型品の破損例が多い。石器石材は蛇紋岩2（第115図157・161）、変質玄武岩2（同159・160）、変はんれい岩（同158）である。159は刃部が潰れ、161は刃部に線状痕が直交する。157は破損後転用され、敲打具・砥石として使用されたようである。敲打具としての転用は上下両端に残されているが、両端とも平滑で、単なる敲打

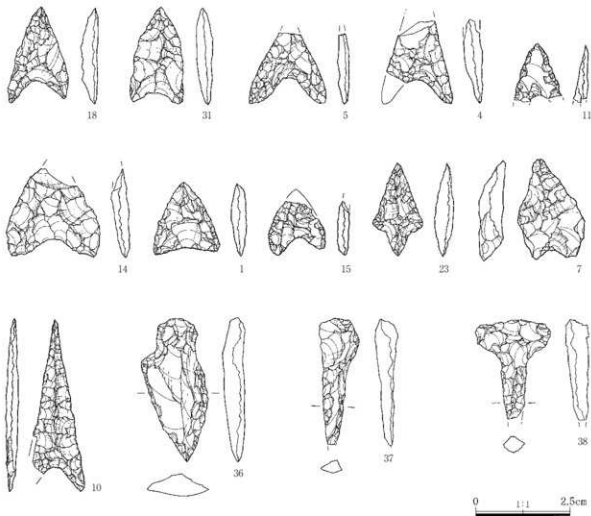
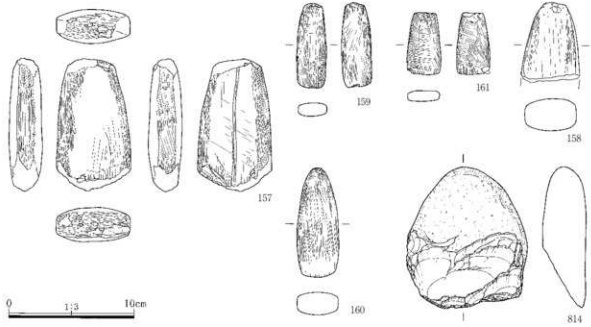
IV 検出された遺構と遺物



第114図 包含層出土の石器(1)



4. 包含層出土の遺物



第115図 包含層出土の石器(2)

#### IV 検出された遺構と遺物

というより敲打したのち研磨具として機能したということだろう。砥石としての転用は腹面側中央の溝として痕跡を残している。

##### 礫器 (第115図814)

2点中1点を図示した。814は、偏平礫の一端を打ち欠き、エッジを加工しただけのものである。エッジは磨耗して丸味を帯びている。ホルンフェルス製。

##### 石鏃 (第115図)

35点が出土した。正三角形形状を呈する石鏃と、二等辺三角形形状を呈する石鏃の両者がある。いずれも平基・凹基・有基の別があり、それぞれ4点・24点・3点・不明4点が出土している。完成品・未成品という範疇で石鏃を分類した結果、完成状態18・未成品17という内訳で、両者は拮抗することが判明、石鏃については遺跡内で製作した可能性が高い石器と捉えた。完成品・未成品の別は、その対称性と薄さ、面構成に基準があり、非対称で厚手の石鏃を便宜的に未成品と判断した。非在地石材を用いる石鏃については、交易等による入手も想定可能だが、本遺跡では黒曜石 (第115図7) についても遺跡内製作しているようで、黒色頁岩製の石鏃 (同10) が逸品で、これに該当するかもしれない。石材構成は、チャート31・黒色安山岩2・珪質頁岩1・黒曜石1であり、在地のチャートが圧倒している。

##### 石匙 (第115図36)

1点のみ出土した。幅広剥片を用いた縦型の石匙で、加工は周辺部分に限られ、刃部の作出は粗い。これも遺跡内製作の石器のひとつであろう。

##### 石錐 (第115図37・38)

2点が出土した。2点とも断面三角形形状の機能部作出を意図した典型的な石錐だが、稜線が新鮮であり、これもまた遺跡内製作の石器と理解した。第115図38は先端を欠いている。チャート製。

##### 削器 (第116図566・567)

5点が出土した。石材は黒色頁岩3・黒色安山岩1・チャート1という内訳であり、在地石材の占める比率は低い。第116図566は、黒色安山岩製の削器である。縦長剥片の側縁を加工したもので、その加工状態は丁寧で、旧石器的である。同567は、厚手の幅広剥片を用いたものである。背面側上端に稜面が回り込み、偏平な河床礫を大割、剥片の上下両端を打ち欠いて形状を整えた後に、薄い側縁に直線的刃部としたものと理解している。

通常、削器等の加工工具は在地石材であることが多い。渡良瀬流域の遺跡では、通常ならホルンフェルスやチャートということになるはずであるが、県央石材を用いる点で特徴的である。黒色頁岩に代わる石材は流域では頁岩ということになるが、意図的か単なるエピソードか、現状では判断できない。

##### 石錘 (第116図)

3点が出土した。石材は珪質頁岩2・黒頁という内訳である。3点とも薄く偏平な河床礫を用いている石錘は3点のみ出土しただけだが、その存在を確認した意義は大きい。漁労具としての用途が明らかであり、縄文期漁労の実態解明に貴重な資料を提供することになる。

第116図505・506は、上下・左右両端の中央を粗く打ち欠いただけのものである。長さ7cm前後・重さ32~64gを測る。同507は、礫片の一端に切れ目を入れている。

##### 凹石 (第117~119図)

120点が出土した。石器石材は、粗粒輝石安山岩117・溶結凝灰岩2・角閃石安山岩1という内訳である。石材の選択性は明らかであり、多分に石皿とセットで使われたということによる。粉砕具としての機能は適

度に目の粗い石材が好まれたはずで、その条件に合う石材が粗粒輝石安山岩ということである。溶結凝灰岩も類似石材として使われてよさそうであるが、不思議と使われていない。縄文人の嗜好性というべきものであろう。凹石は手持ち石器の典型で、敲く・潰す・磨る機能を備えた道具である。主に石皿とセットでドングリ等を製粉したとされ、使用者の体力に応じて選択的に採取されている可能性が高い。以下、属性別に凹石を概観していく。

形態的には楕円タイプが圧倒的多数を占める。91点(75.8%)が楕円タイプのそれで、円礫より偏平礫が選択されたようである。その他のタイプは円礫タイプが10%、不定形が5%程度存在した。いわゆる石鋸型の凹石は9点が出土している。サイズの長さは長さ10.8cm・幅8.4cm・重さ560gが平均値だが、タイプ別に大きな差は見られない。許容範囲で示せば、長さ9～14cm・幅7～10cm・500～800gが選択範囲ということができる。

窪み穴1～2が通例だが、3ヶ所を越えるものも9例ほどあり、長さ10～15cmを測る大型例が多い。磨耗痕は表面側103点(85.8%)・裏面側106点(88.3%)・側面9点(7.5%)に、打痕は小口部に52点(43.3%)・側面に47点(39.1%)に存在、複合的な使用が明らかであった。窪み穴はロート状を呈するものとアバタ状を呈するものからなる。窪み穴の位置は楕円タイプのもの(第117図167・272ほか)は長軸中央よりやや外れて、円礫タイプのもの(第118図206・208ほか)は中央部に見られることが多い。

第118図273・275は打痕や磨耗痕があることから凹石としたものであるが、275は2.66kgと著しく重く、可能性として1穴の多孔石とすべきものかもしれない。

#### 磨石(第119図)

124点が出土した。礫サイズは長さ8～12cm(平均値は10.2cm)・幅7～10cm(平均値は8.3)・重さ575gを測る。楕円礫を用いるものが多く、70.7%を占める。礫サイズ・礫重量とも、概ね、凹石のそれと遜色がないものと考えてよい。表裏両面の磨耗は当然だが、礫の小口部(27点、21.9%)や側面(18点、14.6%)にも及んでいた。1kgを越える大型例10点があり、磨石としてやや重過ぎる感がないわけではないが、磨耗痕は明らかである。

第119図352・368・397は、側面に打痕と磨耗痕が並存するタイプで、これが過度に進んだ石鋸型に近い例(PL76)もある。同471・472は、側面中央に打痕が集中したタイプである。凹石と磨石は同系列の敲く・潰す・磨る機能が複合した石器だが、471・472は磨耗面を切り打痕が生じているようにも見え、転用石器とすべきかもしれない。同306は、楕円球形タイプのそれである。磨耗面を有することにより磨石としたのであるが、礫重量が2kgを越え、分類が妥当か疑問である。被熱品が13点と多く、破損率(31点)も高い。石材は粗粒輝石安山岩。

## IV 検出された遺構と遺物

第3表 凹石(包含層)属性一覧(1)

整理No	凹穴			磨面			打痕	
	表	裏	側	表	裏	側	小口	側面
162	0	1	○	○	-	○	-	-
163	0	2	○	○	-	-	-	-
164	(1)+1	(1)	○	○	-	-	-	-
165	(1)	(1)	○	○	?	?	?	?
166	1	2	○	○	○	-	-	-
167	(2)	(2)	○	○	○	-	-	-
168	(2)	(2)	○	○	○	○	○	○
169	0	2	○	○	○	○	?	?
170	(1)	(1)	○	○	-	○	?	?
171	(1)	(1)	○	○	-	○	○	○
172	2	2	○	○	-	-	-	-
173	2	0	○	○	-	○	-	-
174	(1)+1	(1)+1	○	○	-	○	○	○
175	2	2	○	○	-	-	-	-
176	(1)	(1)	○	○	○	-	-	-
177	(1)+1	1	?	-	-	-	-	-
178	2	2	○	○	○	○	○	○
179	1	2	○	○	○	○	○	○
180	0	1	○	○	-	-	-	-
181	2	1	○	○	○	-	-	-
182	2	1	○	○	-	○	○	○
183	1	1	○	○	-	○	○	○
184	(2)	(2)	○	○	-	-	-	-
185	3	2	○	○	-	○	-	-
186	2	2	○	○	-	○	○	○
187	0	1	?	○	-	?	-	-
188	2	2	?	○	-	-	?	-
189	3	4	○	○	-	○	○	○
190	(2)	(2)	○	○	-	-	-	-
191	4	(1)+1	○	○	-	○	○	○
192	0	1	○	○	-	-	?	-
193	2	2	○	○	-	?	?	-
194	?	?	○	○	-	-	-	-
196	(2)	0	?	○	-	?	?	-
197	(1)	(2)	○	○	-	-	-	-
198	0	3	?	?	-	○	○	○
199	2?	0?	○	○	-	○	○	○
200	2?	1	○	○	-	?	○	○
203	1	1	○	○	-	?	-	-
204	(1)	(1)	○	○	-	-	-	○
205	1	0	○	○	-	-	-	○
206	(2)	(2)	○	○	-	○	○	○
207	1	1	○	○	-	-	-	-
208	(2)	(2)	○	○	○	-	-	?
209	1	1	○	○	-	-	-	○
210	0?	1	-	○	-	-	-	-
211	1	2	○	○	-	○	-	-
212	2	2	○	○	-	○	○	○
213	1	1	○	○	-	-	-	-
214	1	0	○	○	-	?	?	-
215	(2)	(1)+1	○	○	-	○	○	○
216	(2)	(1)	○	○	-	○	-	-
217	(1)	(1)	○	○	-	○	-	-
218	1	1	?	?	-	○	○	○
219	(2)+1	(1)	○	○	-	-	-	○

整理No	凹穴			磨面			打痕	
	表	裏	側	表	裏	側	小口	側面
220	(1)	(1)	○	○	?	-	-	?
221	(1)	(1)+1	○	○	-	○	-	?
222	0	1	○	○	-	○	-	-
223	1	0	○	○	-	○	-	-
224	1	(1)+1	○	○	-	○	-	-
225	?	1	○	○	-	○	-	○
226	(1)	(2)	○	○	-	-	-	-
227	(1)	1	○	○	-	○	-	○
228	1	1	○	○	-	-	-	-
229	0	1	○	○	-	-	?	?
230	(1)	(2)	○	○	-	?	?	○
231	(1)	1	?	?	-	-	-	○
232	1	2	○	○	-	○	-	○
233	2	2	○	○	-	-	-	?
235	1	1?	○	○	?	?	?	?
236	1	1	○	○	-	-	-	-
237	1	2	○	○	-	-	-	-
238	1	0	○	○	-	○	-	○
239	1	1	○	○	-	○	-	○
240	2	1	○	○	-	○	-	○
242	2	2	○	○	-	○	-	○
243	2	2	○	○	-	○	-	○
244	2	2	○	○	-	-	-	○
245	1	0	○	○	-	-	-	-
247	2	1	○	○	-	-	-	-
248	1	2	○	○	-	○	-	○
249	1	1	○	○	-	-	-	-
250	2	2	○	○	-	○	-	○
251	1	0	○	○	-	-	-	○
252	1	1	○	○	-	-	-	○
253	1	3	○	○	-	-	-	-
254	1	0	○	○	-	○	-	-
255	2	2	○	○	-	○	-	○
256	3	2	○	○	-	○	-	○
257	2	0	○	○	-	○	-	○
258	1	2	○	○	-	-	-	-
259	1	2	○	○	?	?	?	?
260	2	2	○	○	-	○	-	○
261	3	2	○	○	-	-	-	-
262	2	1	○	○	-	-	-	○
263	1?	0	○	○	-	○	-	○
264	3	2	○	○	-	○	-	○
265	2	1	○	○	○	-	-	○
266	2	1?	○	○	-	○	-	○
267	2	2	○	○	-	○	-	○
268	2	0	○	○	-	-	-	-
269	2	1	?	?	?	?	?	○
270	1	0	○	-	-	-	-	-
271	1	0	○	○	○	○	○	○
272	4	2	○	○	○	○	○	○
273	1	0	○	○	-	○	-	○
274	1	0	○	○	-	-	-	-
275	1	0	○	○	-	-	-	-
276	1	0	○	?	-	○	-	?
277	1	1	○	○	?	?	?	?

第3表 凹石(包含層)属性一覧(2)

整理No	凹穴			磨面			打痕	
	表	裏	側	表	裏	側	小口	側面
278	1	1	?	?	?	?	?	?
279	1	1	○	○	-	-	-	-
280	1	0	○	○	-	-	-	-
281	2	0	?	○	○	-	-	-
282	3	0	?	○	○	-	?	?

凹石(包含層)

整理No	凹穴			磨面			打痕	
	表	裏	側	表	裏	側	小口	側面
283	1	0	-	-	-	-	-	-
284	1	0	-	○	-	-	-	-
285	2	1	○	○	-	-	○	-
286	2	2	○	○	-	-	-	○
287	1	0	?	○	-	-	-	-

第4表 磨石(包含層)属性一覧(1)

整理No	磨面			打痕	
	表	裏	側	小口	側面
包-195	○	○	-	-	-
包-201	○	○	-	-	-
包-288	○	○	-	-	-
包-289	○	○	-	-	○
包-290	○	○	-	-	-
包-291	○	○	-	?	?
包-292	○	○	-	-	-
包-293	○	○	-	-	-
包-294	○	○	-	-	-
包-295	○	○	-	-	-
包-296	○	○	-	-	-
包-297	○	○	-	-	-
包-298	○	○	-	○	-
包-299	○	○	-	○	○
包-300	○	?	-	-	-
包-301	○	○	-	-	○
包-302	?	?	-	-	-
包-303	○	○	-	-	-
包-304	○	-	-	-	○
包-305	○	-	-	-	-
包-306	○	○	-	-	-
包-307	○	○	-	-	-
包-308	○	○	-	○	-
包-309	○	?	-	-	-
包-310	○	○	-	-	-
包-311	○	○	-	○	-
包-312	○	○	-	-	-
包-313	○	○	-	-	-
包-314	○	○	-	-	○
包-315	○	○	-	○	○
包-316	○	○	-	-	-
包-317	○	○	-	-	-
包-318	○	○	○	-	-
包-319	○	○	-	-	-
包-320	○	○	-	-	-
包-321	○	○	-	-	-
包-322	○	○	-	-	-
包-323	○	○	-	-	-
包-324	○	○	-	-	-
包-325	○	○	○	-	-
包-326	○	○	-	-	-
包-327	○	○	-	-	-

磨石(包含層)

整理No	磨面			打痕	
	表	裏	側	小口	側面
包-328	○	○	-	-	-
包-329	○	○	○	-	-
包-330	○	○	-	-	-
包-331	○	○	-	○	-
包-333	○	○	-	-	-
包-335	○	○	-	-	-
包-336	○	?	-	-	-
包-337	○	○	-	○	-
包-339	○	○	-	-	-
包-340	-	-	-	-	-
包-341	○	?	-	-	-
包-343	○	○	-	○	-
包-344	○	○	-	-	-
包-345	○	○	-	-	○
包-346	○	○	-	-	-
包-347	○	○	-	-	-
包-348	○	○	-	○	-
包-349	○	○	-	○	-
包-350	○	○	-	-	-
包-351	○	○	-	○	-
包-352	○	○	-	-	-
包-353	○	-	-	-	-
包-354	○	○	-	-	○
包-355	○	?	-	-	-
包-356	○	○	-	○	-
包-357	○	○	-	-	-
包-358	○	○	-	-	-
包-359	○	○	-	-	-
包-360	○	○	-	-	-
包-361	○	○	-	-	-
包-362	○	○	-	-	○
包-363	○	○	-	○	-
包-364	○	○	-	-	-
包-365	○	○	-	○	-
包-366	○	○	-	-	-
包-367	○	○	-	-	-
包-368	○	○	-	○	○
包-369	○	○	-	○	-
包-371	○	-	-	-	○
包-372	○	○	-	○	-
包-376	○	○	-	-	○
包-376	○	○	-	-	○

## IV 検出された遺構と遺物

第4表 磨石(包含層)属性一覧(2)

磨石(包含層)

整理No	磨面			打痕	
	表	裏	側	小口	側面
包-377	○	-	-	-	-
包-378	○	○	-	○	○
包-379	○	-	-	-	-
包-380	○	○	-	-	-
包-381	-	○	-	?	-
包-382	○	○	-	○	○
包-383	-	○	-	-	-
包-384	○	○	-	○	-
包-385	○	○	-	-	-
包-386	○	○	-	-	-
包-387	○	○	-	-	-
包-388	○	○	-	-	-
包-389	○	○	-	-	-
包-391	○	○	-	○?	-
包-392	○	○	-	-	-
包-393	○	○	-	-	-
包-394	○	○	-	-	-
包-395	○	○	-	-	-
包-396	○	○	-	-	○

磨石(包含層)

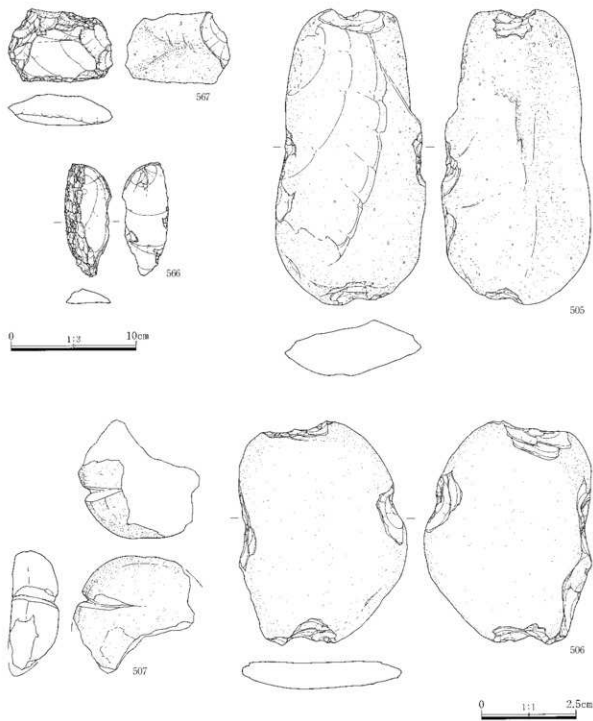
整理No	磨面			打痕	
	表	裏	側	小口	側面
包-397	○	○	-	-	○
包-398	○	○	-	-	-
包-399	○	○	-	-	-
包-400	○	○	-	-	-
包-401	○	○	-	-	-
包-402	○	○	-	-	-
包-403	○	○	-	○	-
包-404	○	○	-	-	-
包-405	○	○	-	-	-
包-406	○	○	-	-	-
包-407	○	○	-	-	-
包-408	○	-	-	-	-
包-409	○	○	-	-	-
包-410	○	-	-	-	-
包-411	○	-	-	-	-
包-817	○	○	-	○	○
包-818	?	?	-	-	-

## 敲石(第120図)

44点が出土した。棒状礫や楕円礫を用いるものが圧倒的だが、石核転用敲石や分割礫、礫片を用いたものも少量出土している。石材は粗粒輝石安山岩とホルンフェルスが各17点と多く、2石材で77.3%を占める。その他の石材としては、溶結凝灰岩4・珪質頁岩2・砂岩2・頁岩1・チャート1がある。礫重量は100～199g 7点、200～299g 7点、300～399g 5点、400～499g 5点・500～599g 9点、600～699g 4点、700～799g 3点、800～899g 1点、1kg以上2点という構成で、多様である。この多様性は、敲石が旧石器とは異なり剥片系石器のみ対応するのではなく、礫石器類の製作その他に使われていたということを暗示するかもしれない。

第120図446～448は棒状礫タイプ、同482は分割礫を用いたタイプ、同464は礫片を用いたタイプ、同451は角柱状タイプ、同479・480は石核転用タイプの敲石である。敲石は小口部や側縁を機能させ、通常の石器製作では、原石の分割・荒削り・形状作出等の各作業工程に対応する大中小の敲石を用意した可能性が高い。旧石器的な石器製作が典型的なそれである。図示した敲石は分割礫や礫片・石核など、エッジを作り出し、そのエッジを機能させようとしたもので、通常の石器製作用敲石とは異なる可能性があるものであり、後述する石皿等の製作に係わるものとして理解している。

4. 包含層出土の遺物

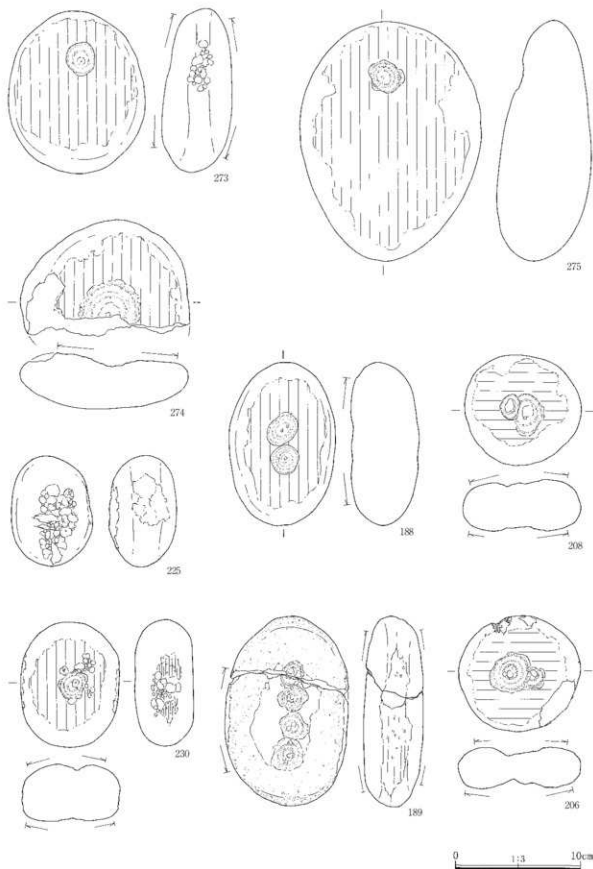


第116図 包含層出土の石器(3)



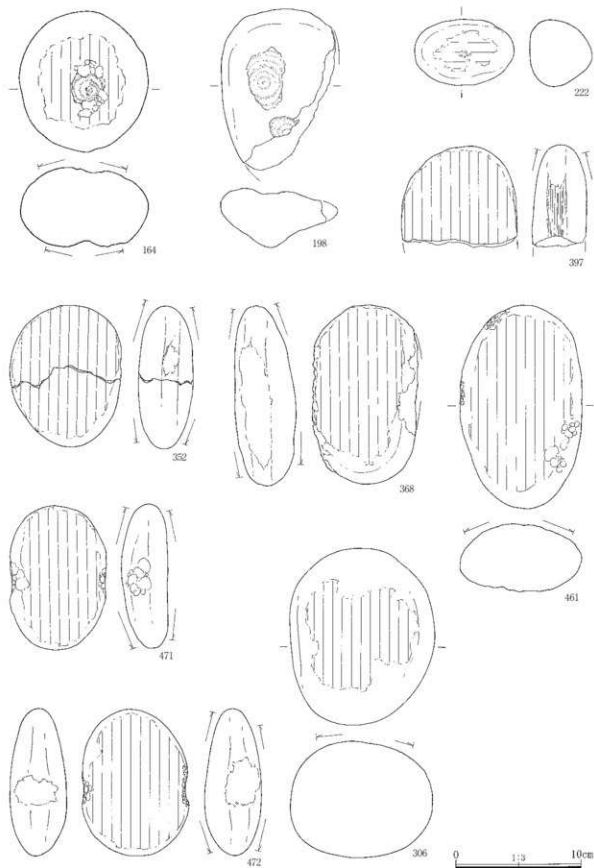


4. 包含層出土の遺物



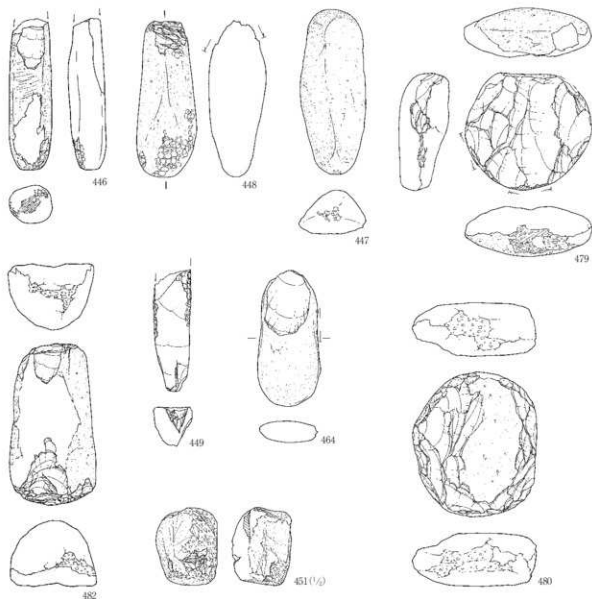
第118図 包含層出土の石器(5)

IV 検出された遺構と遺物



第119図 包含層出土の石器(6)

4. 包含層出土の遺物



第120図 包含層出土の石器(7)

## 石皿（第121・122図）

32点が出土した。32例中24例（80%、ミニチュア型の石皿を除く）が破損しており、大部分が意図的に壊され、廃棄されたものと見られる。石材は粗粒輝石安山岩に限られる。

第121図433は、長さ15.2cm・幅10.3cmを測る。サイズのミニチュア型の石皿であることは明らかである。凹み部は長軸11cm・短軸7cmを測り、中央部付近（中心から長軸7cm・短軸4cmの範囲）は敲打により荒れており、凹み部の周辺部が平滑であるのと対照的である。この敲打痕は使用痕として捉えることも可能だが、敲打痕は新鮮で、周辺部の平滑面に比べ時間差があるように見える。古代住居覆土から出土していることを考慮すべきかもしれない。418・419・431・443は、中央付近から破損したミニチュア型の石皿である。418は凹み部を除いて、敲打痕が器面を被う。419・443は凹み部が良く摩滅しており、意図的に平滑な凹み部を作出している。419は裏面側中央にアバタ状の打痕が集中した凹み部が、443はロート状の凹み部がある。431は上半部を欠いた石皿で、掻き出し部が残る。420は、同じく中央付近から破損した石皿。他のミニチュア型の石皿に比べて、凹み部は小さく深い。凹み部の上にアバタ状の打痕が集中する。凹み部は平滑で、裏面は磨耗している。432は、分類が妥当か疑問だが、サイズの同種タイプの石皿と見た。凹み部の磨耗は弱い。

第122図には、実用サイズの石皿を図示した。423は、箱型の石皿。裏面側にロート状の窪み穴3がある。425は、楕円形状を呈する石皿。有縁の石皿としては縁が低く、「挽き零れ」防止の縁として充分な機能は期待できない。機能部は周辺が低く、中央が盛り上がるタイプで、石皿使用の初期状態を示しており、機能部の磨耗が中央付近のみであることがそれを支持している。被熱により破損、裏面にススが付着している。422は、使用期間の短い縁の低い石皿。機能部は著しく磨耗しており、この磨耗を切り込んで孔を穿つ。裏面側には多数の孔が穿たれている。429は、厚い楕円磗を用いたもの。石皿の凹み部としては小さく、意図的に窪めたのか判断は難しいが、このような磗形状は転石としては考え難く、また、磨耗も激しいことから石皿に分類した。磨石サイズの磗磗を用いた片口の同種石器（377、PL77）がある。被熱してひび割れている。

## 台石（第123図）

18点が出土した。片側に磨耗痕や打痕のあるものを台石として認定した。比較的大型の楕円磗を用いる例が圧倒的で、薄い偏平磗を用いるもの（488・491）と、片側が平坦で片側が賑らむや安定感に欠けるもの（493）がある。安定感の欠ける後者の台石についても設置する場所が柔らかければ、機能的に問題ないだろう。最大8kg程度の磗を用いるようだが、平均的な台石は1～3kg程度の河床磗（平均重量2078g）を多用するようである。18点とも粗粒輝石安山岩を用いる。

## 多孔石（第123～125図）

44点が出土している。1kg毎の見えた多孔石の比率は、2000～2999gが9例、4000～4999gが7例と、5000g以下にピークがあるようだが、これを越える重量の多孔石も多く、最大重量は14.3kg（平均重量は4070g）を測る。多孔石は複数の孔からなる「多孔石」と「1穴の多孔石」がある。石器石材は粗粒輝石安山岩が圧倒（44点中37点）しており、他の石材の利用頻度は低い。

第123図508・513・527・537、第124図509は、「1穴の多孔石」である。孔は磗の中央部にあるもの（508・509）と、上端側にあるもの（513・527・537）がある。窪み穴はロート状を呈し、穿孔は意図的だろう。この種のタイプには偏平磗も多用されるようであるが、「丸石」様の磗も多く、加えて石材も粗粒輝石安山岩だが、磨石や凹石に多いザラザラした多孔質のそれではなく、目の細かい平滑な丸石を用いる点が特徴的である。第124図546・547は角磗（金山石）を用いたものを、124図534、125図514・539は表裏両面に多数の孔があるものを図示した。

## 石製品 (第125～129図)

石棒3・軽石製石製品2・石冠状石製品1、その他の石製品7が出土した。石棒3点(第129図555～557)は557が大型の部類に入る集団のシンボル石棒、残る2点が片岩製未製品である。軽石製石製品2点(第129図558・563)は楕円形状を呈するそれである。同系の石器だが、558が中央に孔がある点が異なる。石冠状の石製品は、中央下部に緩い「挟り」を入れたものである。敲打のみで仕上げしており、底面は傾く。

第125～129図には、不明石製品を图示した。いずれも河床礫の周辺部に敲打を加える点特徴的であるが、敲打によりU字状の中高部を作り出したもの(第128図560)もあり、単なる石皿の未製品というわけにはいかなであろう。これについては別項で詳述する予定で、以下には個別石器の概要を記載する。

第125図552は、背面側に孔1・表面側に孔6を穿つ。背面側の礫周縁には敲打痕が全周、中心部は弱く磨耗しているように見える。表面側平坦面には打痕が部分的に見られ、背面側より磨耗しているようにも見える。表裏両面の磨耗認定は感覚的であり、発掘してから整理に至る間の遺物の取り扱い等の問題もあり、どこまで発掘時の姿が残されているか不安だが、移動時に擦れるなど影響の少ない側面等と比較、その磨耗度を検討したところ、側面 → 表面側磨耗面 → 背面側中央付近の順で磨耗が弱まることが判明した。この結果を素直に読めば、背面側中央部は少なくとも礫面そのものではないということになる。表面側の磨耗は背面側を敲打する際に生じたものかもしれない。古代57土坑出土。5980g。

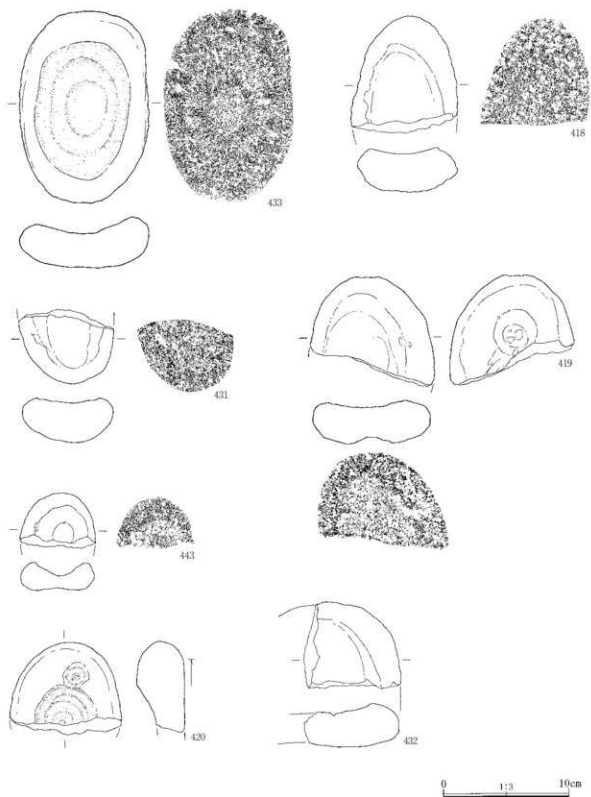
第126図559は、背面側周縁部および中央付近を敲打したものの。出土状態は明らかでないが、グリッド出土の遺物として一括されている。破損品6点が接合したものだが、背面側にススが附着しており、出土状態と考え合わせれば、意図的破壊による可能性は低い。320～810グリッド出土。18040g。同536は、下半部を欠損したものの。背面側周縁部が窪み、中央部が高い形状を有する。周辺部および中央部には部分的に打痕が残る以外は磨耗しており、その差は明らかである。表面側に孔11を有す。古代14溝の出土。5120g。

第127図561は、背面側の礫周縁に敲打による浅い溝が馬蹄形に廻る。下端部は打割られ、直線的である。背面側中央部には打痕が集中しており、その周囲は磨耗しているように見える。表面側にはロート状の孔8があり、打痕が集中している。この打痕は使用により生じたというより、位置的にも設置の際の安定感を確保するためのものである可能性が高い。古代75住居出土。16420g。

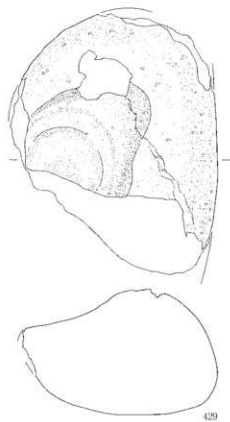
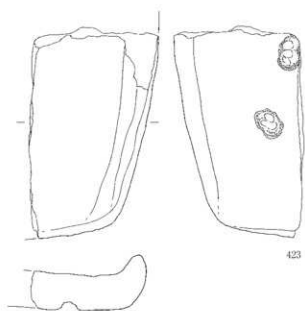
第128図560は、礫周縁・中央部に敲打による浅い溝が廻り、全体として馬蹄形状の中高部が形成されているもの。このほか、敲打は右側面にも及んでおり、ある程度形状を整える意図も感じ取れる。背面側・中高部は礫面が磨耗面が明確ではなく、礫面と見る見解と磨耗面と見る見解に分かれそうだが、印象としては磨耗しているように見える。表面側には孔5があるほか、打痕がある。断面形状は略楕円とされているものだが、その接地率は低く、安定性にかける。表面側下端の孔周縁は平滑であり、磨耗(拓本の濃い部分)しているように見える。古代219土坑出土。17380g。

第129図524は、礫周縁に浅い打痕が溝状に廻る。背面側は凸状に脹らみ、孔6を穿つ。下端側の最も大きな孔の周辺には発掘後のスレで覆われているが、その周辺は弱い磨耗面が広がる。これについては単なる礫面という見方もあり、微妙である。表面側を破損して、礫形状は不明とせざるを得ないが、残存状況からみて相当に厚い河床礫であり、これを石皿の素材とするには無理があるように思う。古代5集石出土。2740g。

IV 検出された遺構と遺物



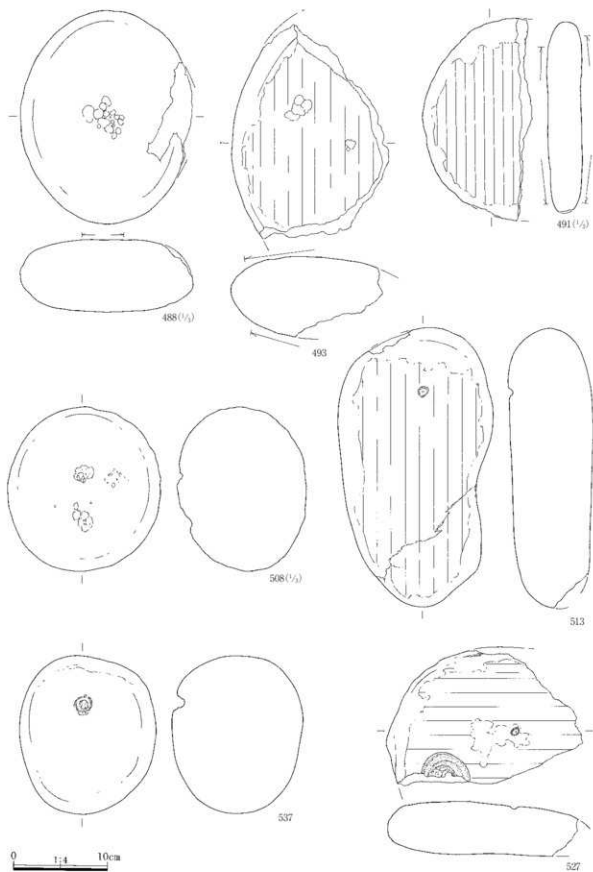
第121図 包含層出土の石器(8)



0 1/4 10cm

第122図 包含層出土の石器(9)

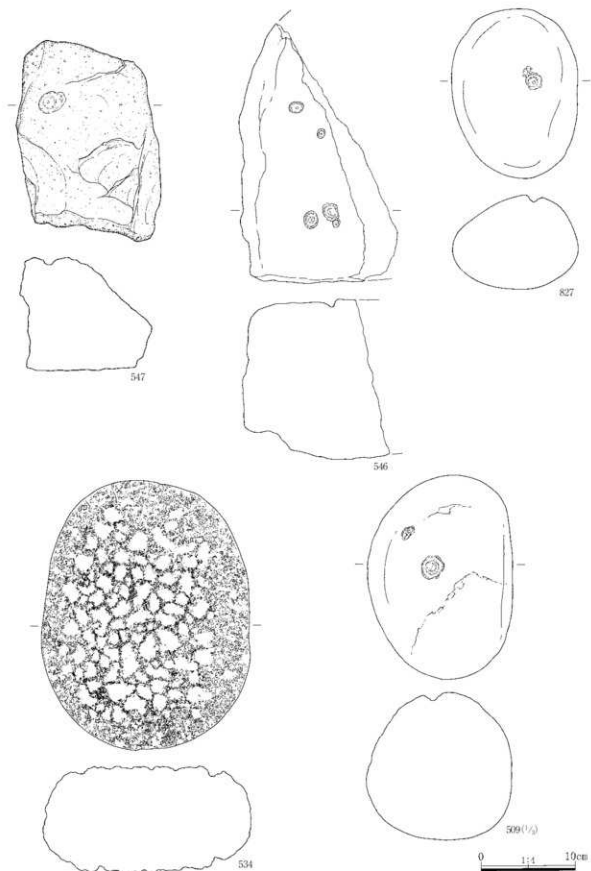
IV 検出された遺構と遺物



第123図 包含層出土の石器(10)

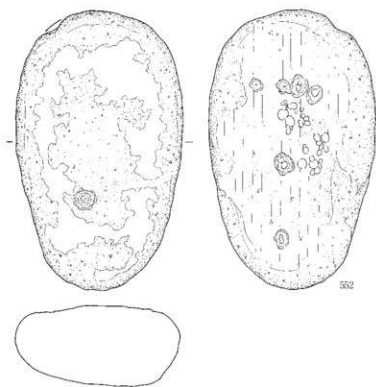
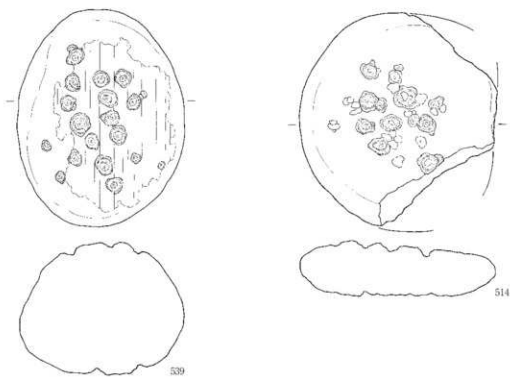


4. 包含層出土の遺物

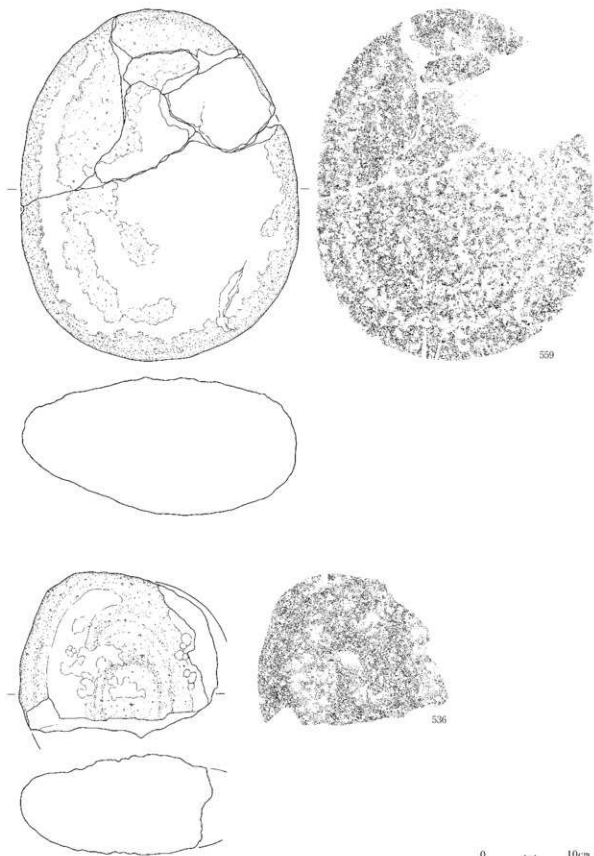


第124図 包含層出土の石器(11)

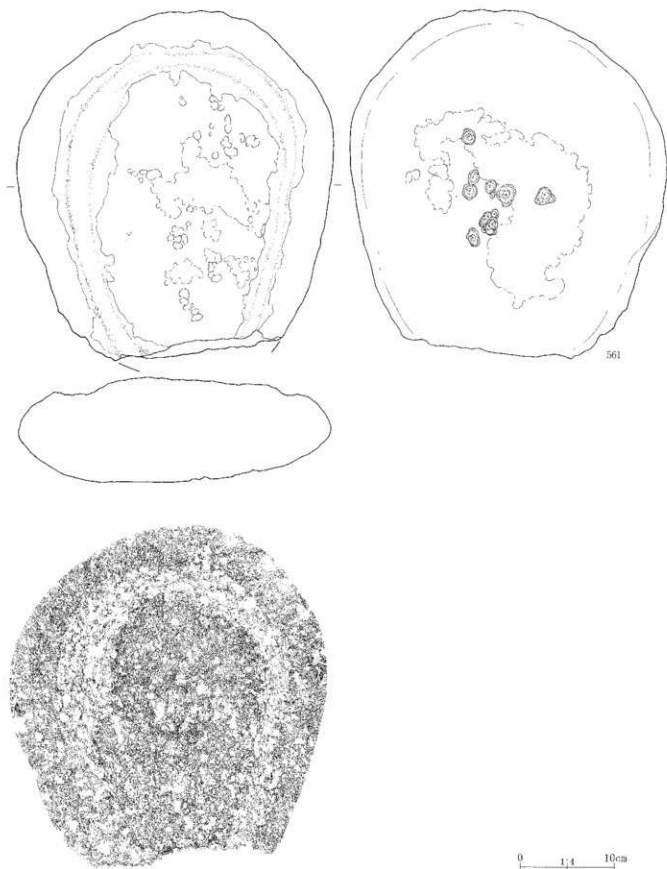
IV 検出された遺構と遺物



第125図 包含層出土の石器(12)

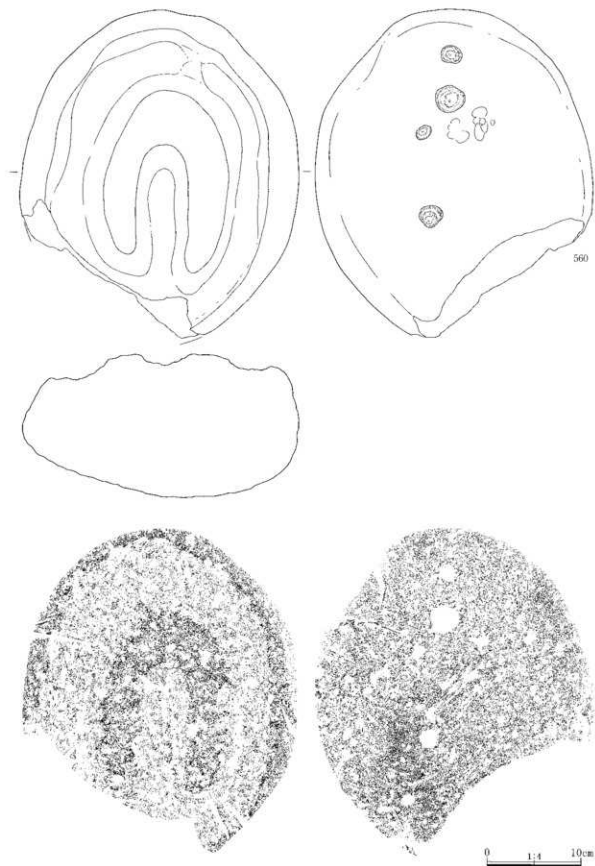


第126図 包含層出土の石器(13)



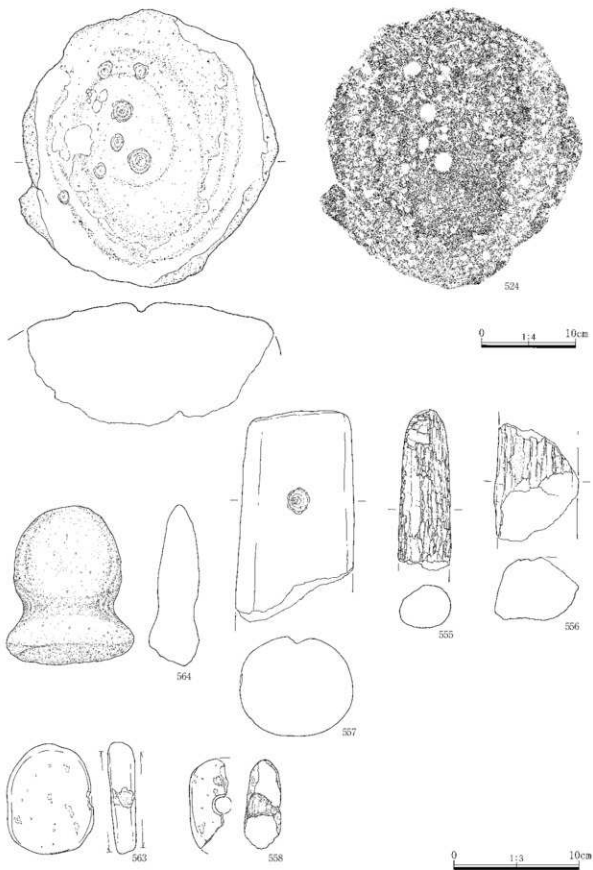
561

第127図 包含層出土の石器(14)



第128図 包含層出土の石器(15)

IV 検出された遺構と遺物



第129図 包含層出土の石器(16)

## 石核 (第130図)

81点が出土した。石核は河床礫を直接石核素材とするもの(楕円礫・扁平礫・角柱状の礫)11点、原石を二分するなど分割して用いるもの20点、大型剥片を用いるもの13点、小型石核35、不明2点からなり、概して多様性である。石材はチャート54点、ホルンフェルス21点があり、9割(92%)以上を占めた。赤城山麓等で主体を占める黒色頁岩や黒色安山岩は1~3点と極めて少ない。上記石核の多様性は剥離過程で生じた大型剥片を石核とすること、より大型の石核は分割するなどして石核とすることを反映したものであろう。剥片生産は剥離の度に適当な作業面を見出して剥離を進めたようで、便宜的剥離の典型とすることができる。

第130図758は、右辺を除く各辺に打面のある石核。石核としては最終段階まで消費が進んだ石核とすることができるが、石核は薄く、石鉄の素材に転用を試みたものかもしれない。同825は、長さ10cm大の扁平礫を石核に用いたものである。右辺・下辺で幅広剥片を剥離、石核消費の初期段階で剥離を放棄している。下辺・右辺には研磨痕が明らかであり、研磨具に器械転用している。剥離場所と研磨の場所が一致しているのは両者が連動する可能性も考えるべきかもしれない。同73は、厚い大型剥片を用いた石核。礫面を大きく残す方では打製石斧というより石核的だが、形状的には打製石斧様である。裏面側の一次剥離面は磨耗が著しく、周辺加工とは剥離の時間差がある。背面側中央および左辺は明らかに磨耗しており、研磨具として理解できよう。同736は、黒曜石製の小型石核。板状石核が破断したようで、素材を吝嗇的に消費している。

## 使用痕ある剥片 (第130図)

8点が出土した。石材構成はチャート5・珪質頁岩1・硬質頁岩1・黒色頁岩1である。剥片類の出土量からするなら、もう少し認定されてしかるべきだが、意外に出土量が少ない。ホルンフェルス製の剥片類が主体であることが影響しているのであろうか。

第130図732は、硬質頁岩製のそれである。打点部が弾け飛んだ幅広剥片端部に連続する小剥離痕が連続する。同731は、珪質頁岩製のそれである。台形状剥片の各辺に微細な使用痕が生じている。

## 加工痕ある剥片 (第131・132図)

158点が出土している。石鉄未成品と見られる小型・両面加工石器16点、両極石核様の小型石器15点、小型石核様石器7点、打製石斧様の加工石器38点、石核様の加工石器12点、加工意図不明の小型加工石器14点、削器様の小型石器9点、加工意図不明の石器41点、その他3点が出土した。石鉄未成品と見られるものは、16点中13点がチャート製で、在地のチャートを用いた石器製作が明らかである。両極石器様小型石器(15点中14点がチャート)も同様で、両極剥離を介在させ石鉄用剥片が剥離されたのであろう。小型石核様の加工石器は石核消費の最終段階で石器としたもので、チャート製のそれが圧倒的に多い。石核様の加工石器も同じ趣旨で加工石器とされたもので、石核の有効利用という延長上で理解すべきである。ホルンフェルス製が圧倒的多数を占める。打製石斧様の加工石器38点はホルンフェルス製が大部分で、本来的には打製石斧の未製品とすべきである。加工意図不明な石器も不要剥片類を素材として、加工したものであろう。

第131図571・575・579・582・584は石鉄様の小型石器。形状からみて石鉄未成品とするのに充分な要素を備えている。同590・592・597は、両極石器様の小型石器。紡錘状の断面形状を呈し、両極剥離法により薄い石鉄用石器に仕上げている。

第132図639・651は、打製石斧様の加工石器。形状から打製石斧未製品として充分な要素を備えている。同632・633・635は、礫を用いた加工石器。635は片刃礫器的な刃部を作出しているように見えるが、刃部側縁等に打痕が残る、敲打具的に使用している可能性が高い。633は極く薄い扁平礫の片側にノッチ状の加工を加えたものである。礫形状とノッチ状の加工状態から、石錘に移行することも可能な属性を有する。

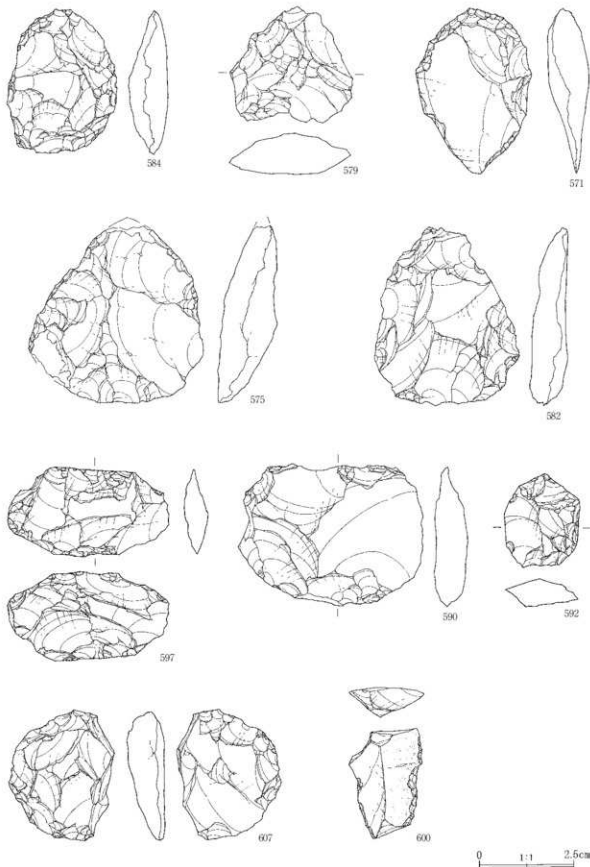
IV 検出された遺構と遺物



第130図 包含層出土の石器(17)

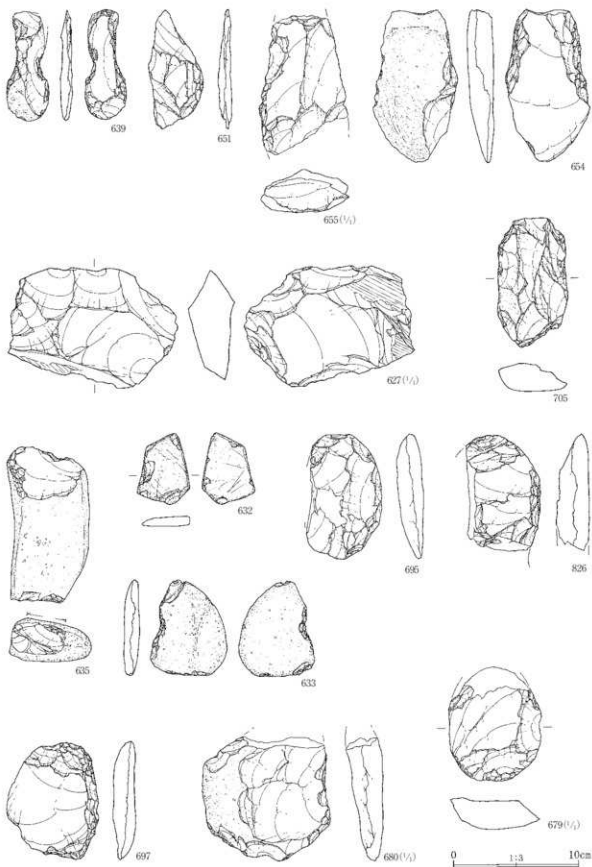


4. 包含層出土の遺物



第131図 包含層出土の石器(18)

IV 検出された遺構と遺物



第132図 包含層出土の石器(19)

## V まとめ

### 1. 河川資源と出土石器

#### 1. はじめに

大道東遺跡は、南北950m・東西250mに広がる大規模遺跡である。東毛域を代表する縄文遺跡のひとつであり、大正期からその存在（山田郡誌を参照）が知られていた。それによると、遺跡は縄文前期から晩期の遺跡とされ、発掘ではこの記載を裏付けるように夥しい量の土器片類が出土、検出遺構も縄文期住居12・土坑93基を数えた。縄文期遺構は古代住居と重複、その残存状態は決して良好とはいえないものであったが、生産具としての土器・石器以外にも、土偶・石棒・石製品・土製品など呪術具としての遺物も多数出土した。こうした質量とも充実した出土遺物の全貌について、それがどれほどのものになるか想像できないが、広範に広がる遺跡の部分的様相であることは確実である。

大道東遺跡から出土した遺物は総重量1.5tを超える土器片類と、石器類は整理番号を付したものでだけで530kg（礫・礫片類は除く）を越えた。土器片類には注口土器3・土偶頭部破片1・土製垂飾1・土製貝輪1・不明土製品2の呪術具があり、精神世界を描く具体的資料となるだろう。同じく、石器類には石棒3・不明軽石製品2・石冠状石製品1・多孔石多数が出土した。このほか、注目されるものとして石皿、及び、その関連遺物があり、それが単なる石皿の未製品か、これとは別の呪術的遺物か、判断に迷う礫石器がある。

遺物は黙して自ら語ろうとしないのであるが、それは豊かな縄文社会を反映したものであるはずで、大道東の出土遺物は、豊饒たる大地の「恵み」に根差したものととして、位置づけられなければならないであろう。ここでは、こうしたことを念頭に出土石器類について整理していきたい。

#### 2. 渡良瀬川の河川資源

まず、最初に縄文期渡良瀬川周辺域に住まいした人々の生活を支えたであろう渡良瀬川について、その石材資源・漁業資源が明らかにされなければならないが、少なくとも現在の渡良瀬川のそれについて知る必要がある。観察地点4ヶ所は、みどり市の相川橋（桐生西高前、写真1）・松原橋・足利市業鹿橋・鹿島橋付近（写真2）である。

##### <観察地点の概要>

a. 流速 相川橋が遺跡から北西8km、松原橋が北西6km、業鹿橋が北方4km、鹿島橋が北東2kmの地点にある。結論的には、流速・構成礫種等の要素は各地点ほぼ同様で大差はないということである。観察時



写真1 相川橋（桐生西高前）



写真2 鹿島橋

## V まとめ

期は11月で水位が低下している時期だが、どの地点も流速の早い「瀬」と流速の遅い「淀み」がある。河川勾配は鹿島橋付近では弱まり、足利市街で完全に「瀬」が消える。増水期には相当量の水量があり、梅雨時などには1～1.5mほど水位が上昇するようで、その痕跡が川岸に残されている。現在は、上流域のダムの影響で砂利の供給は少ないようであるが、サケ等の産卵に適した河床として、条件的には可とすべきである。

**b. 礫形状** 河床礫については、石皿に適する偏平礫の有無という点を重視した。相川橋から鹿島橋までの地点にも偏平礫は存在、どの地点でも採取は可能であるというのが所見であるが、遺跡に最も近い鹿島橋付近では若干偏平礫の量が減じるようである。楕円礫は長軸を横に向けて堆積、偏平礫は長軸を横に平坦面を上へ堆積する傾向(写真3)があるようで、この傾向が分かれば礫の採集は比較的容易である。鹿島橋付近では偏平礫より楕円礫が多く、また、礫サイズも小ぶりとなり、石皿用の偏平礫ということになると、意外に少ないことが判明した。

各地点の偏平礫には、薄型偏平礫(写真4)と厚型偏平礫(写真5)のあることが判明した。前者は平坦面が広く、石皿の機能部(凹面)を作出するのに加工量が少なく、後者は前者よりやや平坦面が狭く、石皿の機能部を作出するには相当な加工が必要で、素材としては前者が適している。また、偏平礫を仔細に見ると、その平面形は楕円～卵型であり、そのまま石皿用のそれとして通用する礫が多い。石皿の素材としては加工量が少なく、安定感のあることが理想であるが、こうした礫は意外に少ない。河床には上面が平坦だが下面が影らむもの、上下とも影らむものがあり、理想的な形状の偏平礫は少ないというべきであろう。

**c. 石材資源** 渡良瀬川の河床礫については、桜井の報告(1994)がある。それによれば河床では安山岩類と凝灰岩類が70%を占めたという。剥片系石器類の主要石材であるチャートやホルンフェルス等は少なく、その組成率は10%未満で、構成礫としては少量の部類に入る。データの再検証が必要かもしれないが、上記石材2種が主体を占めるという状態は変わらないものと見られ、石皿その他の礫石器類に用いた礫は渡良瀬川の河床礫と見て間違いはない。

**d. 漁業資源** 遺跡の所在する渡良瀬中流域では、現在、地元漁協によりヤマメやイワナが放流され、釣り場として人気があるようであるが、コイやフナ・ハヤ等の地魚も釣れる魚種豊富な河川である。現在、漁協



写真3 長軸を横に並ぶ河床礫



写真4 薄型偏平礫



写真5 厚型偏平礫

ではサケも放流しているようであるが、縄文期にそれがどの程度遡上していたかについては明らかでない。東京湾に流れ込む関東圏の河川がサケ遡上の南限にあるという地理的条件や延喜式等の記載から、古利根川を大量に遡上したとは思われないのであるが、いかがであろうか。近世末期の多摩川や荒川にはサケの遡上は確認されていないようであり、安定遡上したのは鹿島灘以北の河川ということになる。

### 3. 縄文期の渡良瀬川

縄文期の渡良瀬川についての情報は、地質データ以外ほとんどないという状況である。渡良瀬川扇状地を横断する北関東ルートの発掘では渡良瀬田河道の確認が期待されたところであるが、これまでそうした成果は得られていない。基本土層の確認は発掘調査の基本であるという認識が浸透していないためか、まだまだ地質調査としか理解されていない状況にあるということなのであろう。

#### a. 渡良瀬川の変流

渡良瀬川は中部 As - BP 降下前（20000年前）、八王子丘陵の西から東に流路を変えた。流路変更の要因については不明だが、扇状地堆積が進み、より低い所へ流路を変えたというのが常識的理解である。流路変更前の八王子丘陵東には足尾山系を南西に流れる桐生川・小俣川・松田川が合流、南東方向へ流れていたのであろうが、その実態は明らかではない。地質区分図（沢口1996）によれば、丘陵部東には岩宿面相当の古い地形面が記されている。焼山から続く東長岡の台地、及び、その東側に広がる蕪川の台地がそれぞれである。東長岡では As - BP 以前の台地を浸食した台地縁辺、及び、縄文期中期前半より古い浸食谷（図1）を確認している。丘陵付近を南流した流路の存在は確実で、浸食規模からみて旧渡良瀬川の河道である可能性

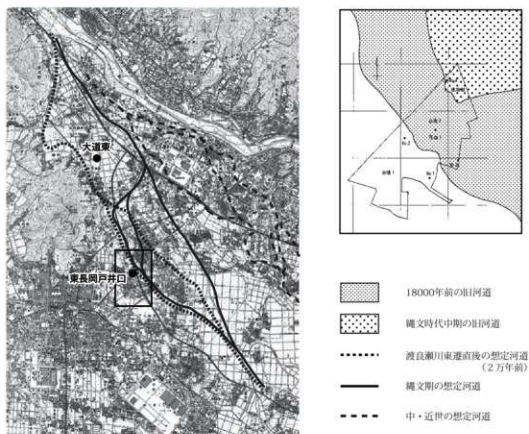


図1 渡良瀬川の変流

## V まとめ

が高い。これに似た現象が北関東自動車道の八ヶ入の東にあり、洪積地を侵食した旧流路が想定できそうである。先の地質区分図によれば、渡良瀬川は徐々に東遷したことが明らかであるが、北関東の遺跡動向（現河道に近い道原遺跡には縄文期遺構がある）を見る限り、縄文期河道は新島・深町遺跡付近から現矢場川筋を想定しておきたい。これについては「周辺遺跡」の項で指摘したとおりである。現在の河道が最も安定したものであるか、これについて確証は得られていない。渡良瀬川は東遷前に大間々扇状地を、東遷後に渡良瀬扇状地を形成しているが、後者の地形発達には複雑であり、これには扇状地堆積と地盤沈下（関東造盆地運動）が関係している可能性が否定できない。具体的には短期間に複数の段丘地形が形成されていること、地形的には現藤川ルートが最も低く安定する流路であること、新島遺跡付近の河床は近世（当事業団職員の指摘）まで辿れる可能性のあることなどで、総合的に考えるなら、気候変動等を契機に上流域の侵食速度が増し扇状地を形成、造盆地運動による沈下が限界に達した段階で段丘が形成されるというシナリオが描けるかもしれない。これについてはこれ以上の推定は避けるべきだが、氾濫を契機に河道が変わるということであろう。

### b. 赤城山麓の浸食時期

赤城山麓では発掘の蓄積が進み、ある程度まで詳細な地形発達（早田2008）が明らかにされている。それによると県内地形発達は同時期に画期があるようで、北関東・伊勢崎インター周辺域（大間々扇状地）では4時期の谷の形成時期があり、時期的に大間々扇状地・段丘面の形成時期に重なるという。この現象について氏の見解は慎重であるが、気候変動が影響しているだろうというのが筆者の個人的理解である。大間々扇状地の最終段丘面は縄文中期の中頃（ $2760 \pm 60$ BP）とされ、先に挙げた太田市東長岡の縄文中期前半（阿玉台期）の台地浸食とは若干時期が異なるようであるが、これをほぼ同時期と見れば、より広範囲に類似する現象が生じていることになるだろう。

### c. 流路

渡良瀬川の旧流路について、通常は「矢場川ルート」が想定されているが、縄文期のそれについては縄文期遺跡の分布、及び、東長岡戸井口の台地浸食（中期前半期）を考え併せ、現藤川ルートを想定、加えて途中分岐して網目状に流れていた可能性を指摘しておきたい。この推定が正しいとすれば、縄文期流路は少なくとも現在より西にあることになり、より近くに多様な資源を抱えていたことになる。丘陵部の資源については、語り得るデータがないので明らかでないが、堅果類等の食料資源に恵まれていたであろうことは確実であり、それは多量の石皿類の出土が暗示している。

## 4. 縄文期・大道東遺跡の石器組成

遺跡を取り巻く周辺環境について、雑駁だが検討してみた。縄文期集落の「道具立て」は対環境という側面から規定されるとすれば、石器組成の把握より評価が重要となる。

大道東の縄文期石器（本文中の第2表を参照されたい）には、石鏃35点（4.3%）・打製石斧117点（14.4%）・磨石類240点（29.6%、凹石を含む）・石皿類48点（5.9%、台石を含む）がある。機能的には、生産具類・製粉具類・敲打具類・呪術系遺物に大別され、狩猟より堅果類等の植物資源を重視する生業形態を示唆した。

以下、これについて製作面から評価、その製作構造を捉えていきたい。

### <生産具類について>

石鏃・打製石斧等、直接生産に係わる石器類については、集落で自ら調達する石器として捉えた。その根拠は未製品類、及び、関連剥片類の多出にあり、未製品率は打製石斧が21.6%、石鏃が50%弱（17/35点）

に達した。これらについて対石材という脈絡で見ると、打製石斧はホルンフェルス、石鏃はチャートを用いることが圧倒的で、渡良瀬流域の縄文期遺跡における典型的な器種：石材関係を示していた。この関係性は石器製作（加工の難易度）や使用に密接に関連しており、時代を超えて継続する関係性である。両石器は在地の石材を使い自前で調達するものとしたが、黒色頁岩・黒色安山岩等の流域以外の石材を用いたそれは、どのように理解できるだろうか。両石材の器種構成は打製石斧や石鏃など定型石器の他、石核や便宜的石器類を含み、特定器種の交換というより石材レベルの交換と捉えるのが実態的だが、両石材とも剥片類を含め1kg以下（黒色頁岩：石器類7点・剥片類650g、黒色安山岩：石器類6点・剥片類439g）であり、交換材としてその比重は低く、戦略的というより集団間関係を反映した持ち帰り等として理解すべきだろう。

このほか、生産具類には石鍾がある。量的には3点と少量だが、その存在意義は大きい。石鍾は漁労具としての性格が明らかであり、生業のひとつとしての河川漁労を示唆するからであり、漁労の具体像が描けるからである。先にも述べたように、渡良瀬川には「瀬」と「淀み」がある。これは上流の典型的様相であり、中流域以下では流速の早い本流と中州を挟んだ流速の遅い支流が通常の様相である。漁法は流速や水深、対象魚種などにより異なり、大東東では石鍾の出土から網漁が想定されるのであろうが、それは「淀み」で展開したのであろう。縄文期には離頭式の銛やヤスがあり、北海道石狩紅葉山49号遺跡の「鮎」に見られるように、縄文期漁法は高度に発達、分化していたことが予想され、こうした状況を踏まえれば、網漁以外の漁も多角的に開発されていたとすべきである。

#### <製粉具類について>

製粉具類として、石皿類48点・磨石類240点が出土した。凹石にはアバタ状の集合打痕やロート状の凹部があり、掌に入るサイズの礫を多用する典型的な手持ち石器として、クルミなどの殻割り・打撃具説などがある。その表裏両面は磨耗していることが多く、サイズの的に磨石と変わらないため、ここでは磨石類に含めた。アバタ状の打痕が磨耗しているものには「敲く」「擦る」等の複合機能で、斜め方向に連続する凹

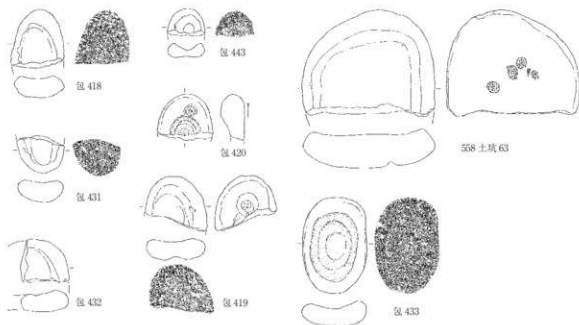


図2 実用型石皿(右)とミニチュアタイプの石皿

## V まとめ

部には石斧の側縁加工で説明できそうであるが、ロート状の凹部については意図的であることは確実だが、詳細については解釈不能であり、回転磨耗する別の目的が明らかにされなければならない。磨石類には磨耗痕のあるものが大部分であるが、磨耗度は低く、ある程度使用した時点で廃棄されたのではないだろうか。

石皿類48点には台石18点を含んでいる。台石には打痕や磨耗痕があり、作業台として理解されているが、緑なし石皿の存在が明らかとなり、機能的重複が気に掛かる。ここでは、広い意味で石皿を認定したことになるのだろうが、あくまでも便宜的なものである。石皿にはミニチュアタイプのものがあり、機能部としての凹面が新鮮な打痕で形成されているものと磨耗しているそれがあり、非実用的なそれとして規定することはできない。実用型の石皿は75%が破損しており、廃棄行為のひとつとして理解されている。石皿32点は有緑石皿で、定型石皿3（うち1点は脚付石皿）を含み、両者とも使用可能な状態の石皿が圧倒的である。

出土資料には、石皿の未製品と見られるものがある。楕円礫の周縁を溝状に敲打するものがそれ（第6図に集成）で、石皿製作時のリード線、設計線のように見える。これについては、個別には石皿の未製品に見えるのであるが、馬蹄形中高部を残す呪術性の強い同種類例があり、属性的に連続する可能性があるため、後述する石製品類の項で詳述する。

### <敲打具類について>

各種形態の敲石が相当する。通常、敲石には楕円礫や棒状礫が使われ、サイズのには大中小の別がある。これは手に持ち易く、工程別に使い分けるといふ使用法の反映である。このような観点から大東道の敲石も採集され使用されたはずであるが、意識的に鋭いエッジを機能部としたものがあり、注意を引いた。具体的

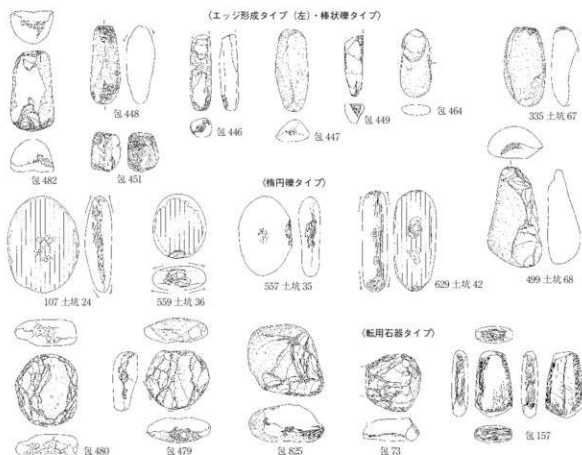


図3 敲打具類の各種



には打製石斧や石枝を転用したものであり、棒状礫の先端を打ち欠きエッジを作出したものである。また、磨石類にも礫の小口や側面に複数の研ぎ面のあるもの、側面で過度に打撃するものなど、広い意味で敲打具として捉えることのできるものが多い。このような敲打具は普遍的に存在するのであろうが、注意されないまま見過がれているというのが現状であろう。敲打具には剥離用のハンマーの他、石皿等の礫石器製作用のハンマーがある。先に述べた敲石用の礫形状や礫サイズの定義は、剥片系石器の製作を念頭に置いたものであり、石皿等を念頭に置いたものでないことは明らかである。通常、石皿等は自ら調達する石器の典型例と見做されるのであるが、その際にもちいる敲打具については判然としないようである。これは、石皿製作跡が発見できていないということと関係がありそうで、典型例が抽出できないからである。集成した敲打具類はエッジを意識的に作出、そのエッジが潰れる例や磨耗する例があり、加えて先端が尖る磨石などもあり、単なる石器製作用ハンマーとするには無理がある。敲打具類に決定的証拠があるわけではないが、ここではそうしたエッジの潰れ・磨耗を重視して石皿等礫石器製作用の敲打具として理解しておきたい。

#### <多孔石>

多孔石については孔の位置や数が多様で形態的把握が困難だが、断面が厚い楕円礫を用いた多孔石（第125図539）や1穴の多孔石（第123図537・527）等には、定型の要素が強い。

前者は表裏両面に隙間なく孔を穿つ点特徴的で、同種多孔石が508土坑から出土している。508土坑の多孔石は、複数の磨石で囲まれるように土坑に埋設され、その出土状況は極めて祭祀の様相を帯びていた。礫石器類の分布は器種レベルでは若干相違も指摘できるようであるが、傾向としては概ね土器の分布範囲に一致する。多孔石も同様であり、特に分布の相違は指摘できない。遺構レベルでは、凹石・磨石・石皿等は住居にも土坑にも出土する傾向が明らかであるが、多孔石については住居から出土するものが少なく、土坑から出土するそれが圧倒的である。明らかに埋設されたものは508土坑以外になく、大半は廃棄状態で出土している。多孔石を出土する土坑は時間的に称名寺2～堀之内1に集中する傾向があるようだが、加曾利E期にもあり、特定の傾向は指摘できない。後者の1穴の多孔石は、丸石に結び付いたものに定型の要素が強い。丸石は土坑や配石等に結び付いた存在であるが、対配石の関係性については、本遺跡では確認できない。

#### <呪術具類について>

土製品・石製品とも多様である。土偶は頭部破片1点が出土しているだけであり、後頭部が張り出し立体的である点で特異だが、目の表現法は縄文期のそれであり、こうした遺物があること自体、集落が安定したものであるという指摘を受けている。こうした脈絡で理解するならば、土製垂飾や土製貝輪も同様に評価することができ、不明土製品（第80図407、558土坑出土）としたそれについても粘土粒を貼り付けるなど、動物を模したようにも見え、呪術性に溢れた縄文期の所産とすることができよう。

この土製品には、端部に孔がある。表面が荒れて孔の機能的役割は明らかでないが、同種類例（1817）が古代住居覆土から出土しており、これが完結するものであることが確定した。類例が辿れず時期不明だが、縄文期のそれと判断したのは整形と胎土が古代のそれとは異なるという消極的理由で、便宜的なものである。これ以外にも先端が尖る土製垂飾が古代住居覆土から出土しており、参考資料として写真（1816）を掲載した。



写真6 呪術具・装身具類

## V まとめ

### 5. 石製品について

石製品としたものは、計12点（遺構出土5点・包含層7点）がある。このうち、2点が軽石製石製品で、1点が石冠状石製品である。残る9点が検討の対象で、楕円礫の周縁部を溝状に敲打する類のものである。先にも述べた通り、石皿の未製品に近い例から馬蹄形中高部を有するものまで多様であり、これらについて同列で捉えるべきか、それとも別の器種として捉えるべきか、以下に検討していきたい。

#### a. 石製品抽出の経緯

まず注意を引いたのが、馬蹄形中高部を有する石製品（560）である。その他の石製品については包含層・住居・土坑と続いた器種分類の過程で、徐々に認識が深まり同系列の石器が増えたという次第である。この認定経過に明らかであるが、石皿等の未製品類は意識的に見なければ認識できないということであり、観察を終えたいま言えることは他の縄文遺跡にも意外に類例があるのではないかということである。石皿や石棒等は生産や交易など社会的な脈絡の中で言及されることが多く成果を上げているが、個別の石器研究は停滞しているというのが実情で、例えば石器をライフサイクルの中に置き換える研究は今後の課題とされているようである。石製品9点については評価が問題となるであろうが、以下に各種属性についてその概要を記載していきたい。

**b. 出土状況** 問題となる石製品（560）は、219土坑に出土した。土坑上面で7世紀代の須恵器壺・土師器鉢が完形で出土、土坑中位で多孔石2・石製品1が出土した。もう少し詳しく言えば、土坑中位の多孔石2点（第124図546・547）の上下には土師器甕の破片が挟み込まれ、その直下に石製品が出土（写真7～9）したということである。意図的埋設が想定されることになるが、実態は明らかではない。土坑のサイズは径0.5m・深さ1.5mを測り、出土状況は祭祀的であるが、サイズ的には柱穴に近い。

出土地点は埋壺と柱穴から推定復元した73号住居のプラン内にあり、土坑の所属時期が懸念されることになるが、上記した通り土師器・須恵器の出土状態から、それ自体は7世紀代の所産と見て間違いないだろう。次に、石製品の時期が問題になるだろうが、これについては先に述べたように、石皿未製品類に相似する打痕が礫の周縁にあり、技術的系譜から縄文期の所産として問題ないものと考えている。

**c. 分布** 参考資料として、礫石器類の分布（図4・5）をグリッド単位で図示した。個別には磨石類が850ライン付近の空白域を挟んで東西に分布するようだが、大筋では磨石類（凹石を含む）・敲打石が全域に、石皿・



写真7 遺物の出土状態1 (219土坑)



写真8 遺物の出土状態2 (219土坑)



写真9 遺物の出土状態3 (219土坑)

1. 河川資源と出土石器

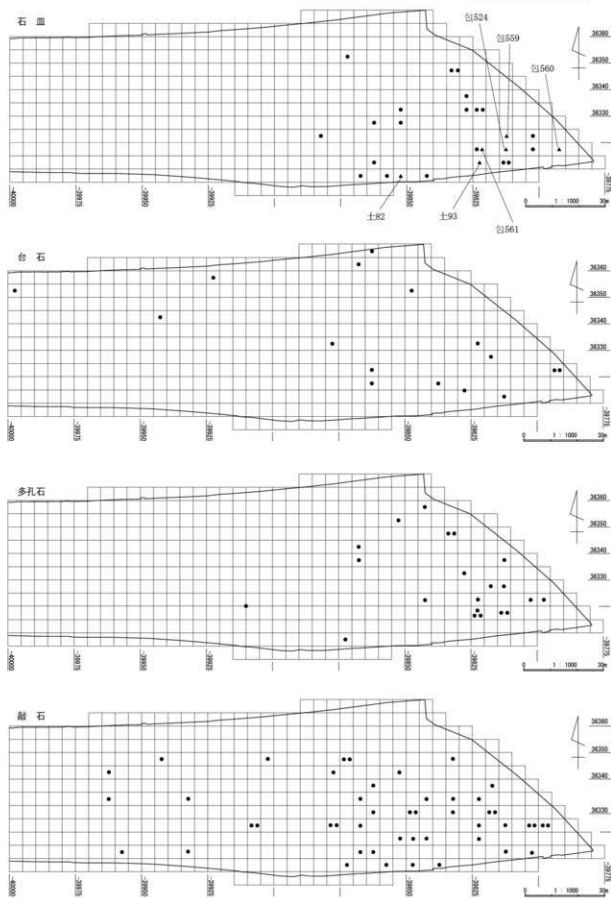


図4 礫石器類の分布1

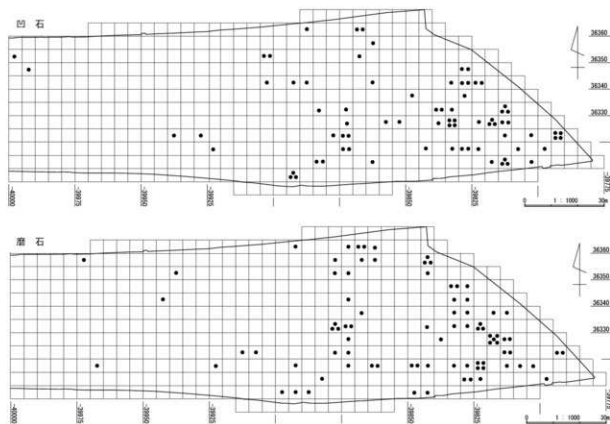


図5 礫石器類の分布2

台石・多孔石が調査区南東に偏在するようである。

これに対して、石製品は調査区南東に偏在する傾向が明らかであり、その分布は調査区南に延びるように見える。遺構に伴う石製品は551住居（柄鏡型住居、称名寺1）の張出部東側の石列中央から出土した1例（第41図14）のみで、他の石製品は包含層から出土、通常は廃棄資料とされるものであるが、出土状況から遺物の性格を考える上で、馬蹄形中高部を有する560の出土位置が重要となるかもしれない。すなわち、560の出土した219土坑は73住居のプラン内にあり、本来的には73住居に帰属したものと考えるのが妥当である。

**d. 表面観察** 560について呪術具として捉える見解と、石皿の未製品と捉える見解がある。前者は馬蹄形中高部のそれを女性器と見る立場であり、また、後者は残る8点の打痕の在り方から石皿の未製品として考え、中高部平坦面を礫面と理解、最終的には大きく打撃して石皿の凹面を作出すとする。

筆者が抱いた最初の印象は、平坦面は磨耗面であるというものであったが、顕微鏡観察による確認の必要性を感じた。PL88がそれである。1～3は中高部平坦面・溝状敲打部、4は裏面側の磨耗面・礫面（1～4は560）、5～8は561・524の溝状敲打部の表面状態を示した。観察倍率等によるのであろうが、これによれば、磨耗面と見た中高部平坦面は礫面より新鮮で、磨耗面とするより整形面（560）とすべきであり、551住居14（本文中41図）については通常の礫面では考え難い形状を呈し、同様に整形面とすべきであるというのが結論である。表面状態を伝える観点から現河床礫（図8）の拓本を掲載したので、本文中図版の石製品類拓本と比較、参照していただきたい。

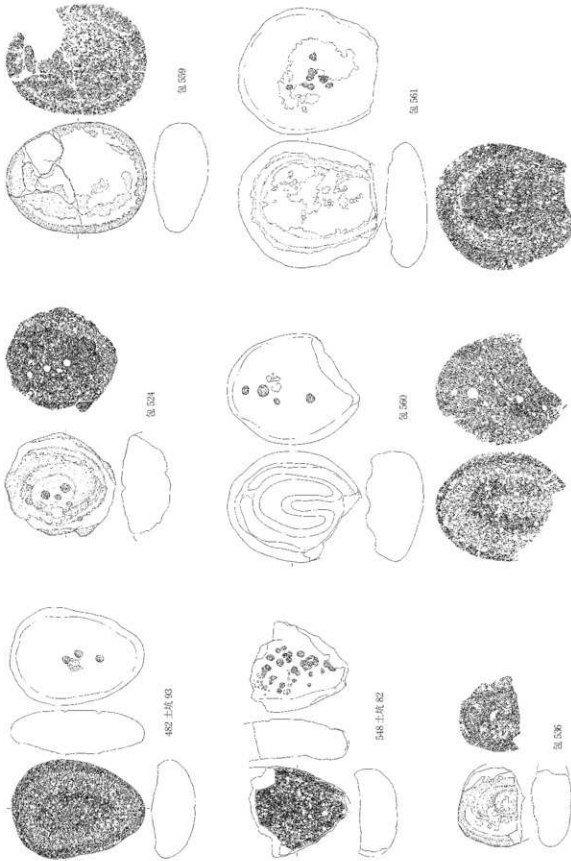


図6 遺構出土石製品(左)と包含層出土の石製品(中・右)

## V まとめ

このほか、礫面の特徴として孔がある。この孔は多孔石のそれであり、石皿の裏面や側面に孔が穿たれるものと同形である。孔の有無を見ると、裏面側には9例中8例（第126図559を除く）に、背面側には9例中5例（551住居・第41図14、548土坑・第77図82、包含層524・552・560）に孔があることが判明した。通常、石皿等の機能部には使用時に孔が穿たれることはなく、最初期の機能を停止後、他の目的に転用あるいは廃棄するため、孔は穿たれたとするのが常識的である。これについての解釈が問題となる。

e. 礫形状 図6に集成した通り、石製品には薄型偏平礫より厚型偏平礫の2タイプがある。薄型偏平礫と呼べるものは9例中1例（561）のみであり、他の8例は厚型偏平礫の部類に入る。渡良瀬の河川資源（2、b礫形状）の項で述べた通り、厚型偏平礫は有効平坦面が少なく、石皿の製作を考えた場合、それだけ加工量が増え、素材として形状的に問題がある。河床に厚型偏平礫だけしかないというなら別だが、薄型のそれがあるというのに、それを選択するのは意味があるという推定が成り立つ。

具体的に、厚型偏平礫と薄型偏平礫から見よう。石製品とした9点中5点で礫形状が判明、幅と断面厚を比較した。それによると、最大0.7～最小0.33、平均0.49（厚/幅）という数字を得た。0.33は薄型偏平礫とした561である。これに対して、石皿でも同様の比較を試みた。石皿は破損率が高く、計測礫は6点と少ない。見た目にも薄型偏平礫とすべきものが多く、計測値は最大0.44～最小0.29、平均0.35となり、厚型偏平礫より平均値で0.14小さいことが判明した。0.14という数字は厚さ1～2cmというところで、物理的に石皿は製作できないというわけではなさそうである。このことを確認するため、原礫の形状が想定可能な石皿（機能

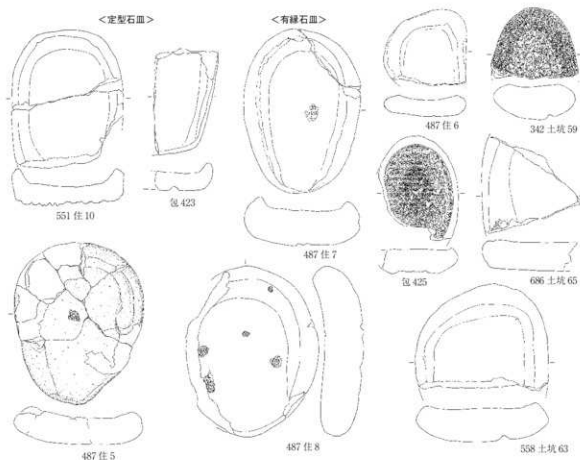


図7 実用型石皿の断面形状

停止状態あるいは廃棄状態)で確認してみた。その結果、石皿は推定礫面(上面)から最大0.41~最小0.22、平均0.33を減じて石皿を放棄したことが判明した。石皿は、未だ使える状態で廃棄されたという状況を考えるなら、断面厚の20%程度を望め使われたということになる。石製品の断面厚と石皿のそれは重複しており、僅か数cmを敲打さえすれば石皿として完成したはずである。

それでは、なぜ石皿として完成させていないのだろうか。これについて答えるだけの根拠は現状で持ち合わせていないが、これを解く鍵として礫形状の相違を指摘しておきたい。具体的には、石皿は例外なく表面側が平坦だが、石製品は背面側と同様に表面側も有効平坦面が狭く、安定性に欠けるという点であり、礫形状に応じた選択性、分担が読み取れる。接地面が地面等であれば、礫自体の安定感は問題にならないという考え方もあるだろうが、実際に出土している実用型石皿の有効平坦面は広く、そして、薄い。石製品が石皿の未製品であるならば、石製品の表面は広い平坦面であるべきであるが、実態とは異なり未製品とする根拠は弱い。

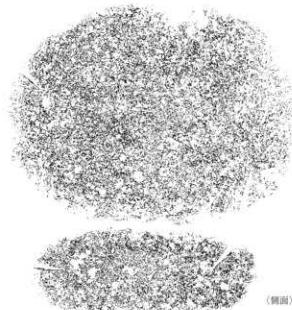


図8 現渡良瀬川採取の河床礫

#### f. 石皿の使用過程と廃棄

テーマから少し逸れることになるが、ここでは石皿の使用過程を展望しておきたい。通常、石皿には多孔質石材が多用され、そのことが製粉具として効果的であるとされ、これに異を唱える研究者はいないだろう。大道東の石皿は使用可能な段階で廃棄されたことが明らかであるが、同時期の遺跡から出土する石皿には底が抜けた石皿があり、それほど珍しいわけではない。このような現象は廃棄行為のひとつとして理解されているが、使用による使用面の後退という側面も無視できない。この点について若干検討しておきたい。

当事業団では普及用に石皿を用意、普及デー等で粉挽き体験をさせているのであるが、激しく磨耗する割に磨り減らないように見える。縄文期に比べ、使用頻度が圧倒的に異なるということかも

しれないが、体験用石皿を見る限り、それほど磨り減らないというようである。この現象が事実なら、石皿は機能性を確保するため使用面が更新されることになり、その度に使用面が後退、結果的に石皿の縁が明瞭になるという想定が成り立つ。逆に、磨石類は激しく磨耗したものは少ないのであるが、磨石は反復使用するより新規に素材を採取(石材確保の容易性)、その効率的運用(機能性の確保)を果したとすべきだろう。

#### g. 類例

石製品とした560の馬蹄形中高部は、見た瞬間、女性器のそれとして衝撃に似た感覚を覚える。これほど特徴的な遺物なら、あれば必ず報告されているはずだが、現在までほとんど類例の報告はないようである。類例を探したところ、下田遺跡(伊勢崎市、旧東村)に類例があるということをお僚から教示され、その実物を見た。大道東が縦型で、下田が横型であるという点で異なるようだが、確認することのできた唯一の類例である。下田例は称名寺期の所産で、柄鏡型住居の連結部に近い主体部から出土している。如は検出されていないようであるが、主体部中心域の南に礫が散在しており、石製品は連結部に近い柱穴の内側に対

## V まとめ

になるように礫が配されたそのひとつである。これを敷石のそれとすれば、転用礫ということになる。現状で、同種石製品は大道東と下田に限られてしまうが、簡単に類似点と相違点を挙げておきたい。

大道東例は古代の土坑出土で本来的な出土位置は不明だが、土坑は縄文期住居（73号、称名寺1段階）内にある。560は同住居の帰属とするのが妥当だが、これを含む多孔石2・礫2が土坑から出土しており、73住居の遺物が偶然混入したというより、選択的に埋め込んだとすべきである。問題はそれが「どこで得られたか」ということであるが、隣接する敷石住居（551住居）や包含層から抜き出したということになろう。大道東の73・551住居は称名寺1式期のそれで、下田例も同時期の敷石住居の出土であり、遺構種別も時期も一致、2例だけとはいえ、これは見逃せないだろう。敷石住居では使われていたというより敷かれていた可能性が高く、本来的な機能を停止した転用礫として存在した点でも類似する。下田例は長さ29.9cm・幅29.0cmを測り、平面形は大道東例に近い。下田例は断面厚8.8cmを測り、大道東例（同12cm）に比べて薄い点で異なる。下田例は溝の幅が広く、石皿として報告されたように中高石皿に近い。

県外に目を転じてみよう。礫周縁部を敲打する石製品類を取り上げた報告は少ないようだが、敲打製石製品の製作技術を纏めた上條（上條2007）が周縁敲打痕を有する石製品を紹介している。そこでは岐阜県勝更白山神社周辺遺跡・新潟県アチャ遺跡・長野県棚畑遺跡出土の3例を類例として図示している。このうち、棚畑例は石皿裏面の孔（多孔石）とすべきかもしれないが、他の2点は概ね筆者が注目している周縁敲打の石製品に相当する。勝更例が厚型河床礫タイプ、アチャ例が薄型河床礫タイプであり、2点とも磨耗面を有している。また、勝更例には周縁敲打した内側に孔1があり、特徴的である。どの程度の磨耗か不明だが、大道東560の中高部も磨耗しているという見解もあり、また、孔についても類似する要素であり、注目しておきたい。

**h. 石製品の性格** 大道東の石製品には、石皿未製品と性格不明の石製品の別があるというのが結論だが、両者を分ける根拠について説明しておきたい。

ひとつには、礫の選択性についてである。礫形状の項で述べたように、礫形状には薄型と厚型の2種類があることを指摘した。数値的（断面厚/幅）には前者が最大0.44～最小0.29、平均0.35、後者が最大0.7～最小0.33、平均0.49となり、相違は明らかである。一方、数字は部分的に重複する関係にもあり、これが解釈の分かれ目になる。解釈の鍵として多孔石としての孔を指摘しておきたい。孔は石製品9例中5例にあり、石皿の未製品（製作途中）なら、孔を穿つ理由はなく、孔を穿つ理由は別のところにあるというのが筆者の見解である。この時点では、礫形状と孔の有無で、石皿未製品と呪術具が分別できることになる。

次なる検討課題は、出土状況についてである。解釈に際し重要な遺構出土の資料が少ないのが残念だが、大道東（551住居）や下田（I区3住）の住居遺物は重要である。時間的にもほぼ同時期であり、両者とも敷石（柄鏡型）住居から出土している。敷石には扁平礫が多用されることが圧倒的だが、石皿等の礫石器の使用も普遍的である。炉石としての石皿や石棒の利用には呪術性が読み取れるというのが現代的解釈だが、ここではもう少し仔細に、石製品には製作から配置されるまでの間に位置づけなり、性格が変わるという観点で検討していきたい。

大道東例も下田例も、最初から住居へ設置するというのでは、石皿の未製品であるという解釈の選択肢はない。従って、それは転用石器であり、本来は別の目的で作られたということになる。これによれば、第1段階：目的意識に基づく製作段階、第2段階：使用段階、第3段階：転用という理解が妥当な理解となる。問題は別目的・別用途と何か？ということである。未製品の孔について、石皿の製作途中に孔を穿つ必要はなく、これがあるということは呪術具であるというのが筆者の見解だが、この見解が正しいなら、なぜそれ



を住居に持ち込んでいるのか、このことを問題とすべきだろうと考えている。意図的に持ち込んでいるなら、その出土位置の規則性なりが見出されるべきである。これについてその傾向性を網羅的に述べる力量はないが、馬蹄形中高部を有する石製品は希少例だが、2遺跡とも住居から出土している可能性があること、同種系統の周縁部を溝状に敲打する石製品（551住居14）が同じく住居遺物であり、このことを踏まえれば、単なる敷石構造材として転用したというより、言わば「ありがたいもの」として、呪術具としての初期機能を明瞭に意識、そして、住居に持ち込んだとすべきだろう。

i. 小結 これまで、不明石製品9点が石皿の未製品か呪術具か、という視点で検討した。初期の印象は、そのまま加工が進めば石皿（561）になるものもあるが、明らかに呪術的であるというもの（560）もあるという印象であった。途中、どう見ても素材として厚過ぎるものがあり、加工量だけでは解釈できない何か別の理由があるだろうと考え、未だ検討中だが、現時点では未製品であるという概念を取り払い、完成状態とすべきだろうと思慮している。すなわち、周縁部敲打は、石皿のリード線あるいは設計線であるという位置づけなり評価は変わらないが、それは石皿を簡便に表現（簡略化）したものであり、呪術具として存在したのではないかとということである。あくまでも製作目的は儀礼用としてのそれで、儀礼が終われば目的は達したことになり、これを住居内に設置したという解釈である。包含層出土の石製品については当初の目的が終り、そのまま廃棄されたということであろう。馬蹄形中高部を有するそれについては、直感的に「中高石皿」を類似資料とすることも想定してみたが、その系譜を辿れず宙に浮いている。現状では、先行形態の見当さえつかない状況である。

## 6. おわりに

ここでは、中期後半から後期前葉という時間軸の中で石器群を捉え、検討した。結果、縄文石器にはさまざまな情報があり、これらについて従来は記載されていないということを改めて実感した。形態名称にしても機能名称にしても記載法としては便利なのであろうが、どれほど実態を反映したものであるか、確信的に断言できる研究者はいないであろう。型式学には記載法としての性格があり、便利だがまだまだ情報は資料から読み取れるということであろう。本稿では、縄文社会を支えた背景として呪術があるという縄文研究の到達点に立ち、生活基盤を支えたものとして丘陵資源と河川資源を評価、石器群を評価したつもりであるが、力量不足から課題が山積している状況にある。とりわけ、石製品としたものについては、詳細が分からないまま報告が終ろうとしているが、下田遺跡の同種石製品の存在を知り、それが限られた時間と空間に広がるであろうことが見えたというべきであろう。今後、その動向に注目していきたい。

## 遺物観察表

住居出土土器観察表

住居	No	図版No	拝図No	出土位置	部位	文様の特徴等	備考
41	13	11 図	PL18	炉	胴一底	胴部上半を欠く。胴部最大径付近にスス付着。R L 縄文斜位。	称名寺 1
73	3	13 図	PL18	12	胴 部	沈線渦巻文内に R L 縄文を充填施文する。	称名寺 1
73	4	13 図	PL18	20	胴 部	沈線渦巻文	称名寺 2
73	5	13 図	PL18	12 ~ 28	胴 部	半軸絡帯体 5 類 L 施文後、沈線渦巻文を施文。	称名寺 2
73	6		PL18	覆 土	底 部	平底。	称名寺 2
125	34	16 図	PL18	6	口縁部	波状口縁。沈線による区画文を施す。35 ~ 37 は同一個体。	称名寺 2
125	35		PL19	覆 土	口縁部	波状口縁。沈線による区画文を施す。	称名寺 2
125	36	16 図	PL18	覆 土	口縁部	波状口縁。沈線による区画文を施す。	称名寺 2
125	37		PL19	6	口縁部	波状口縁。沈線による区画文を施す。	称名寺 2
125	38		PL18	覆 土	口縁部	沈線 J 字区画、口縁部が内折した波状口縁。41 と同一個体。	称名寺 2
125	39		PL19	6	口縁部	無文の波状口縁。40 と同一個体。	称名寺 2
125	40		PL18	16	口縁部	無文の波状口縁。	称名寺 2
125	41	16 図	PL18	床 直	口縁部	沈線 J 字区画、口縁部が内折した波状口縁。	称名寺 2
125	42	16 図	PL19	11	口一胴	口縁部無文帯下に縦位隆帯、隆帯下に L R 縄文を施文。	称名寺 2
125	43	16 図	PL18	覆 土	胴 部	隆帯を U 字状に配す。無文。	加曾利 E 4 ?
125	44	16 図	PL19	8	胴 部	沈線 J 字区内に縄文を施文する。45 と同一個体。	称名寺 1
125	45			12	胴 部	沈線 J 字区内に縄文を施文する。	称名寺 1
125	47	16 図	PL18	2 ~ 5	口縁部	沈線 J 字区画内に列点文を施文する。48 と同一個体。	称名寺 2
125	48		PL19	9	底 部	無文。	称名寺 2
125	49	16 図	PL18	覆 土	口縁部	斜向条線文を施文する。	加曾利 E 3
482	13	19 図	PL19	4 ~ 5	底 部	垂下沈線間に L R 縄文を施文する。	加曾利 E 3
482	14	19 図	PL19	床 直	口縁部	隆帯楕円区画内に R L 縄文を施文する。	加曾利 E 3
482	15	19 図	PL19	覆 土	口縁部	隆帯楕円区画内に R L 縄文を施文する。	加曾利 E 3
482	16		PL19	覆 土	胴 部	垂下沈線間に R L 縄文を施文する。	加曾利 E 3
482	17		PL19	覆 土	胴 部	垂下沈線間に L 縄文を施文。	加曾利 E 3
482	18	19 図	PL19	覆 土	口縁部	細線による楕円区画。区画内に L R 縄文を施文。	加曾利 E 3
482	19	19 図	PL19	覆 土	胴 部	櫛歯状工具による波状文。	加曾利 E 3
482	20	19 図	PL19	覆 土	胴 部	垂下沈線間に R L 縄文を施文。	加曾利 E 3
482	21		PL19	覆 土	胴 部	沈線 J 字区画内に細縄文 L R を施文する。	称名寺 1
482	22		PL19	覆 土	胴 部	沈線 J 字区画。区画内は無文。	称名寺 2
483	4	21 図	PL20	11	口縁部	沈線により J 字状に区画する。	称名寺 2
483	5		PL20	覆 土	胴 部	沈線により J 字状に区画する。4 と同一個体。	称名寺 2
483	6	21 図	PL20	10 ~ 20	胴 部	縦位に鎖状の隆帯を配す。	称名寺 2
483	7	21 図	PL20	19	胴 部	縦位に鎖状の隆帯を配す。6 と同一個体。	称名寺 2
483	8	21 図	PL20	覆 土	胴 部	縦位条線を密に施文。	称名寺 ?
483	9		PL20	覆 土	胴 部	垂下沈線による区画文間に櫛歯状工具による条線施文。	加曾利 E 3
483	10		PL20	覆 土	胴 部	櫛歯状工具による条線施文。	加曾利 E 3
483	11		PL20	覆 土	胴 部	櫛歯状工具による弧状条線を施文。	称名寺 ?
483	12	21 図	PL20	覆 土	口縁部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺 2
483	13		PL20	覆 土	口縁部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺 2
483	14		PL20	覆 土	胴 部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺 2
483	15		PL20	覆 土	胴 部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺 2
483	16	21 図	PL20	覆 土	口縁部	沈線区画内に縄文施文。L R。	称名寺 1
483	17	21 図	PL20	13	胴 部	沈線区画内に縄文施文。L R。	称名寺 1
483	18		PL20	6	胴 部	沈線区画内に縄文施文。L R。	称名寺 1
483	19		PL20	覆 土	胴 部	沈線区画内に縄文施文。L R。	称名寺 1
483	20		PL20	覆 土	胴 部	沈線区画内に縄文施文。L R。	称名寺 1
483	21	21 図	PL20	覆 土	胴 部	横位隆帯列突文下に縦位沈線区画、区画内に L R 縄文。	称名寺 1
483	22		PL20	覆 土	胴 部	沈線区画内に縄文施文。L R。	称名寺 1

住居	No	図版No	挿図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	備 考	
483	23			PL20	覆土 胴部	沈線による区画文施文。	称名寺2	
483	24			PL20	覆土 胴部	垂下沈線施文	加曾利E	
483	25			PL20	覆土 胴部	弧状沈線文(沈線渦巻文?)	称名寺?	
483	26			PL20	覆土 胴部	弧状沈線文(沈線渦巻文?)、L R。	称名寺1	
483	27	21 図		PL20	23 口縁部	隆帯楕円区画文。区画内にR L縄文を施文。波状口縁。	加曾利E 3	
483	28	21 図		PL20	5 口縁部	沈線によるR字状の区画文を施文する。	称名寺2	
483	29			PL20	口縁部	口縁部下にR L縄文、横位の太沈線で楕円区画?	加曾利E 3	
483	30			PL20	覆土 口縁部	隆帯による楕円区画施文。区画内に縄文施文。	加曾利E	
483	31	21 図		PL20	23 口縁部突起	上面に沈線をC字状に配す。R L縄文。	称名寺1	
483	32	21 図		PL20	10 口縁部突起	外面突起・C字状沈線。内面に同種文様を三角形状に配す。	称名寺1	
483	33	21 図		PL20	14 口縁部突起	指状の突起外面に沈線をC字状に配す。	称名寺1	
483	34			PL20	18 粘土境成塊	片手で握れる程度の大きさ、指頭?指紋不明	不明	
487	16	23 図		PL20	16 口縁-胴部	R L縄文施文後、波状沈線区画。波底部下に兼手文を施文。	加曾利E 4	
487	17			PL21	住居内印	R L縄文施文後、波状沈線により区画。	16・17同一	
487	18	23 図		PL20	6 口縁-胴部	口縁部下楕円区画、胴部に垂下沈線。区画内R L縄文施文。	加曾利E 4	
487	19	23 図		PL21	7 口縁-胴部	口縁部下に沈線で波状区画。波状区画間に兼手文を施文。	加曾利E 4	
487	20	23 図		PL20	住居内印	細隆帯による楕円区画下に横位沈線、垂下沈線。R L縄文。	加曾利E 4	
487	21	23 図		PL21	住居内印	R L縄文施文後、垂下沈線により縦位区画。	加曾利E 4	
527	1	28 図		PL22	12~15 口縁-胴部	口縁へつ状工具による斜め削み、胴部沈線渦巻文。R L縄文。	称名寺1	
527	2	28 図		PL22	14 口縁部	細隆帯による楕円区画。楕円区画内にはR L縄文施文。	加曾利E 4	
527	3	28 図		PL22	9 口縁部	波状口縁下に沈線による十字状区画。区画内R L縄文施文。	加曾利E 4	
527	4			PL22	9 口縁部	沈線による横位区画。胴部条線施文。	加曾利E 4	
527	5	28 図		PL22	15 胴部	沈線による縦位区画。胴部R L縄文施文。	加曾利E 3	
537	6	30 図		PL22	床直	口縁部三角状の突起。口縁部隆帯楕円区画下に垂下沈線。	加曾利E 3	
537	7	30 図		PL22	7 胴部	胴部L R縄文施文後、垂下沈線による区画。	加曾利E 3	
537	8	30 図		PL22	10 口縁-胴部	口縁部楕円区画下に垂下沈線。R L縄文施文後、垂下沈線。	加曾利E 3	
537	9	30 図		PL22	覆土	口縁部下に凹形突起文。胴部には沈線による十字状区画。	加曾利E 3	
537	10	30 図		PL22	4 口縁部	波状口縁。楕円状工具による弧状条線を施文。	加曾利E 3	
542	17A	32 図		PL22	印内	口縁-胴部	波状隆帯頂部に渦巻文が連結、6単位を構成する。R L縄文。	加曾利E 3
542	17B	32 図		PL22	印内	口縁部	隆帯による波状文、渦巻文。隆帯内外にR L縄文。17 A と同一。	加曾利E 3
542	17C	32 図		PL22	印内	胴部	横位沈線下に沈線U字文。兼手文。R L縄文。17 A と同一。	加曾利E 3
542	18	32 図		PL22	7~12 胴部	R L縄文施文後、垂下沈線による区画。	加曾利E 3	
542	19	32 図		PL23	10 胴部	L R縄文施文後、垂下沈線による区画。	加曾利E 3	
542	20	33 図		PL23	2 口縁部	横位隆帯により口縁部を区画。胴部にはR L縄文施文。	加曾利E 3	
542	21	32 図		PL22	胴部	口縁部楕円区画。区画内は楕円状工具による条線。	加曾利E 3	
542	22	33 図		PL23	胴部	胴部に縦位条線文を施文後、横位隆帯を添付。	加曾利E 3	
542	23	33 図		PL23	口縁部	口縁部楕円区画。区画内にR L縄文施文。	加曾利E 3	
542	24	33 図		PL23	11 口縁部	口縁部下に横位沈線。沈線下に楕円状工具で波状条線。	加曾利E 3	
542	25	32 図		PL22	胴部	隆帯による楕円区画。楕円区画内L R縄文施文。	加曾利E 3	
542	26	32 図		PL22	胴部	垂下沈線施文。L R縄文施文。	加曾利E 3	
542	27	32 図		PL22	0~2 胴部	隆帯による横位区画。R L縄文施文後、垂下沈線区画。	加曾利E 3	
542	28	PL23		胴部	縄文施文後、垂下沈線区画。	加曾利E 3		
542	29	PL23		胴部	縄文施文後、垂下沈線区画。	加曾利E 3		
542	30	33 図		PL23	印内	縦位条線施文後、横位沈線により口縁部無紋帯作出。	加曾利E 3	
542	31	PL23		印内	口縁部	隆帯による楕円区画。区画内は条線を充填。	加曾利E	
542	32	32 図		PL22	胴部	L R縄文施文後、垂下沈線下に沈線で楕円区画。	加曾利E	
547	32	35 図		PL23	2~11 口縁-胴部	沈線区画内に列点文施文。32~37は同一個体。	称名寺2	
547	33	PL23		口縁部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺2		
547	34	35 図		PL23	2~23 胴部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺2	
547	35	PL23		印内	胴部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺2	
547	36	PL23		11~21 胴部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺2		
547	37	PL23		7~10 胴部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺2		
547	38	35 図		PL23	7~15 口縁-胴部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺2	

住居	No	図版No	挿図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	備 考
547	39		PL23	20	口縁部	隆帯による横位区画、口縁部無紋帯。	後 期
547	40		PL23	6～18	口縁部	隆帯による横位区画、口縁部無紋帯。	後 期
547	41		PL23	6	口縁部	沈線区画内に列点文施文。	称名寺2
547	42	35 図	PL23	13	口縁部	波状口縁。J字状沈線内、L R磨消縄文施文。	称名寺1
547	43		PL23	覆土	胴部	J字状沈線内、L R磨消縄文施文。	称名寺1
547	44	35 図	PL23	覆土	胴部	J字状沈線内、L R磨消縄文・列点文施文。	称名寺2
547	45	35 図	PL23	4	注 口	注口先端破片。	後 期
548	10	37 図	PL24	覆土	口縁部	J字状沈線内、L磨消縄文施文。	称名寺1
548	11	37 図	PL24	覆土	胴部	J字状沈線内、L磨消縄文施文。	称名寺1
548	12	37 図	PL24	-27	口縁部	細隆帯による口縁部横位無紋帯。細隆帯下、R L縄文施文。	加曾利 E 4
548	13		PL24	覆土	口縁部	R L縄文施文後、沈線による槽円区画。	加曾利 E 4
548	14	37 図	PL24	7	胴部	縦位条線を施文。15と同一個体。	称名寺?
548	15		PL24	22	胴部	縦位条線を施文。	称名寺?
548	16	37 図	PL24	-34	口縁部把手	円形刺突、及び、斜線をC字状に配す。	称名寺1
551	16	40 図	PL24	1～13	胴部	L R縄文を横位・斜位に全面施文する。張出部埋差。	称名寺?
551	17	40 図	PL24	14～21	胴部	条線文が縦位・弧線状に廻る。	称2～層1
551	18	40 図	PL24	覆土	胴部	沈線を縦位、及び、斜位に施文する。	称2～層1
551	19	40 図	PL24	覆土	胴部	条線文を縦位施文する。	称2～層1
551	20	40 図	PL24	18	口縁部	J字状沈線内に異束L縄文を充填施文する。波状口縁。	称名寺1
551	21	40 図	PL24	6	胴部	J字状沈線内にR L縄文を充填施文する。	称名寺1
551	22		PL24	8	口縁部	沈線によりJ字状に区画?	称名寺2
551	23	40 図	PL24	15	胴部	口縁部無文帯下に横位隆帯、隆帯下に縄文施文。	称名寺1
551	24	40 図	PL24	17～19	胴部	L R縄文を斜位施文。	称名寺?
551	25		PL24	21	口縁部	槽円区画した沈線内にR L縄文を施文する。波状口縁。	加曾利 E 3
551	26		PL24	覆土	口縁部	口縁部下に横位の沈線を施文する。	称名寺1?
551	27	40 図	PL24	22	胴部	縦位隆帯間に縄文を施文する。	加曾利 E 3
551	28		PL24	11	胴部	J字状沈線内にL R縄文を充填施文する。	称名寺1
551	29		PL24	覆土	胴部	条線文を縦位施文する。	加曾利 E 3
551	30		PL24	覆土	口縁部	口縁部下に横位並行沈線を施文。口縁部直下は押し引き。	勝 坂?

※出土位置の項の数字は床面からの高さを算出した

#### 炉・埋藏出土土器観察表

遺構	No	図版No	挿図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	備 考
1 炉	4	44 図	P L 26	320・825	胴部	三角形の突出部を持つ横位隆帯、隆帯下に縄文施文、L R。	後期前葉
1 炉	5		P L 26	320・825	胴部	三角形の突出部を持つ横位隆帯、隆帯下に縄文施文、L R。	後期前葉
1 炉	6	43 図	P L 25	320・825	完 形	沈線J字文、区画内に列点を充填する、胴部下で区画は開放。	称名寺2
1 炉	7	43 図	P L 26	320・825	胴～底	沈線J字文、区画内に列点を充填する。	称名寺2
1 埋	1	45 図	P L 26	305・820	胴部	垂下沈線間に巽手文・蛇行沈線文を施す。地文縄文、L、1埋2と同一個体。	加曾利 E 3
1 埋	2	45 図	P L 26	305・820	胴部	横位波状沈線頂部下に垂下沈線・巽手文、地文縄文、L。	加曾利 E 3
2 埋	1	45 図	P L 27	320・820	胴～底	無文。胴部外面は丁寧なナゲ。	後期前葉
2 埋	2	45 図	P L 27	320・820	口～胴	口縁部下に横位沈線文下に沈線J字文。	称名寺2
2 埋	3	45 図	P L 27	320・820	胴～底	粗い縦位条線文を施す。	後期前葉
3 埋	1	46 図	P L 27	310・825	胴～底	全面に縄文施文する、L R。	後期前葉

土坑出土土器観察表

土坑No.	No.	図版No.	挿図No.	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等
9	622A	61図	P.L.28	2	口~胴	沈線J字文区画、沈線内縄文充墳。	L.R
9	622B	61図	P.L.28	床直	口~胴	沈線J字文区画、沈線内縄文充墳。	L.R
9	623	61図	P.L.28	2~26	胴部	頸部横位沈線下に渦巻文、頸部に隆帯刺突文。	L.R
71	100	62図	P.L.28	72~78	口縁部	沈線J字文区画、沈線内縄文充墳。	L
71	101	62図	P.L.28	110	口縁部	沈線J字文区画、沈線内縄文充墳。	L.R
106	102	62図	P.L.28		把手	沈線U字文	
106	103	62図	P.L.28		胴部	地文縄文施文後、垂下沈線。	R.L
106	104	62図	P.L.28		胴部	縦位条線施文	
106	105		P.L.28		底部	無文	
182	106A	63図	P.L.29	14	口縁部	沈線J字文、沈線内列点充墳。	106Bと同一
182	106B	63図	P.L.29	14~136	胴部	沈線J字文、沈線内列点充墳。	106Aと同一
182	107	63図	P.L.29	36	口縁部	口縁凹形刺突、沈線U字文。	L.R
182	108		P.L.29	覆土	口縁部	沈線槽凹区画内に縄文施文。	R.L
182	109	63図	P.L.29	22	胴部	隆帯渦巻文	L.R
182	110		P.L.29	26	胴部	縦位条線施文	
182	111	63図	P.L.29	28	胴部	縄文施文後、垂下沈線、凹形刺突。	L.R
182	112	63図	P.L.29	144	胴部	沈線J字文区画、沈線内縄文充墳。	L.R
182	113		P.L.29	74	胴~底	沈線J字文区画、沈線下階段状、無文。	
182	114		P.L.29	47	底部	無文	
330	115	63図	P.L.29	覆土	頸部	横位隆帯下に縄文施文。	R.L
330	116		P.L.29	覆土	胴~底	地文縄文施文後、垂下沈線。	R.L
330	117	63図	P.L.29	覆土	胴部	地文縄文施文後、垂下沈線。	R.L
330	118	63図	P.L.29	床直	胴~底	縦位条線施文	
330	119	63図	P.L.29	覆土	口縁部	「く」字状口縁、無文。	
330	120		P.L.29	覆土	胴部	沈線文	
330	121	63図	P.L.29	床直	胴部	沈線内列点充墳	
335	122	64図	P.L.29	32	口縁部	沈線槽凹区画	R.L
335	123	64図	P.L.29	24~28	胴部	地文縄文施文後、垂下沈線。	R.L
335	124		P.L.29	34	口縁部	隆帯槽凹区画	L.R
335	125		P.L.29	32	口縁部	無文	
336	126	64図	P.L.30	15	口縁部	細隆帯U字文	R.L
336	127	65図	P.L.30	14	口縁部	口縁部無文下に縄文施文。	L.R
336	128	64図	P.L.30	16	口縁部	波状口縁に並行する横位細隆帯、U字文。	L.R
336	129	64図	P.L.30	3	口縁部	細隆帯U字文	異東L
336	130	64図	P.L.30	31~34	口縁部	沈線槽凹区画	R.L
336	131		P.L.30	捜鼠	胴部	沈線J字文	R.L
336	132	65図	P.L.30	覆土	口縁部	口縁下に横位沈線・U字文、沈線凹刺突、縄文。	R.L
336	133		P.L.30	6	胴部	横位隆帯下に縄文施文。	R.L
336	134	65図	P.L.30	14~28	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	R.L
336	135	65図	P.L.30	25	胴部	細隆帯U字文	R.L
336	136		P.L.30	23	胴部	横位沈線下に縦位条線文。	
336	137	65図	P.L.30	1	胴部	沈線J字文、沈線内縄文充墳。	R.L
336	138	64図	P.L.30	27	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充墳、口唇部刺突。	R.L
336	139		P.L.30	20	口縁部	沈線J字文、沈線内列点充墳。	
336	140	64図	P.L.30	22	口~頸	波状口縁、無文。	
336	141		P.L.30	22	胴部	沈線J字文、沈線内列点充墳。	
340	142	63図	P.L.29	1	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	R.L
340	143	63図	P.L.29	覆土	胴部	縄文施文後、縦位細隆帯。	L.R
340	144		P.L.29	覆土	胴部	横位隆帯上に縄文、隆帯下に条線文。	R.L
340	145	63図	P.L.29	覆土	胴部	条線文	
341	146	63図	P.L.29	23	口~胴	口縁部無文、胴部沈線槽凹区画。	L・R.L
341	147		P.L.29	2	口縁部	口縁下に細隆帯、隆帯下に横位沈線U字文。	R.L
341	148	63図	P.L.29	6	胴部	隆帯渦巻文	L.R
341	149	63図	P.L.29	31	胴部	垂下隆帯	R.L
341	150	63図	P.L.29	28	胴~底	縦位条線文	
341	151	63図	P.L.29	9	胴部	沈線渦巻文	

土坑No	No	図版No	挿図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等
341	152		P.L.29	5	胴 部	沈線J字文	L R
341	153		P.L.29	39	胴 部	縦位整形痕が残る。	R L
342	154	65図	P.L.30	3	口縁部	沈線栴形区画、液状突起。	R L
342	155	65図	P.L.30	80	口縁部	沈線栴形区画、液状口縁。	R L
342	156	65図	P.L.30	88	口縁部	口縁部無帯下に細隆帯J字文。	L R
342	157	65図	P.L.30	85	口縁部	口縁部下に横位沈線・J字文。	R L
342	158	65図	P.L.30	51	口縁部	口縁部無帯下に横位・斜位隆帯刺突。	L R
342	159		P.L.30	87	口縁部	口縁部下に横位沈線・沈線下に縄文施文。	R L
342	160		P.L.30	覆 土	口縁部	口縁部無帯下に横位隆帯。	
342	161	65図	P.L.30	64	突 起	突起両側に円形刺突・沈線文。	R L
342	162		P.L.30	覆 土	胴 部	糸線文	
342	163		P.L.30	4	胴 部	縦位沈線施文後、縄文充填。	L R
342	164	65図	P.L.30	85	胴 部	沈線J字文	L R
342	165	65図	P.L.30	33	胴 部	隆帯文	L R
343	166	66図	P.L.31	27	口~胴	隆帯栴形区画	
343	167	66図	P.L.31	11	胴 部	隆帯渦巻文	R L
343	168	66図	P.L.31	11	胴 部	隆帯渦巻文	R L
343	169	66図	P.L.31	20	胴 部	縦位隆帯間に糸線文施文。	
343	170	66図	P.L.31	2	胴 部	沈線J字文	R L
343	171	66図	P.L.31	41	胴 部	沈線J字文、沈線間に横手文挿入。	L R
343	172	66図	P.L.31	26	胴 部	沈線J字文、沈線内に列点文。	
344	173	66図	P.L.31	34	口縁部	隆帯栴形区画	R L
346	174	66図	P.L.31	覆 土	胴 部	沈線J字文、沈線内列点充填。	
346	175		P.L.31	覆 土	胴 部	沈線J字文、沈線内列点充填。	
346	176		P.L.31	覆 土	口縁部	無文	
389	233		P.L.31	1	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
389	234		P.L.31	40	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	R L
389	235		P.L.31	21	胴 部	沈線J字文、沈線内列点充填。	
393	177	66図	P.L.31	覆 土	胴 部	縦位糸線文	
393	178	66図	P.L.31	45	胴 部	沈線区画内に縄文施文。	L R
393	179		P.L.31	48	胴 部	沈線J字文、沈線内列点充填。	
394	180	66図	P.L.31	8	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
394	181	66図	P.L.31	23	胴 部	沈線J字文?	
400	236	67図	P.L.31	5	口縁部	沈線栴形区画、区画内○字文?、区画間刺突。	
400	237	67図	P.L.31	4	口縁部	沈線J字文、沈線間に横手文挿入。	
400	238	67図	P.L.31	4	口縁部	口縁部下の横位隆帯に縦位隆帯が接続。	R L
400	239		P.L.31	5	口縁部	沈線栴形区画、区画内糸線文。	
400	240		P.L.31	13	口縁部	隆帯栴形区画、区画内縄文施文。	R L
400	241	67図	P.L.31	10	口縁部	無文	
400	242		P.L.31	3	胴 部	縄文施文後、垂下沈線。	R L
400	243		P.L.31	覆 土	胴 部	糸線文	
400	244		P.L.31	床 直	胴 部	沈線J字文	異束L
481	182		P.L.31	41	口縁部	沈線栴形区画、液状突起。	L R
481	183	67図	P.L.31	覆 土	口縁部	口縁部無帯下に横位隆帯、隆帯下に縄文。	L R
481	184		P.L.31	覆 土	胴 部	縦位糸線文	
481	185	67図	P.L.31	床 直	胴 部	沈線J字文	
481	186	67図	P.L.31	10	注 口	沈線J字文	
482	187	68図	P.L.32	覆 土	口縁部	口縁部下横位沈線、液状沈線、口縁部「く」字状。	L R
482	188		P.L.32	37	胴 部	縄文施文後、垂下沈線。	R L
482	189		P.L.32	17	胴 部	縄文施文後、垂下沈線。	R L
483	190	67図	P.L.31	26	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に縄文。	L R
483	191		P.L.31	覆 土	口縁部	口縁部「く」字状	
483	192		P.L.31	覆 土	口縁部	液状口縁頂部に刺突・沈線、口縁部「く」字状。	
483	193		P.L.31	27	把 手	口縁部頂部の横状把手、縄文施文。	L R
483	194	67図	P.L.31	26	胴 部	細隆帯上に円形刺突、隆帯下に縄文施文。	R L
483	195	67図	P.L.31	覆 土	胴 部	縄文施文後、沈線。	R L
483	196	67図	P.L.31	22	胴 部	沈線J字文、沈線内列点充填。	
483	197		P.L.31	41	胴 部	沈線J字文	

土坑No	No	図版No	棟図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等
483	198	67図	P.L.31	覆土	胴部	条線文	
483	199		P.L.31	覆土	土製品	小型輪縁の手捏ね土器。	
484	200		P.L.31	覆土	胴部	沈線U字文?	
486	201	69図	P.L.32	23	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
486	202		P.L.32	覆土	口縁部	沈線J字文、沈線内列点充填。	
486	203	69図	P.L.32	14	口縁部	無文、口縁部横位ナデ、以下縦位ナデ。	
486	204		P.L.32	29	口縁部	無文	
486	205	69図	P.L.32	42	胴部	横位細隆帯下に縄文施文。	L R
486	206	69図	P.L.32	14~38	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	R L
486	207		P.L.32	20	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	R L
487	208		P.L.32	覆土	口縁部	縄文施文	R L
487	209	69図	P.L.32	9	胴部	弧状条線文	
488	210		P.L.31	覆土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
488	211	67図	P.L.31	覆土	胴部	縦位条線文	
488	212		P.L.31	覆土	胴部	隆帯渦巻文	
490	213		P.L.33	覆土	胴部	横位細隆帯下に縄文施文。	L R
490	214		P.L.33	覆土	胴部	横位細隆帯下に沈線、U字文。	R L
496	215	70図	P.L.33	28~65	完形	波状突起、沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
496	216	71図	P.L.33	53~61	口~胴	口縁部無文帯下に三角突起、胴部縄文。	
496	217		P.L.33	覆土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
496	218	71図	P.L.33	覆土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
496	219		P.L.33	32	口縁部	沈線J字文	
496	220		P.L.33	覆土	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に刺突列2。	
496	221	71図	P.L.33	覆土	胴部	縦位隆帯刺突後、縄文施文。	L R
496	222	71図	P.L.33	64	胴部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
496	223		P.L.33	65	胴部	沈線渦巻文、沈線内縄文充填。	L R
496	224		P.L.33	覆土	胴部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
496	225	71図	P.L.33	59	胴部	縄文施文後、沈線区画。	L R
497	226	67図	P.L.32	102	口縁部	口縁部凹形刺突、縦位隆帯刺突、沈線J字文。	L R
498	227	68図	P.L.32	覆土	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に縄文。	L R
498	228	68図	P.L.32	覆土	胴部	縦位隆帯施文後、波状条線文。	
499	228	71図	P.L.33	6~50	口~胴	口縁部下に横円区画、胴部垂下沈線、兼手文。	R L
499	229	71図	P.L.33	1~68	口~胴	口縁部沈線、胴部垂下沈線、兼手文。	R L
499	230		P.L.33	覆土	口縁部	口縁部無文、円形刺突。	
499	231		P.L.33	50	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	L R
499	232		P.L.33	42	胴部	横位隆帯下に粗い条線文。	
500	245		P.L.32	覆土	口縁部	無文	
500	246	69図	P.L.32	12	胴部	縦位隆帯、区画内縄文充填。	R L R
500	247	69図	P.L.32	20	胴部	沈線U字文	R L
500	248	69図	P.L.32	覆土	蓋	縁帯に孔2を穿つ。	
501	249	72図	P.L.34	56	口縁部	口縁部横円区画、区画内縄文、胴部垂下沈線。	
501	250	72図	P.L.34	不明	口縁部	波状突起、口縁部隆帯渦巻文、沈線区画文。	L R
501	251	72図	P.L.34	23	口~胴	隆帯円形区画文、胴部垂下沈線、波状文。	
501	252	72図	P.L.34	覆土	胴部	沈線U字文、沈線間に兼手文挿入。	R L
501	253		P.L.34	覆土	胴部	縦位隆帯刺突、隆帯屈曲部に円形刺突。	
501	254	72図	P.L.34	76	胴部	縦位隆帯区画後、縄文施文。	L R
501	255	72図	P.L.34	覆土	胴部	縦位隆帯区画後、縄文施文。	R L
501	257		P.L.34	覆土	胴部	縦位沈線	
501	258		P.L.34	覆土	胴部	沈線U字文	
502	259	72図	P.L.34	覆土	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に縄文。	R L
502	260		P.L.34	覆土	胴部	隆帯U字文?	R L R
502	261	72図	P.L.34	16	胴部	沈線J字文、区画内列点充填。	
502	262	72図	P.L.34	13	胴部	沈線渦巻文	
503	263	72図	P.L.34	46~54	口~胴	横位把手、沈線U字文。	L R
503	264		P.L.34	覆土	胴部	沈線渦巻文、沈線内縄文充填。	L R
503	265		P.L.34	32	胴部	沈線渦巻文、沈線内縄文充填。	L R
508	266	73図	P.L.34	11	口縁部	口縁部横円区画、区画内縄文施文。	L R
508	267	73図	P.L.34	9	口縁部	沈線U字文、沈線内縄文施文。	R L

土坑No	No	図版No	挿図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等	
508	388			P.L.34	覆土	口縁部	沈線U字文、沈線内縄文施文。	R L R
508	389			P.L.34	14	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	R L
508	270	73図		P.L.34	4	胴部	胴部波状文施文後、横位ナデ。	
509	271	74図		P.L.34	覆土	胴部	横位隆帯下に垂下沈線、沈線間に波状文。	
510	272	74図		P.L.35	覆土	口縁部	楕円区画文	R L
510	273			P.L.35	8	胴部	沈線U字文	L R
513	274			P.L.35	覆土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
513	275A	74図		P.L.35	7-9	胴-底	沈線J字文、257 Bと同一個体。	
513	275B			P.L.35	7-10	胴部	沈線J字文	
514	277	74図		P.L.35	8	突起	口縁下に円形刺突、沈線。	
514	278			P.L.35	22	胴部	縦位隆帯区画後、縄文施文。	R L
514	279			P.L.35	12	胴部	垂下沈線区画後、縄文施文。	R L L
514	280			P.L.35	9	胴部	垂下沈線区画後、縄文施文。	L R
514	281			P.L.35	15	胴部	縦位条線文	
514	282			P.L.35	4-14	胴-底	無文	
519	283			P.L.35	10	突起	内側に刺突・周囲に沈線、突起下に沈線U字文。	
519	284	74図		P.L.35	4	口縁部	沈線J字文	
519	285			P.L.35	14	口縁部	沈線J字文、区画内列点充填。	
519	286			P.L.35	覆土	胴部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
519	287	74図		P.L.35	39	胴部	沈線J字文、区画内列点充填。	
519	288			P.L.35	覆土	胴部	地文縄文	R L
519	289			P.L.35	覆土	胴部	地文縄文	L R
522	290			P.L.35	31	口縁部	縄文施文後、横位弧状沈線3条。	R L
522	291			P.L.35	13	口縁部	口縁部縄文横位施文、以下縦位施文。	R L
522	292			P.L.35	44	胴部	垂下沈線区画後、縄文施文。	R L
523	293			P.L.35	覆土	口縁部	隆帯楕円区画、区画内縄文施文。	R L
526	294	74図		P.L.35	-26	口縁部	縄文施文後、沈線U字文。	R L
526	295	74図		P.L.35	覆土	口縁部	口縁部下に横位沈線。	R L
526	296			P.L.35	覆土	口縁部	口縁下に横位隆帯、隆帯下に縦位隆帯を繋ぐ。	
526	297			P.L.35	覆土	口縁部	沈線J字文	
526	298	74図		P.L.35	-35	胴部	細隆帯U字文	R L
526	299			P.L.35	覆土	胴部	縦位隆帯区画	R L
526	300			P.L.35	覆土	胴部	横位沈線下に縦位条線文。	
536	301			P.L.36	35	口縁部	口縁部下に横位隆帯。	
536	302			P.L.36	覆土	口縁部	口縁部無文帯、以下縄文施文。	R L
536	303			P.L.36	覆土	口縁部	口縁部無文帯下にU字文。	R L
536	304	75図		P.L.36	覆土	口縁部	内面口縁部に沈線が廻る、無文。	
536	305	75図		P.L.36	3	口縁部	無文	
536	306			P.L.36	24	口縁部	口縁部下に沈線U字文。	
536	307			P.L.36	覆土	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線下に沈線U字文。	
536	308	75図		P.L.36	38	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線下に沈線U字文。	
536	309	75図		P.L.36	覆土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	R L
536	310			P.L.36	覆土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	R L
536	311			P.L.36	覆土	口縁部	沈線J字文	
536	312	75図		P.L.36	覆土	口縁部	口縁部下に横位沈線2条、沈線下に条線文。	
536	313	75図		P.L.36	13	口-胴	口縁下・胴部に孔1、浅鉢。	
536	314	75図		P.L.36	覆土	胴部	縦位隆帯刺突、弧状沈線内に縄文施文。	L R
536	315	75図		P.L.36	47	胴部	隆帯楕円区画、区画内縄文施文。	L R
536	316			P.L.36	覆土	胴部	縦位隆帯。無文。	
536	317			P.L.36	覆土	胴部	沈線条線文、沈線内縄文充填。	R L
536	318	75図		P.L.36	覆土	胴部	沈線U字文	L R
536	319			P.L.36	床直	胴部	縄文施文後、沈線U字文。	L R
536	320	75図		P.L.36	8	胴部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	R L
536	321	75図		P.L.36	覆土	胴部	沈線条線文、沈線内縄文充填。	L R
536	322			P.L.36	覆土	胴部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
536	323			P.L.36	覆土	胴部	沈線J字文、区画内列点充填。	
536	324	75図		P.L.36	27	胴部	沈線J字文	
538	325	75図		P.L.36	32-66	口縁部	隆帯条線文、楕円区画、胴部縦位沈線。	



土坑No	No	図版No	棟号No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等	
538	326			P L 36	35	口縁部	隆帯槽内区画、区画内縄文施文。	R L
538	327	75 図		P L 36	30	口縁部	横位沈線下に縄文施文。	R L
538	328	75 図		P L 36	30	胴 部	垂下沈線、沈線間に波状文。	
538	329			P L 36	30	胴 部	垂下沈線、沈線間に縄文施文。	R L
539	330	76 図		P L 36	62	口縁部	口縁部無文帯、以下縄文施文。	L R
539	331			P L 36		口縁部	口縁下細隆帯は口唇で交差小突起形成、細隆帯より弧状沈線。	R L
539	332	76 図		P L 36		口唇部	口縁部内折、頸部以下に沈線文、沈線間縄文。	L R
539	333	76 図		P L 36	61	把 手	橋状把手、縄文施文。	L R
539	334	76 図		P L 36		胴部	縦位細隆帯、隆帯間に縄文施文。	L R
539	335			P L 36	57	胴 部	垂下沈線、沈線間に波状文。	
539	336	76 図		P L 36	55	胴 部	沈線U字文、縄文光墳。	L R
539	337			P L 36		胴 部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
539	338	76 図		P L 36	64	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
539	339	76 図		P L 36	28～36	胴 部	胴部に縄文を全面施文、底部に近い胴部は無文。	L R
542	340	75 図		P L 36		口縁部	口縁部内折、沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
545	341	76 図		P L 36	12	突 起	左右の側面・上面に孔が各1、上面には孔を避ける沈線。	
545	342	76 図		P L 36	11	突 起	左右の側面・上面の孔が繋がる、上面には孔を避ける沈線。	
545	343	76 図		P L 36		土製品	上端に孔1、垂れ飾り?	
547	344			P L 36		口縁部	隆帯槽内区画、区画内に縄文施文。	L R
547	345			P L 36	8	胴 部	沈線U字文、縄文光墳。	
548	346	76 図		P L 37	46～57	口縁部	口縁突起下に「8」の字」文、沈線区画内に刺突。	
548	347			P L 37	71	口縁部	沈線J字文、区画内列点光墳。	
548	348			P L 37		口縁部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
548	349			P L 37		口縁部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
548	350			P L 37	35	口縁部	口縁下に縦位隆帯刺突、隆帯間に沈線J字文。	
548	351	76 図		P L 37	55	口縁部	波状口縁の頂部に突起、無文。	
548	352	76 図		P L 37	65	蓋	孔1、無文。	
548	353			P L 37		胴 部	横位隆帯～沈線渦巻文間を帯手状文で繋ぐ。	L R
548	354	76 図		P L 37	31～42	胴 部	沈線J字文、区画内列点光墳。	
548	355	76 図		P L 37		胴 部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
548	356	76 図		P L 37		胴 部	縄文施文後、沈線渦巻文。	L R
548	357			P L 37		胴 部	横位隆帯下に縄文施文。	R L
548	358	76 図		P L 37		胴 部	縦位隆帯間に縄文施文。	L R
548	359			P L 37		胴 部	縦位委線文	
548	360			P L 37		胴 部	縄文施文後、縦位列点。	L R
549	361			P L 38	1	口縁部	口縁部下に横位太沈線、沈線下縄文。	R L
549	362	79 図		P L 38		口縁部	隆帯槽内区画文、区画内に縄文施文。	R L
549	363			P L 38	12	口縁部	縄文施文後、縦位隆帯。	R L
549	364	79 図		P L 38	6	胴 部	縄文施文後、垂下沈線・帯手文。	R L
549	365			P L 38		胴 部	縄文施文後、垂下沈線。	L R
549	366	79 図		P L 38		胴 部	沈線槽内区画内縄文施文、以下に委線文。	R L
551	390	79 図		P L 38	25	胴 部	沈線渦巻文	
551	391			P L 38	13	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
552	367	78 図		P L 38	55～75	口唇部	波状突起頂部に刺突・沈線、沈線J字文。	R L
552	368A	78 図		P L 38	108～114	注 口	槽内区画間に刺突、区画内に縄文施文、注口。	L R
552	368B			P L 38	105	注 口	槽内区画間に刺突、区画内に縄文施文、注口、368Aと同一。	
552	369	78 図		P L 38	109	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
552	370	78 図		P L 38	59～108	胴 部	横位沈線粗野に縄文施文。	R L
552	371	78 図		P L 38	46	胴 部	縄文施文後、沈線渦巻文。	L R
552	372	78 図		P L 38	109～117	胴 部	縄文施文後、垂下沈線。	R L
552	373	78 図		P L 38	96	垂 飾	上端に孔1がある。	
552	374	78 図		P L 38	116	把 手	口縁上部に把手、縄文を全面施文。	L R
552	375	78 図		P L 38	105	口縁部	隆帯渦巻文	
552	376	78 図		P L 38	115	口縁部	隆帯槽内区画、区画内委線文。	
552	377			P L 38	120	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	
552	378			P L 38		口縁部	沈線J字文、沈線内縄文光墳。	L R
552	379			P L 38		口縁部	沈線U字文、縄文光墳。	L R
552	380	78 図		P L 38		胴 部	沈線J字文、区画内列点光墳。	

土坑No	No	図版No	挿図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等
552	381	78 国	P L 38	101	胴 部	縦位隆帯刺突文、隆帯間に沈線区画。	
552	382	78 国	P L 38	64	胴 部	横位隆帯下に隆帯U字文、区画内縄文。	L R
552	383		P L 38	覆 土	胴 部	縄文施文後、縦位隆帯。	R L
552	384	78 国	P L 38	18	胴 部	縄文施文後、隆帯渦巻文。	R L
552	385		P L 38	62	胴 部	垂下沈線間に縄文施文。	R L
552	386		P L 38	120	胴 部	垂下沈線間に縄文施文。	R L
552	387		P L 38	117	胴 部	縦位波状文施文後、垂下沈線。	
552	388			117	胴 部	縦位波状文施文後、垂下沈線。	
552	389	62 国	P L 38	53	蓋	無文	
555	392	79 国	P L 38	覆 土	胴 部	縦位条線文	
555	393		P L 38	覆 土	胴 部	条線文施文後、沈線3状を弧状に重ねる。	
555	394		P L 38	覆 土	胴 部	沈線区画内に縄文を施文。	L R
557	395	79 国	P L 39	46	口縁部	口縁部横位沈線、沈線下に縄文施文。	L R
557	396		P L 39	覆 土	口縁部	波状口縁下に沈線柵目区画文。	R L
557	397		P L 39	覆 土	口縁部	口縁部刺突下に縄文施文。	L
557	398	79 国	P L 39	覆 土	口縁部	口縁部横位沈線、沈線区画、区画内縄文。	L R
557	399	79 国	P L 39	覆 土	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	L R
557	400		P L 39	覆 土	胴 部	縄文施文後、縦位隆帯。	R L
557	401	79 国	P L 39	7	胴 部	縄文施文後、縦位沈線。	R L
557	402	79 国	P L 39	覆 土	胴 部	縦位条線文	
557	403	79 国	P L 39	覆 土	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
558	404		P L 39	覆 土	口縁部	縄文施文後横位沈線、波状口縁。	R L
558	405	80 国	P L 39	覆 土	胴 部	縦位条線文	
558	406	80 国	P L 39	覆 土	胴 部	垂下沈線、沈線間に縄文施文。	R L
558	407	80 国	P L 39	覆 土	土製品	棒状、先端に孔を穿つ、孔の下が瓢状に突出、下端に刺突。	
559	408A	81 国	P L 39	8～40	口～胴	口縁部無文文、胴部上半に柵目区画。	R L
559	408B	81 国	P L 39	6～16	胴 部	柵目区画下に条線文。	R L
559	409		P L 39	125	口縁部	隆帯柵目区画	
559	410	81 国	P L 39	覆 土	口縁部	横位隆帯下に縄文施文。	R L
559	411		P L 39	92	口縁部	口縁部横位太沈線、以下縄文施文。	R L
559	412	81 国	P L 39	106	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	
559	413		P L 39	107	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	
559	414	81 国	P L 39	18	胴 部	横位隆帯下に縄文施文。	L R
559	415		P L 39	覆 土	胴 部	横位隆帯下に縄文施文。	R L
559	416		P L 39	12	胴 部	縄文施文後、縦位沈線。	L R
559	417		P L 39	96	胴 部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L R
559	418		P L 39	覆 土	胴 部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L R
559	419	81 国	P L 39	98	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
559	420		P L 39	109	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
559	421	81 国	P L 39	133	胴 部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	L R
559	422	81 国	P L 39	不 明	胴 部	沈線J字文	
559	423	81 国	P L 39	98	胴 部	沈線J字文、区画内列点充填。	
559	464		P L 39	103	口縁部	波状口縁下に隆帯渦巻文、柵目区画文。	
562	424	82 国	P L 40	覆 土	胴 部	横位波状隆帯を挟んで竹管による斜向沈線。	
562	425		P L 40	覆 土	胴 部	隆帯渦巻文下に縄文施文。	L R
564	426	82 国	P L 40	覆 土	口縁部	口縁部下横位沈線・弧状沈線、沈線内縄文。	R L
564	427		P L 40	覆 土	口縁部	口縁部下刺突、沈線J字文。	R L
564	428		P L 40	覆 土	口縁部	口縁部下刺突、沈線J字文。	R L
564	429		P L 40	覆 土	口縁部	口縁部無文帯下に縄文施文。	L R
564	430	82 国	P L 40	覆 土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填。	呉東 L
564	431	82 国	P L 40	覆 土	口縁部	沈線J字文、沈線内縄文充填、口縁内折。	L R
564	432	82 国	P L 40	覆 土	口縁部	沈線J字文	
564	433	82 国	P L 40	覆 土	口縁部	口縁部無文	
564	434	82 国	P L 40	覆 土	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	R L
564	435		P L 40	覆 土	胴 部	横位沈線下に波状文。	
564	436	82 国	P L 40	覆 土	胴 部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	R L
564	437	82 国	P L 40	覆 土	胴 部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	R L
564	438		P L 40	覆 土	胴 部	垂下沈線、区画内縄文、沈線間条手文。	L R

土坑No	No	図版No	挿図No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等
564	439		P.L.40	覆土	胴部	垂下沈線、区画内縄文。	R.L
564	440		P.L.40	覆土	胴部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L.R
564	441	82図	P.L.40	覆土	脚部	台付昇脚部、黒文。	
565	442		P.L.40	例木覆土	口縁部	隆帯渦巻文	
565	443		P.L.40	例木覆土	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に縄文施文。	L.R
565	444		P.L.40	例木覆土	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に太沈線、縄文施文。	R.L
566	445	82図	P.L.40	例木覆土	口縁部	横位沈線下に縦位沈線、地文条線文。	
567	446		P.L.40	覆土	口縁部	口縁部無文帯下に縄文施文。	R.L
567	447	82図	P.L.40	88	口縁部	沈線J字文、区画内列点充填。	
567	448	82図	P.L.40	21	胴部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L.R
568	449	82図	P.L.40	12～16	胴部	垂下沈線、区画内に縄文施文。	R.L
573	450		P.L.40	覆土	胴部	垂下沈線3条、区画内に縄文施文。	L.R
574	451		P.L.40	覆土	口縁部	沈線区画内に縄文を横位施文する。	L.R
574	452		P.L.40	覆土	胴部	沈線渦巻文、地文縄文。	R.L
574	453		P.L.40	覆土	胴部	縦位細隆帯間に縄文を施文、施文後隆帯の脇を撫で。	R.L
574	454		P.L.40	覆土	胴部	沈線区画内に縄文を施文する。	R.L
575	455		P.L.40	7	口縁部	横位隆帯下に縄文施文。	R.L
575	456		P.L.40	覆土	胴部	縦位波状隆帯を挟んで、竹管による幅の広い並行沈線を施す。	
575	457		P.L.40	1	胴部	隆帯椀口区画下に垂下沈線、地文縄文。	R.L
575	458	82図	P.L.40	覆土	胴部	縦位隆帯上を利突、隆帯間に沈線J字文。	L.R
575	459	82図	P.L.40	覆土	胴部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L.R
575	460	82図	P.L.40	覆土	胴部	波状条線文	
575	461		P.L.40	覆土	胴部	垂下沈線、区画内に縄文施文。	R.L
576	462		P.L.40	覆土	胴部	垂下沈線、区画内に縄文施文。	R.L
576	463		P.L.40	17	胴部	縦位条線文	
593	465	83図	P.L.41	覆土	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、隆帯下縄文。	L.R
593	466		P.L.41	106	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、隆帯下縄文。	L.R
593	467		P.L.41	75	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯。	
593	468	83図	P.L.41	72	口縁部	波状条線文施文	
593	469		P.L.41	118	口縁部	縄文施文後、口縁部ナゲ。	R.L
593	470		P.L.41	61	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、隆帯下縄文。	R.L
593	471	83図	P.L.41	61	口縁部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L.R
593	472		P.L.41	覆土	口縁部	口縁部縄文横位施文2段、以下縦位施文。	R.L
593	473		P.L.41	覆土	口縁部	口縁部縄文横位施文、以下縦位施文。	R.L
593	474	83図	P.L.41	77	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、隆帯下条線文、475と同一。	
593	475		P.L.41	62	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、隆帯下条線文。	
593	476		P.L.41	75	口縁部	縦位条線文	
593	477	83図	P.L.41	59	胴部	横位隆帯下に弧状・垂下沈線。	R.L
593	478	83図	P.L.41	85	胴部	縄文施文後、椀口沈線文・斜向沈線文。	R.L
593	479	83図	P.L.41	80	胴部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	R.L
593	480		P.L.41	96	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	R.L
593	481	83図	P.L.41	75	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	L.R
593	482		P.L.41	51	胴部	縄文施文後、垂下沈線。	R.L
593	483	83図	P.L.41	84	胴部	縦位沈線文	
593	484		P.L.41	117	胴部	縦位条線文	
593	485		P.L.41	109	胴部	縦位条線文	
593	486		P.L.41	覆土	胴部	縦位隆帯利突、隆帯間に縦位沈線文。	
593	487	83図	P.L.41	29～83	口縁部	波状口縁頂部に突起、沈線J字文、区画内に縄文施文。	
593	488	83図	P.L.41	54	口縁部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L.R
593	489		P.L.41	覆土	口縁部	沈線J字文	
593	490	83図	P.L.41	86	口縁部	沈線J字文、区画内の円形利突に沈線を繋ぐ。	
593	491		P.L.41	81	口縁部	沈線J字文、区画内に縄文、口唇部円形利突。	L.R
593	492	83図	P.L.41	覆土	口縁部	沈線J字文、区画内に縄文施文、縦位隆帯利突。	R.L
593	493		P.L.41	77	口縁部	沈線J字文、区画内列点充填。	
593	494		P.L.41	覆土	口縁部	沈線J字文	
593	495		P.L.41	覆土	口縁部	口縁部下に横位沈線、口縁部内湾。	
593	496	83図	P.L.41	82	口縁部	沈線J字文、区画内に縄文施文。	L.R
593	497	83図	P.L.41	51	胴部	R字状の沈線区画	

土坑No	No	図版No	神田No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等
593	498	83 図	P L 41	覆 土	胴 部	頂部横位沈線間に刺突、胴部沈線区画内に列点。	
593	499	83 図	P L 41	2～93	胴 部	胴部沈線区画内に横文、区画内に円形刺突・沈線を繋ぐ。	L R
593	500	83 図	P L 41	40	胴 部	渦巻状の横位沈線区画。	
593	501		P L 41	107	胴 部	沈線J字文、区画内列点充填。	
593	502		P L 41	覆 土	胴 部	沈線J字文、区画内列点充填。	
593	503	83 図	P L 41	29～53	胴 部	沈線J字文、区画内に横文施文。	異束L
593	504	84 図	P L 41	54	突 起	筒状・中空、上面にC字状の沈線、孔2。	
593	505	84 図	P L 41	58	突 起	筒状・中空、上面にC字状の沈線、孔1。	
593	506	83 図	P L 41	27	土製品	沈線J字文	
593	507	83 図	P L 41	覆 土	土製品	口縁部横位沈線2条。	
593	621	83 図	P L 41	覆 土	土製品	土製陶輪	L ?
597	508		P L 42	覆 土	胴 部	縦位隆帯、隆帯間に横文。	R L
597	509		P L 42	覆 土	胴 部	横文施文後、縦位沈線。	L R
597	510		P L 42	38	胴 部	沈線J字文、区画内に横文施文。	L R
598	511		P L 42	覆 土	口縁部	沈線J字文、区画内に横文施文。	R L
598	512		P L 42	覆 土	胴 部	横文施文後、縦位沈線。	L R
608	513		P L 42	2	胴 部	沈線J字文、区画内列点充填。	
611	514		P L 42	覆 土	口縁部	口縁部無文帯下に太沈線、以下横文施文。	R L
611	515		P L 42	覆 土	口縁部	沈線J字文、区画内列点充填。	
611	516		P L 42	覆 土	胴 部	横文施文後、縦位沈線。	R L
611	517		P L 42	覆 土	胴 部	沈線J字文、区画内に横文施文。	R L
612	518	84 図	P L 42		胴 部	沈線J字文・縦位沈線、区画内に横文・裏手文。	R L
612	519	84 図	P L 42		口縁部	隆帯渦巻文、裏手文、胴部横文。	R L
612	520		P L 42		胴 部	縦位条線文	
613	521		P L 42		口縁部	横位隆帯	
613	522		P L 42		胴 部	横位沈線下に円形刺突。	
613	523		P L 42		胴 部	垂下沈線、地文横文。	L R
613	524	84 図	P L 42		胴 部	縦位隆帯、地文横文。	L R
629	525	85 図	P L 42	1～15	口～胴	波頂部突起4区分、突起したに縦位隆帯刺突、沈線J字文。	
629	526	85 図	P L 42	20～27	口～胴	隆帯横凹区画、胴部垂下沈線、地文横文。	R L
629	527	85 図	P L 42	12	口縁部	波頂部隆帯渦巻文、地文横文。	R L
629	528		P L 42	32	口縁部	波状口縁下の横位沈線、以下条線文。	
629	529		P L 42	33	口縁部	沈線横凹区画、区画内横文。	R L
629	530		P L 42	24	口縁部	口縁下部円形刺突2列、以下条線文。	
629	531	85 図	P L 42	不 明	突 起	橋状突起、突起外面S字状沈線。	R L
629	532	85 図	P L 42	覆 土	胴 部	横位隆帯下に横文施文。	R L
629	533	85 図	P L 42	2	胴 部	横位沈線下に垂下沈線、地文横文。	L R L
629	534	85 図	P L 42	9	胴 部	沈線J字文	R L
629	535	85 図	P L 42	50	胴 部	垂下沈線、地文横文。	L R
629	536	85 図	P L 42	27	胴 部	縦位条線文	
629	537		P L 42	2	胴 部	波状条線文	
631	539		P L 43	胴木覆土	口縁部	隆帯横凹区画内に横文を施文する。	R L
631	540		P L 43	胴木覆土	口縁部	隆帯渦巻文内に横文を施文する。	R L
631	542		P L 43	胴木覆土	口縁部	横文施文後に沈線J字文を施文する、0段多条。	R L
631	543		P L 43	胴木覆土	口縁部	口縁部下の横位沈線下に横文施文、波状口縁。	L R
631	544		P L 43	胴木覆土	口縁部	横位隆帯が顕る、地文横文。	R L
631	545		P L 43	胴木覆土	口縁部	口縁部下の横位隆帯下に横文施文。	R L
631	546		P L 43	胴木覆土	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線。	
631	547		P L 43	胴木覆土	口縁部	無文、口唇部は外削ぎ。	
631	548		P L 43	胴木覆土	口縁部	沈線区画内に列点充填。	
631	551		P L 43	胴木覆土	胴 部	沈線J字文・裏手文、地文横文。	R L
631	552		P L 43	胴木覆土	胴 部	横文施文後に垂下沈線3条。	R L
631	553		P L 43	胴木覆土	胴 部	横文施文後に垂下沈線3条。	R L
631	554		P L 43	胴木覆土	胴 部	横文施文後に垂下沈線。	R L
631	555		P L 43	胴木覆土	胴 部	横文施文後に垂下沈線。	R L
631	556		P L 43	胴木覆土	胴 部	垂下沈線、沈線間に波状条線文を施す。	
631	557		P L 43	胴木覆土	胴 部	粗い条線文を施文する。	
631	558		P L 43	胴木覆土	胴 部	細い条線文を格子状に施文する。	

土坑No	No	図版No	神田No	出土位置	部位	文 様 の 特 徴 等	原体等	
631	559			P.L.43	銅本覆土	銅 部	銅沈線をU字状に施文。	
641	560	86図		P.L.43	5	突 起	正面・突起側面に孔1、8の字状沈線。	
641	561			P.L.43	16	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯。	
649	562	86図		P.L.43	60	銅 部	隆帯U字文、上端のU字状の破損は意図的。	R.L
651	563	86図		P.L.43	床 直	口縁部	沈線槽内区画、横位隆帯下に垂下沈線。	R.L
651	564	86図		P.L.43	横 底	口縁部	無文帯下に横位・垂下沈線、波状口縁。	R.L
651	565			P.L.43	2	口縁部	縦位条線文	
651	566			P.L.43	25	口縁部	隆帯渦巻文、区画内に縄文施文。	R.L
651	567			P.L.43	12～26	銅 部	縄文施文後、垂下沈線。	R.L.R
651	568			P.L.43	9～10	銅 部	縄文施文後、垂下沈線。	R.L
658	569			P.L.43		口縁部	沈線J字区画内に縄文施文。	L.R
658	570			P.L.43		口縁部	沈線J字区画内に縄文施文。	L.R
658	571			P.L.43		口縁部	沈線J字区画内に縄文施文、口唇部に沈線。	L.L.R
658	572			P.L.43		口縁部	口縁部無文帯下に縄文横位施文。	L.R
658	573			P.L.43		銅 部	縦位隆帯利突間に沈線J字区画。	
662	577			P.L.44		口縁部	沈線J字区画内に列点充填。	
673	578	88図		P.L.44	覆 土	口縁部	口縁円形利突・U字文、地文縄文。	R.L.R
673	579			P.L.44	横 底	口縁部	口縁円形利突・U字文、地文縄文。	R.L.R
673	580			P.L.44	21	口縁部	沈線槽内区画、区画内に縄文施文。	L.R
673	581			P.L.44	覆 土	銅 部	沈線U字文、区画内に縄文施文。	L.R
673	582	88図		P.L.44	7～10	銅 部	縄文施文後、垂下沈線。	
678	583			P.L.44	56	口縁部	波状口縁下に弧状沈線、沈線U字文。	R.L
678	584	88図		P.L.44	54	銅 部	隆帯U字文・渦巻文を繋ぐ。	R.L
678	585	88図		P.L.44	17	銅 部	沈線U字文、区画内に縄文充填。	L.R
678	586			P.L.44	覆 土	銅 部	縦位条線文	
678	587			P.L.44	30	銅 部	沈線渦巻文、区画内に縄文充填。	L.R
678	588			P.L.44	22	銅 部	沈線渦巻文、区画内に縄文充填。	
678	589			P.L.44	41	銅 部	沈線J字文	
679	590	88図		P.L.44	22	銅 部	沈線区画内に縄文施文。	L.R
679	591	88図		P.L.44	13	銅 部	沈線J字文、区画内に列点充填。	
680	592	88図		P.L.44	10	口縁部	沈線J字文、区画内に列点充填。	
680	593			P.L.44	17	銅 部	幅広い竹管状工具による条線。	
683	594	86図		P.L.44	13	把 手	横位に紐文の把手が付く。	
685	595			P.L.44	38	銅 部	縄文施文後、垂下沈線。	R.L
686	596	87図		P.L.44	38	口縁部	浅鉢、後期?	
686	597	87図		P.L.44	19	銅 部	沈線渦巻文、区画内に縄文充填。	L.R
686	598	87図		P.L.44	2	銅 部	隆帯渦巻文、区画内に縄文施文。	L.R
686	599			P.L.44	覆 土	銅 部	縦位条線文	
687	600				26	口縁部	口縁部突起S状のモチーフ、隆帯槽内区画。	
688	601	88図		P.L.44	22	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、U字文。	
688	602	88図		P.L.44	覆 土	突 起	突起上面に凹面、外面に沈線J字区画、逆C字状の隆帯利突。	
691	603			P.L.45	銅本覆土	口縁部	沈線U字文	L.R
691	604			P.L.45	銅本覆土	銅 部	沈線渦巻文、区画内に縄文充填。	L.R
692	605			P.L.45	銅本覆土	口縁部	口縁部沈線槽内区画、区画内に縄文施文。	R.L
692	606			P.L.45	銅本覆土	口縁部	口縁部下に沈線、縄文施文。	R.L
692	607			P.L.45	銅本覆土	銅 部	沈線U字文、区画内に縄文施文。	R.L
692	608			P.L.45	銅本覆土	銅 部	垂下沈線間に沈線U字文、区画内に縄文施文、0段多条。	R.L
692	609			P.L.45	銅本覆土	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	L.R
693	610			P.L.45	銅本覆土	口縁部	横位沈線下に縄文を斜位施文。	L
693	611			P.L.45	銅本覆土	口縁部	横位沈線下に縄文を横位施文。	R
693	612			P.L.45	銅本覆土	口縁部	横位沈線下に縄文を斜位施文、0段多条R.L。	R.L
693	613			P.L.45	銅本覆土	銅 部	垂下沈線間に蛇行沈線、地文縄文。	L.R
693	614			P.L.45	銅本覆土	銅 部	垂下沈線間に縄文施文。	R.L.R
693	615			P.L.45	銅本覆土	銅 部	細隆帯渦巻文、渦巻文内に縄文施文。	R.L
702	616			P.L.45	覆 土	口縁部	隆帯渦巻文、区画内に縄文施文。	R.L
703	617	89図		P.L.45	3	銅 部	隆帯槽内区画文?区画内に縄文施文。	L.R
703	618			P.L.45	覆 土	銅 部	隆帯槽内区画文?区画内に縄文施文。	L.R
703	619	89図		P.L.45	覆 土	銅 部	沈線J字文、区画内に列点充填。	
711	620	89図		P.L.45	覆 土	銅 部	沈線J字文、区画内に列点充填。	

包含層出土土器観察表

No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1001	91 図	P L 46	325・815	胴 部	隆帯内を沈線で楕円区画。金雲母を含む。	LR	中期後
1002	91 図	P L 46	484住フテ	口縁部	角押文下に波状工具による波状の押し引き。	RL	勝 坂
1003		P L 46	330・815	突 起	内・外面とも隆帯上を波状工具による連続刺突する。		勝 坂
1004	98 図	P L 51	340・825	胴 部	連弧文	LR	E3第1
1005	98 図	P L 51	330・880	胴 部	連弧文	単絡1類	E3第1
1006	98 図	P L 51	340・880	胴 部	連弧文、地文条線文。		E3第1
1007	98 図	P L 51	340・815	口縁部	波状口縁直下に隆帯渦巻文、区画内に縄文。	LR?	E3第2
1008	98 図	P L 52	335・805	胴 部	隆帯渦巻文	LR	E3第4
1009	91 図	P L 46	484住フテ	口縁部	隆帯渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	加E2
1010	91 図	P L 46	325・800	胴 部	隆帯内に小突起あり。	RL	加E2
1011	91 図	P L 46	340・825	胴 部	頸部無文帯下に横位沈線3条、口縁部は隆帯楕円区画?	RL	加E2
1012	91 図	P L 46	330・820	口縁部	横位隆帯下に沈線。	単絡1類	加E2
1013	91 図	P L 46	310・800	胴 部	隆帯による楕円区画文。	RL	加E2
1014	91 図	P L 46	340・820	口縁部	隆帯による楕円区画。		加E2
1015	91 図	P L 46	310・795	口縁部	口唇部沈線、波状口縁。		加E2
1016	91 図	P L 46	330・825	口縁部	隆帯による楕円区画。		加E2
1017	91 図	P L 46	325・820	口縁部	隆帯による楕円区画・渦巻文下に隆帯を懸垂。	RL	加E2
1018	91 図	P L 46	310・790	口縁部	隆帯楕円区画、隆帯懸垂、地文縄文。	LR	加E2
1019	91 図	P L 46	325・865	口縁部	横位隆帯下に隆帯楕円区画文、地文縄文。	LR	加E2
1020	91 図	P L 46	310・790	口縁部	隆帯楕円区画文、区画内に縄文施文。	RL	加E2
1021		P L 47	315・865	口縁部	口縁部下に横位沈線、隆帯による楕円区画、区画内縄文。	RL	加E3
1022	92 図	P L 46	310・965	口縁部	隆帯楕円区画文	RL	加E3
1023	92 図	P L 46	330・880	口縁部	隆帯楕円区画文	RL	加E3
1024	92 図	P L 46	315・865	口縁部	隆帯楕円区画文、区画内に縄文施文。	LR	加E3
1025	92 図	P L 46	330・815	口縁部	沈線楕円区画、区画内に縄文施文。	RL	加E3
1026	92 図	P L 46	315・880	口縁部	横位隆帯下に隆帯懸垂、隆帯間を沈線で区画、0段多条。	RL	加E3
1027	92 図	P L 46	310・805	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線による楕円区画、区画内縄文。	RL	加E3
1028	92 図	P L 46	325・825	口縁部	隆帯渦巻文		加E3
1029		P L 47	325・815	口縁部	沈線楕円区画、区画内に縄文施文。	RL	加E3
1030		P L 47	340・835	口縁部	口縁部横位沈線下に沈線楕円区画、兼手文。	RL	加E3
1031		P L 47	7住フテ	口縁部	横位隆帯下に隆帯隆帯区画、区画内に縄文施文、0段多条。	RL	加E3
1032	99 図	P L 52	330・820	口縁部	楕円区画文		加E3
1033		P L 47	345・830	口縁部	口唇部横位沈線下に沈線楕円区画。	RL	加E3
1034	93 図	P L 46	340・815	口縁部	隆帯による楕円区画、地文縄文。	RL	加E3
1035	92 図	P L 46	315・865	口一胴	隆帯楕円区画、胴部垂下沈線、兼手文、地文縄文。	LR	加E3
1036	92 図	P L 46	330・890	口一胴	沈線楕円区画、胴部垂下沈線。	黄求L	加E3
1037		P L 47	310・860	口縁部	隆帯楕円区画、波状口縁。	RL	加E3
1038		P L 47	325・825	口縁部	隆帯楕円区画、波状口縁。	RL	加E3
1039	92 図	P L 46	330・870	口縁部	沈線楕円区画文、兼手文、地文縄文。	RL	加E3
1040		P L 47	345・865	口縁部	口縁部横位沈線下に沈線楕円区画、波状口縁。	RL	加E3
1041		P L 47	315・875	口縁部	波状口縁下に隆帯渦巻文を配す。	RL	加E3
1042	92 図	P L 46	325・815	口縁部	隆帯楕円区画文、地文縄文。	RL	加E3
1043	92 図	P L 46	315・875	口縁部	隆帯楕円区画、波状口縁。	RL	加E3
1044	92 図	P L 46	315・830	口縁部	沈線楕円区画、波状口縁。	RL	加E3
1045	92 図	P L 46	315・855	口縁部	隆帯楕円区画、波状口縁。	RL	加E3
1046	93 図	P L 46	330・820	胴 部	隆帯楕円区画、楕円文の頂部は三角形形状に突出、兼手文。	RL	加E3
1047	93 図	P L 47	330・820	胴 部	弧状隆帯間に隆帯楕円区画、区画内に縄文施文。	RL	加E3
1048		P L 47	325・795	胴 部	隆帯楕円区画を縦位隆帯で繋ぐ、隆帯脇を沈線で区画。	RL	加E3
1049		P L 47	325・815	胴 部	隆帯楕円区画	RL	加E3
1050		P L 47	340・820	口縁部	隆帯楕円区画、区画内に縄文施文。	RL	加E3
1051		P L 47	325・840	胴 部	隆帯楕円区画、楕円文の頂部は三角形形状に突出。	LR	加E3
1052	93 図	P L 47	325・820	浅鉢胴	口縁部無文帯下に沈線楕円区画。	RL	加E3
1053		P L 47	330・860	胴 部	楕円区画文		加E3
1054		P L 47	315・820	胴 部	隆帯楕円区画文下に縦位隆帯懸垂。	RL	加E3
1055	94 図	P L 47	330・810	胴 部	楕円区画文		加E3

No	図版No	神田No	出土位置(X, Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1056	92 国	P L 46	75 住フク	口縁部	隆帯楕円区画文下に垂下沈線。	R L	加E 3
1057	92 国	P L 46	204 土坑	口縁部	隆帯楕円区画文、渦巻文。	R L	加E 3
1058	92 国	P L 46	330・906	口縁部	隆帯楕円区画文、渦巻文。	L R	加E 3
1059		P L 47	表 様	口縁部下に横位沈線、隆帯楕円区画、区画内に縄文施文。	R L	加E 3	
1060	92 国	P L 46	146 土坑	口縁部	沈線楕円区画文、垂下沈線。	R L	加E 3
1061	93 国	P L 46	284 土坑	口縁部	弧状隆帯間に隆帯楕円区画文、区画内に縄文、0段多条。	R L	加E 3
1062	92 国	P L 46	283 土坑	口縁部	隆帯楕円区画、区画内に縄文施文。	L R	加E 3
1063	92 国	P L 46	505 住	口縁部	隆帯楕円区画、渦巻文、胴部垂下沈線、地文縄文。	R L	加E 3
1064		P L 47	不 明	口縁部	隆帯楕円区画、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1065	93 国	P L 47	146 土坑	浅鉢胴	口縁部無文帯下に沈線渦巻文、垂下沈線。		加E 3
1066	94 国	P L 48	5 溝	胴 部	隆帯の字文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1067	95 国	P L 49	340・830	口縁部	沈線楕円区画文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1068		P L 49	335・805	口縁部	沈線楕円区画文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1069		P L 49	330・815	口縁部	沈線楕円区画文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1070	95 国	P L 49	345・825	口縁部	沈線楕円区画文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1071		P L 49	325・815	口縁部	横位沈線下に縄文施文、0段多条。	R L	加E 3
1072		P L 49	330・875	口縁部	横位沈線下に縄文施文、0段多条。	R L	加E 3
1073		P L 49	330・815	口縁部	横位沈線下に縄文施文。	R L	加E 3
1074	95 国	P L 49	325・815	口縁部	横位沈線下に縄文施文。	R L	加E 3
1075		P L 49	330・820	口縁部	横位沈線下に縄文施文。	R L	加E 3
1076	95 国	P L 49	330・810	口縁部	横位沈線下に縄文施文。	L R	加E 3
1077	95 国	P L 49	不 明	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に縄文施文。	R L	加E 3
1078		P L 49	86 住フク	胴部	横位太沈線、沈線下に縄文を横位施文。	R L	加E 3
1079	95 国	P L 49	3 堀立	胴 部	横位沈線下に斜位沈線、地文縄文。	R L	加E 3
1080	93 国	P L 47	330・830	口縁部	横隆帯による楕円区画?	R L	加E 3
1081		P L 47	484 住フク	口縁部	横隆帯による楕円区画?	R L	加E 3
1082		P L 47	325・815	口縁部	横隆帯による楕円区画?	L R	加E 3
1083		P L 47	325・815	口縁部	横隆帯による楕円区画?	L R	加E 3
1084	93 国	P L 47	325・850	口縁部	口縁部下に横位沈線、胴部隆帯下に垂下沈線、地文縄文。	R L	加E 3
1085		P L 47	325・815	口縁部	沈線楕円区画、地文縄文。	R L	加E 3
1086		P L 47	345・840	口縁部	隆帯楕円区画?	R L	加E 3
1087	93 国	P L 47	330・825	口→胴	口縁部下に横位沈線、胴部隆帯下に垂下沈線、0段多条。	R L	加E 3
1088		P L 47	330・815	胴 部	横位隆帯2条、区画内に縄文光墳、0段多条。	R L	加E 3
1089	93 国	P L 47	315・870	口縁部	横隆帯による楕円区画?	R L	加E 3
1090		P L 47	340・805	胴 部	口縁部無文帯下に隆帯、隆帯下に縄文施文、0段多条。	R L	加E 3
1091		P L 47	330・810	胴 部	横位隆帯下に縄文施文。	L R	加E 3
1092		P L 47	330・820	胴 部	横位隆帯下に垂下沈線、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1093		P L 47	330・810	胴 部	横隆帯下に垂下沈線。	R L R	加E 3
1094	93 国	P L 47	330・805	胴 部	横隆帯下に垂下沈線2条。	R L R	加E 3
1095		P L 47	330・815	口縁部	沈線楕円区画、地文縄文。	R L	加E 3
1096	93 国	P L 47	86 住フク	口縁部	横隆帯による楕円区画?	R L	加E 3
1097		P L 47	104 住フク	口縁部	横位隆帯下に縄文施文。	R L	加E 3
1098		P L 47	88 住フク	胴 部	横位隆帯部付→縄文施文→隆帯上沈線(ナゲ)。	L R	加E 3
1099		P L 47	85 住フク	胴 部	横位隆帯下に縄文施文。	L R	加E 3
1100	93 国	P L 47	330・820	胴 部	隆帯U字文	R L	加E 3
1101		P L 48	325・840	胴 部	隆帯U字文、0段多条。	R L	加E 3
1102		P L 48	310・815	胴 部	横位隆帯下に縦位隆帯を懸垂。	R L	加E 3
1103		P L 48	325・815	胴 部	隆帯渦巻文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1104	93 国	P L 47	335・845	胴 部	隆帯U字文	R L	加E 3
1105	93 国	P L 47	325・810	胴 部	隆帯U字文	R L	加E 3
1106		P L 48	330・880	胴 部	隆帯U字文	R L R	加E 3
1107		P L 48	330・820	胴 部	隆帯U字文	R L	加E 3
1108	93 国	P L 47	325・815	胴 部	隆帯U字文、地文縄文。	L R	加E 3
1109	93 国	P L 47	325・830	胴 部	隆帯U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1110		P L 48	330・835	胴 部	隆帯U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1111	93 国	P L 47	330・815	胴 部	隆帯U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1112		P L 48	330・815	胴 部	隆帯U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1113		P L 48	212 土坑	口縁部	横位隆帯下に隆帯U字文、縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3

No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1114	93 図	P L 47	315 土坑	口縁部	口縁部横位隆帯下に隆帯U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1115		P L 48	59 住フク	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	L R	加E 3
1116	94 図	P L 48	65 住フク	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	R L	加E 3
1117	94 図	P L 48	49 住	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	R L	加E 3
1118		P L 48	68 住フク	胴 部	隆帯渦巻文、区画内に縄文施文。	L R	加E 3
1119		P L 48	59 住フク	胴 部	隆帯渦巻文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1120		P L 48	104 住フク	胴 部	隆帯U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1121		P L 48	52 住フク	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文、0段多条。	R L	加E 3
1122		P L 48	3 住	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	R L	加E 3
1123		P L 48	65 住フク	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文、隆帯脇を沈線で囲む、0段多条。	R L	加E 3
1124	94 図	P L 48	65 住フク	胴 部	隆帯区画文を隆帯で繋ぐ、地文縄文。	R L	加E 3
1125	94 図	P L 48	53 住フク	胴 部	隆帯区画文を隆帯で繋ぐ、地文縄文。	R L	加E 3
1126	94 図	P L 48	10 住	胴 部	隆帯U字文、区画内に縄文施文。	R L	加E 3
1127	94 図	P L 48	65 住フク	胴 部	隆帯U字文		加E 3
1128	94 図	P L 48	7 住フク	胴 部	隆帯区画文を繋ぐ、地文縄文、0段多条。	L R	加E 3
1129		P L 48	85 住フク	胴 部	隆帯柵目区画文、区画内に縄文施文、0段多条。	R L	加E 3
1130		P L 48	101 住フク	胴 部	隆帯渦巻文	R L	加E 3
1131		P L 48	85 住フク	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	R L	加E 3
1132		P L 48	104 住フク	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1133	94 図	P L 48	65 住フク	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1134		P L 48	43 住フク	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	標系 R	加E 3
1135		P L 48	53 住フク	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1136		P L 48	59 住フク	胴 部	縦位隆帯文、地文縄文。	R L	加E 3
1137	94 図	P L 48	340・825	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1138	94 図	P L 48	325・815	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	L R	加E 3
1139		P L 48	315・860	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1140	94 図	P L 48	325・825	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	L R	加E 3
1141		P L 48	340・815	胴 部	縦位隆帯、地文縄文、0段多条。	R L	加E 3
1142	94 図	P L 48	330・805	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1143		P L 48	315・820	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	L R	加E 3
1144		P L 48	330・830	胴 部	縦位隆帯、地文縄文、0段多条。	R L	加E 3
1145		P L 48	330・850	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1146	94 図	P L 48	340・825	胴 部	縦位隆帯、地文縄文、縄文施文側の隆帯の脇に沈線。	R L	加E 3
1147		P L 48	325・820	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	異東 L	加E 3
1148		P L 49	340・825	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	L R	加E 3
1149	94 図	P L 48	330・810	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	L R	加E 3
1150		P L 49	340・825	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	R L	加E 3
1151		P L 49	340・830	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	L R L	加E 3
1152	94 図	P L 48	330・825	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	R L	加E 3
1153	93 図	P L 47	330・830	胴 部	隆帯U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1154		P L 49	330・830	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	R L	加E 3
1155		P L 49	59 住カマド	胴 部	隆帯渦巻文、地文縄文。	L R	加E 3
1156		P L 49	101 住フク	胴 部	縦位隆帯、地文縄文。	L R	加E 3
1157	97 図	P L 51	330・820	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に条線文。		加E 3
1158	97 図	P L 51	310・860	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に条線文。		加E 3
1159		P L 51	350・830	口縁部	横位沈線下に条線文。		加E 3
1160		P L 51	330・820	口縁部	縦位条線文		加E 3
1161	97 図	P L 51	325・815	口縁部	沈線U字文施文後、条線文。		加E 3
1162		P L 51	325・815	口縁部	縦位条線文、波状口縁。		加E 3
1163	97 図	P L 51	330・815	口縁部	隆帯柵目区画、区画内に縄文施文、胴部条線文。	R L	加E 3
1164		P L 51	484 住フク	胴 部	横位隆帯下に条線文。		加E 3
1165		P L 51	330・810	胴 部	沈線柵目区画文下に条線文。		加E 3
1166		P L 51	325・810	胴 部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に条線文。		加E 3
1167		P L 51	305・860	胴 部	縦位条線文		加E 3
1168		P L 51	325・820	胴 部	縦位条線文		加E 3
1169		P L 51	305・805	胴 部	縦位条線文		加E 3
1170		P L 51	340・830	胴 部	縦位条線文		加E 3
1171	97 図	P L 51	345・825	胴 部	縦位条線文		加E 3



No	図版No	神図No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1172		P.L.51	335・615	銅 部	縦位条線文		加E3
1173	97図	P.L.51	330・815	銅 部	浅く繊細な縦位条線文。		加E3
1174		P.L.51	335・820	銅 部	縦位条線文		加E3
1175	97図	P.L.51	315・860	銅 部	浅く繊細な縦位条線文。		加E3
1176		P.L.51	325・815	銅 部	縦位条線文		加E3
1177	97図	P.L.51	330・790	銅 部	弧状条線文		称名寺2
1178	97図	P.L.51	325・815	銅 部	弧状条線文		称名寺2
1179		P.L.51	340・830	口縁部	縦位波状条線文		加E3
1180	97図	P.L.51	330・825	銅 部	地文条線文、沈線U字文、区画内に縄文光塊。	R.L.	加E3
1181		P.L.51	335・805	銅 部	垂下沈線内に波状条線文。		加E3
1182		P.L.51	305・885	銅 部	横位沈線?の上下に波状条線文。		加E3
1183	97図	P.L.51	315・865	銅 部	垂下沈線間に波状条線光塊。		加E3
1184		P.L.51	305・835	銅 部	縦位波状条線文		加E3
1185		P.L.51	315・840	銅 部	縦位波状条線文		加E3
1186		P.L.51	330・790	銅 部	縦位波状条線文		加E3
1187		P.L.51	325・840	銅 部	条線文		加E3
1188	97図	P.L.51	56住フタ	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線下に条線文。		加E3
1189	97図	P.L.51	表 採	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に縦位波状条線文。		加E3
1190		P.L.51	54住フタ	銅 部	条線文		加E3
1191	97図	P.L.51	95住フタ	銅 部	横位隆帯下に縦位波状条線文。		加E3
1192		P.L.51	65住フタ	銅 部	横位沈線2条、沈線上に縄文・下に条線文。	R.L.	加E3
1193	97図	P.L.51	115住フタ	銅 部	縦位条線文		加E3
1194		P.L.51	45住フタ	銅 部	縦位波状条線文		加E3
1195		P.L.51	101住フタ	銅 部	垂下沈線内に波状条線文。		加E3
1196	97図	P.L.51	78住フタ	銅 部	縦位波状条線文		加E3
1197	97図	P.L.51	167土坑	銅 部	縦位波状条線文		加E3
1198		P.L.51	505住フタ	銅 部	波状条線文と縦位条線文の併用。		加E3
1199		P.L.51	505住フタ	銅 部	粗い縦位条線文。		加E3
1200		P.L.51	505住	銅 部	縦位条線文		加E3
1201	97図	P.L.51	68住フタ	銅 部	縦位条線文		加E3
1202	97図	P.L.51	278土坑	銅 部	縦位条線文		加E3
1203		P.L.51	8住	銅 部	縦位条線文		加E3
1204		P.L.51	59住フタ	銅 部	浅く繊細な縦位条線文。		加E3
1205	96図	P.L.50	325・815	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線U字文、地文縄文、0段多条。	R.L.	加E3
1206	96図	P.L.50	325・835	口縁部	沈線U字文	L.R.	加E3
1207	96図	P.L.50	310・805	口縁部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1208		P.L.50	320・790	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1209	96図	P.L.50	340・830	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線U字文、地文縄文、波状口縁。	L.R.	加E3
1210		P.L.50	335・820	口縁部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1211		P.L.50	345・875	銅 部	沈線U字文、地文縄文、0段多条。	R.L.	加E3
1212	96図	P.L.50	335・810	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1213	96図	P.L.50	325・875	銅 部	沈線U字文(対向)、地文縄文。	摩捺I類	加E3
1214	96図	P.L.50	315・795	銅 部	横位沈線下に沈線U字文、地文縄文。	R.L.R	加E3
1215	96図	P.L.50	305・870	銅 部	縦位沈線間に沈線U字文、裏手文。	R.L.	加E3
1216	96図	P.L.50	325・815	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1217		P.L.50	345・875	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	L.R.	加E3
1218		P.L.50	330・820	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1219		P.L.50	330・825	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1220		P.L.50	360・880	銅 部	沈線U字文、地文縄文、0段多条。	R.L.	加E3
1221		P.L.50	325・815	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1222		P.L.50	310・795	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1223	96図	P.L.50	330・825	銅 部	沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1224	96図	P.L.50	335・650	銅 部	沈線U字文(対向)、地文縄文。	R.L.	加E3
1225	96図	P.L.50	330・820	銅 部	隆帯U字文、区画内に縄文光塊。	L.R.	加E3
1226	96図	P.L.50	291土坑	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1227	96図	P.L.50	1溝	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線U字文、地文縄文。	R.L.	加E3
1228		P.L.50	表 採	口縁部	口縁部無文帯下に地文縄文、沈線U字文。	R.L.	加E3
1229		P.L.50	253土坑	口縁部	沈線U字文、地文縄文、0段多条。	R.L.	加E3

No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1230	96 図	P L 50	110 土坑	口縁部	沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1231	96 図	P L 50	59 住フク	胴 部	沈線U字文(対向)、地文縄文。	R L	加E 3
1232	96 図	P L 50	7 住フク	胴 部	沈線U字文(対向)、地文縄文。	L R	加E 3
1233		P L 50	68 住フク	胴 部	沈線U字文(対向)、地文縄文、0段多条。	R L	加E 3
1234		P L 50	56 住フク	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	L R	加E 3
1235		P L 50	45 住フク	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1236	96 図	P L 50	13 住フク	胴 部	沈線U字文(対向)、地文縄文。	L R	加E 3
1237	96 図	P L 50	101 住フク	胴 部	隆帯U字文、区画内に縄文施文。	L R	加E 3
1238	96 図	P L 50	335・815	胴 部	横位隆帯から縦位隆帯を繋ぎ、隆帯上刺突、地文条線文。		加E 3
1239		P L 50	315・810	胴 部	横位隆帯上に刺突、地文条線文。		加E 3
1240		P L 50	300・885	胴 部	縦位隆帯上に円形刺突、地文条線文。		加E 3
1241		P L 50	325・920	胴 部	縦位・盛り出し液状隆帯、地文条線文。		加E 3
1242	96 図	P L 50	330・820	胴 部	横位隆帯上に匙状工具による刺突文、隆帯下にU字文。		加E 3
1243	96 図	P L 50	不 明	胴 部	横位隆帯上に円形刺突文、地文縄文。	L R	加E 3
1244	96 図	P L 50	320・855	胴 部	横位隆帯上に匙状工具による刺突文、隆帯下に渦巻文。	R L	加E 3
1245		P L 50	286 土坑	口縁部	口縁部下に横位刺突、横位沈線、0段多条。	R L	加E 3
1246	96 図	P L 50	7 住フク	口縁部	口縁部下に刺突文、横位沈線。	R L	加E 3
1248	96 図	P L 50	289・303土	口縁部	口縁部下の横位沈線上に刺突、沈線U字文、0段多条。	R L	加E 3
1249		P L 50	59 土坑	口縁部	口縁部下の横位沈線上に刺突文、沈線U字文、0段多条。	R L	加E 3
1250		P L 50	78 住フク	口縁部	口縁部下に横位沈線、匙状工具による刺突文、沈線U字文。	L R	加E 3
1251		P L 50	330・845	胴 部	横位沈線下に刺突文、0段多条。	L R	加E 3
1252	96 図	P L 50	325・820	胴 部	沈線U字文、刺突文。	R L	加E 3
1253	96 図	P L 50	310・800	胴 部	垂下沈線間に沈線U字文、刺突文。	L R	加E 3
1254		P L 50	330・810	胴 部	垂下沈線間に沈線U字文、刺突文。	L R	加E 3
1255	96 図	P L 50	330・810	口縁部	口縁部下に刺突文、横位沈線、刺突文。	R L	加E 3
1256		P L 50	335・820	胴 部	沈線U字文、刺突文。		加E 3
1257		P L 50	330・820	胴 部	沈線U字文、刺突文。	R L	加E 3
1258	95 図	P L 49	不 明	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	R L R	加E 3
1259	95 図	P L 49	310・805	胴 部	縦位沈線、刺突文、地文縄文。	R L	加E 3
1260	95 図	P L 49	484 住フク	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	L R	加E 3
1261	95 図	P L 49	325・825	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	R L	加E 3
1262	95 図	P L 49	310・860	胴 部	縦位沈線、地文縄文、0段多条。	R L	加E 3
1263		P L 49	325・820	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	R L	加E 3
1264		P L 49	320・660	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	R L	加E 3
1265	95 図	P L 49	15 住フク	胴 部	横位沈線下に成果沈線、地文縄文、0段多条。	R L	加E 3
1266	95 図	P L 49	82 住フク	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	R L	加E 3
1267	95 図	P L 49	95 住フク	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	L R	加E 3
1268		P L 49	99 住フク	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	L R	加E 3
1269		P L 49	65 住フク	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	L R	加E 3
1270	96 図	P L 50	350・840	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1271	96 図	P L 50	325・805	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1272		P L 50	330・810	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 3
1273		P L 50	380・890	胴 部	縦位沈線、地文縄文。	L	加E 3
1274		P L 50	345・825	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	L R	加E 3
1275	99 図	P L 52	78 住フク	胴 部	横位沈線下に縦位沈線、区画内に縄文、0段多条。	R L	加E 3
1276		P L 50	65 住フク	胴 部	縦位沈線間に縄文施文。	L R	加E 3
1277	99 図	P L 52	335・850	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、地文縄文。	L R	E 3第4
1278	99 図	P L 52	360・850	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、地文縄文、0段多条。	L R	E 3第4
1279	99 図	P L 52	350・850	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、地文縄文。	R L	E 3第4
1280		P L 53	330・810	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、地文縄文。	L R	E 3第4
1281		P L 53	350・850	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、地文縄文。	R L	E 3第4
1282	99 図	P L 52	335・850	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、地文縄文。	L R	E 3第4
1283		P L 53	330・820	口縁部	沈線U字文、地文縄文。	R L	E 3第4
1284		P L 53	335・820	口縁部	沈線U字文、地文縄文。	R L	E 3第4
1285		P L 53	484 住フク	口縁部	沈線U字文、地文縄文。	R L	E 3第4
1286	99 図	P L 52	335・810	口縁部	沈線U字文、地文縄文、0段多条。	R L	E 3第4
1287	99 図	P L 52	315・790	口縁部	沈線U字文、地文縄文。	R L	E 3第4

No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部位	文様の特徴等	原 体	備 考
1288	99 図	P L 52	325・810	口縁部	沈線U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1289	99 図	P L 52	不 明	口縁部	沈線U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1290		P L 53	345・825	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文織文。	L R	E 3第4
1291		P L 53	330・815	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文織文。	R L	E 3第4
1292		P L 53	325・885	胴 部	垂下沈線間に沈線U字文、区画内に縄文、0段多条。	R L	E 3第4
1293		P L 53	310・860	胴 部	垂下沈線間に沈線U字文、区画内に縄文織文。	R L	E 3第4
1294		P L 53	310・860	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文織文。	R L	E 3第4
1295	99 図	P L 52	32住フタ	口縁部	沈線U字文、区画内に縄文織文、0段多条。	R L	E 3第4
1296	98 図	P L 51	65住フタ	口縁部	口縁部無文帯下の横位沈線下に縦位沈線・縄文、0段多条。	R L	E 3第4
1297	99 図	P L 52	表 採	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文織文。	L R	E 3第4
1298		P L 53	表 採	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文織文。	R L	E 3第4
1299	99 図	P L 52	2 溝	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文織文。	L R	E 3第4
1300		P L 52	891土坑	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文織文。	L R	E 3第4
1301	98 図	P L 51	330・815	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1302	98 図	P L 51	335・820	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	呉東 R	E 3第4
1303	98 図	P L 51	335・810	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1304		P L 52	330・940	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1305	98 図	P L 51	325・810	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1306		P L 52	325・810	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画。	R L	E 3第4
1307		P L 52	330・810	口縁部	口縁部下に太沈線、隆帯下に区画。		E 3第4
1308	98 図	P L 52	330・880	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1309	98 図	P L 52	330・820	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1310		P L 52	484住フタ	口縁部	口縁部下に沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1311	98 図	P L 52	335・820	口縁部	波状口縁直下に太沈線による渦巻文、地文織文。	L R	E 3第4
1312		P L 52	325・815	口縁部	口縁部下に沈線U字区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1313		P L 52	330・820	口縁部	口縁部下に沈線U字区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1314		P L 52	330・850	口縁部	口縁部下に沈線U字区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1315		P L 52	343土坑	口縁部	口縁部下に沈線U字区画、区画内に縄文、0段多条。	R L	E 3第4
1316	98 図	P L 51	340・835	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1317	98 図	P L 51	335・830	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1318	98 図	P L 51	325・825	口縁部	口縁部下の太沈線下にU字状の区画、0段多条の縄文。	R L	E 3第4
1319		P L 52	330・830	口縁部	口縁部下の太沈線下にU字状の区画、0段多条の縄文。	R L	E 3第4
1320		P L 52	320・825	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に縄文。	R L	E 3第4
1321	98 図	P L 52	330・820	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1322	98 図	P L 52	335・825	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1323		P L 52	340・825	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1324		P L 52	315・865	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1325		P L 52	330・875	胴 部	隆帯U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1326	98 図	P L 52	330・825	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1327		P L 52	305・850	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1328		P L 52	325・815	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文、0段多条。	R L	E 3第4
1329	98 図	P L 52	330・825	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	L R	E 3第4
1330		P L 52	325・815	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1331		P L 52	310・825	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1332		P L 52	310・805	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1333		P L 52	340・830	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1334		P L 52	330・810	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1335	98 図	P L 52	330・820	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1336	98 図	P L 52	355・875	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1337	98 図	P L 52	335・840	胴 部	隆帯U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1338		P L 52	325・815	胴 部	隆帯U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1339		P L 52	340・825	胴 部	隆帯U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1340	98 図	P L 52	330・820	胴 部	隆帯U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1341		P L 52	325・815	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1342	98 図	P L 52	335・820	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文、0段多条。	R L	E 3第4
1343	99 図	P L 52	330・820	胴 部	隆帯渦巻文、地文織文。	R L	E 3第4
1344		P L 53	330・815	口縁部	沈線U字文、地文織文。	R L	E 3第4
1345		P L 53	325・840	口縁部	横位太沈線、区画内に縄文織文。	R L	E 3第4

No	図版No	神図No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1346		P L 53	340 - 840	口縁部	横位太沈線、区画内に横文施文、0段多条。	R L	E 3第4
1347		P L 53	340 - 820	口縁部	沈線U字文、区画内に横文施文。	L R	E 3第4
1348	99 図	P L 52	350 - 850	口縁部	横位太沈線、沈線下に横文施文、0段多条。	R L	E 3第4
1349		P L 53	350 - 850	口縁部	横位太沈線、沈線下に横文施文、0段多条。	R L	E 3第4
1350		P L 53	310 - 835	口縁部	横位太沈線、沈線下に横文施文、0段多条。	R L	E 3第4
1351	99 図	P L 52	325 - 810	口縁部	横位太沈線、沈線下に横文施文。	R L	E 3第4
1352	99 図	P L 52	325 - 815	口縁部	横位太沈線、横門区画? 沈線下に横文施文。	R L	E 3第4
1353	101 図	P L 54	330 - 820	口縁部	口縁部無文帯下に沈線U字文、地文確文。	L R	加E 4
1354	100 図	P L 54	335 - 815	口縁部	口縁部無文帯下に横位太沈線、地文確文。	L R	加E 4
1355		P L 54	350 - 835	口縁部	口縁部無文帯下に横文施文、0段多条。	R L	加E 4
1356	100 図	P L 54	305 - 920	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文、0段多条。	R L	加E 4
1357		P L 54	315 - 860	口縁部	口縁部無文帯下に横文施文。	R L	加E 4
1358	100 図	P L 54	330 - 820	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	L R	加E 4
1359	100 図	P L 54	315 - 810	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	L R	加E 4
1360		P L 54	330 - 815	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文、0段多条。	R L	加E 4
1361	100 図	P L 54	325 - 825	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文、0段多条。	L R	加E 4
1362	100 図	P L 54	330 - 820	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	L R	加E 4
1363		P L 54	335 - 880	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	R L	加E 4
1364	101 図	P L 54	315 - 795	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	R L	加E 4
1365		P L 54	320 - 815	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	R L	加E 4
1366	100 図	P L 54	310 - 865	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	R L	加E 4
1367	101 図	P L 54	330 - 825	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に横文。	R L	加E 4
1368		P L 54	330 - 825	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	R L	加E 4
1369		P L 54	不明	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文。	L R	加E 4
1370		P L 54	330 - 825	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文、0段多条。	R L	加E 4
1371	100 図	P L 54	355 - 845	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、横文施文、0段多条。	R L	加E 4
1372	100 図	P L 53	320 - 825	胴 部	隆帯U字文、区画内に横文施文。	R L	加E 4
1373	100 図	P L 53	345 - 830	胴 部	隆帯渦巻文、地文確文。	R L	加E 4
1374		P L 53	315 - 810	胴 部	隆帯渦巻文、地文確文、0段多条。	R L	加E 4
1375		P L 53	340 - 825	胴 部	隆帯渦巻文、地文確文。		加E 4
1376	100 図	P L 53	315 - 850	胴 部	隆帯渦巻文、地文確文。	L R	加E 4
1377		P L 53	335 - 835	胴 部	隆帯渦巻文、地文確文。	R L	加E 4
1378		P L 53	325 - 845	胴 部	隆帯渦巻文、地文確文。	R L	加E 4
1379	100 図	P L 53	320 - 820	胴 部	隆帯U字文、区画内に横文施文。	R L	加E 4
1380	100 図	P L 53	325 - 810	胴 部	縦位隆帯、区画内に横文施文。	R L	加E 4
1381		P L 53	330 - 820	胴 部	縦位隆帯、区画内に横文施文。	R L	加E 4
1382		P L 53	330 - 820	胴 部	縦位隆帯、区画内に横文施文。	L R	加E 4
1383		P L 53	340 - 820	胴 部	縦位隆帯、区画内に横文施文。	R L	加E 4
1384	100 図	P L 53	320 - 880	胴 部	隆帯渦巻文		加E 4
1385	100 図	P L 53	325 - 835	胴 部	隆帯渦巻文		加E 4
1386		P L 53	330 - 805	胴 部	隆帯渦巻文		加E 4
1387	100 図	P L 53	335 - 825	胴 部	隆帯渦巻文		加E 4
1388	100 図	P L 53	305 - 855	胴 部	隆帯渦巻文		加E 4
1389	100 図	P L 53	330 - 825	口縁部	鳳(ひさご)		加E 4
1390	100 図	P L 53	不明	口縁部	鳳(ひさご)		加E 4
1391	100 図	P L 53	310 - 855	口縁部	鳳(ひさご)		加E 4
1392	100 図	P L 53	330 - 830	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に横文。	R L	加E 4
1393	100 図	P L 53	320 - 915	口縁部	口縁部下の太沈線下にU字区画、区画内に0段多条横文。	R L	加E 4
1394	100 図	P L 53	325 - 820	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下にU字状の区画、区画内に横文。	R L	加E 4
1395		P L 53	325 - 820	口縁部	口縁部下の太沈線下にU字区画、区画内に0段多条横文。	R L	加E 4
1396	100 図	P L 53	不明	口縁部	隆帯渦巻文		加E 4
1397	100 図	P L 53	320 - 810	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、胴部縦位隆帯を繋ぐ。	R L	加E 4
1398		P L 53	325 - 820	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、胴部縦位隆帯を繋ぐ。	R L	加E 4
1399		P L 53	320 - 800	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、波状口縁。	R L	加E 4
1400	100 図	P L 53	335 - 820	口縁部	口縁部下に太沈線、沈線下の横位隆帯に縦位隆帯を繋ぐ。	R L	加E 4
1401		P L 53	310 - 860	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、胴部縦位隆帯を繋ぐ。		加E 4
1402	101 図	P L 54	310 - 840	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に沈線U字文、地文確文。	L R	加E 4
1403	101 図	P L 54	330 - 805	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に沈線U字文、地文確文。	R L	加E 4

No	図版No	神図No	出土位置(X,Y)	部位	文様の特徴等	原体	備考
1404	101 図	P L 54	330・815	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯下に沈線U字文、地文縄文。	L R	加E 4
1405	101 図	P L 54	330・800	口縁部	口縁部無文帯下に刺突・細隆帯、隆帯下に沈線U字文。	L R	加E 4
1406		PL55	355・845	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に沈線U字文。	R L	加E 4
1407	101 図	P L 54	350・840	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に沈線U字文。	R L	加E 4
1408	101 図	P L 54	350・850	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に沈線U字文。	R L	加E 4
1409		PL55	350・850	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線下に沈線U字文。	R L	加E 4
1410	101 図	P L 54	330・820	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、刺突、沈線U字文、O段多条。	R L	加E 4
1411	101 図	P L 54	325・805	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 4
1412		P L 55	315・855	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線U字文、O段多条の縄文。	R L	加E 4
1413	101 図	P L 54	350・850	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線U字文、波状口縁。	R L	加E 4
1414	101 図	P L 54	340・860	口縁部	沈線渦巻文、波状口縁。	L R	加E 4
1415		P L 55	310・835	口縁部	口唇部刺突下に横位太沈線、沈線U字文。	R L	加E 4
1416		P L 55	345・835	口縁部	口唇部刺突下に横位太沈線、沈線U字文。	R L	加E 4
1417	101 図	P L 54	10 住マフ	口縁部	沈線渦巻文、波状口縁。	R L	加E 4
1418		P L 55	340・840	口縁部	口唇部刺突下に横位太沈線、沈線U字文、O段多条。	R L	加E 4
1419	101 図	P L 55	320・820	口縁部	口縁部無文帯下の細隆帯下に沈線U字文、O段多条の縄文。	R L	加E 4
1420		P L 55	330・825	口縁部	口縁部下に横位太沈線、沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 4
1421	101 図	P L 54	35 住	口縁部	口縁部無文帯下の横位沈線下に沈線U字文、O段多条。	L R	加E 4
1422	102 図	P L 55	350・835	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	L R	加E 4
1423		P L 55	355・845	胴 部	沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 4
1424		P L 55	315・825	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文施文。	R L	加E 4
1425	102 図	P L 55	325・805	胴 部	横位沈線下に沈線U字文、縄文施文。	R L	加E 4
1426	102 図	P L 55	350・805	胴 部	沈線U字文、縄文施文。	L R	加E 4
1427	102 図	P L 55	360・850	胴 部	沈線U字文、縄文施文。	L R	加E 4
1428	102 図	P L 55	325・830	胴 部	沈線U字文、縄文施文。	R L	加E 4
1429	102 図	P L 55	330・845	胴 部	沈線渦巻文、縄文施文。	R L	加E 4
1430		P L 55	340・830	胴 部	沈線渦巻文、縄文施文。	R L	加E 4
1431	101 図	P L 54	330・855	口縁部	沈線渦巻文、波状口縁。	R L	加E 4
1432	101 図	P L 54	345・825	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、波状口縁部部下突出、O段多条。	R L	加E 4
1433	101 図	P L 54	340・825	口縁部	横位沈線下に沈線U字文、波状口縁部部下突出、O段多条。	R L	加E 4
1434	101 図	P L 55	310・855	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、沈線U字文、波状口縁。	L R	加E 4
1435		P L 55	320・870	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、沈線U字文、波状口縁。	L R	加E 4
1436	101 図	P L 54	340・850	口縁部	口縁部無文帯下に細隆帯、隆帯U字文、波状口縁部突出。	L R	加E 4
1437		P L 55	315・825	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、波状口縁部突出。	L R	加E 4
1438	101 図	P L 54	310・815	口縁部	口縁部下に沈線・刺突、沈線U字文。	R L	加E 4
1439	101 図	P L 54	310・860	口縁部	口縁部下に沈線・刺突、沈線U字文、口縁表面部に刺突。		加E 4
1440		P L 55	325・825	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、波状口縁部部下突出。	R L	加E 4
1441		P L 55	345・830	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、沈線U字文、地文縄文。	R L	加E 4
1442		P L 54	330・820	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、地文縄文。	R L	加E 4
1443		P L 54	330・820	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線、地文縄文、O段多条。	R L	加E 4
1444	101 図	P L 54	325・820	口縁部	口縁部無文帯下の横位太沈線下に縄文施文、O段多条。	L R	加E 4
1445	101 図	P L 54	360・850	口縁部	口縁部無文帯下の横位太沈線下に縄文施文、O段多条。	R L	加E 4
1446		P L 54	325・810	口縁部	口縁部無文帯下に横位太沈線、沈線下に縄文施文。	R L	加E 4
1447	101 図	P L 54	345・820	口縁部	口縁部無文帯下に横位太沈線、沈線下に縄文施文。	R L	加E 4
1448		P L 54	320・855	口縁部	口縁部無文帯下に横位太沈線、沈線下に縄文施文。	R L	加E 4
1449		P L 54	350・840	口縁部	口縁部無文帯下に横位太沈線、沈線下に縄文施文。	R L	加E 4
1450	101 図	P L 55	315・880	口縁部	口縁部無文帯下に横位太沈線、沈線U字文、地文縄文。	L R	加E 4
1451		P L 55	350・825	胴 部	垂下沈線、沈線間に縄文施文、O段多条。	異変R L	加E 4
1452	102 図	P L 55	320・880	胴 部	縦沈線区画、区画内に縄文施文。	R L	加E 4
1453		P L 55	320・815	胴 部	垂下沈線、沈線間に縄文施文。	R L	加E 4
1454		P L 55	330・850	胴 部	垂下沈線、沈線間に縄文施文。	R L	加E 4
1455		P L 55	345・850	胴 部	垂下沈線、沈線間に縄文施文。	R L	加E 4
1456		P L 56	330・820	両耳部	無文、把手外面は浅くS状に窪む。		E 3・E 4
1457	102 図	P L 55	330・820	両耳部	外面はS字状沈線様に窪む、胴部条縄文。		E 3・E 4
1458	102 図	P L 56	330・820	両耳部	把手外縁に縄文施文、O段多条。	R L	E 3・E 4
1459	102 図	P L 55	330・810	両耳部	把手外面にS字状モチーフ、胴部沈線U字文、区画内縄文。	R L	加E 3
1460	102 図	P L 55	340・830	把手	外面彫形刺突、孔4を穿つ。		加E 3
1461		P L 56	320・845	把手	把手外面にS字状の沈線、沈線U字文、区画内縄文。	R L	加E 3

No	図版No	神図No	出土位置(X,Y)	部位	文様の特徴等	原 体	備 考
1462		P.L.56	表 採	把手	楕状把手外面に縄文施文。	RL	加E 4
1463	102 図	P.L.56	330・820	把手	無文楕状把手。口縁部下に刺突、0段多条の縄文。	RL	加E 4
1464	102 図	P.L.55	501住フタ	把手	外面に沈線、口縁部下に刺突、沈線U字文、地文縄文。	RL	加E 4
1465	102 図	P.L.55	335・825	突起	口縁下に横位沈線、突起頂部からS字状沈線、地文縄文。	RL	E 3・E 4
1466	102 図	P.L.55	315・845	突起	強情突起、上面からS字状沈線。		E 3・E 4
1467	102 図	P.L.55	335・820	突起	口縁部無文帯下に横位隆帯、沈線U字文、両側面に刺突。	RL	加E 4
1468	102 図	P.L.55	325・815	突起	突起上端から口縁に沈線、地文縄文。	LR	加E 4
1469	102 図	P.L.55	320・840	突起	突起上端から口縁に沈線、地文縄文、上面に円形の窪み2。	RL	加E 4
1470	102 図	P.L.55	不 明	突起	棒状突起、上面からS字状沈線、側面は孔が貫通。		加E 4
1471	102 図	P.L.55	11住?	突起	棒状突起、口縁下に太沈線が突起側面に及ぶ、沈線U字文。	RL	加E 3
1472	102 図	P.L.55	42住?フタ	突起	突起・S字状沈線、沈線縦手文、U字文。	RL	加E 3
1473	103 図	P.L.56	305・860	口縁部	沈線J字文、区画内に刺突文、充填縄文。	LR	称名寺1
1474		P.L.57	330・825	口縁部	沈線J字文、区画内に充填縄文。	LR	称名寺1
1475	103 図	P.L.56	320・800	口縁部	沈線J字文、区画内に刺突・沈線文、充填縄文。	L	称名寺1
1476		P.L.57	305・810	口縁部	沈線J字文、区画内に充填縄文。	LR	称名寺1
1477	103 図	P.L.56	305・840	口縁部	沈線J字文、区画内に充填縄文。	LR	称名寺1
1478	103 図	P.L.56	335・800	口縁部	沈線J字文、区画内に充填縄文。	LR	称名寺1
1479	103 図	P.L.56	325・910	口縁部	沈線J字文、区画内を列点で埋める、口唇部刺突・沈線。		称名寺1
1480	103 図	P.L.56	330・855	口縁部	沈線J字文、区画内を列点で埋める。		称名寺1
1481		P.L.57	330・810	口縁部	沈線J字文、区画内に列点を充填、口縁頂部の突起に刺突。		称名寺1
1482	103 図	P.L.56	305・890	胴 部	沈線J字文、区画内に充填縄文。	LR	称名寺1
1483	103 図	P.L.56	330・805	胴 部	沈線J字文、区画内に充填縄文。	LR	称名寺1
1484	103 図	P.L.56	325・815	胴 部	沈線J字文、区画内に縄文・列点。	LR	称名寺1
1485		P.L.57	330・820	胴 部	沈線J字文、区画内に縄文。	LR	称名寺1
1486	103 図	P.L.56	310・850	胴 部	沈線渦巻文、区画内を縄文で埋める。	LR	称名寺1
1487		P.L.57	330・800	胴 部	沈線渦巻文、区画内を縄文で埋める。	LR	称名寺1
1488	104 図	P.L.57	335・825	胴 部	沈線渦巻文、区画内を縄文で埋める。	LR	称名寺1
1489	104 図	P.L.57	330・820	胴 部	沈線渦巻文、区画内を縄文で埋める。	LR	称名寺1
1490		P.L.57	330・805	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1491	104 図	P.L.57	335・825	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	RL	称名寺1
1492		P.L.57	300・860	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1493		P.L.57	325・815	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1494		P.L.57	325・815	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1495		P.L.57	325・815	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1496	104 図	P.L.57	305・845	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1497		P.L.57	330・820	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1498	104 図	P.L.57	325・815	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1499		P.L.57	325・810	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1500	104 図	P.L.57	310・860	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1501		P.L.57	305・905	胴 部	沈線渦巻文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1502	104 図	P.L.57	320・815	胴 部	沈線U字文、区画内に縄文施文。	LR	称名寺1
1503	104 図	P.L.57	320・790	両耳部	上限2段の横位隆帯に楕状把手を繋ぐ、地文縄文。	RL	称名寺1
1504	108 図	P.L.60	300・945	鉢鉢注	注口縁部に隆帯刺突、底面に縄文施文。	LR	称名寺1
1505	108 図	P.L.60	315・810	鉢鉢注	釣手部C字文、体部沈線渦巻文、底面縄文施文。	LR	称名寺1
1506	104 図	P.L.57	335・815	口縁部	口縁部は直立尖味に立ち上がりやや外反、肩が大きく張る。		称名寺1
1507		P.L.57	330・820	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯。		称名寺1
1508	104 図	P.L.57	315・815	口縁部	口唇部円形貼付文、口縁から斜位に隆帯刺突、沈線J字文。		称名寺1
1509	107 図	P.L.60	330・810	突起	筒状、正面に隆帯C字文、上面に沈線C字文を環状施文。	LR	称名寺1
1510	107 図	P.L.60	325・810	突起	筒状、上面に刺突と沈線を繋いだC字文を環状施文。		称名寺1
1511	107 図	P.L.60	310・860	突起	筒状、正面に縦位隆帯刺突、上面にC字文を環状施文。		称名寺1
1512	107 図	P.L.60	表 採	突起	中央に孔を穿つ環状突起、C字文を施文。	RL	称名寺1
1513	104 図	P.L.57	310・850	胴 部	横位隆帯下に隆帯U字文、U字文頂部は三角形状に突出。	LR	称名寺1
1514	104 図	P.L.57	315・825	胴 部	横位隆帯下に条線文、横隆帯は三角形状に突出。		称名寺1
1515		P.L.58	315・825	胴 部	横位隆帯下に条線文。		称名寺1
1516	104 図	P.L.57	325・855	胴 部	横位隆帯下に弧状条線文。		称名寺1
1517		P.L.58	305・815	胴 部	横位隆帯下に縄文施文。	LR	称名寺1
1518	104 図	P.L.57	335・820	胴 部	括れ部に横隆帯、無文。		称名寺1
1519	104 図	P.L.57	305・860	胴 部	隆帯渦巻文。		称名寺1

No	図版No	神図No	出土位置(X,Y)	部位	文様の特徴等	原体	備考	
1520	104 図	P L 57	330・950	口縁部	横位幅込隆帯に円形刺突、隆帯下に沈線J字文。		称名寺1	
1521	104 図	P L 57	315・805	胴部	横位隆帯に縦位隆帯を繋ぐ、隆帯刺突、交点に円形貼付文。		称名寺1	
1522		P L 58	330・810	胴部	横位隆帯上に円形刺突、隆帯下に縄文。	LR	称名寺1	
1523		P L 58	330・820	胴部	縦位隆帯刺突、隆帯間にU字状沈線、地文縄文。	LR	称名寺1	
1524		P L 58	315・875	胴部	縦位隆帯刺突、隆帯間にU字状沈線、地文縄文。	LR	称名寺1	
1525	103 図	P L 56	65住フタ	口縁部	沈線J字文、区画内を縄文で埋める、波状口縁に突起が付く。	LR	称名寺1	
1526	103 図	P L 56	504住フタ	口縁部	沈線J字文、区画内を縄文で埋める。	LR	称名寺1	
1527	103 図	P L 56	174土坑	口縁部	口縁内面に円形刺突、外面沈線区画内に刺突・沈線。	LR	称名寺1	
1528	103 図	P L 56	139土坑	口縁部	口縁頂部円形刺突、縦位隆帯刺突、沈線J字文、充填縄文。	LR	称名寺1	
1529		P L 58	79住フタ	口縁部	沈線J字文、縄文光墳、波状口縁より斜位隆帯刺突。	LR	称名寺1	
1530		P L 58	28住フタ	胴部	縦位隆帯刺突、隆帯間に沈線渦巻文、地文縄文。	LR	称名寺1	
1531		P L 58	78住フタ	胴部	縦位隆帯刺突、隆帯間に沈線区画文、地文縄文。	LR	称名寺1	
1532	103 図	P L 56	5溝	胴部	沈線渦巻文、区画内を縄文で埋める。	異東L	称名寺1	
1533	103 図	P L 56	13溝	口縁部	口縁部下に横位隆帯、隆帯J字文、沈線J字文内に列点。		称名寺1	
1534	103 図	P L 56	108住フタ	口縁部	沈線J字文、区画内を列点で埋める。		称名寺1	
1535	103 図	P L 56	2住雑瓦	口縁部	沈線J字文、区画内を列点で埋める。		称名寺1	
1536	103 図	P L 56	53住フタ	口縁部	沈線J字文、区画内を円形刺突・列点、縄文で埋める。	LR	称名寺1	
1537	104 図	P L 57	291土坑	口一側	波状口縁、全面に縄文施文。		L	称名寺1
1538	104 図	P L 57	表 様	口縁部	全面に縄文施文。	LR	称名寺1	
1539	104 図	P L 57	17土坑	口縁部	口縁部無文帯でC字状区画、以下縄文施文。	L	称名寺1	
1540	104 図	P L 57	29住フタ	口縁部	口縁部無文帯下に横線、隆帯下に斜向条縄文。		称名寺1	
1541		P L 58	64住フタ	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯、隆帯下縄文。	異東L	称名寺1	
1542	104 図	P L 57	69住フタ	口縁部	横位隆帯上に浅い円形の窪み、隆帯下に縄文施文。	LR	称名寺1	
1543		P L 58	70住フタ	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯刺突、隆帯下縄文。	R	称名寺1	
1544		P L 58	253土坑	口縁部	縄文施文後、斜位沈線・隆帯刺突、口唇部に円形刺突。	LR	称名寺1	
1545	104 図	P L 57	75住フタ	胴部	沈線・隆帯刺突が大きく弧状に廻る、地文縄文。	LR	称名寺1	
1546		P L 58	59住フタ	胴部	垂下沈線間に縄文施文。	RL	称名寺1	
1547	104 図	P L 57	79住フタ	口縁部	口縁下の横位沈線間に円形刺突。		称名寺1	
1548		P L 58	表 様	口縁部	口縁部無文帯下に円形刺突2列。		称名寺1	
1549		P L 60	88住フタ	突起	突起外面に刺突・沈線によるC字状モチーフ。		称名寺1	
1550		P L 60	4溝	突起	突起上面に刺突・沈線によるC字状モチーフ。		称名寺1	
1551		P L 60	340土坑	突起	突起内面・側面に刺突・沈線C字状モチーフ。		称名寺1	
1552		P L 60	53住フタ	突起	突起内面・側面に刺突・沈線C字状モチーフ、上面に刺突。		称名寺1	
1553		P L 60	148土坑	突起	突起内外面に刺突・沈線によるC字状モチーフ。		称名寺1	
1554		P L 60	504住フタ	突起	中央に孔を穿つ環状突起。		称名寺1	
1555		P L 60	397土坑	突起	両側面の沈線楕円区画内に充填縄文。	RL	称名寺1	
1556		P L 60	12溝	突起	側面に孔を穿つ、内面に円形刺突。		称名寺1	
1557		P L 58	320・810	口縁部	列点J字文、列点光墳、口唇部で円形刺突と沈線を繋ぐ。		称名寺2	
1558	105 図	P L 58	320・795	口縁部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1559	105 図	P L 58	330・815	口縁部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1560		P L 58	310・860	口縁部	沈線J字文		称名寺2	
1561		P L 58	335・820	口縁部	沈線J字文		称名寺2	
1562	105 図	P L 58	320・820	口一側	沈線J字文、口縁部内折。		称名寺2	
1563	105 図	P L 58	325・820	口縁部	沈線J字文、口縁部突起。		称名寺2	
1564		P L 58	325・820	口縁部	沈線J字文、口唇部に円形押捺。		称名寺2	
1565	105 図	P L 58	320・820	口縁部	沈線J字文、口縁部内折、口縁頂部に円形刺突、沈線。		称名寺2	
1566	105 図	P L 58	320・790	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1567		P L 58	325・820	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1568	105 図	P L 58	325・805	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1569		P L 58	310・860	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1570	105 図	P L 58	335・810	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1571	105 図	P L 58	320・820	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1572	105 図	P L 58	325・820	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1573	105 図	P L 58	315・855	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1574		P L 58	300・860	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1575	105 図	P L 58	320・820	胴部	列点J字文、区画内に列点を光墳。		称名寺2	
1576	105 図	P L 59	不明	胴部	沈線J字文		称名寺2	
1577	105 図	P L 58	310・830	胴部	沈線J字文		称名寺2	
1578	105 図	P L 58	315・820	口縁部	隆帯刺突文、波状口縁頂部で刺突と沈線を繋ぐC字文。		称名寺2	

No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1579	106 図	P L 59	310・860	胴 部	縦位隆帯刺突文		称名寺2
1580		P L 59	325・810	胴 部	横位隆帯刺突、隆帯下に横文施文。	L R	称名寺2
1581		P L 59	330・815	胴 部	横位隆帯下に沈線J字文。		称名寺2
1582		P L 59	310・860	口縁部	口縁部下に横位沈線、沈線J字文。		称名寺2
1583		P L 60	330・920	注 口	沈線による曲線文、横状把手が上端に付く。		称名寺2
1584		P L 59	330・815	胴 部	沈線J字文、区画内で刺突に沈線を置く。		称名寺2
1585	106 図	P L 59	330・860	胴 部	縦位隆帯文間に沈線J字文。		称名寺2
1586	108 図	P L 60	5 溝	突 起	口縁頂部に環状突起を伏す、口縁部に沈線をU字状に配す。		称名寺2
1587	105 図	P L 59	168 土坑	口縁部	列点J字文、沈線間に円形刺突。		称名寺2
1588			3 壺立	胴 部	列点J字文、沈線間に円形刺突。		称名寺2
1589			101 住フク	胴 部	列点J字文、沈線間に円形刺突。		称名寺2
1590	105 図	P L 58	85 住	胴 部	列点J字文、沈線間に円形刺突。		称名寺2
1591	105 図	P L 59	表 採	口縁部	縦位条線文		称名寺2
1592	105 図	P L 59	313 土坑	口縁部	口縁部無文帯下に沈線、沈線下に斜向沈線。		称名寺2
1593		P L 59	521 土坑	胴 部	縦位沈線、地文条線文。		称名寺2
1594	105 図	P L 59	6 住	胴 部	縦位条線文		称名寺2
1595	105 図	P L 59	105 住フク	胴 部	縦位条線文		称名寺2
1596	105 図	P L 59	298 土坑	胴 部	縦位条線文を間隔を空けて粗く施文。		称名寺2
1597		P L 59	表 採	胴 部	縦位条線文を間隔を空けて粗く施文。		称名寺2
1598	105 図	P L 59	65 住フク	胴 部	縦位条線文		称名寺2
1599		P L 59	88 住フク	胴 部	縦位条線文		称名寺2
1600	105 図	P L 59	9 住フク	胴 部	沈線J字文、区画内に列点を光墳、地文条線文。		称名寺2
1601	108 図	P L 60	105 住フク	突 起	正面に孔1・円形刺突2・上面に孔1を付す、口唇部沈線。		称名寺2
1602	105 図	P L 58	100 住フク	口縁部	外面渦巻状沈線、沈線内刺突、内面は渦巻状に隆帯を配す。	L R	称名寺2
1603	106 図	P L 59	58 住フク	胴 部	横位隆帯刺突に縦位隆帯刺突を置く、地文条線文。	R L	称名寺2
1604		P L 60	63 住フク	注 口	注口部左に沈線区画、同右に隆帯痕跡?、鉢形土器。		称名寺2
1605	107 図	P L 59	330・800	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線。		特2-壺1
1606	107 図	P L 59	325・875	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線。		特2-壺1
1607	107 図	P L 59	330・800	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線。		特2-壺1
1608	107 図	P L 60	310・860	胴 部	縦位条線文		特2-壺1
1609	107 図	P L 60	345・825	胴 部	斜向条線文		特2-壺1
1610	107 図	P L 60	325・875	胴 部	斜向条線文		特2-壺1
1611		P L 60	320・805	胴 部	縦位沈線間を斜向条線文で埋める。		特2-壺1
1612	107 図	P L 59	330・820	胴 部	縦位沈線文		特2-壺1
1613		P L 60	325・845	胴 部	縦位沈線文		特2-壺1
1614	107 図	P L 59	345・820	胴 部	粗い縦位条線文。		特2-壺1
1615	107 図	P L 59	325・810	胴 部	縦位沈線文		特2-壺1
1616		P L 60	315・855	胴 部	曲線様の沈線文。		特2-壺1
1617	107 図	P L 60	330・815	胴 部	粗い縦位条線文。		特2-壺1
1618		P L 60	330・810	胴 部	粗い縦位条線文。		特2-壺1
1619	107 図	P L 60	325・820	口縁部	口縁部外反、無文。		後 期
1620	107 図	P L 60	330・820	口縁部	口縁部外反、無文、頸部に弱い隆帯。		後 期
1621	107 図	P L 60	310・870	口縁部	口縁部下に横位沈線、無文。		後 期
1622	107 図	P L 60	315・855	口縁部	口縁部態は角面状、無文。		後 期
1623	107 図	P L 60	315・860	口縁部	口縁部外反、無文、頸部に弱い隆帯。		後 期
1624	107 図	P L 60	330・810	口縁部	口縁部外反、無文。		後 期
1625	107 図	P L 60	335・820	口縁部	口縁部外反・やや肥厚、無文。		後 期
1626	107 図	P L 60	310・840	口縁部	口縁部外反、無文。		後 期
1627	107 図	P L 60	335・835	口縁部	口唇部小突起、無文。		後 期
1628	107 図	P L 60	305・835	突 起	釣手状の突起に円形刺突5を付す。		称名寺1
1629			310・840	突 起	上面にC字文を配す。		称名寺1
1630			315・795	突 起	中央に孔1を配した環状突起、隆帯による「8」の字文を表出。		称名寺1
1631			330・810	突 起	正面にC字文を配す。表面沈線。		称名寺1
1632		P L 60	310・780	突 起	側面に沈線区画、区画内に横文光墳・刺突文。	L R	称名寺1
1633		P L 60	325・820	突 起	側面に沈線区画、区画内横文・刺突、裏面にC字文。		称名寺1
1634	108 図	P L 60	10 住フク	蓋	細隆帯を環状貼付、両端に爪み部?		加E4-壺1
1635	108 図	P L 60	81 住フク	蓋	蓋(爪み部)		称名寺
1636	112 図	P L 64	506 住フク	底 部	底部本葉痕		壺2-B1



No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1637	112 図	P L 64	139 土坑	底 部	底部網代敷		層2～B1
1638	112 図	P L 64	315・805	土丹盤	地文縄文	LR	層2～B1
1639	108 図	P L 60	不 明	土丹盤	無文		後 期
1640	108 図	P L 60	315・815	土丹盤	縦位沈線、沈線間に縄文地文、0段多条。	RL	後 期
1641		P L 60	不 明	土丹盤	縦位沈線、沈線間に縄文地文。	LR L	後 期
1642	108 図	P L 60	330・810	土丹盤	地文縄文	LR	後 期
1643	108 図	P L 60	315・860	土丹盤	地文縄文	LR	後 期
1644		P L 60	325・810	土丹盤	地文縄文	RL	後 期
1645		P L 60	325・840	土丹盤	底部		後 期
1646		P L 60	330・810	土丹盤	無文		後 期
1647	108 図	P L 60	146 土坑	土丹盤	縦位沈線		後 期
1648	108 図	P L 60	99 住フク	土丹盤	条線文		後 期
1649	108 図	P L 60	253 土坑	土丹盤	地文縄文	RL	後 期
1650	108 図	P L 60	504 住フク	土丹盤	地文縄文	LR	後 期
1651	108 図	P L 60	330・860	土丹盤	条線文		後 期
1652		P L 60	62 住フク	土丹盤	無文		後 期
1653		P L 60	305・885	土丹盤	底部		後 期
1654		P L 60	不 明	土丹盤	沈線		後 期
1655	111 図	P L 62	330・790	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯刺突、隆帯下に縄文。	LR	層ノ内1
1656	111 図	P L 62	325・810	口縁部	口縁部無文帯下に横位隆帯刺突、隆帯下に縄文。	LR	層ノ内1
1657	111 図	P L 62	315・815	口縁部	口縁部より斜向隆帯、縄文施文後に隆帯と同方向の沈線。	LR	層ノ内1
1658		P L 63	335・815	口縁部	口唇部より隆帯を弧状配置、沈線を添え横位沈線と繋ぐ。		層ノ内1
1659		P L 63	330・990	口縁部	口唇部下に並行沈線、沈線間に円形刺突列。		層ノ内1
1660	109 図	P L 61	330・790	口縁部	口縁部内折、内折口縁部に竹管上工具による刺突2。		層ノ内1
1661	110 図	P L 62	315・855	口縁部	口唇部刺突、沈線J字文。		層ノ内1
1662	110 図	P L 62	310・850	口縁部	口唇部刺突2に横位沈線を繋ぐ、沈線J字文、区画内列点。		層ノ内1
1663		P L 63	330・850	口縁部	口唇部に刺突・横位沈線、横位沈線により無文帯を構成。		層ノ内1
1664		P L 63	325・810	口縁部	口唇部に沈線、口縁部は内折する。		層ノ内1
1665		P L 63	315・795	口縁部	口唇部上に沈線、口縁部下の横位沈線により無文帯形成。		層ノ内1
1666	110 図	P L 62	330・800	口縁部	口唇部下に横位沈線、地文縄文。	LR	層ノ内1
1667	110 図	P L 62	305・850	口縁部	口縁部無文帯下に沈線J字文。		層ノ内1
1668		P L 63	315・860	口縁部	口縁部下にU字状沈線を配す。		層ノ内1
1669	111 図	P L 62	325・820	口縁部	浅く細かな縦位条線文。		層ノ内1
1670		P L 63	325・815	口縁部	口縁部外反、横位沈線により口縁部無文帯を形成する。		層ノ内1
1671		P L 63	不 明	口縁部	口唇部に横位沈線を施す有段口縁、地文縄文。	LR	層ノ内1
1672	109 図	P L 61	335・830	口縁部	口唇部よりC字状文を垂下、地文縄文。	RL	層ノ内1
1673		P L 63	345・830	口縁部	口唇部横位沈線による偽隆帯、地文縄文。	RL	層ノ内1
1674	109 図	P L 61	315・805	口縁部	口唇部横位隆帯、隆帯下にU字状文を配す、区画内縄文。	LR	層ノ内1
1675	110 図	P L 62	315・805	口縁部	口唇部下に横位沈線、沈線下に沈線J字文、沈線間に縄文。	LR	層ノ内1
1676		P L 63	315・805	口縁部	口唇部下に横位沈線・U字文。		層ノ内1
1677		P L 63	310・815	口縁部	隆帯上にC字状文、横位に円形刺突が圍る、遊状口縁。		層ノ内1
1678		P L 63	305・845	口縁部	波状口縁頂部に沈線C字状文、口唇部下に刺突・横位沈線。		層ノ内1
1679	111 図	P L 62	330・825	口縁部	条線文施文後に、横位沈線、波状口縁。		層ノ内1
1680	109 図	P L 61	310・780	口縁部	口縁部内折、頸部に横位沈線。		層ノ内1
1681		P L 63	325・840	胴 部	頸部に刺突2、沈線文3条が横位に廻る。		層ノ内1
1682	109 図	P L 61	330・805	胴 部	弧状沈線間を斜向沈線で埋める、地文縄文。	RL	層ノ内1
1683		P L 63	325・810	胴 部	沈線渦巻文と沈線3条からなる曲線文で文帯を構成。		層ノ内1
1684	109 図	P L 61	330・805	胴 部	横位沈線下に縦位沈線、地文縄文。	LR	層ノ内1
1685	109 図	P L 61	330・800	胴 部	沈線を垂下させ、沈線間を弧状沈線で埋める。		層ノ内1
1686	110 図	P L 61	330・820	胴 部	曲線状の沈線を連結する、地文縄文。	LR	層ノ内1
1687	110 図	P L 61	330・820	胴 部	曲線状の沈線を連結する、地文縄文。	L	層ノ内1
1688		P L 63	330・835	胴 部	沈線渦巻文と斜向沈線を連結する、地文縄文。	LR	層ノ内1
1689	109 図	P L 61	315・805	胴 部	沈線渦巻文下に沈線を弧状に配す、地文縄文。	LR	層ノ内1
1690	110 図	P L 61	325・795	胴 部	刺突と沈線を繋ぐ横位文帯下に曲線文を配す。		層ノ内1
1691		P L 63	330・875	胴 部	沈線J字文、区画内に列点、地文縄文。	RL	層ノ内1
1692	110 図	P L 62	305・860	胴 部	沈線J字文、区画内に列点、地文縄文。	LR	層ノ内1
1693	111 図	P L 62	315・795	胴 部	単軸絡集合5条を絡集する。		層ノ内1
1694	110 図	P L 61	330・820	胴 部	沈線3を弧状に配す、区画内に縄文を充填。	L	層ノ内1

No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体	備 考
1695		P.L.63	330・825	銅 部	沈線を垂下・U字状に配す、地文縄文。	L.R	堀ノ内1
1696	110図	P.L.61	310・850	銅 部	沈線を弧状に配す。区画内に縄文施文。	L.R	堀ノ内1
1697	103図	P.L.56	315・920	銅 部	沈線J字文、区画内の先端に円形刺突。		称名寺
1698		P.L.63	330・800	銅 部	隆帯上に円形刺突・沈線、地文縄文。	R.L	称名寺
1699	110図	P.L.62	305・860	銅 部	浅い沈線3を斜位に施文する。		堀ノ内1
1700		P.L.63	315・805	銅 部	沈線を垂下・U字状に配す。		堀ノ内1
1701		P.L.63	45住フク	銅 部	沈線を垂下・U字状に配す、1703と同一。		堀ノ内1
1702	111図	P.L.62	315・840	銅 部	条線文を扇歯状に配す。		堀ノ内1
1703		P.L.63	45住フク	銅 部	沈線を垂下・U字状に配す、1701と同一。		堀ノ内1
1704		P.L.63	305・840	銅 部	横位隆帯刺突下に縄文を施文。	L.R	堀ノ内1
1705	111図	P.L.62	310・780	銅 部	縦位隆帯刺突		堀ノ内1
1706		P.L.63	310・815	銅 部	隆帯を斜位に配す、器面が荒れ文様等不明。		堀ノ内1
1707	110図	P.L.61	330・820	銅 部	横位沈線下に「コ」の字状に沈線を縦位連結する。	L.R	堀ノ内1
1708	110図	P.L.62	315・800	銅 部	横位並行沈線間に沈線横刺突列、横位沈線下に斜向沈線。	L.R	堀ノ内1
1709	112図	P.L.64	330・810	口縁部	やや外反する。無文。		堀ノ内
1710		P.L.64	320・790	口縁部	口縁部外反。無文。		堀ノ内
1711	112図	P.L.64	330・870	口縁部	やや外反する。無文。		堀ノ内
1712	112図	P.L.64	36住フク	口縁部	やや外反する。無文。		堀ノ内
1713	112図	P.L.64	330・800	口縁部	やや外反する。無文。		堀ノ内
1714	112図	P.L.64	330・800	口縁部	やや外反する。無文。		堀ノ内
1715	112図	P.L.64	345・820	口縁部	やや外反する。無文。		堀ノ内
1716		P.L.64	360・850	口縁部	口縁部外反。無文。		堀ノ内
1717		P.L.64	335・825	口縁部	口縁部外反。無文。		堀ノ内
1718	112図	P.L.64	345・800	口縁部	口縁部外反。無文。		堀ノ内
1719	109図	P.L.61	75 住	口縁部	口縁突起・孔1に沈線が廻る。突起部を波状沈線で繋ぐ。		堀ノ内1
1720	109図	P.L.61	表 採	口縁部	波頂部に渦巻状沈線、波状部を沈線で繋ぐ。口唇部沈線。		堀ノ内1
1721	109図	P.L.61	135土坑	口縁部	横位沈線下に縦位沈線3条を垂下、沈線間に波状沈線。	L.R	堀ノ内1
1722	109図	P.L.61	9 溝	銅 部	沈線渦巻文、沈線間を縄文施文。	L.R	堀ノ内1
1723	109図	P.L.61	不 明	銅 部	沈線3条を斜向施文。地文縄文。	R.L	堀ノ内1
1724	109図	P.L.61	79住フク	銅 部	沈線3条を斜向施文。地文縄文。	L.R	堀ノ内1
1725	109図	P.L.61	141土坑	銅 部	沈線3条を横位施文。以下縄文施文。	L.L	堀ノ内1
1726	111図	P.L.62	78住フク	注 口	縦位隆帯上に刺突・沈線、両側に沈線区画、各区内に縄文。	R.L	堀ノ内1
1727	109図	P.L.61	187土坑	銅 部	横位沈線下に弧状沈線を配す。		堀ノ内1
1728	109図	P.L.61	512住フク	銅 部	波状沈線3条。地文縄文。	R.L	堀ノ内1
1729	109図	P.L.61	107住フク	銅 部	沈線3条を「く」の字・弧状に配す。沈線屈曲部に円形刺突。		堀ノ内1
1730	109図	P.L.61	81住フク	銅 部	横位沈線下に垂下沈線、沈線間にU字状に区画、縄文充填。	L.R	堀ノ内1
1731	111図	P.L.62	77住フク	口縁部	口唇部横位沈線下に、条線文を扇歯状に配す。		堀ノ内1
1732	111図	P.L.62	291土坑	口縁部	条線文を斜向配置。		堀ノ内1
1733	111図	P.L.62	44住フク	口縁部	口唇部に雑な刺突文。粗い条線文を縦位に配す。		堀ノ内1
1734	111図	P.L.62	43住フク	銅 部	粗い条線文を縦位に配す、1733と同一。		堀ノ内1
1735	111図	P.L.62	77住フク	銅 部	条線文を扇歯状に配す。		堀ノ内1
1736	109図	P.L.61	65住フク	口縁部	波頂部下に隆帯C字文、横位隆帯下に山形条線、1737と同一。		堀ノ内1
1737	109図	P.L.61	65住フク	口縁部	波頂部下に隆帯C字文、横位隆帯下に山形条線、1736と同一。		堀ノ内1
1738	109図	P.L.61	65住フク	口縁部	横位沈線間に円形刺突文。		堀ノ内1
1739	111図	P.L.62	69住フク	口縁部	口唇部刺突文下に縦位条線文を配す。		堀ノ内1
1740		P.L.63	200土坑	口縁部	口唇部沈線下に横位隆帯刺突、隆帯下に垂下沈線。	R.L	堀ノ内1
1741	109図	P.L.61	307土坑	口縁部	口唇部に横位沈線2条、頂部に沈線1条を配す。		堀ノ内1
1742	109図	P.L.61	4 溝	口縁部	口唇部に横位沈線、沈線下に円形刺突。		堀ノ内1
1743	111図	P.L.62	74住フク	銅 部	沈線渦巻文を曲線文で連結、連結部には刺突文。		堀ノ内1
1744		P.L.63	79住フク	銅 部	隆帯三叉文より隆帯刺突文を垂下する。		堀ノ内1
1745	111図	P.L.62	65住フク	銅 部	U字状の沈線区画内に縦位の隆帯刺突を配す。		堀ノ内1
1746		P.L.63	101住フク	銅 部	横位円形刺突文下にU字状沈線、区画内に円形刺突。		堀ノ内1
1747		P.L.63	105住フク	銅 部	弧状沈線間に円形刺突で埋める。		堀ノ内1
1748	110図	P.L.61	65住フク	銅 部	縦位の「コ」の字状沈線と曲線文を連結する。	L.R	堀ノ内1
1749	111図	P.L.62	77住フク	銅 部	列点文を縦位に配した後に縄文を施文する。	異東L	堀ノ内1
1750	110図	P.L.61	297土坑	銅 部	渦巻状沈線を斜向沈線・曲線で繋ぐ。	L.R?	称名寺
1751	103図	P.L.56	510土坑	銅 部	沈線J字文		称名寺
1752		P.L.56	38住フク	銅 部	沈線J字文、縦位隆帯刺突。		称名寺

No	図版No	神田No	出土位置(X,Y)	部位	文様の特徴等	原体	備考
1753	103 図	P L 56	109 住フタ	胴 部	沈線J字文、区画内を縄文で埋める、区画間にC字状の隆帯。	LR	称名寺
1754	102 図		61 住フタ	胴 部	沈線U字文、縄文縄文。	LR	加E 4
1755	112 図	P L 63	330・810	口縁部	横位沈線下に斜向沈線を配す、縄文縄文。	LR	瀬ノ内2
1756	112 図	P L 63	315・795	口縁部	沈線J字文、区画内に縄文縄文。	LR?	瀬ノ内2
1757	112 図	P L 63	310・790	口縁部	口唇部上に沈線・刺突、口唇部下に縦位の蛇行沈線。	RL	瀬ノ内2
1758	112 図	P L 63	315・800	口縁部	縄文縄文、内面沈線。	LR	瀬ノ内2
1759	112 図	P L 63	320・810	口縁部	口唇部下に横位沈線、沈線下に曲線状沈線。	LR	瀬ノ内2
1760	112 図	P L 64	315・805	胴 部	弧状沈線4条を刻む。		瀬ノ内2
1761		P L 64	335・805	胴 部	縄文縄文後、渦巻状の沈線を配す。	LR	瀬ノ内2
1762	112 図	P L 64	310・780	注 口	胴部内形刺突の脇に隆帯槽内区画、区画内外に沈線。		瀬ノ内2
1763	112 図	P L 63	320・790	胴 部	横位並行沈線間に斜向刺突、弧状沈線区画、縄文縄文。	LR	瀬ノ内2
1764	112 図	P L 63	310・745	胴 部	縦位隆帯刺突間を縦位沈線、弧状沈線で埋める、縄文縄文。	LR	瀬ノ内2
1765	112 図	P L 64	330・805	胴 部	縦位沈線間を弧状沈線で埋める。	LR	瀬ノ内2
1766	112 図	P L 63	340・860	胴 部	低い横位の隆帯刺突文、内面沈線。		瀬ノ内2
1767	112 図	P L 63	315・805	胴 部	弧状配置した沈線区画内を沈線で相対分割、縄文縄文。	LR	瀬ノ内2
1768	112 図	P L 63	305・860	胴 部	沈線区画内に縄文縄文。	L	瀬ノ内2
1769	112 図	P L 64	315・860	胴 部	渦巻状の沈線文。		瀬ノ内2
1770	112 図	P L 64	320・825	胴 部	渦巻状の沈線文。		瀬ノ内2
1771	112 図	P L 64	不明	胴 部	沈線区画を横位に配す。		瀬ノ内2
1772	112 図	P L 64	315・800	胴 部	渦巻状の沈線文。		瀬ノ内2
1773	112 図	P L 63	11 溝	口縁部	口縁部無文帯下に横位沈線・U字状沈線。	LR	瀬ノ内2
1774	112 図	P L 63	20 住フタ	口縁部	口縁部下に低い横位隆帯刺突・沈線、内面沈線。	LR	瀬ノ内2
1775	112 図	P L 63	139 土坑	口縁部	低い横位の隆帯刺突文、割れ面に縦帯。		瀬ノ内2
1776	112 図	P L 63	185 土坑	胴 部	低い横位の隆帯刺突文を隆帯で繋ぐ、隆帯上に刺突。	LR	瀬ノ内2
1777	113 図	P L 64	335・960	口縁部	2段の有段口縁、無文。		地脚
1778			表 採	口縁部	口唇部より隆帯を案山子状に貼り付ける、縄文縄文。	RL	E 3並
1779	97 図	P L 51	146 土坑	胴 部	沈線渦巻文下に垂下沈線、沈線間に流状条線文。		加B 3
1780	113 図	P L 64	320・800	口縁部	斜向条線縄文後に並行沈線区画、体部「工」字状に沈線。		加B 1
1781	113 図	P L 64	330・790	口縁部	並行沈線間を斜め刺突、横位沈線下に縄文、内面に刻み。	LR	加B 1
1782	113 図	P L 64	345・865	胴 部	縄文縄文後、横位の並行沈線。	LR	加B 1
1783	113 図	P L 64	310・805	胴 部	内外面に並行沈線。		加B 1
1784	113 図	P L 64	340・830	口縁部	口唇部内外面沈線、口縁部並行沈線区画内に縄文縄文。	LR	加B 1
1785	113 図	P L 64	355・945	口縁部	内面横位沈線		加B 1
1786	113 図	P L 64	315・805	口縁部	口唇部隆帯刺突、隆帯下に斜向条線。		加B 2
1787	113 図	P L 64	315・815	口縁部	口縁部斜向沈線、内面沈線。		加B 2
1788	113 図	P L 64	330・850	口縁部	口縁部隆帯刺突		加B 2
1789	113 図	P L 64	305・850	胴 部	縄文縄文後、横位沈線。	異束L	加B 2
1790	113 図	P L 64	340・840	胴 部	縄文縄文後、横位沈線。	LR	加B
1791	113 図	P L 64	不明	胴 部	横位沈線下に斜向条線。		加B
1792	93 図	P L 47	36 住フタ	口縁部	流状口縁直下に隆帯U字文を施文、縄文縄文0段多条。	RL	加E 3
1793	93 図	P L 47	不明	口縁部	隆帯U字文、流状口縁頂部に突起が付く。	RL	加E 3
1794		P L 46	7 住フタ	胴 部	頸部に横位の流状沈線、沈線下に斜向沈線を押し引く。		中期前
1795	91 図	P L 46	200 土坑	口縁部	隆帯による槽内区画、縄文縄文。	?	加E 2
1796	99 図	P L 52	65 住フタ	口縁部	竹管状工具による斜向沈線。		加E 3
1797	96 図	P L 50	55 住フタ	胴 部	横位隆帯から縦位隆帯を懸垂、隆帯上刺突、縄文条線文。		加E 3
1798			105 住フタ	胴 部	流状隆帯を縦位に配し、隆帯間を条線で埋める。		加E 3
1799	91 図	P L 46	450 住フタ	口縁部	縦位沈線を横位に連続施文、頸部に横位沈線3条。		勝 坂
1800			74 住フタ	口縁部	横位に「工」字状沈線? 縄文縄文、口唇部内面に沈線。	LR	加B 1
1801			65 住フタ	口縁部	押し引き沈線横位3条、縄文縄文。	RL	加B 3
1802A	106 図	P L 59	320・810	口縁部	口縁部内形刺突より斜位隆帯刺突、縄文縄文。	LR	称名寺2
1802B	106 図	P L 59	不明	口一胴	隆帯刺突を大きくU字状・X字状に配し、縄文を施文。	LR	称名寺2
1803	113 図	P L 64	550 住	注 口	体部上半に細隆帯による槽内区画文。		加B 3
1804	95 図	P L 49	526 住	口一胴	口縁部槽内区画下に縦位沈線、縄文縄文、0段多条。	RL	加E 3
1805	108 図	P L 60	340・820	深 鉢	無文、器面ナ字整形。		後 期
1806	106 図	P L 59	315・800	口一胴	口縁部無文帯下に横位隆帯刺突、以下縄文縄文。	L	称名寺2
1807	108 図	P L 60	不明	土 偶	頸部破片、篋・棒状工具による目・鼻・口を表現。		後期前
1808	102 図	P L 43	631 土坑	突 起	突起・S字状沈線、沈線槽内区画・縦手文・縄文縄文。	RL R	加E 3
1809		P L 43	不明	鉢	口縁部無文帯下に隆帯槽内区画文、区画内に縄文。	RL	加E 3

No	図版No	押図No	出土位置(X,Y)	部 位	文 様 の 特 徴 等	原 体 備 考
1810		P L 43	631 土坑	口縁部	口縁下の横位隆帯から縦位隆帯を垂下、隆帯間に縄文施文。	R L 加E 4
1811		P L 43	631 土坑	胴 部	縄文施文後、縦位隆帯。	R L 加E 4
1812		P L 44	662 土坑	口縁部	沈線J字文内に充填縄文。	L R 称名寺1
1813		P L 44	662 土坑	胴 部	J字縄文	称名寺1
1814		P L 44	662 土坑	口縁部	内面口唇部に沈線、外面に縦位沈線、波状口縁。	L R 瀬ノ内1
1815	105 図	P L 44	不 明	口一割	沈線J字文、波状口縁頂部に突起、刺突・沈線によるC字文。	
1816			310・850	垂 飾	先端が尖る棒状土製品、上手を欠損する。	後 期
1817			6 住	土製品	端部に孔が開く、558 土坑の土製品に類似。	後 期

### 住居出土石器観察表

住居 No	図版	押図	出土	器種	石材	長さ	幅	重量
41 1	12 図	PL18	床直	凹石	粗安	9.8	9.1	366
41 2	12 図	PL18	10	凹石	粗安	13.5	8.0	686
41 3	12 図	PL18	12	磨石	粗安	18.4	8.1	366
41 4	12 図	PL18	7	磨石	粗安	13.1	9.1	※ 10
41 5	12 図	PL18	床直	磨石	粗安	13.0	7.8	※ 11
41 6			床直	剥片	ホル	12.0	4.0	
41 7			2	剥片	ホル	15.5	7.9	
41 8			8	礫	金山	19.8	21.3	※ 68
41 9			-12	礫	金山	18	12.9	※ 16
41 10			-16	礫	金山	13.8	8.4	619
41 11			-12	礫	溶凝	9.6	6.2	251
41 12			9	礫片	ホル	10.3	6.3	422
73 1	13 図	PL18	覆土	剥片	チャ	3.5	3.2	97
73 2			14	礫	チャ	11.6	10.3	446
125 1	16 図	PL19	-11	磨石	粗安	17.2	9.5	※ 13
125 2			覆土	礫片		3.6	2.8	140
125 3			覆土	礫	チャ	10.3	3.7	130
125 4			覆土	礫	チャ	14.6	9.3	※ 11
125 5	16 図	PL19	11	凹石	粗安	11.3	8.5	610
125 6	16 図	PL19	16	凹石	粗安	10.7	7.2	395
125 7	17 図	PL19	12	磨石	粗安	23.0	14.0	※ 35
125 8			床直	磨石	粗安	14.2	12.5	546
125 9	17 図	PL19	15	石皿	粗安	12.8	10.8	512
125 10	17 図	PL19	5	台石	粗安	18.3	9.5	※ 13
125 11	16 図	PL19	覆土	石製	軽石	6.4	3.7	17.0
125 12			覆土	剥片	ホル	4.2	3.2	130
125 13			覆土	礫片	チャ	2.2	1.9	2.9
125 14			1	礫	粗安	40.0	18.3	※ 130
125 15			2	礫	ホル	29.0	18.3	※ 81
125 16			21	礫	溶凝	31.7	18.5	※ 128
125 17			覆土	礫	チャ	4.2	2.3	130
125 18			礫片	粗安	10.7	9.8	385	
125 19			覆土	礫片	粗安	7.3	4.8	257
125 20			覆土	礫片	粗安	5.8	4.9	18.9
125 21			覆土	礫片	粗安	7	3.3	32.4
125 22			覆土	礫片	溶凝	6.7	8.3	158
125 23			覆土	礫片	溶凝	7.4	7.2	221
125 24			覆土	礫片	溶凝	6.5	7.2	127
125 25			覆土	礫片	溶凝	5	8.0	109

住居 No	図版	押図	出土	器種	石材	長さ	幅	重量	
125 26			覆土	礫片	溶凝	6.5	7.0	59.8	
125 27			覆土	礫片	溶凝	8.2	4.8	75.9	
125 28			覆土	礫片	溶凝	4.6	4.0	21.8	
125 29			覆土	礫片	溶凝	6	3.9	29.8	
125 30			覆土	礫片	溶凝	7.5	4.7	42.0	
125 31			覆土	礫片	溶凝	3.9	5.1	29.5	
125 32			覆土	礫片	溶凝	3.9	2.5	11.3	
125 33			覆土	礫片	溶凝	9	5.4	72.7	
482 1	19 図	PL19	床直	石皿	チャ	2.2	2.2	1.1	
482 2	19 図	PL19	10	石皿	黒曜	2.3	1.7	0.7	
482 3	19 図	PL19	覆土	打芥	ホル	11.4	9.3	482	
482 4			研内	加工	ホル	9.2	12.7	712.8	
482 5	19 図	PL19	床直	磨石	粗安	14.0	10.3	※ 11	
482 6	19 図	PL19	床直	石製	粗安	11.4	5.8	306	
482 7			研内	礫	粗安	34.2	15.7	※ 98	
482 8			研内	礫	ホル	30.2	10.0	※ 34	
482 9			研内	礫	溶凝	22.3	8.2	※ 13	
482 10			10	礫	粗安	16.5	13.3	※ 18	
482 11			研内	礫	溶凝	18.2	15.0	※ 32	
482 12			研内	礫	粗安	25.7	22.2	※ 8.5	
482 13			覆土	礫	ホル	9.7	3.2	120	
483 1	21 図	PL20	24	加工	ホル	12.3	10.0	626.1	
483 2			覆土	剥片	チャ	2	2.5	1.5	
483 3			21	礫片	粗安	13	8.5	67.9	
487 1	24 図	PL21	覆土	石皿	チャ	3.1	2.1	2.5	
487 2	24 図	PL21	研内	磨石	粗安	14.7	9.7	※ 12	
487 3	24 図	PL21	7	磨石	粗安	13.0	10.1	778	
487 4			PL21	23	磨石	粗安	15.7	8.2	810
487 5	25 図	PL21	4	石皿	粗安	34.2	27.7	※ 76	
487 6	24 図	PL21	研内	石皿	粗安	16.1	17.9	※ 17	
487 7	26 図	PL21	研内	石皿	粗安	35.0	24.8	※ 98	
487 8	24 図	PL21	研内	石皿	粗安	36.4	28.1	※ 125	
487 9			研内	石枝	チャ	10.7	6.9	285	
487 10			15	剥片	ホル	12.2	6.1	186	
487 11			研内	礫	粗安	38.7	19.5	※ 140	
487 12			4	礫	粗安	8.0	6.6	227	
487 13			3	礫	粗安	5.4	4.0	79.4	
487 14			研内	礫	ホル	16.4	5.5	61.3	
487 15			6	礫	粗安	12.5	12.6	※ 10	

住居	No	図版	神田	出土	器種	石材	長さ	幅	重量
537	1	30 国	PL.22	2	四石	粗安	10.9	8.4	705
537	2	30 国	PL.22	6	磨石	粗安	11.9	7.7	576
537	3			15	洞片	チャ	9.3	3.8	77.4
537	4			2		粗安	13.5	12.5	※10
537	5			23	洞片	金山	9.1	3.8	343.5
542	1			洞木	加工	ホル	8.3	5.8	131.2
542	2	33 国	PL.23	洞木	加工	ホル	12.1	7.6	424.6
542	3			洞木	洞片	チャ	5.8	5.6	0.3
542	4			覆土	洞片	ホル	5.9	4.5	35.3
542	5			砂内	礎	粗安	29.3	21.5	※90
542	6			砂内	礎	粗安	17.1	21.0	※5.5
542	7			砂内	礎	粗安	19.3	19.2	※4.5
542	8			9	礎	ホル	14.5	2.8	142
542	9			洞木	敲石	砂岩	13.3	7.4	654
542	10			洞木	礎	粗安	16.4	7.3	334
542	11	33 国	PL.23	覆土	四石	粗安	10.4	9.8	901
542	12	33 国	PL.23	洞木	磨石	粗安	15.0	8.9	※10
542	13			洞木	礎	チャ	6.9	5.6	178
542	14			洞木	洞片	黒安	5.6	5.0	207
542	15			洞木	礎片	粗安	17	7.5	143
542	16			洞木	礎片	粗安	5.3	4.1	64.1
547	1	35 国	PL.23	砂内	石敷	チャ	2.9	1.8	1.3
547	2		PL.23	1	加工	チャ	4.9	3.3	20.0
547	3	35 国	PL.23	7	加工	チャ	4.0	2.7	12.3
547	4	35 国	PL.23	6	四石	金山	10.5	8.9	838
547	5	35 国	PL.23	13	磨石	金山	9.9	7.2	517
547	6		PL.23	15	磨石	粗安	13	8.0	475
547	7		PL.24	7	磨石	粗安	9.2	5.0	287
547	8		PL.24	7	磨石	粗安	12.5	6.4	203
547	9	35 国	PL.23	砂内	台石	粗安	17.3	7.9	※13
547	10		PL.24	4~12	石棧	黒頁	8.3	9.5	498
547	11			覆土	洞片	チャ	3.2	2.2	3.9
547	12			16	洞片	チャ	2.2	1.7	1.4
547	13			2	礎	ホル	22.7	19.1	※7.4
547	14			11	礎	ホル	11.1	6.8	531
547	15			5	礎	輝藏	9.4	4.1	143
547	16			19	礎	安武	9.7	3.7	152
547	17			砂内	礎	チャ	12.0	9.6	544
547	18			2	礎	粗安	21.6	12.5	
547	19			5	台石	粗安	13.6	11.6	※17
547	20			6	台石	粗安	16.5	18.0	※5.1
547	21			6~8	礎	粗安	17.5	17.4	※1.9
547	22			砂内	礎	粗安	22	13.6	※1.8
547	23			床直	礎	粗安	16.7	10.5	※2.7
547	24			1~6	礎	粗安	18.5	13.5	※2.4
547	25			1	礎	溶凝	15.2	15.7	※4.1
547	26			砂内	礎片	粗安	4.7	3.9	72.7
547	27			9	礎片	粗安	9.3	5.8	187
547	28			17	礎片	粗安	11.2	4.0	137
547	29			砂内	礎片	粗安	10.6	7.3	232
547	30			床直	礎片	粗安	17	10.2	※1.3
547	31			砂内	礎片	粗安	10.5	9.3	660
548	1	37 国	PL.24	覆土	四石	粗安	6.6	6.3	149

住居	No	図版	神田	出土	器種	石材	長さ	幅	重量
548	2			12	洞片	ホル	7.2	7.0	96.8
548	3			18	礎	粗安	16.8	6.8	764
548	4			12	礎	粗安	12.4	6.7	61.1
548	5			5	礎	粗安	7.6	5.4	121
548	6			19	礎	溶凝	7.8	6.0	141
548	7			覆土	礎	ホル	7.5	3.0	83.7
548	8			-9	礎	溶凝	42.0	21.0	※20.5
548	9			-7	礎	溶凝	25.1	24.7	※14.3
551	1		PL.25	2	四石	粗安	10.6	7.0	540
551	2		PL.25	10	四石	粗安	10.8	8.5	577
551	3			覆土	四石	粗安	10.3	7.2	403
551	4		PL.25	10	磨石	粗安	7.1	6.0	243
551	5		PL.25	12	磨石	粗安	7.7	7.5	432
551	6		PL.25	19	磨石	粗安	11.2	10.5	922
551	7		PL.25	4	磨石	粗安	9.2	8.8	617
551	8	40 国	PL.24	7	磨石	粗安	13.1	10.0	984
551	9		PL.25	3	磨石	粗安	9.3	9.0	615
551	10	40 国	PL.24	4~12	石皿	粗安	29.2	23.6	※50.8
551	11		PL.25	6	石皿	粗安	23.2	17.2	※24.8
551	12			30	台石	粗安	17.6	16.2	※21.4
551	13		PL.25	14	多孔	金山	19.3	18.9	※47.8
551	14	41 国	PL.25	11	石製	粗安	43.6	27.2	※31.4
551	15	40 国	PL.24	覆土	加工	チャ	2.8	2.4	6.2

重量の項の※印= kg を表す

土坑出土石器観察表

土坑	No.	図版	押印	器種	石材	長さ	幅	重量	
9	20	61	国	PL28	凹石	粗安	11.5	9.4	793
9	21			PL28	凹石	粗安	11.4	7.4	673
9	94			PL28	石核	チャ	3.9	5.5	36.2
71	22	62	国	PL28	凹石	粗安	12.7	8.2	552
98	23			PL28	凹石	粗安	9.2	9.2	660
106	73	62	国	PL28	多孔	花崗	27.1	19.2	※ 1.1
107	24	62	国	PL28	凹石	粗安	45.3	11.3	871
335	25	64	国	PL29	凹石	粗安	12.1	9.0	749
335	43	64	国	PL30	凹石	粗安	11.8	7.4	629
335	46			PL30	磨石	粗安	9.0	9.3	752
335	66	64	国	PL30	敲石	粗安	14.2	10.1	499
335	67	64	国	PL29	敲石	ホル	12.5	6.5	367
335	74	64	国	PL29	多孔	粗安	21.3	12.1	※ 2.7
336	47	65	国	PL30	磨石	粗安	12.6	9.6	885
336	70			PL30	台石	粗安	21.5	14.3	924
340	3			PL29	打斧	ホル	3.8	2.7	20.4
340	4	63	国	PL29	打斧	ホル	7.3	3.9	61.1
342	59	65	国	PL30	石皿	粗安	11.3	13.7	※ 1.1
346	26	66	国	PL31	磨石	粗安	12.9	10.6	※ 1.1
394	48	66	国	PL31	磨石	粗安	10.9	7.9	699
394	60	66	国	PL31	石皿	粗安	7.3	12.3	864
482	93	68	国	PL32	石製	粗安	36.1	26.4	※ 1.4
484	49	67	国	PL31	磨石	粗安	10.4	8.1	707
486	27			PL32	磨石	粗安	10.2	6.6	335
486	61			PL32	石皿	粗安	12	9.2	663
486	71				台石	粗安	13.9	7.5	372
486	75	69	国	PL32	多孔	粗安	23.2	14.8	※ 3.9
487	28	69	国	PL32	凹石	粗安	11.0	6.5	355
487	76	69	国	PL32	多孔	粗安	12.2	15.1	※ 1.6
499	68	71	国	PL33	敲石	ホル	16.6	8.7	774
502	50	72	国	PL34	磨石	粗安	10.6	7.5	370
502	77	72	国	PL34	多孔	粗安	24.4	22.8	※ 1.4
508	29			PL34	凹石	粗安	12.0	8.5	655
508	30	73	国	PL34	凹石	粗安	12.4	7.0	※ 5.5
508	31	73	国	PL34	凹石	粗安	13.3	9.7	983
508	32			PL35	凹石	粗安	9.9	8.5	485
508	51	73	国	PL34	磨石	粗安	14.2	10.0	※ 1.1
508	52	73	国	PL34	磨石	粗安	13.6	9.7	※ 1.1
508	78	73	国	PL35	多孔	粗安	25.6	16.2	※ 5.7
508	79	74	国	PL35	多孔	粗安	24.1	18.6	※ 4.5
514	19	74	国	PL35	使用	ホル	9.1	4.7	89.2
526	5			PL35	打斧	ホル	9.4	4.0	63.8
526	11				湖片	ホル	4.7	3.3	22.9
526	53	74	国	PL35	磨石	粗安	12.2	7.8	625
536	54	75	国		磨石	砂岩	11.0	7.7	352
536	55			PL36	磨石	粗安	8.8	7.2	609
542	80	75	国	PL36	多孔	粗安	9	9.5	571

土坑	No.	図版	押印	器種	石材	長さ	幅	重量	
545	33	76	国	PL36	凹石	粗安	11.4	8.0	570.6
548	12			PL37	加工	チャ	2.5	2.3	6.0
548	81	77	国	PL37	多孔	粗安	26.5	25.1	※ 11.6
548	82	77	国	PL37	石製	粗安	26	24.2	※ 7.5
548	83	77	国	PL37	多孔	粗安	17.8	23.3	※ 8.5
551	84	79	国	PL28	多孔	粗安	20.9	16.3	※ 4.7
552	6	78	国	PL38	打斧	ホル	12.3	8.0	235
552	13			PL38	加工	ホル	10.1	5.9	172.4
552	34			PL38	凹石	粗安	6.9	8.4	257
555	14	79	国	PL38	加工	ホル	13.7	11.5	662.3
555	62	79	国	PL38	石皿	粗安	14	9.2	※ 1.1
555	72			PL38	台石	粗安	13.2	10.8	※ 1.2
555	95			PL38	石核	チャ	1.9	3.8	7.4
557	35	80	国	PL39	凹石	粗安	12.5	8.5	425
558	63	80	国	PL39	石皿	粗安	22.7	28.3	※ 7.3
559	36	81	国	PL39	凹石	粗安	10.3	8.4	508
559	37	81	国	PL39	凹石	粗安	12.5	8.3	672
559	56	81	国	PL39	磨石	粗安	11.5	7.7	545
564	7	82	国	PL40	打斧	ホル	9.9	7.6	162
564	15			PL40	加工	チャ	2.9	3.4	6.4
593	1	84	国	PL41	石製	ホル	2.3	1.2	0.9
593	8	84	国	PL41	打斧	ホル	11.8	7	162
593	38	84	国	PL41	凹石	粗安	9.8	8.8	639
593	69	84	国	PL41	敲石	珪質	10.9	4.3	120
593	85	84	国	PL41	多孔	粗安	18.4	15.7	※ 4.3
593	86			PL41	多孔	花崗	8.6	8.5	334
597	39			PL42	磨石	粗安	4.5	7.1	137
612	57	84	国	PL42	磨石	粗安	13	8.5	634
629	2	86	国	PL43	石製	チャ	3.1	1.9	1.5
629	16			PL43	加工	ホル	9.1	6.0	100.7
629	40	86	国	PL43	凹石	粗安	11.9	8.7	755
629	41	86	国	PL43	凹石	粗安	10.9	6.9	501
629	42	86	国	PL43	凹石	粗安	16.0	6.9	661
648	9	86	国	PL43	打斧	ホル	12.4	6.3	260
652	17			PL44	加工	チャ	2.7	3.5	3.1
662	66	64	国	PL44	石皿	粗安	1.7	2.2	1.97
673	58	88	国	PL44	磨石	粗安	15.8	9.9	※ 1.2
673	87	88	国	PL44	多孔	粗安	24.4	10.6	※ 3.8
686	44	87	国	PL44	凹石	粗安	13.1	9.6	※ 1.2
686	65	87	国	PL44	石皿	粗安	15.3	15.7	※ 1.3
686	88	87	国	PL44	多孔	粗安	17.8	18.7	※ 5.8
686	89	87	国	PL44	多孔	粗安	23.0	12.6	796
686	90	87	国	PL44	多孔	粗安	12.1	10.8	810
693	45	88	国	PL45	凹石	粗安	13.0	8.1	937
700	92	89	国	PL45	多孔	粗安	31.0	20.9	※ 14.0

包含層出土石器觀察表

No	図版	種類	出土位置(X, Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
1	115 図	PL68	340・960	石鏃	チャ	1.9	1.7	1.2
2		PL68	315・855	石鏃	チャ	1.9	1.6	0.7
3		PL68	340・920	石鏃	チャ	2.6	1.9	2.9
4	115 図	PL68	2 区	石鏃	黒安	2.2	1.7	1.3
5	115 図	PL68	330・815	石鏃	チャ	1.9	2.0	0.9
6		PL68	315・925	石鏃	チャ	1.8	1.6	1.1
7	115 図	PL68	325・860	石鏃	黒曜	2.6	1.8	2.5
8		PL68	315・840	石鏃	チャ	3.3	2.1	3.9
9		PL68	325・790	石鏃	チャ	3.0	2.1	5.2
10	115 図	PL68	505 住居	石鏃	埴貫	4.5	1.4	1.3
11	115 図	PL68	504 住居	石鏃	チャ	1.6	1.2	0.4
12		PL68	19 溝	石鏃	チャ	2.7	1.7	1.7
13		PL68	74 住居	石鏃	チャ	2.4	1.7	2.0
14	115 図	PL68	104 住居	石鏃	チャ	2.3	2.5	2.1
15	115 図	PL68	486 住居	石鏃	チャ	1.4	1.5	0.6
16		PL68	79 住居	石鏃	チャ	2.2	1.2	0.5
17		PL68	86 住居	石鏃	チャ	2.4	1.7	1.1
18	115 図	PL68	75 住居	石鏃	チャ	2.5	1.6	1.3
19		PL68	503 住居	石鏃	チャ	2.2	2.0	1.5
20		PL68	85 住居	石鏃	チャ	2.0	2.0	2.4
21		PL68	85 住居	石鏃	チャ	2.0	2.4	2.6
22		PL68	101 住居	石鏃	チャ	1.9	1.3	0.6
23	115 図	PL68	531 住居	石鏃	チャ	2.4	1.3	1.1
24		PL68	72 住居	石鏃	チャ	2.9	1.2	1.0
25		PL68	3 区	石鏃	チャ	3.3	2.2	5.5
26		PL68	45 住居	石鏃	チャ	2.6	1.8	4.7
27		PL68	99 住居	石鏃	チャ	2.3	2.2	2.4
28		PL68	72 住居	石鏃	チャ	1.9	2.2	2.5
29		PL68	72 住居	石鏃	チャ	2.8	2.1	2.8
30		PL68	51 住居	石鏃	チャ	1.4	1.0	0.2
31	115 図	PL68	2 溝	石鏃	黒安	2.5	1.4	1.6
32		PL68	表 採	石鏃	チャ	1.3	1.2	0.3
33		PL68	表 採	石鏃	チャ	1.9	1.4	0.8
34		PL68	表 採	石鏃	チャ	2.9	1.5	3.9
35		PL68	表 採	石鏃	チャ	2.1	1.3	0.8
36	115 図	PL69	330・845	石鏃	チャ	3.8	1.8	3.6
37	115 図	PL69	85 住居	石鏃	チャ	3.4	1.1	1.7
38	115 図	PL69	42 住居	石鏃	チャ	2.6	2.0	1.9
39		PL65	330・820	打斧	ホル	5.7	3.8	42.1
40			330・820	打斧	ホル	4.4	3.5	24.5
41		PL65	325・845	打斧	ホル	9.8	5.2	21.2
42	114 図	PL65	335・815	打斧	ホル	6.7	5.2	10.9
43		PL65	305・905	打斧	ホル	9.1	6.0	14.2
44			315・820	打斧	ホル	8.9	6.1	21.0
45			325・835	打斧	ホル	6.8	3.8	39.2
46	114 図		345・830	打斧	ホル	6.0	6.0	76.3
47		PL65	360・860	打斧	ホル	5.9	5.8	82.4
48		PL65	315・810	打斧	ホル	9.7	6.8	16.7
49		PL65	315・855	打斧	ホル	9.1	6.0	84.4
50	114 図	PL65	305・860	打斧	ホル	9.3	5.7	79.6
51	114 図	PL65	310・830	打斧	ホル	9.1	7.5	82.0
52		PL65	320・790	打斧	ホル	8.8	7.1	15.1
53	114 図	PL65	335・850	打斧	ホル	9.5	7.7	14.9
54		PL65	320・810	打斧	ホル	9.9	7.9	16.3
55			345・830	打斧	ホル	10.7	7.7	34.9
56	114 図	PL65	325・870	打斧	ホル	10.4	8.3	25.0

No	図版	種類	出土位置(X, Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
57	114 図	PL65	315・850	打斧	ホル	11.0	8.0	26.0
58		PL65	315・860	打斧	ホル	11.3	8.5	32.8
59		PL65	330・815	打斧	ホル	9.5	5.5	87.6
60		PL65	315・820	打斧	ホル	12.4	5.7	94.7
61	114 図	PL65	315・820	打斧	ホル	12.3	6.0	15.3
62			330・810	打斧	ホル	9.0	5.6	86.9
63		PL65	325・860	打斧	ホル	13.5	6.2	16.1
64		PL65	315・860	打斧	ホル	12.5	5.9	14.0
65		PL65	325・860	打斧	ホル	12.8	7.5	22.7
66			305・815	打斧	ホル	12.2	7.6	18.2
67		PL65	310・890	打斧	ホル	8.8	6.7	77.2
68		PL65	325・820	打斧	ホル	10.0	5.1	97.9
69		PL65	325・925	打斧	ホル	10.3	6.7	13.0
70			320・790	打斧	ホル	10.6	5.3	89.7
71		PL65	310・860	打斧	ホル	10.0	5.5	99.6
72		PL65	325・815	打斧	ホル	10.2	8.5	26.7
73	130 図	PL85	320・795	石核	ホル	8.8	9.2	36.4
74			325・875	打斧	ホル	5.1	5.9	54.2
75	114 図		340・840	打斧	ホル	5.6	6.5	57.1
76		PL66	325・875	打斧	ホル	10.4	7.0	15.3
77			325・815	打斧	ホル	7.2	7.8	79.3
78		PL66	320・790	打斧	ホル	10.0	7.5	14.6
79		PL65	330・820	打斧	ホル	5.5	5.8	65.8
80		PL65	335・810	打斧	ホル	5.4	5.5	60.1
81			320・790	打斧	ホル	6.1	4.9	52.8
82		PL65	330・880	打斧	ホル	6.6	6.2	74.1
83	114 図	PL65	310・815	打斧	ホル	6.1	5.6	58.9
84			315・855	打斧	ホル	10.5	6.1	26.6
85		PL66	335・965	打斧	ホル	14.5	11.6	74.6
86		PL66	305・840	打斧	ホル	11.5	5.6	17.9
87		PL66	340・920	打斧	ホル	13.5	6.4	17.7
88		PL66	315・900	打斧	ホル	12.9	9.0	38.5
89			310・870	打斧	ホル	8.3	6.0	14.0
90		PL66	86 住居	打斧	ホル	12.6	3.7	11.7
91		PL66	186 住居	打斧	ホル	10.3	3.8	7.6
92		PL66	表 採	打斧	ホル	10.3	3.8	93.9
93		PL66	85 住居	打斧	ホル	10.4	4.4	82.3
94			484 住居	打斧	ホル	13.8	6.2	18.8
95			80 住居	打斧	ホル	7.4	4.2	72.9
96			70 住居	打斧	ホル	8.0	4.8	11.5
97			74 住居	打斧	ホル	9.8	5.1	13.0
98		PL66	503 住居	打斧	ホル	12.1	5.3	16.1
99		PL66	117 住居	打斧	ホル	12.2	4.6	12.5
100		PL66	26 住居	打斧	ホル	13.3	5.4	28.3
101	114 図	PL66	547 住居	打斧	ホル	10.8	5.3	20.1
102		PL66	14 溝	打斧	ホル	11.7	6.5	28.0
103		PL66	171 土坑	打斧	ホル	11.3	7.6	32.0
104	114 図	PL66	168 土坑	打斧	ホル	16.1	8.8	49.9
105		PL66	505 住居	打斧	ホル	10.4	4.6	62.5
106		PL66	85 住居	打斧	ホル	10.1	4.7	67.4
107		PL66	107 住居	打斧	ホル	12.6	5.7	13.0
108		PL66	291 住居	打斧	ホル	6.5	6.0	76.3
109			288 土坑	打斧	ホル	10.0	6.3	16.7
110			63 住居	打斧	ホル	6.3	4.3	56.7
111		PL66	201 土坑	打斧	ホル	6.4	5.8	74.9
112		PL66	75 住居	打斧	ホル	10.0	5.5	88.8

No	図版	神図	出土位置(X,Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
113		PL66	107 住居	打斧	ホル	144	67	162
114	114 図	PL66	9 住居	打斧	ホル	80	30	294
115		PL66	67 住居	打斧	ホル	84	50	608
116			98 住居	打斧	ホル	100	50	144
117		PL66	3 住居	打斧	ホル	89	66	962
118		PL66	45 住居	打斧	ホル	92	52	118
119	114 図	PL67	86 住居	打斧	ホル	89	66	127
120		PL67	77 住居	打斧	ホル	111	73	190
121			55 住居	打斧	ホル	54	65	770
122		PL67	9 溝	打斧	ホル	58	69	681
123		PL67	132 土坑	打斧	ホル	94	91	233
124			209 土坑	打斧	ホル	82	61	780
125			144 土坑	打斧	ホル	76	58	593
126		PL67	61 住居	打斧	ホル	132	90	257
127		PL67	87 住居	打斧	ホル	109	64	172
128		PL67	99 住居	打斧	ホル	123	60	170
129	114 図	PL67	227pit	打斧	黒頁	121	73	274
130		PL67	113 住居	打斧	ホル	67	65	113
131		PL67	79 住居	打斧	ホル	143	99	413
132		PL67	79 住居	打斧	ホル	140	103	507
133		PL67	117 住居	打斧	ホル	105	87	154
134		PL67	4 住居	打斧	ホル	88	70	111
135			15 溝	打斧	ホル	105	46	940
136		PL67	70 住居	打斧	粗安	74	55	904
137		PL67	79 住居	打斧	ホル	56	60	667
138			204 土坑	打斧	ホル	53	35	222
139			253 土坑	打斧	ホル	43	30	139
140			55 住居	打斧	ホル	20	32	62
141		PL67	534 住居	打斧	ホル	118	53	234
142		PL67	88 住居	打斧	ホル	118	60	168
143		PL67	493 住居	打斧	ホル	120	65	166
144		PL67	28 住居	打斧	ホル	105	64	124
145		PL67	294 土坑	打斧	ホル	87	55	732
146		PL67	147 土坑	打斧	ホル	107	68	113
147		PL67	15 溝	打斧	ホル	97	61	808
148		PL67	446pit	打斧	黒頁	100	65	142
149		PL67	12 溝	打斧	ホル	82	69	122
150		PL67	表 採	打斧	ホル	132	66	302
151		PL67	表 採	打斧	ホル	110	62	169
152	114 図	PL67	表 採	打斧	ホル	82	58	108
153	114 図	PL67	350・845	打斧	ホル	176	86	450
154			345・825	打斧	ホル	106	65	153
155		PL67	330・825	打斧	ホル	94	70	189
156			330・825	打斧	ホル	100	40	919
157		PL68	320・800	磨斧	蛇紋	105	58	307
158	115 図	PL68	330・815	磨斧	緑泥	64	46	146
159	115 図	PL68	330・870	磨斧	変玄	77	24	362
160	115 図	PL68	54pit	磨斧	変玄	87	33	981
161	115 図	PL68	147pit	磨斧	蛇紋	49	27	251
162		PL69	360・865	四石	粗安	85	74	468
163		PL69	340・825	四石	粗安	98	78	630
164	119 図	PL69	345・825	四石	粗安	112	102	870
165			325・810	四石	粗安	88	55	172
166	117 図	PL69	320・790	四石	粗安	112	69	437
167	117 図	PL69	310・810	四石	粗安	120	72	509
168	117 図		340・820	四石	粗安	131	92	746
169		PL69	365・865	四石	粗安	116	81	667
170		PL69	325・870	四石	粗安	100	76	389

No	図版	神図	出土位置(X,Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
171	117 図	PL69	310・860	四石	粗安	96	77	346
172			360・885	四石	粗安	113	69	401
173			345・825	四石	粗安	117	74	514
174	117 図	PL69	315・805	四石	粗安	107	79	566
175		PL69	340・830	四石	粗安	101	88	608
176	117 図	PL69	325・815	四石	粗安	103	81	689
177	117 図	PL69	330・870	四石	粗安	110	88	476
178			320・860	四石	粗安	110	74	474
179		PL70	360・860	四石	粗安	124	84	466
180		PL69	310・855	四石	粗安	118	91	617
181		PL70	310・855	四石	粗安	119	82	695
182		PL69	320・925	四石	粗安	110	87	633
183		PL70	315・830	四石	粗安	125	86	773
184	117 図	PL70	310・810	四石	粗安	120	79	580
185			325・810	四石	粗安	120	83	649
186		PL70	315・795	四石	粗安	121	86	773
187			315・920	四石	粗安	115	93	939
188	118 図	PL70	310・800	四石	粗安	129	184	822
189	118 図	PL70	340・820	四石	粗安	150	97	846
190	117 図	PL70	320・790	四石	粗安	135	83	673
191		PL70	310・810	四石	粗安	141	85	706
192		PL70	340・825	四石	粗安	133	107	818
193		PL70	320・800	四石	粗安	140	97	554
194		PL70	330・880	四石	粗安	140	104	968
195		PL72	360・870	磨石	粗安	153	100	※ 13
196		PL70	325・815	四石	粗安	101	81	416
197		PL70	320・790	四石	粗安	110	66	364
198	119 図		320・810	四石	滑凝	128	90	514
199		PL69	320・790	四石	粗安	67	67	257
200			325・815	四石	粗安	65	77	321
201			365・865	磨石	粗安	108	70	442
202			310・880	磨石	粗安	76	101	443
203		PL70	14 溝	四石	粗安	80	76	344
204		PL70	74 住居	四石	粗安	102	93	584
205		PL70	130 土坑	四石	粗安	94	99	344
206	118 図	PL70	105 住居	四石	粗安	97	92	363
207		PL70	表 採	四石	粗安	100	93	569
208	118 図	PL70	495 住居	四石	粗安	92	88	441
209		PL70	260 土坑	四石	粗安	100	91	403
210			15 溝	四石	粗安	77	73	340
211			460 土坑	四石	粗安	84	81	598
212		PL70	85 住居	四石	粗安	99	90	504
213		PL71	28 住居	四石	粗安	119	103	853
214			2 住居	四石	粗安	85	75	428
215		PL70	8 住居	四石	粗安	95	88	602
216		PL70	55 住居	四石	粗安	104	68	440
217		PL71	17 溝	四石	粗安	85	67	290
218			17 溝	四石	粗安	94	60	359
219		PL71	17 溝	四石	粗安	98	75	424
220		PL71	531 住居	四石	粗安	106	69	238
221		PL71	17 溝	四石	粗安	98	71	422
222	119 図		105 住居	四石	粗安	79	53	262
223			2 住居	四石	粗安	92	62	313
224		PL71	198 住居	四石	粗安	90	66	349
225	118 図	PL71	14 住居	四石	粗安	88	65	409
226		PL71	105 住居	四石	粗安	95	71	478
227		PL71	57 住居	四石	粗安	100	83	517
228		PL71	85 住居	四石	粗安	95	77	365



No	図版	種図	地土位置(X,Y)	路種	石材	長さ	幅	重量
229		PL.71	17 溝	凹石	粗安	10.5	7.3	374
230	118 図	PL.71	50 住居	凹石	粗安	10.0	7.8	544
231		PL.71	72 住居	凹石	粗安	10.4	7.8	354
232		PL.71	14 溝	凹石	粗安	10.1	6.8	447
233		PL.71	65 住居	凹石	粗安	10.1	7.3	500
235			18 住居	凹石	粗安	10.8	8.5	488
236		PL.71	648 土坑	凹石	粗安	9.9	7.5	631
237			5 溝	凹石	粗安	9.5	7.6	604
238			6 集石	凹石	粗安	11.0	8.3	512
239			534 住居	凹石	粗安	10.0	8.0	540
240		PL.71	75 住居	凹石	粗安	11.0	7.8	418
242		PL.71	17 溝	凹石	粗安	11.5	8.5	488
243		PL.71	17 溝	凹石	粗安	10.2	8.3	505
244		PL.71	17 溝	凹石	粗安	11.0	8.8	631
245		PL.71	17 溝	凹石	粗安	10.8	8.4	537
247			17 溝	凹石	粗安	11.5	8.3	560
248		PL.71	表 採	凹石	粗安	11.5	8.5	649
249		PL.71	505 住居	凹石	粗安	11.5	8.7	561
250		PL.71	139 土坑	凹石	粗安	10.0	13.3	609
251		PL.71	15 溝	凹石	粗安	12.0	7.5	465
252		PL.72	3 住居	凹石	粗安	10.5	8.0	574
253		PL.72	5 溝	凹石	滑懸	13.0	8.0	665
254		PL.72	表 採	凹石	粗安	12.5	7.3	431
255		PL.72	84 住居	凹石	粗安	11.3	8.2	639
256		PL.72	108 住居	凹石	粗安	10.1	10.3	632
257		PL.72	44 住居	凹石	粗安	12.3	10.1	904
258		PL.72	534 住居	凹石	粗安	11.4	8.6	720
259		PL.72	2 集石	凹石	粗安	13.1	9.6	740
260		PL.72	85 住居	凹石	粗安	12.8	9.0	724
261		PL.72	表 採	凹石	粗安	12.7	8.2	515
262		PL.72	表 採	凹石	粗安	13.4	10.5	748
263		PL.72	15 溝	凹石	粗安	12.8	11.0	767
264		PL.72	74 住居	凹石	粗安	13.4	8.4	707
265		PL.72	表 採	凹石	粗安	11.9	9.2	746
266		PL.72	83 住居	凹石	粗安	13.9	11.0	791
267		PL.72	15 溝	凹石	粗安	13.2	9.3	808
268		PL.72	504 住居	凹石	粗安	14.8	9.0	990
269		PL.72	534 住居	凹石	粗安	10.5	7.2	462
270		PL.72	124 住居	凹石	粗安	11.2	10.4	750
271	117 図	PL.69	表 採	凹石	粗安	9.7	7.9	679
272	117 図	PL.69	14 溝	凹石	粗安	14.4	7.3	758
273	118 図	PL.73	57 土坑	凹石	粗安	12.8	10.8	999
274	118 図	PL.73	15 土坑	凹石	粗安	9.2	13.4	744
275	118 図	PL.73	2 集石	凹石	粗安	19.1	14.3	※ 27
276			表 採	凹石	角安	5.3	6.1	158
277			17 溝	凹石	粗安	9.7	5.5	271
278			14 溝	凹石	粗安	8.3	8.9	257
279			108 住居	凹石	粗安	8.6	9.0	336
280			531 住居	凹石	粗安	10.0	5.4	226
281			15 溝	凹石	粗安	8.0	10.5	412
282			85 住居	凹石	粗安	10.8	7.3	355
283			330・810	凹石	粗安	6.9	5.3	145
284			330・810	凹石	粗安	8.7	7.6	248
285		PL.73	330・810	凹石	粗安	11.9	8.4	612
286		PL.73	350・865	凹石	粗安	13.0	9.1	831
287			340・820	凹石	粗安	6.1	8.9	273
288		PL.73	335・815	磨石	粗安	6.3	6.0	154
289		PL.73	350・875	磨石	粗安	9.0	8.2	453

No	図版	種図	地土位置(X,Y)	路種	石材	長さ	幅	重量
290		PL.73	330・840	磨石	粗安	12.0	11.1	893
291		PL.73	325・810	磨石	粗安	10.6	9.4	727
292		PL.73	315・825	磨石	粗安	11.8	10.8	※ 10
293		PL.73	325・815	磨石	粗安	7.3	6.2	281
294		PL.73	335・810	磨石	粗安	8.3	7.0	550
295		PL.73	320・790	磨石	粗安	8.1	7.8	566
296		PL.74	330・825	磨石	粗安	9.5	8.5	997
297		PL.74	345・830	磨石	粗安	9.6	9.3	999
298		PL.74	360・890	磨石	粗安	11.3	7.6	648
299		PL.74	340・940	磨石	粗安	12.4	7.5	654
300		PL.74	320・790	磨石	粗安	13.1	7.8	592
301		PL.74	320・810	磨石	粗安	12.0	8.6	784
302		PL.73	320・810	磨石	粗安	7.2	5.9	263
303		PL.73	330・870	磨石	粗安	8.6	6.9	495
304		PL.73	340・830	磨石	粗安	9.3	7.0	479
305		PL.73	325・835	磨石	粗安	9.4	7.7	593
306	119 図	PL.74	330・820	磨石	粗安	13.9	11.5	※ 22
307		PL.73	345・830	磨石	粗安	6.7	5.2	131
308		PL.73	315・840	磨石	粗安	8.5	7.3	374
309		PL.73	340・825	磨石	粗安	10.0	7.8	312
310		PL.73	315・805	磨石	粗安	10.0	8.3	443
311		PL.74	330・875	磨石	粗安	11.3	9.5	492
312		PL.74	325・810	磨石	粗安	11.5	9.5	700
313		PL.74	325・815	磨石	粗安	10.8	8.7	648
314		PL.74	345・825	磨石	粗安	10.8	9.3	720
315		PL.73	315・920	磨石	粗安	12.8	10.7	989
316		PL.73	330・875	磨石	粗安	13.7	12.0	※ 11
317		PL.74	315・810	磨石	粗安	14.0	12.0	※ 14
318		PL.73	315・800	磨石	粗安	6.9	6.5	237
319		PL.74	325・815	磨石	粗安	7.8	6.6	279
320			330・820	磨石	滑懸	6.2	3.3	107
321		PL.74	330・875	磨石	粗安	8.2	7.9	396
322			315・860	磨石	粗安	5.2	7.4	206
323			355・840	磨石	粗安	6.4	6.9	200
324		PL.74	335・825	磨石	粗安	5.5	9.3	695
325			325・815	磨石	粗安	9.4	9.4	470
326			325・815	磨石	粗安	9.6	9.6	257
327			330・820	磨石	粗安	11.7	4.5	287
328		PL.74	310・820	磨石	粗安	11.6	11.0	746
329		PL.74	315・860	磨石	粗安	6.6	11.3	402
330			330・870	磨石	粗安	11.9	11.1	344
331		PL.73	267 土坑	磨石	粗安	6.3	5.9	247
333		PL.73	21 住居	磨石	粗安	8.3	7.6	411
335		PL.73	15 土坑	磨石	粗安	8.1	7.3	435
336		PL.73	表 採	磨石	粗安	7.7	7.0	326
337		PL.73	166 住居	磨石	粗安	7.5	7.0	498
339		PL.74	137 土坑	磨石	粗安	10.6	9.5	※ 11
340		PL.74	18 溝	磨石	粗安	9.0	8.0	405
341		PL.74	26 住居	磨石	粗安	9.7	9.0	489
343		PL.74	1 集石	磨石	粗安	9.1	6.7	373
344		PL.74	75 住居	磨石	粗安	8.9	7.0	366
345		PL.74	121 住居	磨石	粗安	9.9	7.9	370
346		PL.75	200 土坑	磨石	粗安	9.5	6.9	499
347		PL.75	501 住居	磨石	粗安	10.6	8.5	539
348		PL.75	664 土坑	磨石	粗安	10.7	8.3	451
349		PL.75	65 住居	磨石	粗安	10.4	8.7	665
350		PL.75	21 住居	磨石	粗安	10.0	9.1	613
351		PL.75	15 溝	磨石	粗安	10.5	8.8	659

No	図版	種別	地土位置(X, Y)	路種	石材	長さ	幅	重量
352	119 図	PL.75	294 土坑	磨石	粗安	11.2	8.8	623
353		PL.75	48 住居	磨石	粗安	10.4	8.3	640
354		PL.75	15 溝	磨石	粗安	11.9	7.2	363
355		PL.75	538 住居	磨石	粗安	11.3	8.8	526
356		PL.75	161 住居	磨石	粗安	11.3	8.6	588
357		PL.75	21 住居	磨石	粗安	13.0	9.4	572
358		PL.75	510 住居	磨石	粗安	13.2	8.2	660
359		PL.75	619 住居	磨石	粗安	12.7	8.5	664
360		PL.76	2 集石	磨石	粗安	12.1	10.2	959
361		PL.76	15 溝	磨石	粗安	12.7	9.7	980
362		PL.76	表 採	磨石	粗安	11.3	9.0	690
363		PL.75	75 住居	磨石	粗安	13.8	7.5	778
364		PL.76	15 溝	磨石	粗安	13.8	7.4	688
365		PL.76	7 集石	磨石	粗安	12.9	8.2	887
366		PL.76	510 住居	磨石	粗安	14.0	9.8	897
367		PL.76	430 住居	磨石	粗安	9.0	10.1	※ 1.2
368	119 図	PL.76	22 住居	磨石	粗安	14.3	8.4	656
369		PL.76	545 住居	磨石	粗安	14.3	9.1	915
370		PL.76	294 土坑	磨石	粗安	12.1	10.2	※ 1.1
372		PL.76	15 溝	磨石	粗安	12.5	9.6	※ 1.0
373		PL.76	2 溝	磨石	粗安	12.6	9.0	926
374		PL.76	506 住居	磨石	粗安	7.1	10.3	783
375		PL.76	506 住居	磨石	粗安	7.7	9.2	862
376		PL.77	476 住居	磨石	粗安	16.2	9.6	※ 1.1
377		PL.77	14 溝	磨石	粗安	14.7	11.8	※ 1.3
378		PL.77	4 集石	磨石	粗安	9.5	11.8	691
379		PL.77	57 土坑	磨石	粗安	11.1	14.1	924
380		PL.75	79 住居	磨石	粗安	8.7	6.2	310
381		PL.75	79 住居	磨石	粗安	8.9	5.6	309
382		PL.76	538 住居	磨石	粗安	10.2	7.9	640
383		PL.75	36 住居	磨石	粗安	13.0	8.0	782
384		PL.76	75 住居	磨石	粗安	12.0	8.0	972
385		PL.76	14 溝	磨石	粗安	11.0	7.0	662
386			15 溝	磨石	粗安	13.3	7.5	583
387			16 溝	磨石	粗安	7.4	6.7	311
388			1 集石	磨石	粗安	3.6	5.0	67.5
389			505 住居	磨石	粗安	4.5	4.8	90.1
391		PL.75	212 土坑	磨石	粗安	9.4	7.3	462
392		PL.75	1 配石	磨石	粗安	8.9	7.9	504
393			115 住居	磨石	粗安	5.3	5.2	87.3
394			90 住居	磨石	粗安	5.2	7.2	167
395			1 集石	磨石	粗安	8.5	4.5	175
396		PL.75	113 住居	磨石	粗安	5.3	8.4	205
397	119 図	PL.75	103 住居	磨石	粗安	8.0	9.1	496
398			17 溝	磨石	粗安	6.3	8.8	296
399		PL.76	表 採	磨石	粗安	8.5	8.5	401
400		PL.76	123 土坑	磨石	粗安	8.0	7.5	328
401			498 住居	磨石	粗安	6.6	5.2	133
402		PL.76	18 住居	磨石	粗安	10.8	8.5	309
403		PL.76	286 住居	磨石	粗安	8.6	12.4	367
404			2 集石	磨石	粗安	6.6	10	304
405			5 集石	磨石	粗安	10.6	7.9	374
406			147 住居	磨石	粗安	10.2	6.9	316
407			11 住居	磨石	粗安	14.5	11.5	942
408			75 住居	磨石	粗安	7.1	5.5	122
409		PL.75	350・870	磨石	粗安	11.9	7.6	310
410		PL.75	表 採	磨石	粗安	8.0	7.2	280
411		PL.76	335・830	磨石	粗安	11.8	7.4	714

No	図版	種別	地土位置(X, Y)	路種	石材	長さ	幅	重量
412		PL.78	310・860	石皿	粗安	17.7	18.3	※ 2.9
413		PL.78	350・870	石皿	粗安	18.2	19.2	※ 2.4
414			330・820	石皿	粗安	14.6	11.1	※ 1.3
415			335・825	石皿	粗安	11.2	11.2	※ 1.3
416			345・830	石皿	粗安	11.6	11	693
417		PL.80	345・830	石皿	粗安	16.2	10	※ 1.2
418	121 図	PL.79	320・800	石皿	粗安	9.3	8.4	320
419	121 図	PL.79	320・880	石皿	粗安	8.7	9.8	286
420	121 図	PL.79	310・810	石皿	粗安	7.3	8.9	304
422	122 図	PL.78	15 溝	石皿	粗安	18.2	19.2	※ 3.2
423	122 図	PL.78	75 住居	石皿	粗安	22	13.8	※ 1.7
424		PL.78	14 溝	石皿	粗安	14.5	19.5	※ 3.4
425	122 図	PL.79	807pit	石皿	粗安	22.2	17	※ 2.5
427		PL.79	8 溝	石皿	粗安	19.4	18	※ 5.2
428		PL.79	2958pit	石皿	粗安	20	14.9	※ 2.2
429	122 図	PL.79	412 住居	石皿	粗安	22.6	21.8	※ 9.0
430		PL.79	15 溝	石皿	粗安	9.8	6.8	331
431	121 図	PL.79	79 住居	石皿	粗安	5.8	7.6	176
432	121 図		17 溝	石皿	粗安	6.9	7.6	212
433	121 図	PL.79	104 住居	石皿	粗安	15.2	10.3	847
434		PL.79	15 溝	石皿	粗安	11.5	10.4	802
435		PL.78	504 住居	石皿	粗安	10.4	10.9	802
436		PL.79	699 土坑	石皿	粗安	13	7.6	977
437		PL.79	4 集石	石皿	粗安	11.8	10	699
438			618 住居	石皿	粗安	11.7	12.3	※ 1.6
439			107 住居	石皿	粗安	11.7	11	※ 1.1
440			77 住居	石皿	粗安	10	9.2	382
441			75 住居	石皿	粗安	8.9	8.3	326
442			330・850	石皿	粗安	8.6	7.0	380
443	121 図	PL.79	330・820	石皿	粗安	4.3	6.0	66.8
444		PL.77	325・815	敲石	ホル	8.9	5.4	189
445		PL.77	330・840	敲石	ホル	12.8	5.1	141
446	120 図	PL.77	345・830	敲石	ホル	12	3.4	181
447	120 図	PL.77	305・835	敲石	ホル	13.2	5.2	288
448	120 図	PL.77	320・820	敲石	頁岩	12.4	4.7	390
449	120 図	PL.77	330・820	敲石	鈔岩	9.6	3.0	92.8
450		PL.77	325・815	敲石	ホル	13.1	3	138
451	120 図	PL.77	320・810	敲石	チャ	6.1	4.8	217
452		PL.77	320・800	敲石	ホル	11.7	7.6	510
453		PL.77	305・855	敲石	ホル	10	3.2	208
454		PL.77	310・800	敲石	ホル	11.4	5.8	335
455		PL.77	315・850	敲石	ホル	9.5	8.3	596
456			315・840	敲石	粗安	10.5	6.7	590
457		PL.77	310・860	敲石	粗安	8.5	7.1	509
458			325・845	敲石	滑凝	12.2	6.7	567
459		PL.77	320・795	敲石	粗安	12.6	6.5	717
460		PL.78	325・960	敲石	粗安	17.0	8.6	※ 1.1
461	119 図	PL.78	310・930	敲石	粗安	16.1	9.7	※ 1.1
462		PL.77	325・845	敲石	ホル	9.1	7.8	210
463		PL.77	330・930	敲石	粗安	11.1	9.4	428
464	120 図	PL.77	320・905	敲石	珪質	10.8	5.0	138
465			79 住居	敲石	粗安	11.4	6.2	366
466			505 住居	敲石	粗安	11.0	5.6	315
467			510 住居	敲石	粗安	11.5	6.4	428
468			14 溝	敲石	粗安	13.5	5.6	432
469		PL.78	443 住居	敲石	粗安	14.0	7.0	691
470		PL.78	31 住居	敲石	粗安	9.5	6.5	599
471	119 図	PL.77	283 住居	敲石	粗安	11.4	7.7	414

No	図版	神図	出土位置(X, Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
472	119 図	PL77	544 住居	甌石	粗安	11.6	8.5	324
473		PL77	267 土坑	甌石	滑凝	12.1	8.2	672
474		PL77	498 住居	甌石	滑凝	130	8.1	644
475			10 住居	甌石	滑凝	16.7	8.0	716
476			17 住居	甌石	粗安	16.3	7.7	821
477		PL77	104 住居	甌石	ホル	8.9	5.9	294
478		PL78	415 住居	甌石	ホル	12	10.2	577
479 120 図		PL78	107 住居	甌石	ホル	9.3	10.1	491
480 120 図		PL78	85 住居	甌石	ホル	11.4	9.9	739
481			65 住居	甌石	ホル	11.8	6.7	338
482 120 図		PL78	14 溝	甌石	ホル	12.7	6.8	634
483		PL77	168 土坑	甌石	ホル	7.9	4.6	140
484			6 住居	甌石	粗安	7.7	6.6	290
485			83 住居	甌石	粗安	8.8	6.0	235
486		PL77	340・850	甌石	珪質	10.5	6.9	105
487			330・865	甌石	砂岩	15.4	10.6	584
488 123 図		PL80	360・865	台石	粗安	16.7	13.6	※ 18
489		PL80	315・860	台石	粗安	18.7	15.9	※ 11
490		PL80	310・810	台石	粗安	9.2	16.2	※ 11
491 123 図		PL80	365・860	台石	粗安	8.7	16.1	500
492			330・875	台石	粗安	14.3	8.4	700
493 123 図		PL80	320・790	台石	粗安	22.6	16.8	※ 38
494		PL80	330・820	台石	粗安	13.4	11.8	※ 12
495		PL80	325・815	台石	粗安	19.7	14.1	※ 30
496			320・790	台石	粗安	13.2	13.9	※ 30
497		PL80	320・860	台石	粗安	29.3	17.5	※ 81
498		PL80	130 住居	台石	粗安	17.8	17.3	※ 22
499		PL80	15 溝	台石	粗安	16.2	13.2	※ 14
500		PL80	74 住居	台石	粗安	14.8	18.8	※ 20
502		PL80	84 住居	台石	粗安	10	12.2	※ 11
503			648 土坑	台石	粗安	13.7	9.1	※ 10
504			350・845	台石	粗安	10.7	10	※ 11
505 116 図		PL69	315・860	石罫	珪質	7.9	4.0	64.4
506 116 図		PL69	315・825	石罫	黒質	6.0	4.4	32.6
507 116 図		PL69	320・845	石罫	珪質	3.2	3.1	11.1
508 123 図		PL82	305・870	多孔	滑凝	13.0	12.1	※ 21
509 124 図		PL82	325・815	多孔	粗安	16.2	11.5	※ 28
510		PL82	335・810	多孔	粗安	18.3	14.1	※ 41
511		PL81	320・820	多孔	粗安	25.2	17.0	※ 83
512		PL81	330・825	多孔	花崗	22.3	19.0	※ 44
513 123 図		PL82	320・800	多孔	粗安	29.6	16.4	※ 64
514 125 図		PL81	320・795	多孔	粗安	22.6	21.0	※ 23
515		PL83	345・830	多孔	粗安	18.4	15.1	※ 18
516		PL83	315・820	多孔	粗安	22.7	12.2	※ 21
517			315・810	多孔	粗安	11.7	8.8	774
518			325・810	多孔	粗安	11.0	10.7	717
519			345・830	多孔	粗安	8.1	9.1	487
520			315・855	多孔	粗安	10.1	10.4	※ 10
521			315・810	多孔	粗安	14.6	13	942
522		PL83	350・850	多孔	粗安	25.3	18.5	※ 63
523		PL83	355・840	多孔	金山	21.2	14.3	※ 42
524 129 図		PL84	315・810	石製	粗安	29.4	27.5	※ 112
525		PL80	159 住居	台石	粗安	14.5	12.8	740
526		PL80	539 住居	台石	粗安	16.1	18.9	※ 26
527 123 図		PL83	84 住居	多孔	粗安	20.6	14.2	※ 23
528		PL82	12 住居	多孔	粗安	23.2	19.5	※ 39
529		PL82	20 住居	多孔	粗安	25.6	22.2	※ 44
530		PL81	75 住居	多孔	粗安	34.5	34.3	※ 143

No	図版	神図	出土位置(X, Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
531		PL82	不明	多孔	粗安	20.8	22.5	※ 60
532		PL82	17 溝	多孔	粗安	20.8	18.0	※ 36
533		PL83	123 土坑	多孔	粗安	27.5	18.2	※ 44
534 124 図		PL81	494 土坑	多孔	粗安	28.4	22.0	※ 89
535		PL81	5 集石	多孔	粗安	24.2	20.5	※ 70
536 126 図		PL84	14 溝	多孔	粗安	17.6	21	※ 51
537 123 図		PL82	75 住居	多孔	粗安	17.0	14.6	※ 49
538		PL82	2 谷(包)	多孔	粗安	23.0	14.7	※ 47
539 125 図		PL81	169 土坑	多孔	粗安	23.0	17.8	※ 82
540			498 住居	多孔	粗安	15.6	11.6	※ 10
541		PL83	331 住居	多孔	粗安	16.6	13.7	※ 24
542			2 溝	多孔	粗安	10.1	16	※ 15
543			2 谷(包)	多孔	粗安	13.2	11	※ 10
544		PL83	284 土坑	多孔	粗安	10.7	16.3	※ 24
545		PL83	434 土坑	多孔	粗安	9.6	10.7	333
546 124 図		PL83	219 土坑	多孔	金山	27.6	16.8	※ 89
547 124 図		PL83	219 土坑	多孔	金山	21.2	15.4	※ 53
549		PL83	699 土坑	多孔	金山	24.8	17.2	※ 58
550		PL83	83 土坑	多孔	金山	17.2	13.2	※ 27
551			5 集石	多孔	粗安	10.5	11.3	798
552 125 図		PL82	57 土坑	多孔	粗安	29.4	17.4	※ 60
553		PL83	57 土坑	多孔	粗安	16.5	15	※ 18
554		PL83	5 集石	多孔	粗安	22.7	11.3	※ 27
555 129 図		PL85	325・810	石罫	緑片	12.7	4.2	302
556 129 図		PL85	320・790	石罫	緑片	9.4	6.7	375
557 129 図		PL85	75 住居	石罫	アイ	16.7	9.4	※ 18
558 129 図		PL85	335・805	石製	榍石	7	3.1	19.7
559 126 図		PL84	320・810	石製	粗安	37.2	29.4	※ 180
560 128 図		PL84	219 土坑	石製	粗安	34.8	29.4	※ 174
561 127 図		PL84	75 住居	石製	粗安	36.6	33.6	※ 164
563 129 図		PL85	430pit	石製	榍石	8.7	6.9	82.1
564 129 図		PL85	2 集石	石製	石罫	12.6	10.2	576
565		PL69	340・850	削器	チャ	5.2	3.5	333
566 116 図		PL69	325・820	削器	黒質	9.0	3.7	44.4
567 116 図		PL69	325・925	削器	黒質	5.8	8.3	135
568		PL69	130 住居	削器	黒質	5.3	10.5	95.6
569			335・830	加工	チャ	3.3	2.7	7.7
570			320・870	加工	チャ	3.7	2.4	7.1
571 131 図		PL86	320・840	加工	チャ	3.1	4.4	12.0
572			320・860	加工	チャ	3.9	2.9	10.0
573		PL86	315・805	加工	チャ	3.6	4.0	18.2
574			330・820	加工	チャ	4.7	3.2	19.1
575 131 図		PL86	305・835	加工	黒質	4.7	4.6	29.6
576			8 溝	加工	チャ	2.9	2.3	6.2
577		PL86	65 住居	加工	チャ	4.1	2.8	10.1
578			165 住居	加工	チャ	3.4	2.9	13.8
579 131 図			1 甲	加工	チャ	3.1	3.3	11.1
580			表 採	加工	チャ	3.5	2.8	7.7
581			65 住居	加工	チャ	4.1	3.5	16.2
582 131 図		PL86	536 住居	加工	チャ	4.7	3.8	16.5
583			表 採	加工	チャ	4.3	2.7	9.7
584 131 図		PL86	表 採	加工	砂質	3.8	2.9	11.7
585			310・825	加工	チャ	3.8	2.8	9.3
586		PL86	330・815	加工	黒質	3.7	2.9	11.3
587			330・815	加工	チャ	2.2	4.6	12.9
588			330・850	加工	チャ	4.0	3.0	15.8
589		PL86	325・790	加工	チャ	3.8	4.9	13.6
590 131 図		PL86	320・820	加工	チャ	2.9	3.4	22.0

No	国産	神岡	出土位置(X,Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
591			320・805	加工	チヤ	4.5	3.9	33.0
592	131 国	PL86	85 住居	加工	チヤ	2.0	2.5	4.0
593		PL86	85 住居	加工	チヤ	3.5	3.3	4.2
594			9 溝	加工	チヤ	1.8	2.8	4.3
595			98 住居	加工	チヤ	2.1	3.2	9.2
596			105 住居	加工	チヤ	4.4	2.1	8.8
597	131 国	PL86	217 土坑	加工	チヤ	2.4	4.3	6.6
598			105 住居	加工	チヤ	4.1	3.4	11.5
599			536pit	加工	チヤ	3.0	3.7	13.3
600	131 国	PL86	310・850	加工	点頁	2.9	1.9	3.9
601			325・855	加工	チヤ	3.6	2.4	6.0
602			315・865	加工	ホル	6.6	2.4	18.9
603			104 住居	加工	チヤ	3.2	2.3	4.0
604			99 住居	加工	チヤ	4.4	1.8	5.2
606			131 土坑	加工	チヤ	3.3	2.6	6.9
607	131 国	PL86	98 住居	加工	チヤ	3.4	2.8	9.8
608			17 住居	加工	チヤ	3.4	4.1	12.1
609			28 住居	加工	チヤ	4.3	5.0	32.8
610		PL86	表 採	加工	チヤ	2.6	2.0	8.8
611			315・845	加工	チヤ	2.7	1.9	5.0
612			320・870	加工	チヤ	2.2	3.0	7.4
613			315・815	加工	チヤ	3.7	2.9	10.9
614			335・805	加工	チヤ	3.6	2.8	13.4
615		PL86	325・855	加工	チヤ	3.6	3.8	17.2
616		PL86	320・815	加工	チヤ	4.4	3.0	16.9
617			335・815	加工	珪頁	6.5	2.0	16.3
618			65 住居	加工	チヤ	3.1	2.5	8.1
619			85 住居	加工	チヤ	2.4	3.3	7.5
620		PL86	249 土坑	加工	チヤ	4.2	1.9	7.4
621		PL86	511pit	加工	チヤ	3.5	2.0	6.6
622		PL86	表 採	加工	チヤ	3.1	2.3	7.4
623			168 土坑	加工	チヤ	4.5	3.3	12.8
624			42 住居	加工	チヤ	4.2	3.3	19.0
625			不明	加工	チヤ	6.7	4.4	28.5
626			315・800	加工	チヤ	3.7	5.0	31.3
627	132 国	PL87	484 住居	加工	チヤ	3.2	4.5	18.9
628		PL87	表 採	加工	チヤ	4.8	4.1	17.8
629		PL87	99 住居	加工	チヤ	4.8	3.7	25.7
630		PL87	表 採	加工	チヤ	6.0	3.3	25.7
631			488 住居	加工	チヤ	5.6	6.8	65.5
632	132 国	PL87	表 採	加工	チヤ	5.6	4.1	28.1
633	132 国	PL87	289 土坑	加工	チヤ	7.5	6.0	67.5
634			100 住居	加工	緑片	12.4	5.9	281.3
635	132 国	PL87	674 土坑	加工	ホル	12.3	6.5	385.2
636			340・820	加工	ホル	2.8	5.3	16.4
637			360・870	加工	頁岩	6.2	4.2	36.4
638			330・815	加工	ホル	5.5	4.8	33.5
639	132 国	PL87	315・860	加工	ホル	8.7	3.3	28.2
640		PL87	330・990	加工	ホル	4.3	7.2	56.7
641		PL87	340・825	加工	ホル	7.1	5.3	79.5
642			360・890	加工	ホル	9.5	5.5	129.3
643		PL87	335・945	加工	ホル	10.6	6.4	156.3
644			104 住居	加工	ホル	3.0	5.5	20.6
645			484 住居	加工	ホル	3.7	5.8	34.1
646			31 住居	加工	ホル	5.3	6.4	48.3
647			101 住居	加工	ホル	4.6	6.0	50.3
648			330-830	加工	ホル	5.2	5.8	57.1
649			2 住居	加工	ホル	4.9	7.2	67.9

No	国産	神岡	出土位置(X,Y)	器種	石材	長さ	幅	重量
650			45 住居	加工	ホル	5.3	7.4	68.0
651	132 国	PL87	59 住居	加工	ホル	9.4	4.3	40.8
652			85 住居	加工	ホル	8.0	5.5	68.7
653			538 住居	加工	ホル	9.3	8.0	185.5
654	132 国	PL87	168 住居	加工	ホル	12.0	6.7	212.1
655	132 国	PL87	34 住居	加工	ホル	11.0	7.0	263.1
656			55 住居	加工	ホル	11.1	9.0	329.3
657			28 住居	加工	ホル	9.4	8.0	261.7
658			335・835	加工	ホル	4.8	5.1	37.3
659			315・850	加工	珪頁	4.1	6.3	36.3
660			330・850	加工	珪頁	4.0	5.7	19.3
661			320・820	加工	ホル	5.2	5.2	22.0
662			320・805	加工	ホル	4.1	5.4	38.4
663			320・840	加工	ホル	5.8	5.2	74.1
664			330・805	加工	ホル	5.5	6.0	36.2
665			315・795	加工	ホル	5.3	5.8	42.0
666			320・865	加工	ホル	6.7	4.2	58.3
667			330・820	加工	ホル	7.4	4.7	66.1
668			320・815	加工	ホル	7.3	4.4	50.4
669			340・825	加工	ホル	7.3	7.6	77.3
670			330・820	加工	ホル	7.5	6.7	95.0
671			320・810	加工	ホル	7.4	7.0	81.3
672			330・950	加工	黒頁	7.3	7.0	122.8
673			330・820	加工	ホル	7.1	7.2	121.9
674			330・870	加工	ホル	8.0	7.0	90.5
675			305・825	加工	ホル	8.5	6.4	127.3
676			330・875	加工	ホル	10.9	5.8	176.7
677			335・810	加工	ホル	8.7	7.0	163.8
678			310・860	加工	ホル	9.3	7.5	214.7
679	132 国	PL87	345・840	加工	ホル	9.1	7.3	209.9
680	132 国	PL87	325・870	加工	ホル	9.8	10.2	320.2
681			325・920	加工	ホル	10.6	9.5	416.4
682			325・875	加工	ホル	14.3	9.8	412.7
683			110 住居	加工	ホル	6.3	3.3	23.8
684			9 溝	加工	ホル	4.8	6.0	33.8
685			65 住居	加工	ホル	7.2	4.2	46.4
686			不明	加工	ホル	6.1	5.6	53.7
687			85 住居	加工	ホル	6.3	5.8	58.5
688			100 住居	加工	頁岩	7.6	4.8	65.8
689			492 住居	加工	ホル	7.7	5.8	74.2
690			113 住居	加工	ホル	9.2	6.5	82.1
691			113 土坑	加工	ホル	5.3	9.7	118.7
692			表 採	加工	ホル	9.7	7.2	173.3
693			17 溝	加工	ホル	9.2	6.3	101.6
694			76 住居	加工	頁岩	9.3	7.4	171.3
695	132 国	PL87	31 住居	加工	ホル	9.8	6.0	162.0
696			44 土坑	加工	ホル	7.0	10.0	113.5
697	132 国	PL87	表 土	加工	ホル	9.3	9.3	139.0
698			85 住居	加工	ホル	5.7	10.0	193.9
699			513 住居	加工	ホル	6.4	10.8	140.3
700			137 土坑	加工	ホル	8.0	11.0	202.5
701			531 住居	加工	ホル	9.7	8.3	250.8
702			121 住居	加工	ホル	11.5	6.7	271.1
703			144 土坑	加工	ホル	11.0	7.8	313.6
704			137 土坑	加工	ホル	10.2	11.7	311.5
705	132 国	PL87	335・815	加工	灰安	10.3	5.6	187.2
706			305・890	加工	ホル	9.0	8.0	193.1
707		PL87	310・820	加工	ホル	8.9	9.4	257.3

No	図版	神田	出土位置	器種	石材	長さ	幅	重量
708			355・840	加工	ホル	10.5	8.5	395.8
709	PL87		310・860	加工	ホル	12.1	9.2	244.0
710	PL87		14 溝	加工	ホル	9.7	5.9	129.2
711	PL87		540 住居	加工	ホル	9.8	6.0	190.4
712			9 住居	加工	ホル	8.9	7.6	294.5
713			21 住居	加工	ホル	10.3	8.4	336.5
714			23 住居	加工	ホル	11.4	9.3	380.2
715			72 住居	加工	ホル	10.6	10.8	444.9
716			不明	加工	ホル	10.0	13.3	452.4
717			325・885	加工	ホル	7.7	6.1	120.1
718			77 住居	加工	ホル	3.9	6.1	35.3
719			79 住居	加工	ホル	4.4	4.9	37.1
720			56 住居	加工	ホル	6.8	3.2	33.4
721			79 住居	加工	ホル	9.0	3.9	59.3
722			517 土坑	加工	ホル	5.9	6.0	35.3
723			337 土坑	加工	ホル	5.4	6.7	110.0
724			154 土坑	加工	ホル	8.8	7.0	168.0
725			104 住居	加工	ホル	9.8	12.3	471.7
726	PL87		79 住居	加工	ホル	9.4	12.9	535.2
727	PL86		462 住居	使用	チャ	3.0	10.9	4.8
728	PL86		表 採	使用	チャ	4.5	1.7	4.5
729			476 住居	使用	チャ	3.1	2.4	6.1
730			315・840	使用	チャ	3.0	3.2	8.0
731	130 国	PL86	2 住居	使用	珪質	4.7	3.9	12.0
732	130 国	PL86	320・800	使用	硬頁	3.4	5.9	21.5
733	PL86		59 住居	使用	チャ	9.3	5.0	100.1
734			315・840	使用	黒質	5.5	7.2	52.7
735	PL85		116 土坑	石核	黒曜	2.8	2.5	12.2
736	130 国	PL85	76 住居	石核	黒曜	2.3	2.5	9.4
737			325・875	石核	チャ	3.5	3.3	13.6
738			315・855	石核	チャ	2.7	3.7	17.6
739	PL85		340・820	石核	チャ	3.9	3.5	18.4
740			335・820	石核	チャ	3.4	3.0	14.8
741			330・850	石核	チャ	3.3	4.2	23.7
742	PL85		335・820	石核	チャ	3.1	4.6	21.3
743	PL85		330・825	石核	チャ	3.8	3.3	22.7
744			330・830	石核	チャ	3.0	4.9	33.7
745			350・870	石核	チャ	3.4	5.4	38.7
746	PL85		320・810	石核	チャ	4.8	5.6	49.0
747	PL85		340・825	石核	チャ	4.0	6.0	46.0
748	PL85		325・815	石核	チャ	5.3	6.4	73.6
749			325・815	石核	チャ	4.9	7.9	83.3
750			67 住居	石核	チャ	2.3	2.5	6.9
751			26 住居	石核	チャ	2.5	2.9	9.4
752			526 住居	石核	チャ	3.2	3.6	19.9
753			105 住居	石核	チャ	3.4	4.3	21.1
754			173 住居	石核	チャ	3.3	4.6	17.8
755			81 住居	石核	チャ	3.1	4.8	23.7
756	PL85		498 住居	石核	チャ	3.5	5.2	42.9
757			187 住居	石核	チャ	3.7	4.0	36.8
758	130 国	PL85	526 住居	石核	チャ	4.3	5.5	26.8
759	PL85		534 住居	石核	チャ	4.4	5.4	50.2
760	PL85		253 土坑	石核	チャ	3.3	2.8	15.0
761	PL85		291 土坑	石核	チャ	2.6	4.9	16.0
762	PL85		253 土坑	石核	チャ	2.8	3.5	13.6
763			307 土坑	石核	チャ	3.8	3.0	12.8
764			291 土坑	石核	チャ	3.0	3.7	18.8
765			335・840	石核	チャ	3.7	3.1	23.2
766			330・830	石核	チャ	3.8	3.7	23.5

No	図版	神田	出土位置	器種	石材	長さ	幅	重量
767			14 溝	石核	チャ	4.2	3.3	28.9
768	PL86		3 礫石	石核	チャ	5.2	4.0	27.9
769	PL86		283 土坑	石核	チャ	3.8	5.3	29.3
770			335・815	石核	チャ	5.7	5.2	84.5
771			310・820	石核	ホル	9.8	5.9	165.2
772			350・840	石核	ホル	8.0	6.9	184.1
773			335・865	石核	ホル	9.3	6.8	233.5
774	PL86		345・835	石核	ホル	8.6	7.0	286.3
775	PL86		325・820	石核	ホル	12.7	12.0	712.3
776			57 住居	石核	チャ	6.4	4.0	52.8
777			117 土坑	石核	ホル	8.0	3.7	61.0
778	PL86		17 溝	石核	黒質	5.2	6.5	75.2
779			2249pit	石核	チャ	7.0	5.2	109.1
780			表 土	石核	ホル	11.7	9.2	327.8
781	PL86		2 谷(包)	石核	ホル	10.9	12.7	547.9
782			1 配石	石核	ホル	12.7	10.0	606.0
783			310・890	石核	チャ	6.3	4.0	90.8
784			315・840	石核	チャ	5.9	4.9	107.8
785			340・820	石核	チャ	7.5	6.1	241.4
786			320・800	石核	チャ	7.2	5.8	180.6
787			320・800	石核	チャ	7.1	6.6	192.2
788			340・820	石核	ホル	8.3	6.5	223.7
789			310・800	石核	チャ	7.6	8.3	307.0
790			315・825	石核	ホル	10.7	9.4	419.5
791			340・835	石核	ホル	13.6	8.9	769.1
792			105 住居	石核	チャ	5.4	3.3	71.5
793			48 住居	石核	チャ	5.0	5.8	101.1
794			15 住居	石核	チャ	5.4	4.5	92.6
795	PL86		15 住居	石核	チャ	7.0	6.2	181.1
796	PL86		6 礫石	石核	黒安	5.8	7.0	151.9
797	PL86		65 住居	石核	チャ	5.8	7.6	188.7
798			88 住居	石核	ホル	8.2	8.0	309.6
799			10 住居	石核	ホル	8.1	5.4	210.4
800	PL86		148 住居	石核	ホル	5.6	8.4	225.6
801	PL86		85 住居	石核	黒質	7.4	6.8	148.4
802			29 住居	石核	ホル	12.2	11.1	635.0
803			2 谷(包)	石核	チャ	9.4	7.8	305.4
804	PL86		335・825	石核	チャ	5.0	5.1	86.9
805			350・840	石核	チャ	6.6	5.0	121.7
806	PL86		320・920	石核	黒質	12.8	9.7	667.9
807			104 住居	石核	チャ	5.0	12.5	150.5
808			405 土坑	石核	チャ	9.2	3.3	163.8
809	PL86		17 溝	石核	チャ	4.9	8.9	195.8
810			17 溝	石核	ホル	9.6	7.6	358.1
811	PL86		14 溝	石核	チャ	7.9	10.5	369.0
812	PL86		表 採	石核	ホル	13.8	6.7	388.5
813			表 採	石核	ホル	9.1	10.5	548.8
814	115 国	PL68	325・840	礫石	ホル	10.2	9.5	493
815			310・900	礫石	黒質	7.9	2.5	17.5
816			325・900	加工	珪質	10.7	5.0	112.2
817			355・840	礫石	粗安	11.5	8.7	667
818	PL75		12 溝	礫石	粗安	8.5	7.5	59.8
819			355・840	礫石	粗安	6.4	5.3	179
821	PL79		330・825	石皿	粗安	11.5	12.5	※ 1.1
824	114 国	PL67	668	打斧	ホル	10.9	6.6	153
825	130 国	PL85	668	石核	ホル	11.8	11.5	※ 1.1
826	132 国	PL87	692 土坑	加工	ホル	19.2	8.8	196
827	124 国	PL72	692 土坑	多孔	粗安	17.9	13.3	※ 3.4
828	PL44		(662 土坑)	石皿	粗安	6.3	7.1	197



# 写 真 图 版







八王子丘陵上空からみた遺跡と渡良瀬川・足尾山系



上空からみた遺跡周辺の状況



1. 遺跡全景（南から）



2. 遺跡遠景（南側からみた渡良瀬扇状地）



3. 台地を分断する南北低地（低地部が旧河道）



4. 遺跡全景（東から）



5. 遺跡全景（西から）

## PL.4



1. 遺跡全景（1・2区、南から）



2. 遺跡全景（3・4区、南から）



3. 遺跡全景（1・2区、北から）



4. 上空からみた遺構配置状況と埋没谷



5. 遺構確認面下の土層堆積（310-970 G）



6. 遺構確認面下の土層堆積（310-960 G）



7. 遺構確認面下の土層堆積（330-970 G）



8. 遺構確認面下の土層堆積（340-970 G）



1. 41号住居全景（南から）



2. 41号住居炉跡



3. 41号住居埋喪（西から）



4. 73号住居埋喪（南から）



5. 73号住居埋喪（西から）



1. 125号住居ピット検出状況



2. 調査時認定の住居プラン(125・126住)



3. 482号住居全景(北から)



4. 482号住居遺物出土状況



5. 482号住居炉跡(東から)



1. 483号住居全景（北から）



2. 483号住居土層堆積



3. 487号住居全景（南から）



4. 487号住居土層堆積



5. 487号住居炉跡（北から）



1. 527号住居全景（南から）



2. 527号住居土層堆積



3. 537号住居全景（北から）



4. 537号住居遺物出土状況



5. 537号住居pit 遺物出土状況



6. 537号住居土層堆積



7. 548号住居全景（東から）



8. 548号住居遺物出土状況





1. 542号住居全景（南から）



2. 542号住居遺物出土状況1



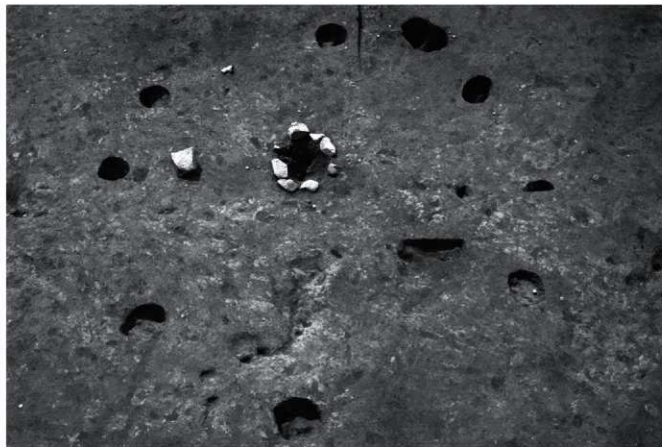
3. 542号住居遺物出土状況2



4. 542号住居炉跡（東から）



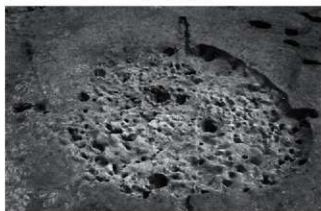
5. 542号住居炉跡（南から）



1. 547号住居全景（北から）



2. 547号住居遺物出土状況



3. 547号住居 pit 配置状況



4. 547号住居土層堆積状況



5. 547号住居跡



1. 551号住居全景（北から）



2. 551号住居張出部（北から）



3. 551号住居張出部（西から）



4. 551号住居埋裏



5. 1号埋裏全景



6. 3号埋裏全景



7. 1号炉全景



8. 2号炉全景



1. 土坑全景 (4区)



2. 9号土坑



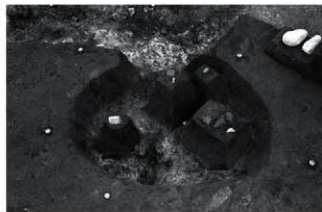
3. 71号土坑



4. 106号土坑



5. 182号土坑



1. 335号土坑



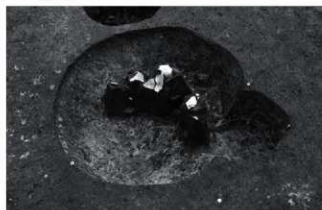
2. 同・遺物出土状況



3. 336号土坑



4. 340号土坑



5. 341号土坑



6. 342号土坑



7. 343号土坑



8. 344号土坑



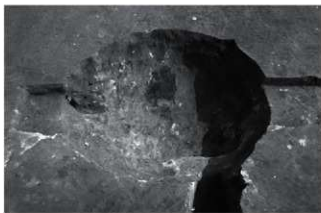
1. 345号土坑



2. 346号土坑



3. 389号土坑



4. 393号土坑



5. 394号土坑



6. 400号土坑



7. 483号土坑



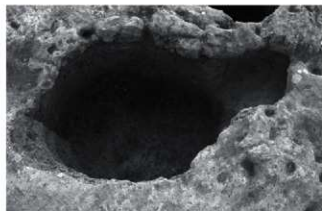
8. 484号土坑



1. 487号土坑



2. 488号土坑



3. 490号土坑



4. 496号土坑



5. 499号土坑



6. 501号土坑



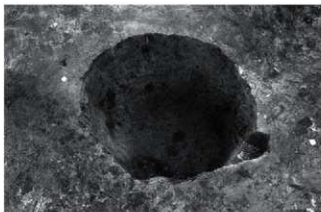
7. 503号土坑



8. 508号土坑



1. 519号土坑



2. 522号土坑



3. 526号土坑



4. 536号土坑



5. 538号土坑



6. 539号土坑



7. 541号土坑



8. 546号土坑





1. 547号土坑



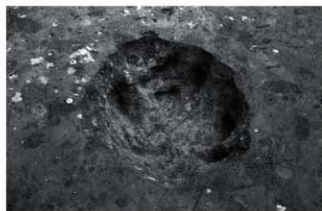
2. 548号土坑



3. 552号土坑



4. 557号土坑



5. 558号土坑



6. 559号土坑



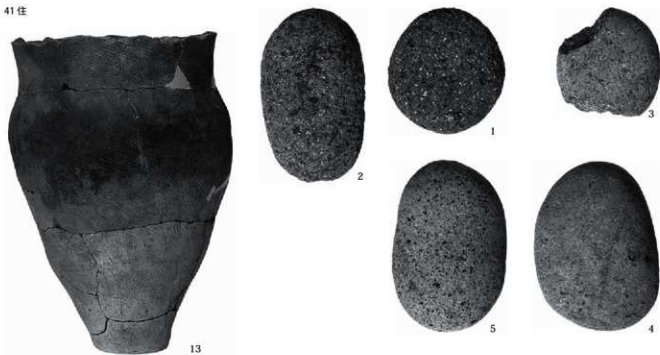
7. 564号土坑



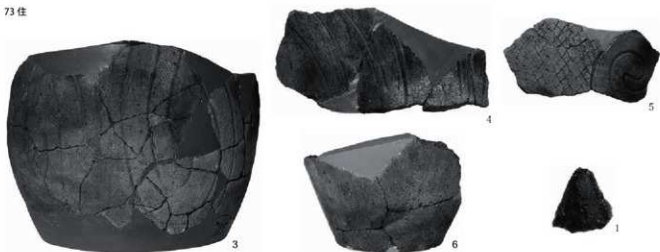
8. 593号土坑

# PL.18

41住



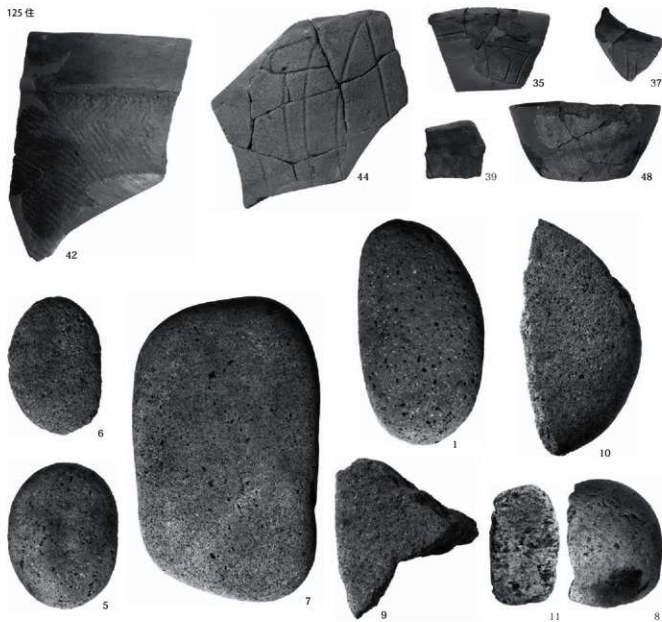
73住



125住



125住



482住



# PL.20

482 住



4

483 住



27



12



28



16



4



8



6



32



33



13



14



23



31



25



15



24



17



21



30



22



11



29



19



26



20



5



1



18



34



10



9

487 住



18



16



20



# PL.22

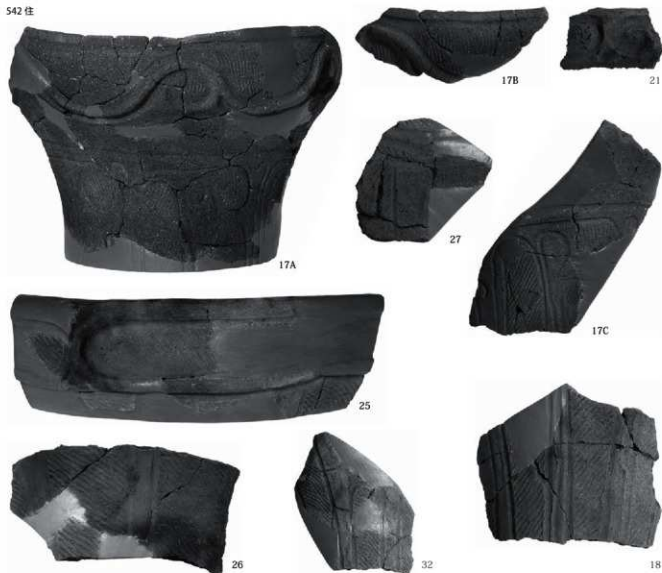
527住



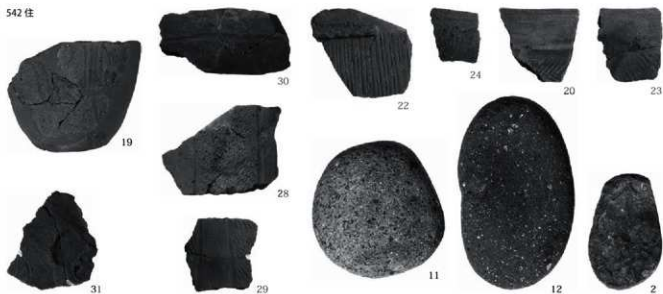
537住



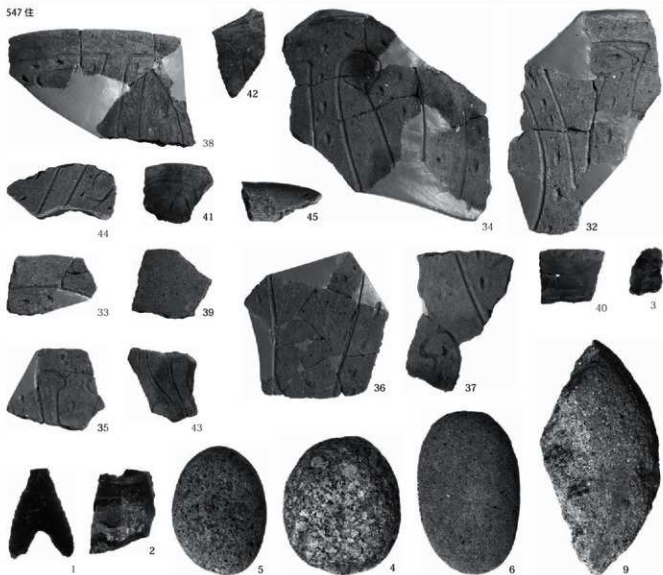
542住

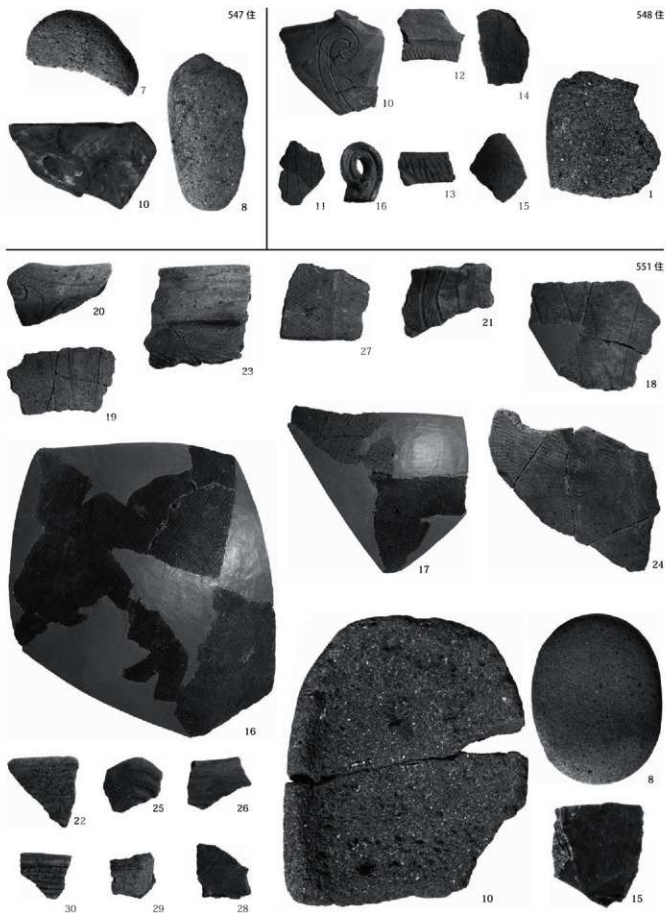


542住



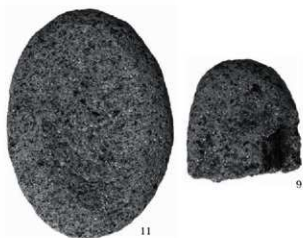
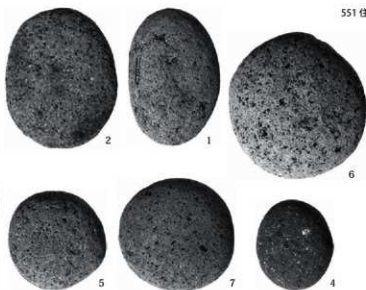
547住





547号(2)・548号・551号(1)住居出土の遺物





1号



1埋裏



1号炉（2）出土の遺物・1号埋裏



3埋裏



# PL.28

9 土坑



623



622B



622A



20



21



94

71 土坑



100



101



22

98 土坑



23

107 土坑



24

106 土坑



103

104

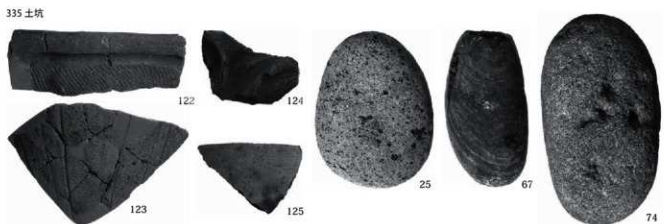
102



105

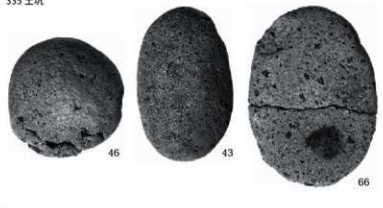


73

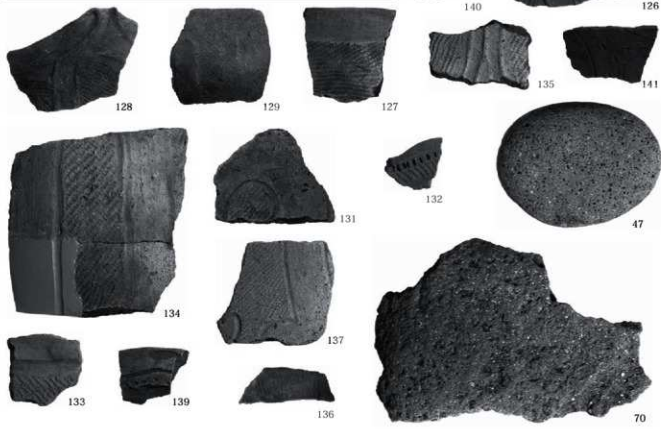


# PL.30

335 土坑



336 土坑



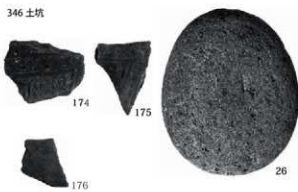
342 土坑



343 土坑



346 土坑



344 土坑



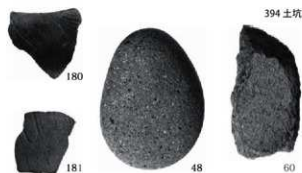
389 土坑



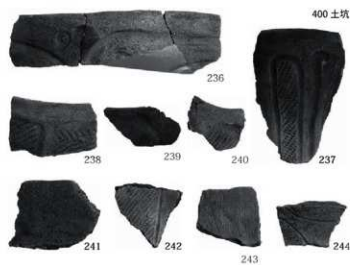
393 土坑



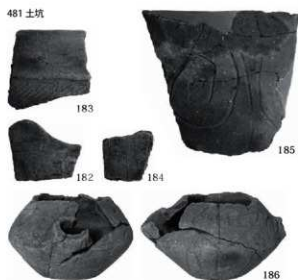
394 土坑



400 土坑



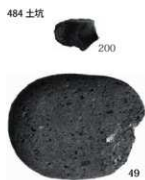
481 土坑



483 土坑

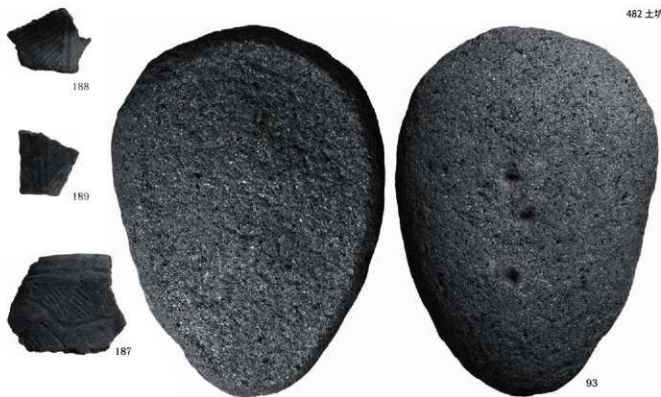


484 土坑



488 土坑

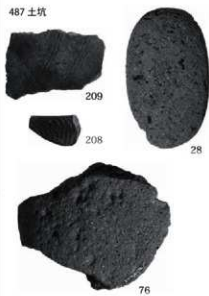




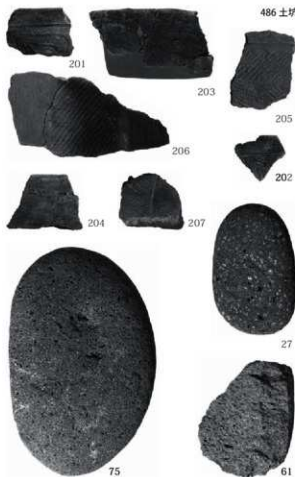
497 土坑



487 土坑



486 土坑



498 土坑



500 土坑



256



496 土坑

490 土坑



215



216



213



214



218



222



217



225



221



219



224



223



220



229



228



68



230



232



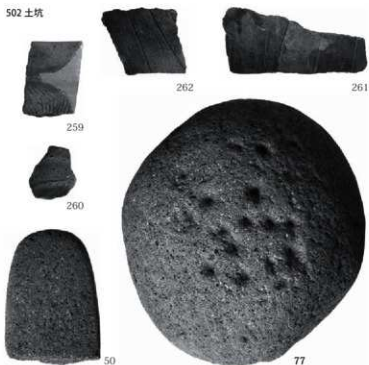
231

# PL.34

501 土坑



502 土坑



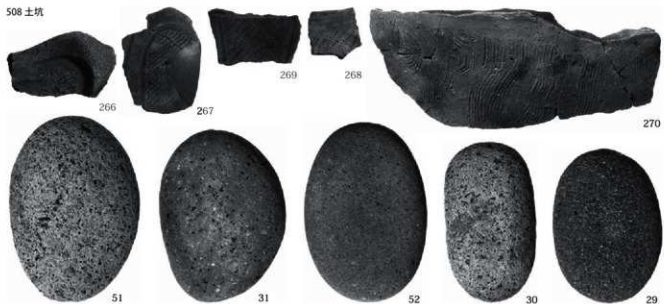
503 土坑

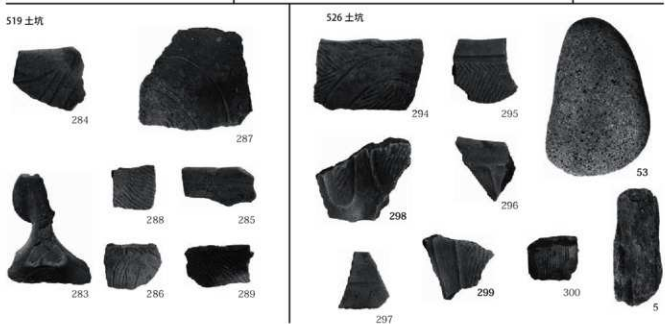
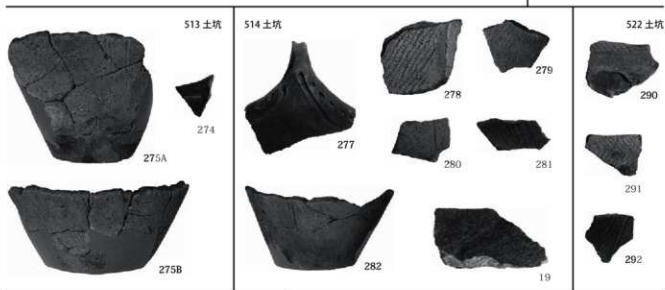
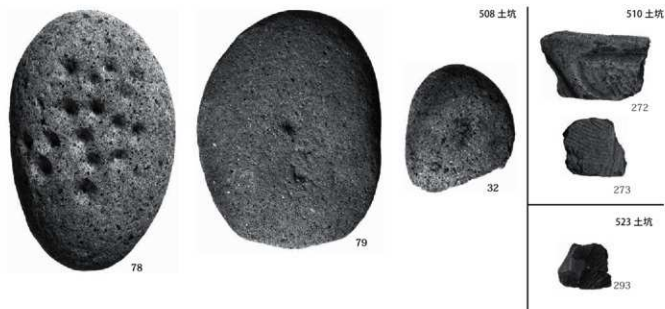


509 土坑



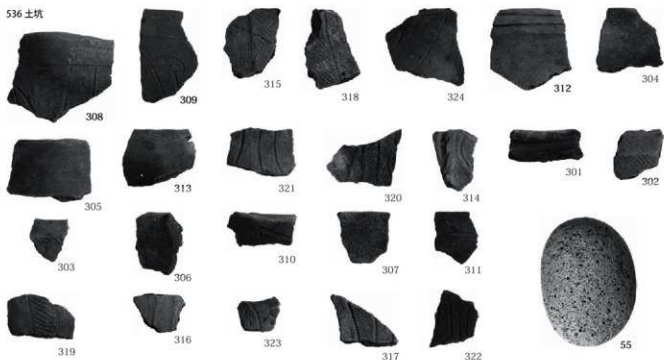
508 土坑





# PL.36

536 土坑



538 土坑



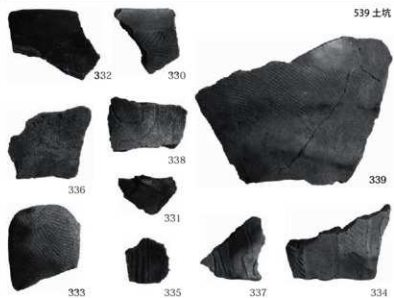
542 土坑



547 土坑



539 土坑



545 土坑

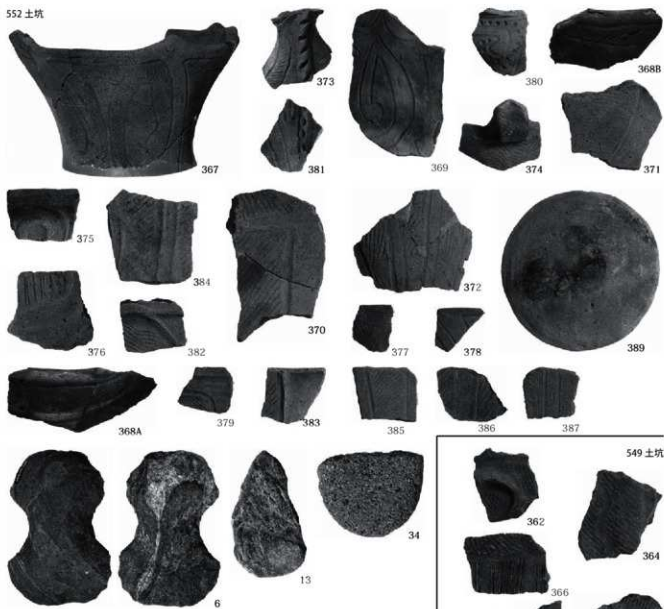


548 土坑



# PL.38

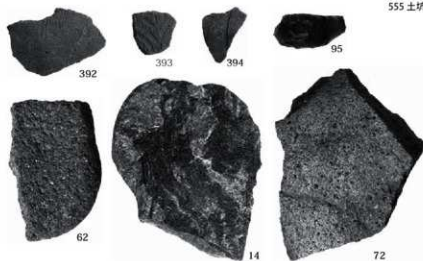
552 土坑



549 土坑



555 土坑



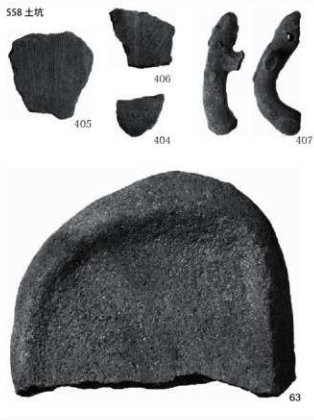
551 土坑



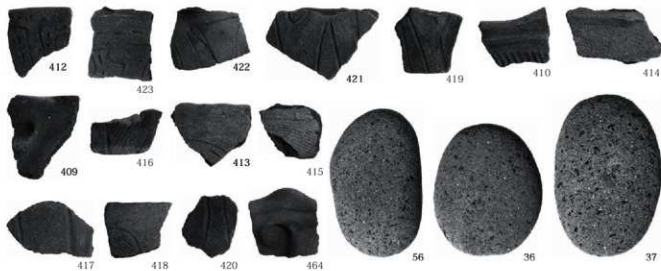
557 土坑



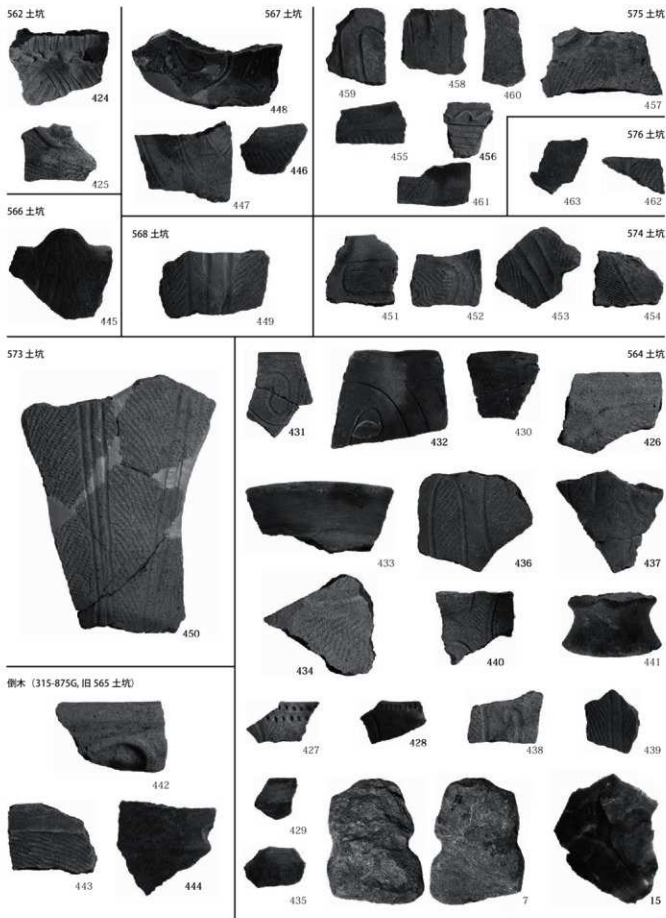
558 土坑



559 土坑



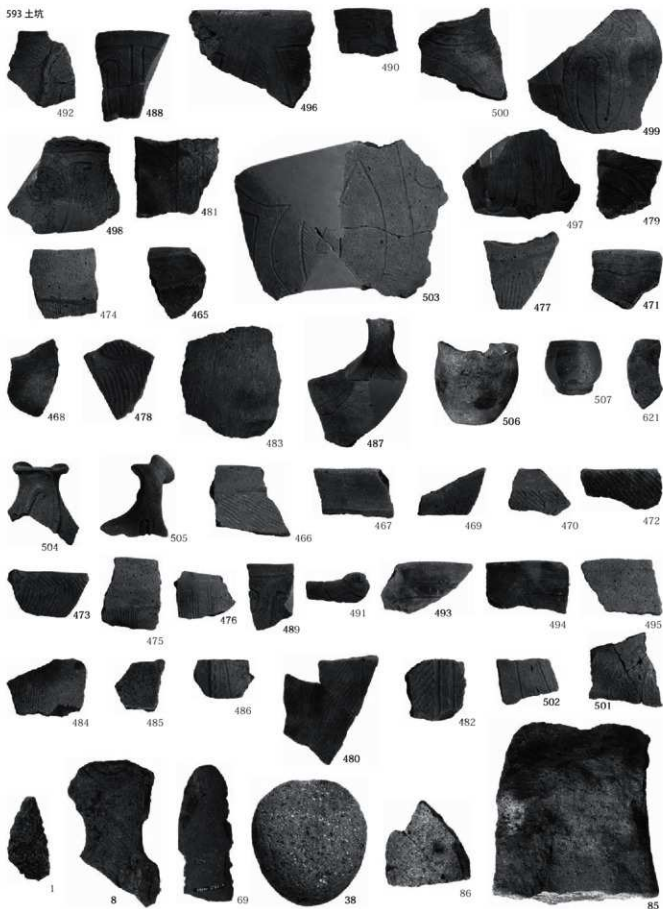
# PL.40



土坑出土の遺物 (13)



593 土坑



土坑出土の遺物 (14)

# PL.42

597 土坑



611 土坑



613 土坑



612 土坑



598 土坑



608 土坑

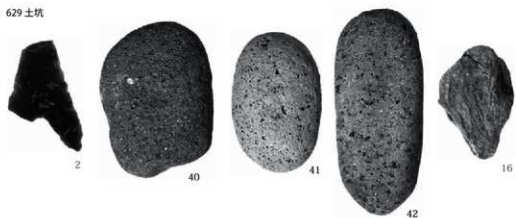


629 土坑



土坑出土の遺物 (15)

629 土坑



641 土坑



倒木 (315-875G, 旧 631 土坑)



648 土坑



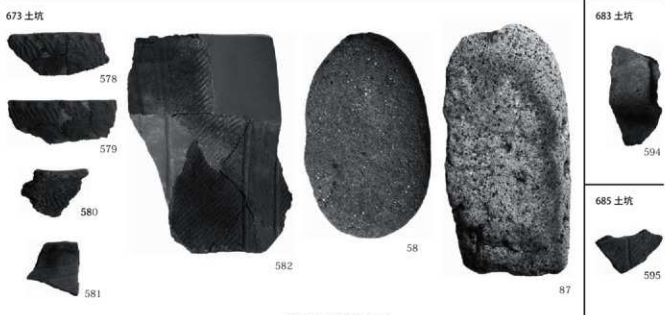
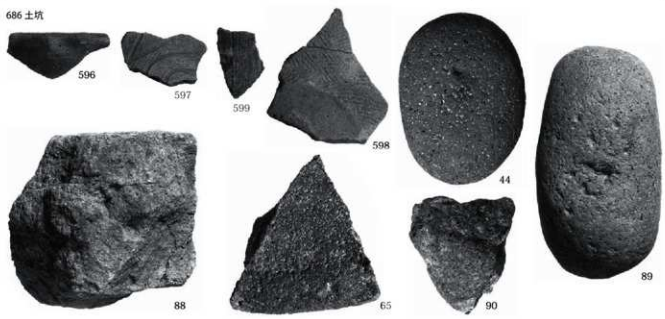
649 土坑



651 土坑



PL.44



土坑出土の遺物 (17)

678 土坑



680 土坑



688 土坑



691 土坑



倒木 (315-875G, 旧 692 土坑)



700 土坑



倒木 (315-875G, 旧 693 土坑)



702 土坑



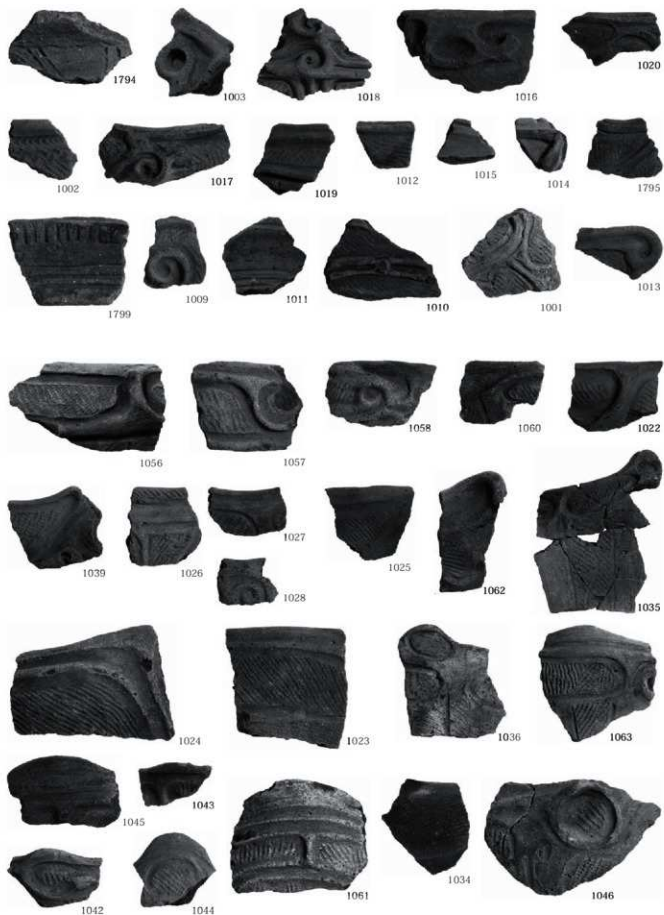
703 土坑



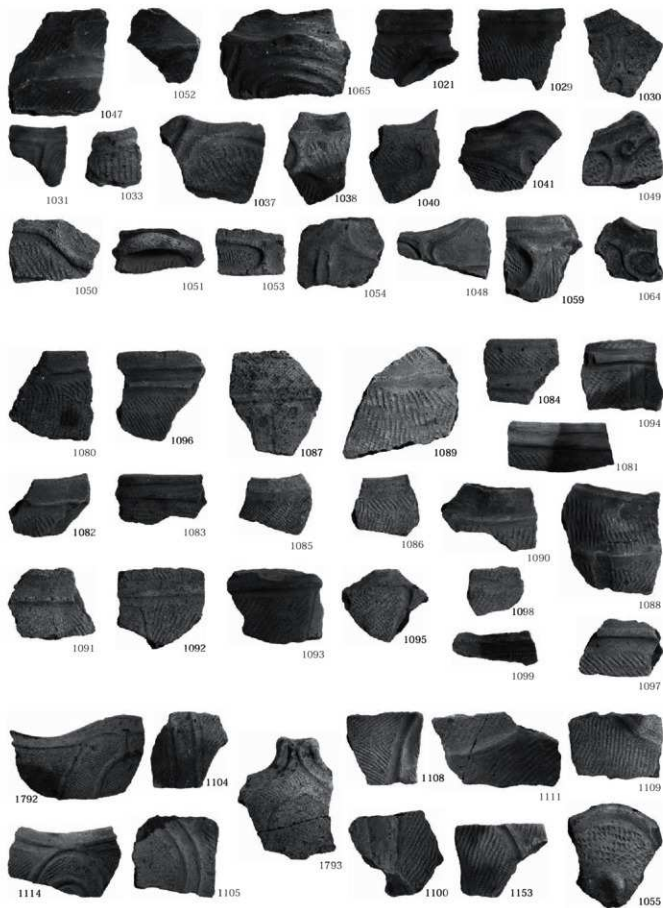
711 土坑



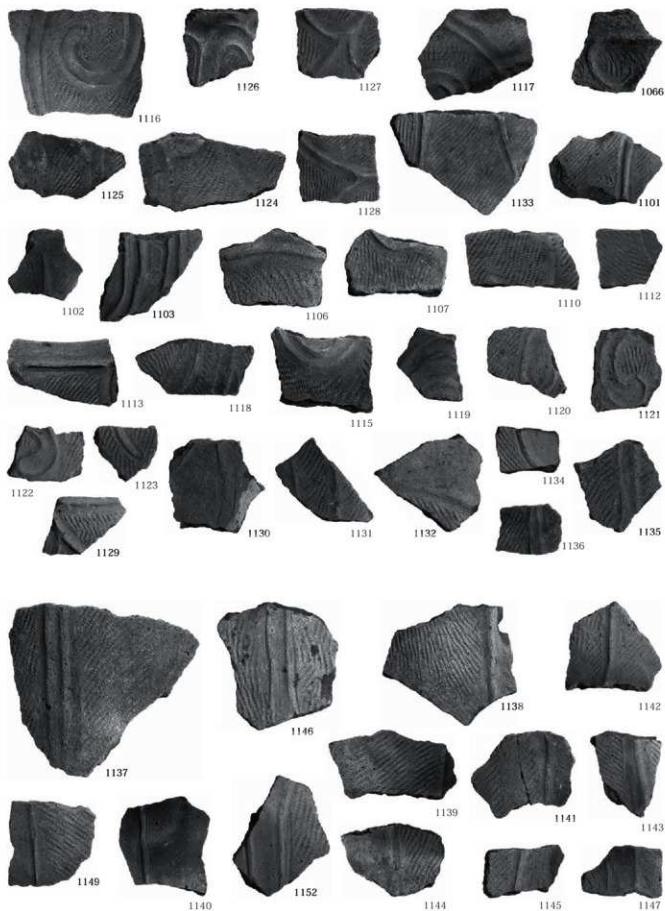
PL.46



包含層出土の土器（1）

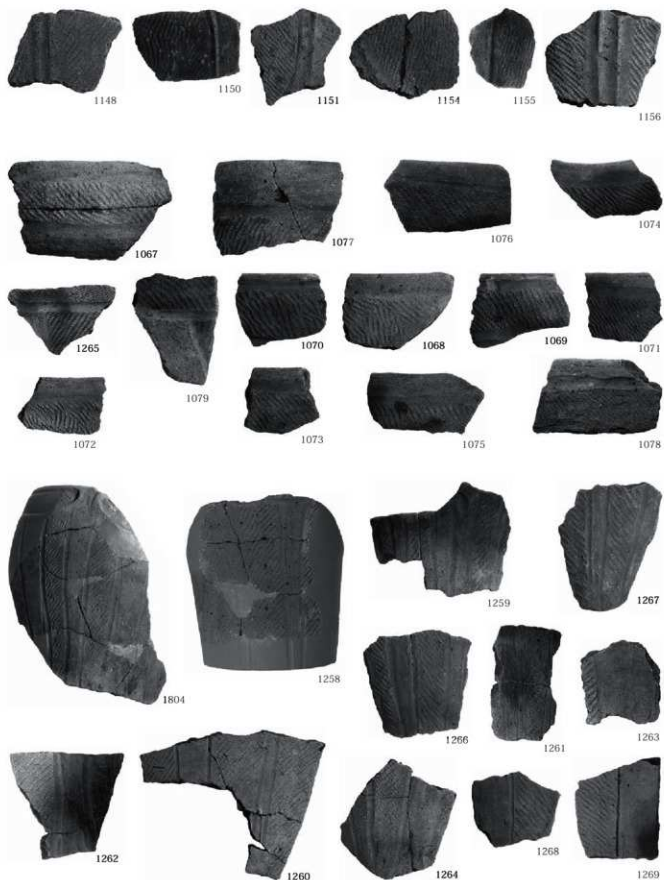


包含層出土の土器（2）

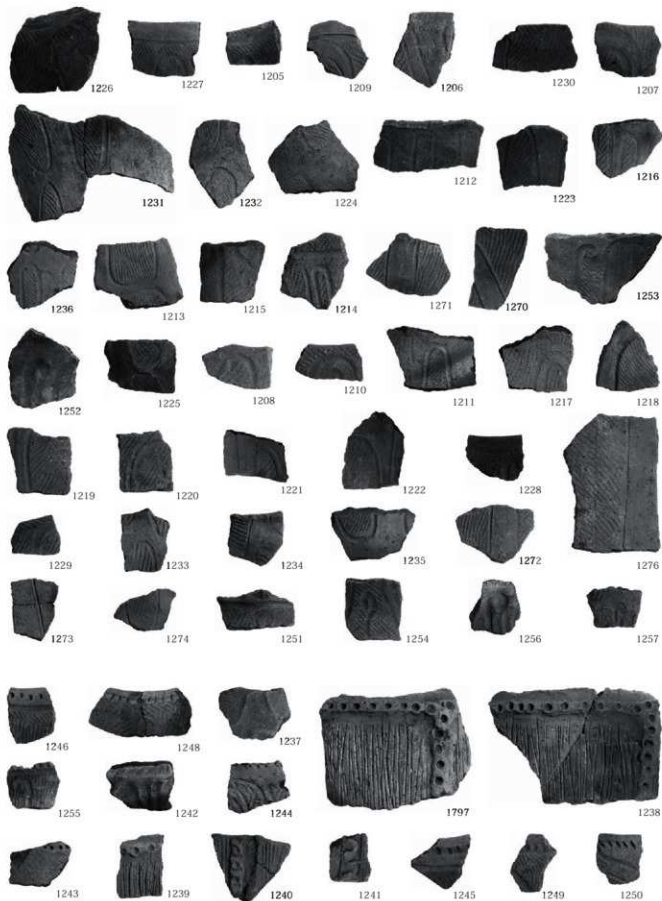


包含層出土の土器（3）

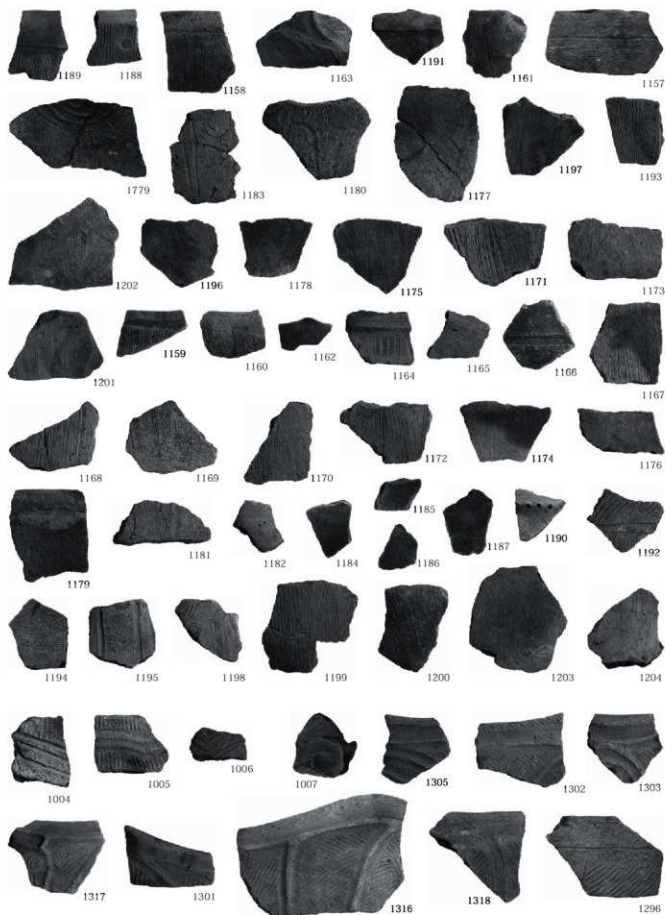




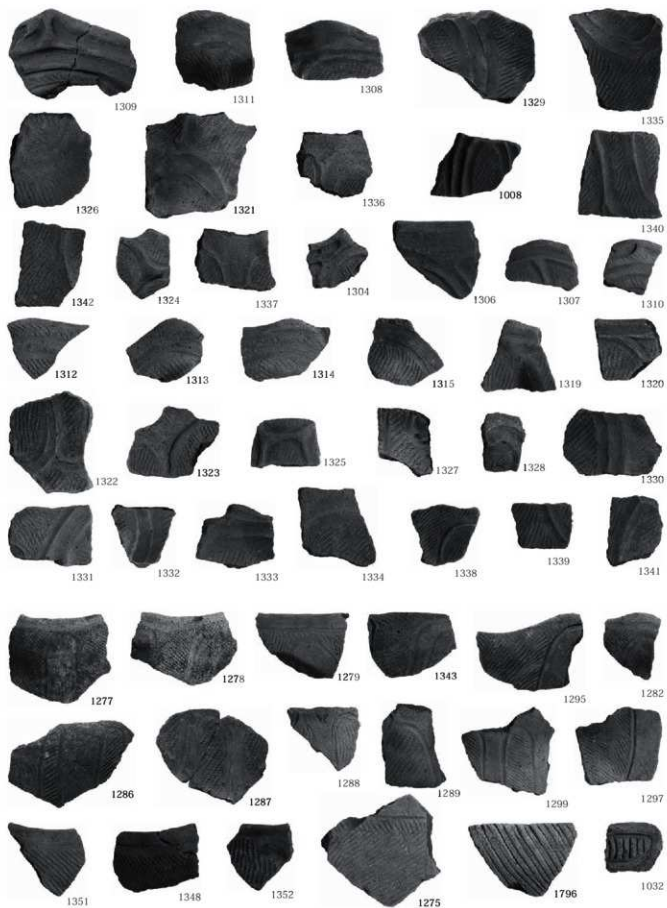
PL.50



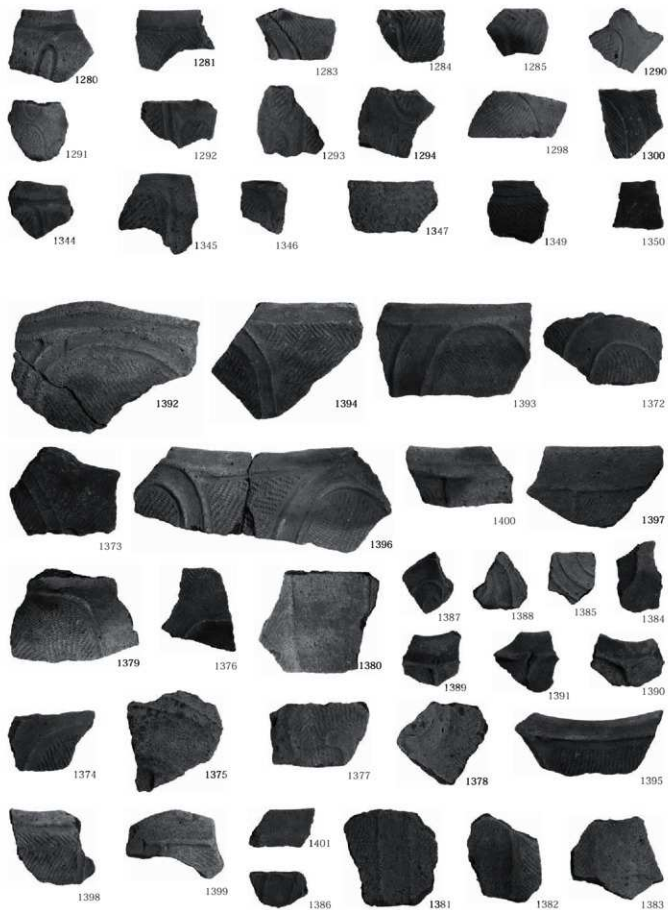
包含層出土の土器（5）



包含層出土の土器（6）

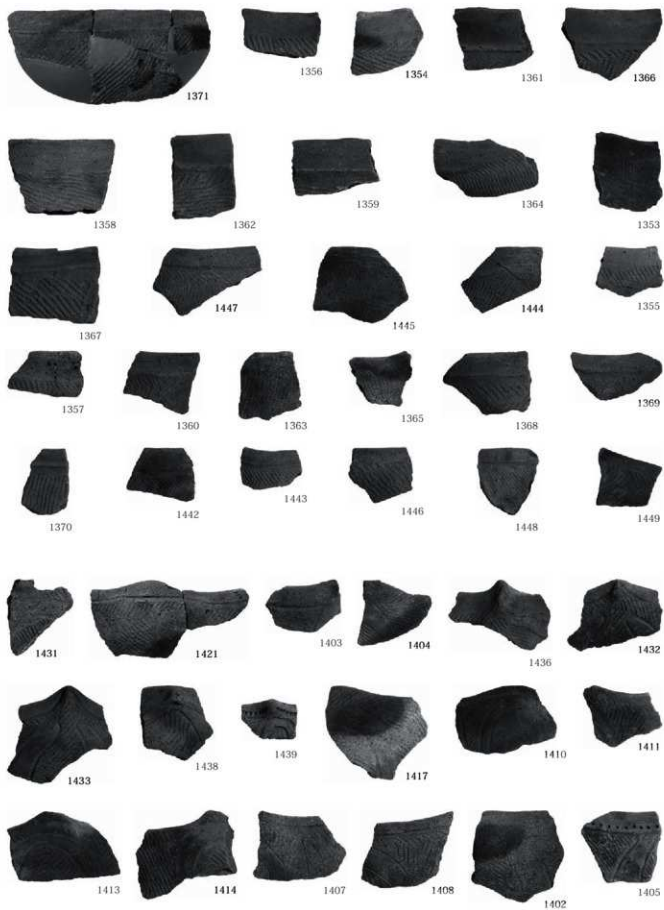


包含層出土の土器（7）

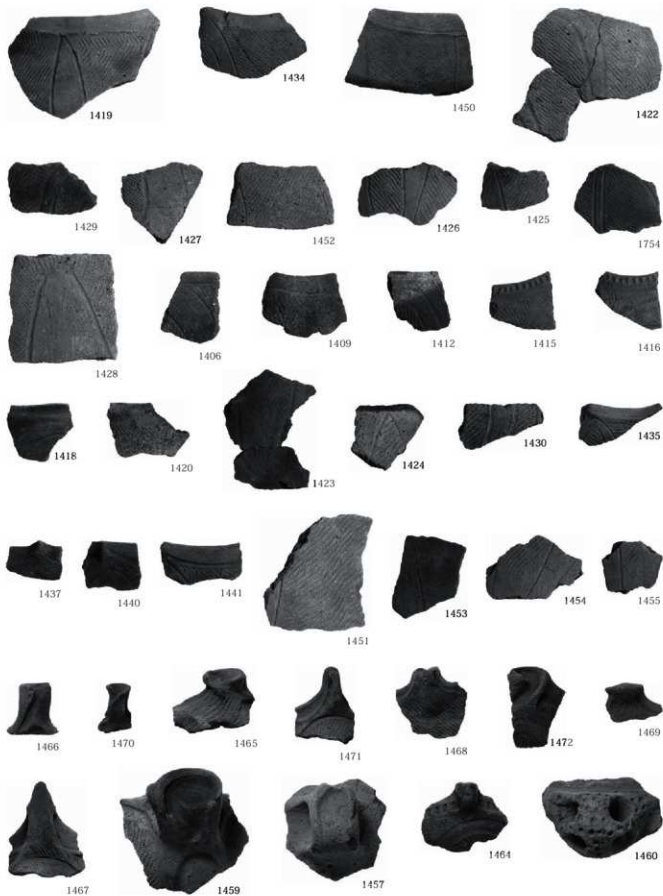


包含層出土の土器（8）

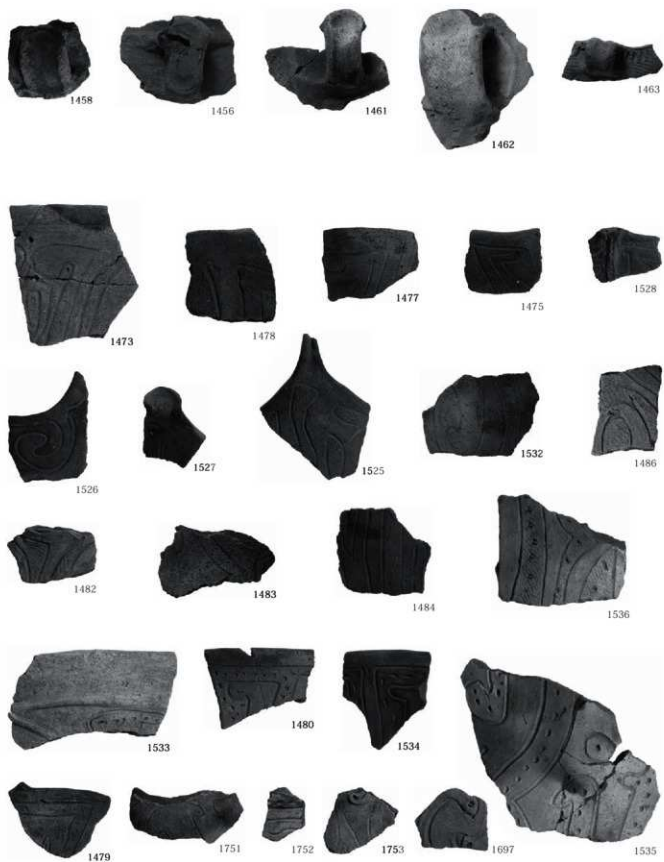
PL.54



包含層出土の土器（9）



PL.56

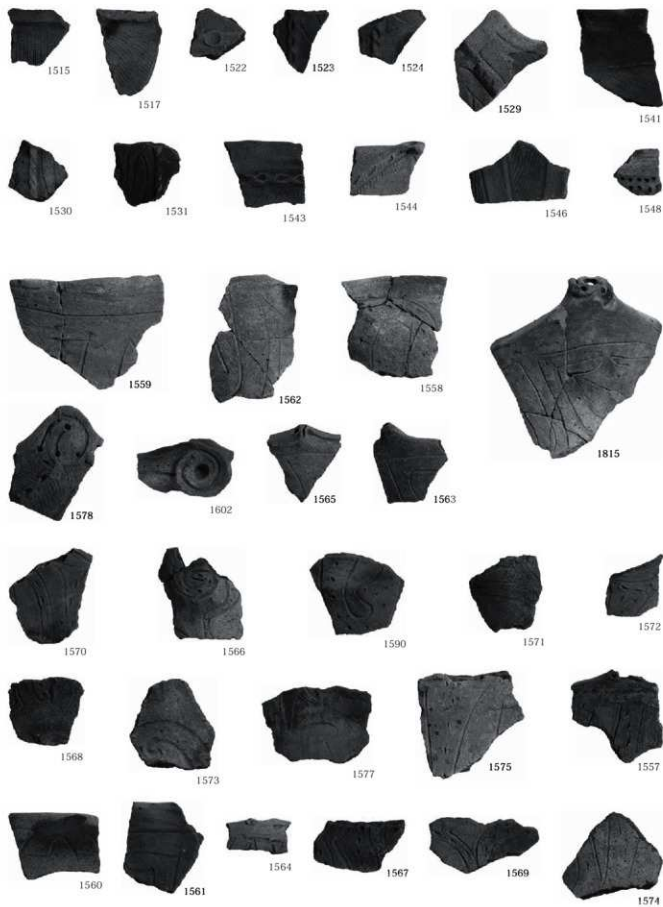


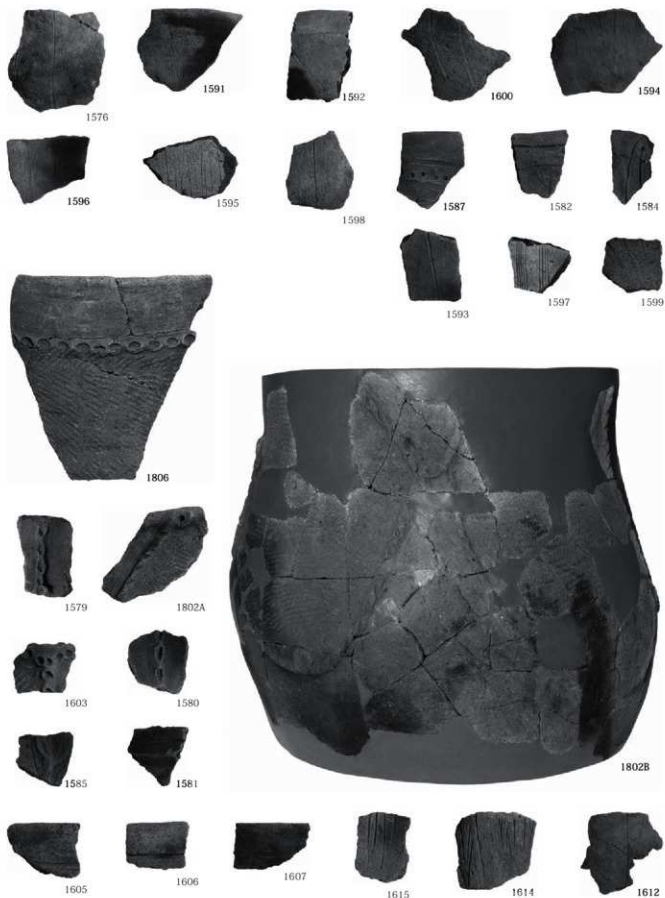




包含層出土の土器 (12)

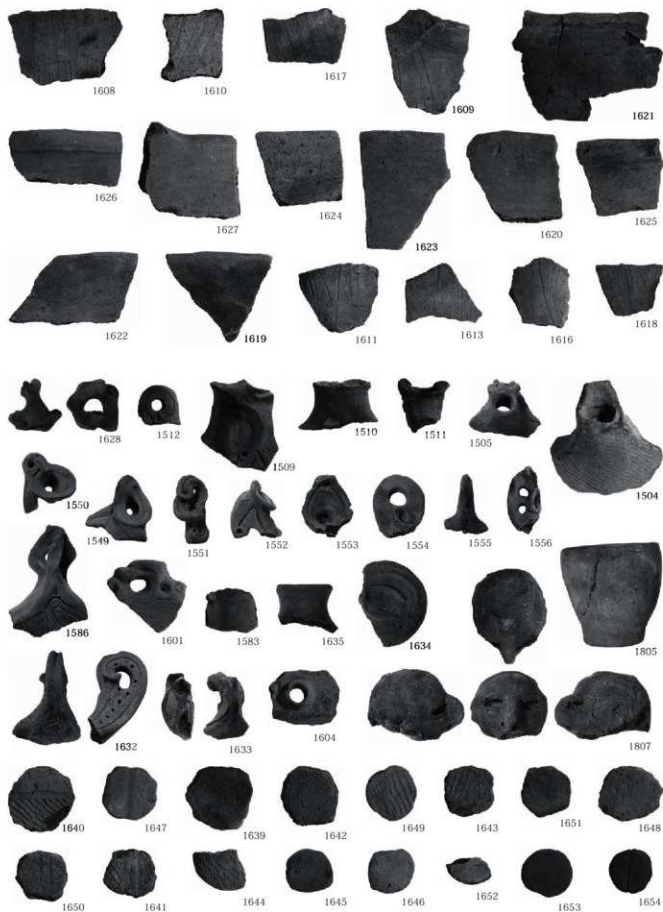
PL.58



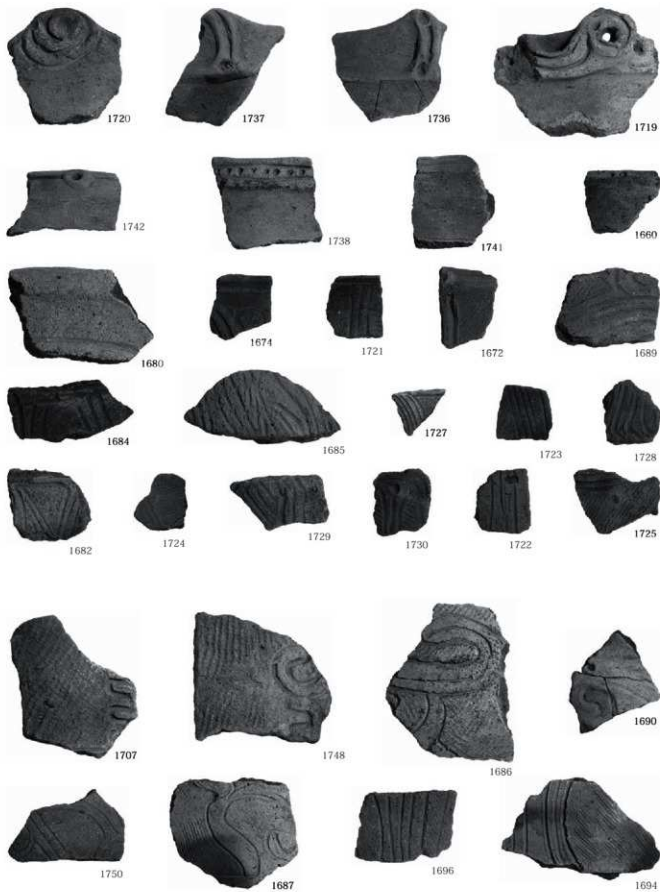


包含層出土の土器 (14)

PL.60



包含層出土の土器 (15)





1662



1661



1692



1699



1667



1675



1666



1708



1733



1739



1731



1669



1679



1732



1734



1735



1702



1655



1745



1743



1749



1656



1657



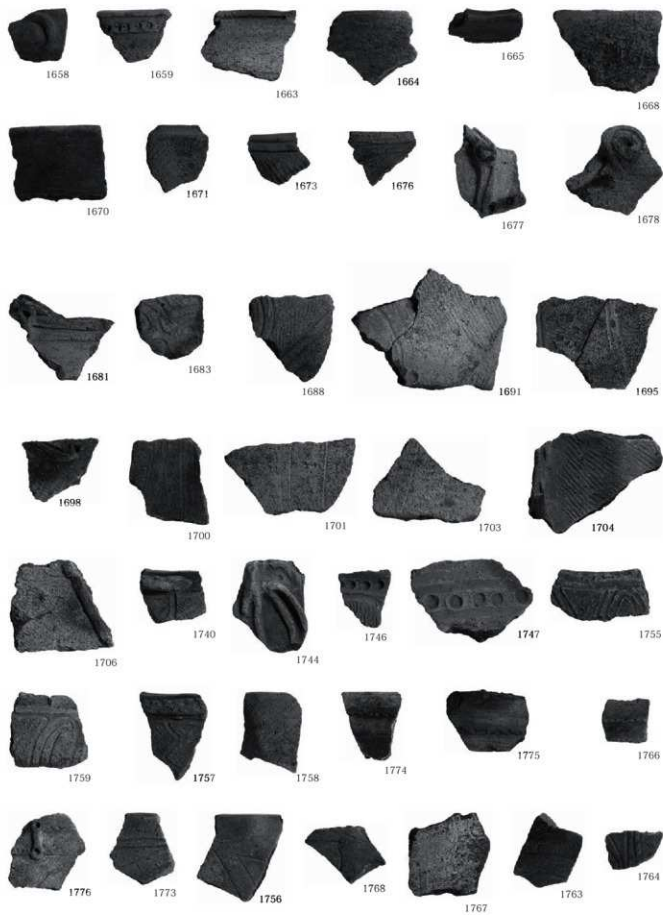
1693



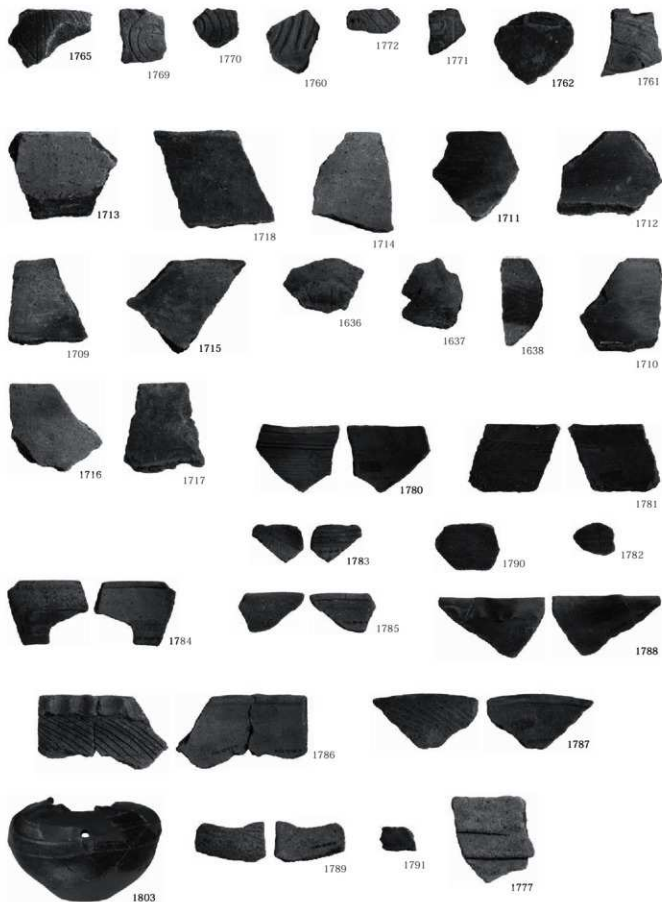
1726



1705

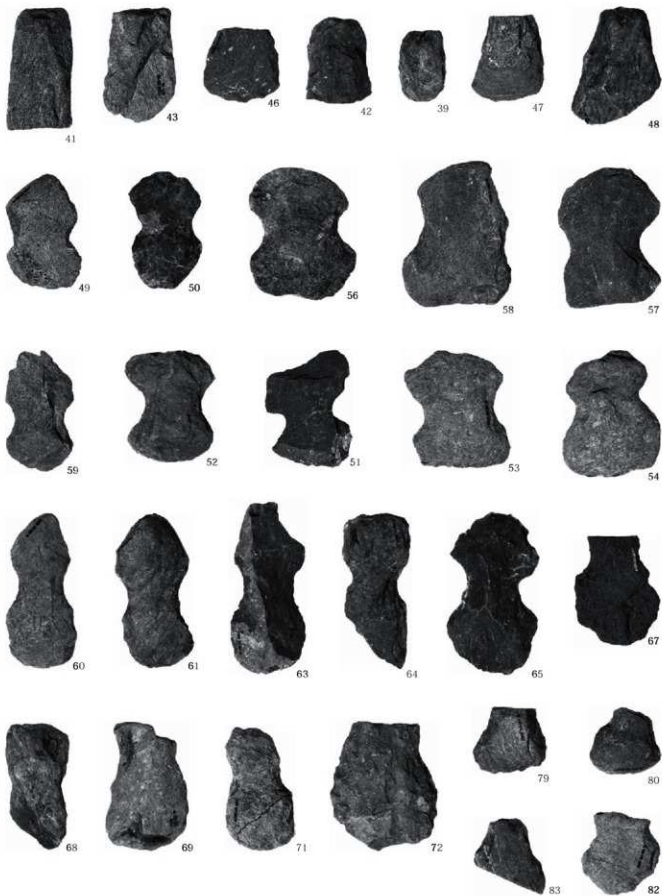


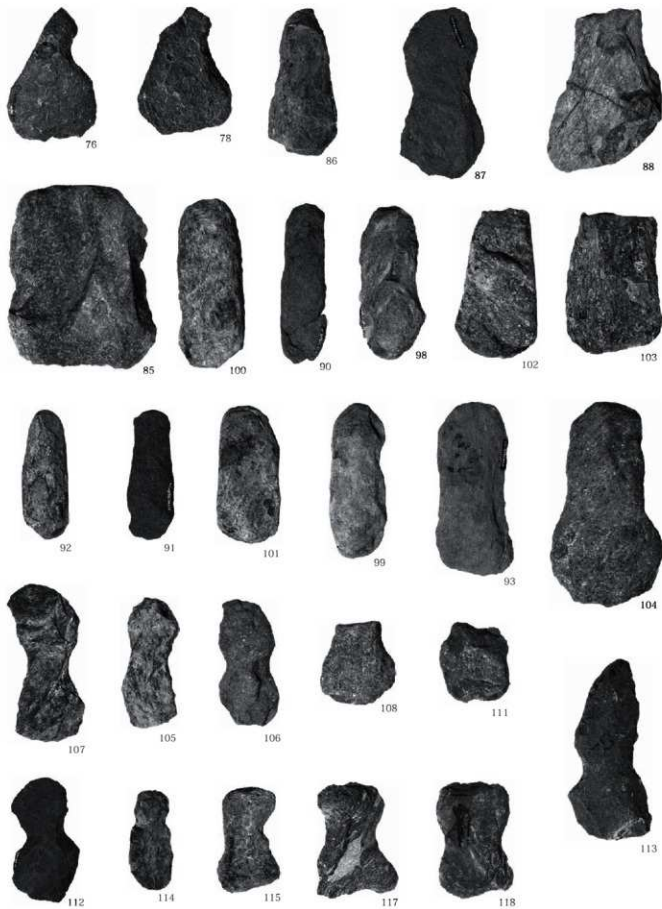
PL.64

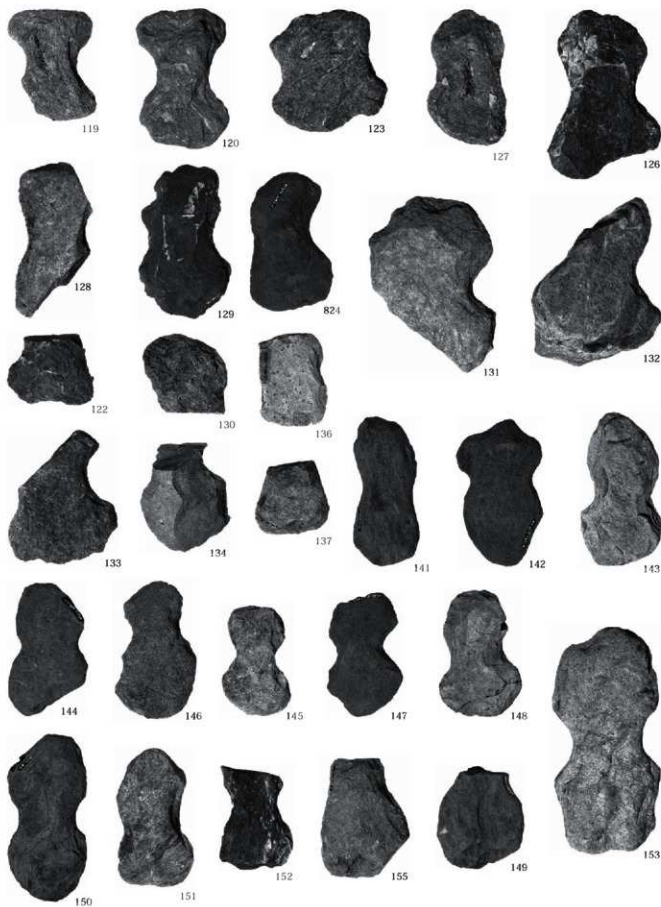


包含層出土の土器 (19)



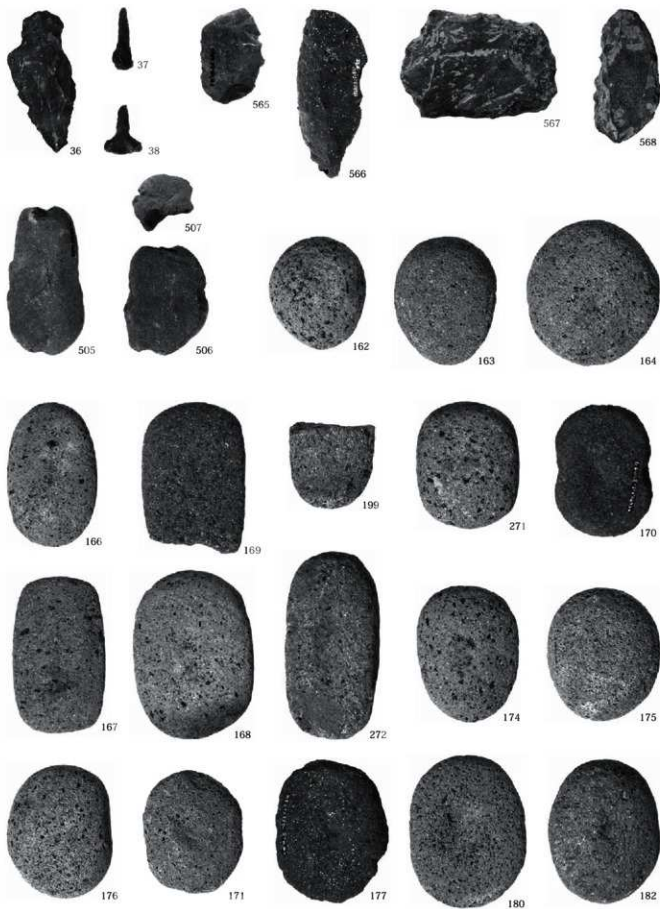






包含層出土の石器（3）





包含層出土の石器 (5)

PL.70



包含層出土の石器（6）

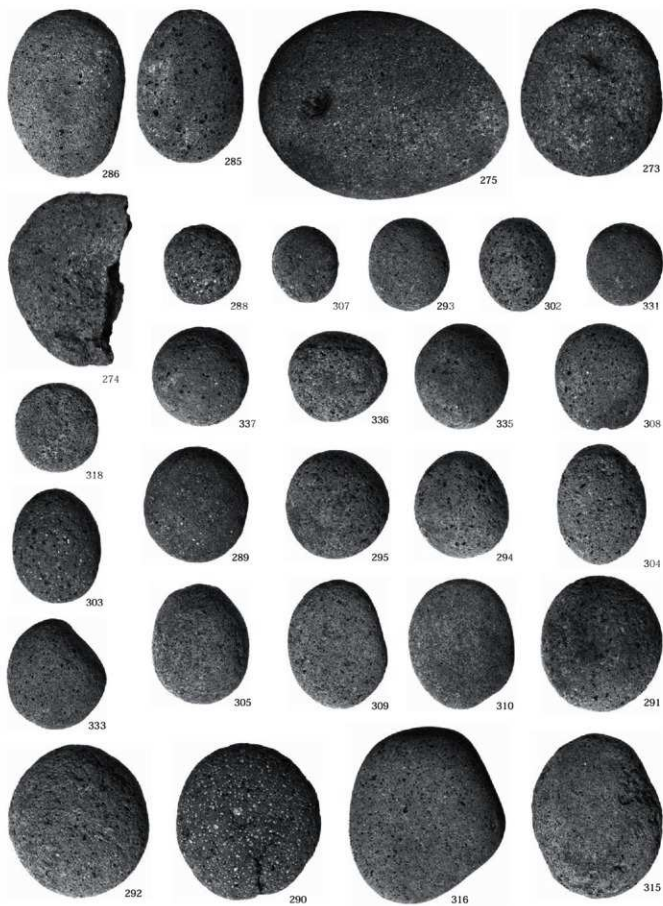


包含層出土の石器（7）



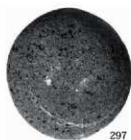
包含層出土の石器（8）





包含層出土の石器 (9)

PL.74



297



296



306



311



339



317



340



341



319



321



324



329



328



299



300



298



313



314



343



344



345



301



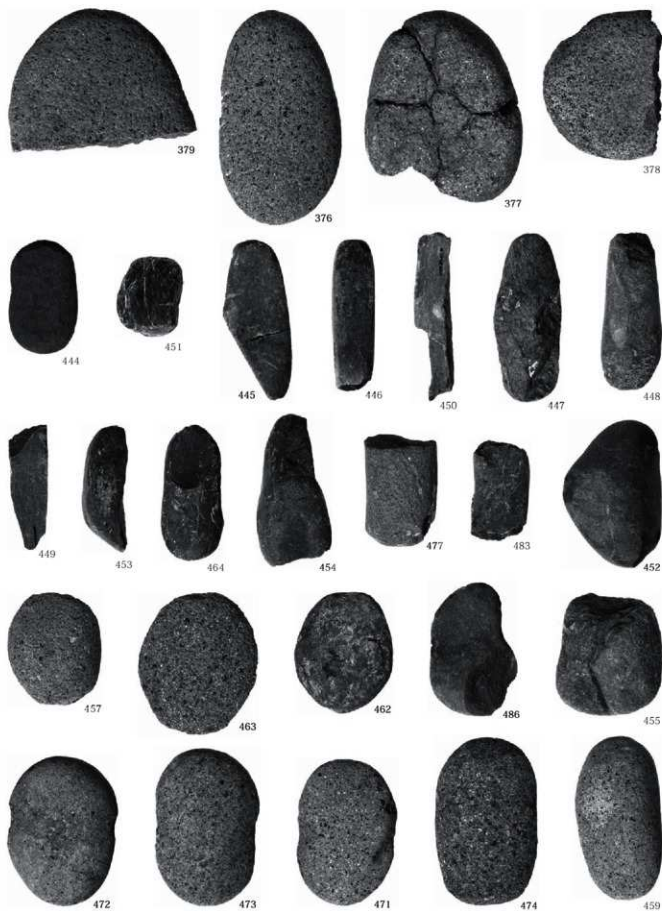
312



PL.76



包含層出土の石器 (12)



包含層出土の石器 (13)



469



470



460



461



478



480



479



482



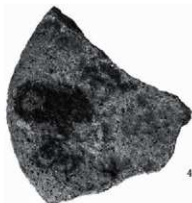
424



422



423



412



413



435



436



429



425



427



428



821



437



432



434



433



430



418



420



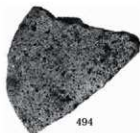
419



443



431







534



530



539



535



512

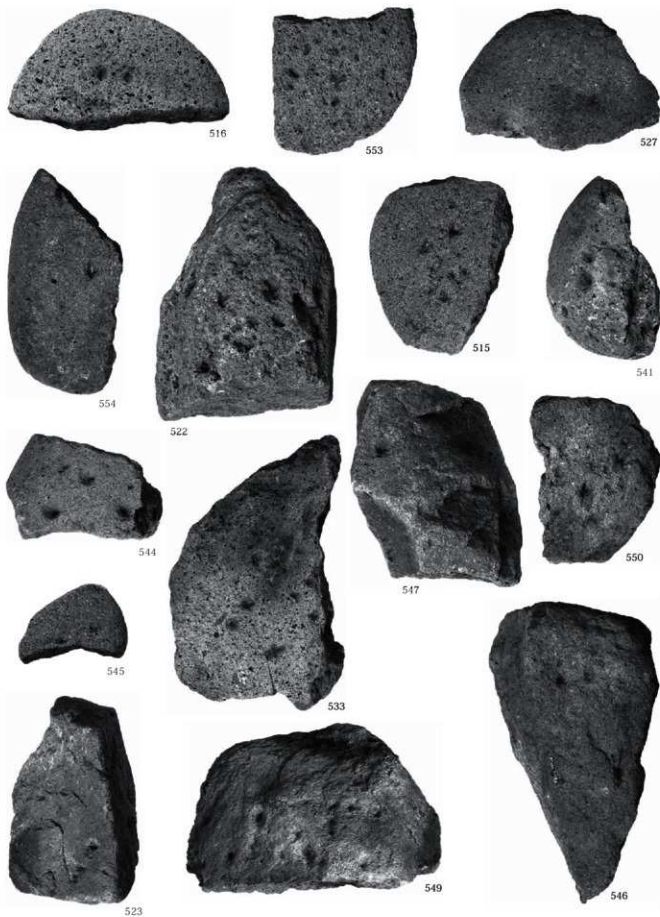


511



514





包含層出土の石器 (19)



536



559



560



524



561



563



558



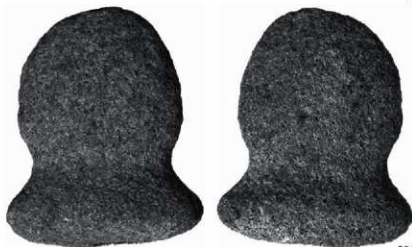
555



556



557



564



825



73



735



736



739



742



743



746



747



748



756



758



759



760

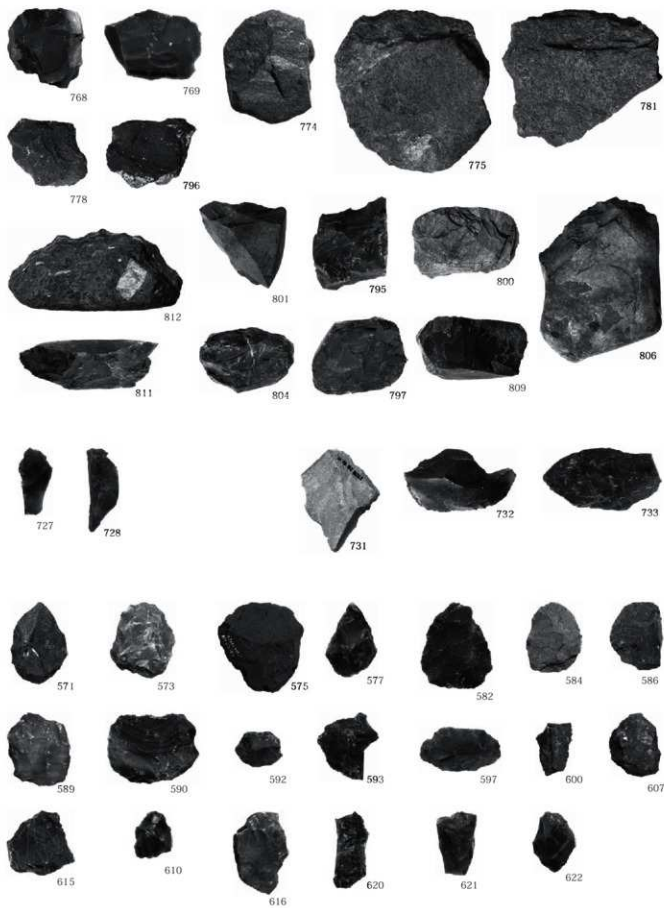


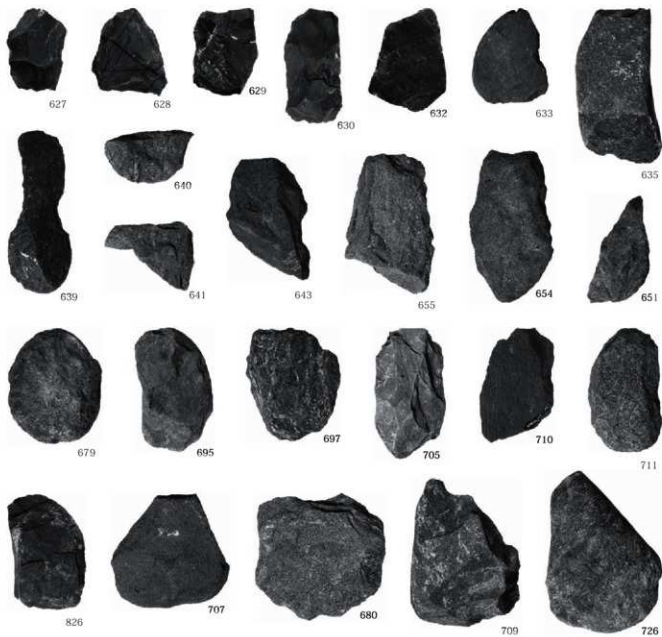
761



762

PL.86







1. 中高部平坦面と周縁敲打部 (横、560)



2. 同 (斜め上、560)



3. 同 (長軸方向、560)



4. 560裏面摩擦部 (右上) と裸面



5. 石皿状石製品 (561)



6. 同・溝状敲打面 (561)



7. 石皿状石製品 (横、524)



8. 同 (斜め上、524)



## 報 告 書 抄 録

書名ふりがな	だいどうひがしいせき-じょうもんじだいへん-
書名	大道東遺跡(1)-縄文時代編-
副書名	北関東自動車道(伊勢崎~県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	岩崎泰一/佐藤明人/新井 仁
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090303
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	だいどうひがしいせき
遺跡名	大道東遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしひがしいまいずみちょう
遺跡所在地	群馬県太田市東今泉町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0147
北緯(日本測地系)	361937
東経(日本測地系)	1392320
北緯(世界測地系)	362011
東経(世界測地系)	1391945
調査期間	20030701-20031031/20040101-20050930
調査面積	11977
調査原因	道路建設
種別	包蔵地
主な時代	縄文/古墳/平安
遺跡概要	縄文-住居12+土坑93-土器+石器
特記事項	縄文-住居12+土坑93-加曾利E+称名寺+堀之内+副片石器+礫石器
要約	縄文時代/中期後半から後期前葉の住居・土坑を検出。包含層より多量の土器・石器類が出土した。出土遺物には土偶・土製垂飾・土製貝輪等の土製品類や、石棒・石冠状石製品・軽石製石製品の他、石皿様の不明石製品・馬蹄形中高部を有した特殊石製品が出土している。



財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第464集

## 大道東遺跡(1) - 縄文時代編 -

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告

---

平成 21 年(2009) 2 月 23 日 印刷

平成 21 年(2009) 3 月 3 日 発行

編集・発行/財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒 377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地の 2

電話(0279)52 - 2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/杉浦印刷株式会社

---